

---

# 風の吹くままに

杜神

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

風の吹くままに

### 【Nコード】

N21321

### 【作者名】

杜神

### 【あらすじ】

世界を統べる「かの方」に誘われ、半強制的に異世界に召喚されしかも「神」として活動するようになった女性。その女性を中心に物語は進む。彼女は「ノンテースンザード」と呼ばれる世界、魔法などが使われるファンタジックな世界で冒険をすることになる。杜<sup>あかなし</sup>神<sup>しのかみ</sup>として「神」として降り立つ彼女がとり始める行動とは…。  
「風の吹くままに」歩む神<sup>しのかみ</sup>の旅、其れから何を垣間見えるのか…。

## 杜（あかなし）神（しの）（前書き）

このお話は段落ごとに人称が変わる場合があります。また、台詞の括弧書きが誰が言っているかについても書いてある場合と、書いていない場合があります。会話シーンが多いので些か見づらい点が多々ありますが、初心者故に生暖かい目でご覧になってください。

## 杜（あかなし）神（しの）

小説 風の吹くままに

### 第一章 杜あかなし神

荒涼とした草原にあたしは立っていた。

見渡す限り何も見えないほどにあたりは平坦で静かだった。

ふと見上げると一輪の花が咲いていた。

名前は知らないが、見たことのある花だった。

凜として、力強く大地に根を張っており、小さいながらも存在感があった。

「それはあなたです。」

ふと声が聞こえた。振り向くと初老に見える老人がたたずんでいた。いつの間に？ そう悩んでいるとさらに老人は語った。

「悩むことはありません。ここは現実ではない世界、そう、あなたの心のうちの世界で語らせてもらっているだけですから。」

心？ つまり、夢でも見ている、と？

しかし、あたしは今ここに立っているのがはっきりとわかるほど認識できている。

夢ならこうもはっきりしたものだろうか・・・。

「迷うのも無理はありません。あなたの知らないところであなたは選ばれあなたに使命が与えられました。あなたの意思に合うかどうかにかかわりなく。これは宿命とも言えるべき事柄なのです。」

老人は淡々と説明していった。

「つまり、あたしは別世界に召喚され、そこで活動しなければなら  
ない、と?」

要約するとそういうことらしい。

「簡潔に言えばそうなりますね。あなたはこれから、あなたの知らない世界で旅をしていただかなくてはならないのです。しかし、以前の世界のような無力な者ではありません。その世界を左右するほどの力が与えられます。それをどう使うかはあなた自身にかかっているのです。」

いきなり突拍子もない宣告に、あたしは面食らった。

異世界に召喚され巨大な力を持って旅をするように・・・そういきなり言われて、はいそうですか、と納得できるほうがどうかしている。戸惑っていると初老らしく見える老人はさらに言った。

「戸惑われるのはもったもなことです。かの方はこのようなことが大変好きな方で、私どもをいつも困らせる方です。ですが、ご自分で対処できるだけの力が与えられますのでそう困ることは無いかと思いますよ。」

「はぁ・・・」

あたしは情けないような、肯定の返事をしてしまった。彼もどうやら特定の存在からの指示で動いているようである。「神」がいるとすればそういう方からなのだろう。あえてだめもとで彼に聴いてみることにした。

「その方は、なんという名前でこういう方なのでしょう？」

初老の人物は少し困った顔をしながら答えた。

「お名前を語る事は許されておりませんので、今回は御遠慮させて下さい。恐らくあなた方が「神」と呼ぶ存在である、とだけ言い含めておきます。われわれを含めあらゆるものに関係される方です。」

そう話してくれた。

「神」か。まあそうなるだろう、超自然的な介入など「神」やそれに近いものでしか不可能な話である。

「話の内容はわかったわ。で、どうすればよいのかしら。」

あたしはそう答えて、今後どうすればいいのか聞いた。その返事に初老の風体の人物は、少し驚いた様子で答えた。

「お早い肯定の返事で、正直驚いております。大抵このような突拍子もない内容を語ると、大抵の方は拒絶や、無理解を示されますので。」

まあ、そうだろう。いきなり現れて（しかも幻のような状態で）「神」の使いです。これから起こることを理解してください。対処する力は与えておきますから。などと、つつけんどんに言われても、信じる信じない以前の問題であるだろう。その人物は話を続けた。

「あなたは、杜<sup>あかなしの</sup>神という名の人物として、その世界で過ごす事になります。初めは旅人として始めますが、どう過ごすかはあなたの自由です。というか、あなたにはほぼその世界に対する全権が与え

られているので、どう過ごすかはあなたが決めることができます。」

そこまで語ったときあたしは話を遮った。

「ちょっと待って。それって、あたしに「神」になれということ？」

彼は軽くうなずいて答えた。

「簡単に言うそう言う事になりますな。何をするのもあなたの自由です。制限はほぼないと思っていいでしょう。ただ、世界を根底から崩すことを行うとそこに存在できなくなりますので、強制的にそこから戻ることになります。注意点として、あなたご自身は寿命が無い存在となるので、そのまま、そこにいる人間と長く生活するのは大変難しいということだけは言い含めておきます。」

突拍子も無い内容に、あたしは哑然とした。何をするのもいい世界、といえば聞こえはいいが、要するに、力は与える、後は勝手にして来い、というようなものである。

「なんともねえ・・・まあ、やると言った以上やってみるけど、どうなることやら・・・まあ、それが先方の見たいことなのかしらね。」

彼は、あたしがそう言ったのを聞いて、多少驚いた様子で答えた。

「先見の明がおりますな、かの方のご意思もお分かりのようですな。では準備が出来次第お送りしましょう。」

気持ちを落ち着けてから、あたしは彼にお願いすることにした。彼はそれに答えてあたしを送り出してくれた。

光の只中をあたしは抜けていった。新たな世界へ杜神<sup>あかむめ</sup>として。風の  
ように吹き抜けるために。



杜（あかなし）神（しの）（後書き）

次回「始まりの丘」。神しのの旅は始まったばかり彼女は何を考え何を決めるのか。次回も良い風が吹きますように。

## 始まりの丘（前書き）

新たな世界へと旅立つ神<sup>しの</sup>。彼女が見る先には何があるのか・・・。

## 始まりの丘

小説 風の吹くままに

### 第二章 始まりの丘

そこにあたしは立っていた。  
荒涼とした丘にあたしは立っていた。

「ここは・・・どこだろう？」

初めての場所で、どこかわからない。どうしようかと悩んでいたら、頭に声が聞こえてきた。

「ご自分の力を使ってください。あなたは这个世界では「神」なのですから。」

あ、なるほど。今自分がわからないのは自分の今までの能力だけで理解しようとしていたからなんだ。自分に与えられた新しい力のことを念頭に入れていなかった。それに気づいてあたしは新たな力を使うことにした。

「力」を使い、一つのものを作り上げた。

「人間」である。ただただの人間ではない。「使い魔」を創り出したのだ。

「呼ばれて飛び出て・・・」

「べたな台詞はやめなさい！」

くだらない台詞を言いそうになったので、あたしは「彼女」の台詞を遮った。

「うー、せっかくのチャンスだったのに。」

彼女は残念そうに言った。それに答えてあたしは言った。

「まだチャンスはいくらでもあるわよ。それよりもミル、あたしがあなたを創った理由は分かっているわね。」

「分かってますよ。マスター。まずは、この世界からですね。えーっと・・・。」

そう言い出してミルは説明を始めた。

この世界は「ノンテースンザード」という名前で、大きな大陸が4つ、ほかに大小の島々がある一般的な(?)世界だそうである。現在、あたしたちが立っている場所は「レイグラード」と呼ばれる大陸で中規模な大陸で比較的温暖な所らしい。大体的内容をあたしは「理解」した。

「なるほどね。じゃあ、ここはあたしにとって「始まりの丘」ってところね。」

「そうですね、さすがはマスター。」

「褒めても何もでないわよ。」

あたしがそう言うのと、ミルは少々はぶててしまった。

「まあ、それはともかく、これからどうするかよねえ。」

あたしはどうするか、迷っていた。ミルは、それに答えて言った。

「とりあえず、麓の村にでも行くのはどうでしょう？」

「まあ、無難な選択かな。そうしましょうか。」

あたしはそう言って、麓の村に向けて歩き出した。ミルもそれについて行った。ちなみに、ミルは、大柄な女性で、非常に体格が良い。しかし、可愛い女性で、非常に魅力的である。特に性格は。(笑)もちろん、彼女は「使い魔」なので普通の人間とは異なる。能力も極めて秀でている。

あたしたちは、麓の村に向かうことにした。

## 始まりの丘（後書き）

次回「一陣の風」。旅を始めることになった神達<sup>しの</sup>。彼女達は吹き行く風として如何に行動するのか？お楽しみに。

## 一陣の風（前書き）

とある村に向かうことになった神<sup>し</sup>達。彼女はどんな選択をしていくのか・・・。

## 一陣の風

小説 風の吹くままに

### 第三章 一陣の風

「しかし、物好きよねえ・・・」

と、ふとあたしはぼやいた。ミルがそれに答える。

「え？と、いいますと？」

「わざわざ、世界を用意して、まあ、歴史もあるみたいだからすであつた世界でしようけれど、そこに行つて「旅」をして来い。だなんて、酔狂つて言うか、物好きつて言うか・・・」

「はあなるほど。でも、マスターも見たことあるんじゃないですか？」

ミルはあたしの意見に答え始めた。

「正確な意図は、あたしには分かりかねますが、もし、ご性格があつたちと差異の無い方であつて、あたしたちを省みられる方なら、いろいろな形で介入したり逆に、じつと見守ったりして、私たちが世界を楽しんで見ていらっしゃるのではないでしょうか。」

ミルのその言葉に、あたしは、はっとした。確かに、人間でも、そのように感じるはずだ、まして「神」があたしたちをもともと「そういう風に」創られたのであれば、「神」はそれ以上に関心を示されて当然である。



「さすがね、ミル。あたしには考え付かなかったな。」

少々感心してあたしは答えた。ミルはそれを見て、少し偉そうに、

「でしよ。あたしにお任せください♪。」

と、上機嫌に答えた。それを見て、苦笑しながら、

「まあ、お願いするわ。でも、調子に乗りすぎないこと。」

「う・・・、はあい。」

くすつ、とお互い笑って、笑顔になりながら麓の村に向かった。

その村は小さなものでざっと見ても家が数十戸あるか、というほどのものだった。恐らく開拓村の一つなのだろう。村の境界となるものはほとんど無く、各戸が恐らくは自由に引いたものであろう、杭があちこちに、各家々の敷地を分けるように立っていた。村は小さいながらも、活気に満ち、子供たちの声や大人たちの声が聞こえていた。

私たちの姿を見つけた子供があたしたちに近づいてきた。

「お姉さんたちは、どこから来たの？」

見知らぬものがない、小さな村では当然の質問である。

「遠いところから旅してきたのよ。」

と、答えた。まあ、別世界から来たのだから「遠いところ」である

だろう。

「ふん。」

子供はそう答えてさらに言った。

「ようこそ、暁の村へ。静かで何も無いところだけど、楽しんでいてね。」

そう言って、あたしたちを村の中心部へと案内してくれた。

村の中心部では小さなバザーが行われていた。お互いに作ったものを交換したり、購入したり、談笑したり、ごく普通の村々である一般的な光景であった。そんな中、あたしたちは子供に導かれるようにして、そこに入っていた。あたしたちを見た村人たちはにこやかに迎え入れてくれ、また会話もしてくれた。そして、初老の男性が話しかけてきた。村長らしい。

「初めまして。わしはこの村長をしておるルーベンスという爺じや。」

そう言って、挨拶をしてきた。あたしはそれに答えた。

「初めまして。あたしは杜神あかむしめと言います。彼女はミルーフエリシアあたしの付き人をしてもらっています。」

そう言ってミルも紹介した。ミルも軽く会釈をする。それを見て、村長は、やや感心しながら言った。

「お嬢さん方は二人で旅をしておられるのかね？」

「はい、そうですが・・・なにか？」

そう答えると、興味深そうに、あたしのほうを見ながら答えた。

「ほほう、とすると付き人の方が優れているのか、もしやお二人ともかな。このあたりは、ここはまだ平穏じゃが、奥の街道は物騒でな、噂では野盗共も出ると言うのでな。これから旅をされるのであれば気をつけられるといい。できることなら、ここで落ち着かれると、村のものも喜ぶがのう。」

半分本気、半分冗談とも言える口調で、村長は語った。事実、この周囲は危険なのかもしれない、広大な大陸すべてに治安を安定させるのは並大抵ではないので大抵、悪さをする者が出るのは日常茶飯事だが、この世界も同様のようである。

「お心遣い感謝します。ですが、あたしは世界を見聞する旅の途中ですので、お気持ちだけ頂いておきます。」

「そうか、まあ、無理はなさらぬようにな、ここは宿屋が無いので今日はわしの家で泊まるといい。あまり広い家ではないが、妻と二人暮らしゆえに、多少は自由が利くのでな。」

「ありがとうございます、ご好意に甘えさせて頂きます。」

村長の親切に、ありがたく応じ、その日はそこに泊まる事にした。村長の家では村長婦人が親切に対応してくれ夕食を振舞ってくれた。

「美味しい食事をありがとうございます。旅の身ではこういう料理は大変ありがたいです。」

多少儀礼的にあたしが言っていると婦人は答えていった。

「かしこまらなくていいですよ。年頃的にも孫のような方をもてなしていますから、気楽にしてくださいね。」

温かいもてなしにあたし達は喜んでいた。村長が語る。

「で、お二人はどちらに向かわれるのかな。」

「そうですね。とりあえず街道に出て、多少大きな街に行って見ようかと思えます。お勧めの場所とかご存知であればお教え頂きたいのですが。」

あたしの返答にやや困惑しつつ村長は語った。

「ほう・・・この辺りをご存じないのかな？まあ、詮索はしないほうがいいじゃろうな。そうじゃな、街道は西に行けば北と南に延びておるがお勧めは北のレミアルト王国のほうかのう。南のサディルウム帝国はいささか物騒だと聞いておるからのう。」

「南が面白そうですねえ。」

ミルが楽しそうに言った。あたしはたしなめながら言った。

「ミル・・・単に暴れただけでしょ。とりあえずは街道の北を目指してみますか。どうせ南にもそのうち行くでしょうしね。それに、結局はいろんなところに行くわけだし。いいわね？」

「はーい。あたしはマスターに従うのみですよ。」

「まったく、調子がいいんだから・・・。」

あたしたちがそう会話していると、それを見ていた村長夫妻が微笑ましそうにあたしたちを見ていたことに気づいた。

「村長？あたしたちに何か？」

「ああ、いや、出て行った娘を思い出してな・・・」

「娘さんですか？」

「もう30年もなるか、旅の男について行ってどこに行っただのやら便りすらしてこないんじゃないよ。」

村長は、やや悲しそうに語った。

「まあ、今晚はゆっくりしてくれ、妻も楽しそうだしもう。」

「はい。」

今晚はゆっくり団欒ができそうだった。

そこは、荘厳な場所だった。ただし物質的なものではない。すなわちそれは、別の次元であることを指していた。つまり、「天」と呼ばれる領域である。

「で、報告は？」

中央に立つ威厳のある人物が、部下らしきものからの報告を待つ様子だった。

「はっ。神様しのかみはレイグロード中央部曉の村付近に現れたそうです。」

「そうか、分かった。今後も定期的に報告してくれたまえ。」

「かしこまりました。で、大天使様。とりあえず今まで通りで構い

ませんでしょうか。」

「問題ない。どうしても言う場合は、私が使者を出して判断を仰ぐでしょう。それにしても・・・」

ため息をつきつつ「大天使」と呼ばれた人物は語った。

「相変わらず、この世界は、振り回されているな。いや、それこそが、かの方の望みなのかもしれないが。」

「はっ？」

「いや、なんでもない。下がりました。」

「かしこまりました。」

そう答えて部下らしき人物は下がっていった。「大天使」と呼ばれた人物は、「外」を見つづばやくように言った。

「相変わらずだ。だが、それこそが、望まれてることなのかもしれないが。今度はどうなるのやら。」

彼は、振り返って「奥」へ進んでいった。

「ほう、魔法が使えるとは、見かけによらず学術も学んでおいでかな。」

村長はミルに対してそう語った。そう語ったのを聞いてあたしが喋った。

「魔法って学術なんだ？」

「あれ？神様しのかみご存じなかったんですか？」

ミルも村長も少し驚いてあたしのほうを見た。

「あ、うん。魔法の認識が違うのかも。こちらではどうなってるのかな？」

あたしが聞いてきたので、ミルが答えて言った。

「では、お教えしますね。こちらでは「魔法」と言う名のとおり「魔」つまり、超越的な力を行使する「法」法則、またはやり方を体系化したものなんですよ。ですから、神様しのかみの世界では「科学」と呼ばれていたものに、「魔」の力を作用させる術を加えたものと解釈

すれば分かりやすいと思います。」

「なるほど。ある意味便利な力ってわけね。」

あたしが答えると、村長が付け足して言った。

「そして、強いが故に悪用もされやすい力じゃな。」

「そう・・・ですね・・・」

少し声を落として、ミルが村長の意見に賛同した。

「実際、この力を悪用して犯罪なども行われています。逆に、それを防ぐためにも使われていますけどね。」

「なるほど、じゃああたしも学べば使えるわけね。」

あたしが納得してそう聞くと、ミルがそれに答えて言った。

「まあ、神様しのかみだとすぐ扱えますけどね・・・。」

「けど？」

「そんなことをしなくても、神様しのかみだと・・・。」

と言いかけてから、あたしはそれを遮った。

（「奇跡」はほいほい使っているものなの？」）

（「あ、気づいていらっしやいましたか。」）

（「気づかないわけじゃない・・・で、どうなの？」）

（「使うこと自体には、まったく制約はないですけど、使いすぎれば、人の形でこうやっているのが大変になるのは間違いないかと。」）

物理法則ですら容易に捻じ曲げますので。」）

（「だよねえ・・・地上でのんびり旅をするなら人の状態でいるのが一番だよねえ・・・。」）

（「そうですね。」）

あたしたちが念話テレパシーで語っていたので村長は黙っているように見えて語ってきた。

「どうされたかな？そろそろ休まれるかな？」

「あ、いえ、少々考え事を・・・あははは（ハハッ）。」

軽く笑って誤魔化した。そして、話題を変えて、あたしは言った。

「この辺りの国家情勢とかは、いささかご存知ですか？」

「ふむ、わしも詳しくは知らぬが、たまに来る旅人から情報程度な

らあるな。最近の情報では南のサディルウム帝国はいろんな周囲の国家にちょっかいを出して侵略行為を仕掛けようとしてるらしいと言われてるな。」

村長はそう、情勢について話してくれた。ミルがそれに答えた。

「結構不穏なんですね。じゃあ、まずは北の王国からですかね。」

「そうね。まずは、レミアルト王国と言うところに向かいましょうか。」

あたしも賛同した。村長がそれにあわせて言った。

「なら今晚はもう休んで、明日村で支度してから旅立つといい。生活必需品くらいなら用意できるからの。」

「ありがとうございます。」

村長の申し出に、あたしは謝意を述べた。そして、そのまま就寝することにした。

朝日は心地よく、すがすがしい始まりだった。

「ん〜。いい朝だ。」

背伸びをしながらあたしは言った。

「まったくですねえ、いい旅になりそうです〜。」

ミルは身支度をしながらあたしの意見に答えていた。

「用意ができましたよ。マスター。」

手際よくミルが仕度をしてあたしに言ってきた。村長が近づいてくる。

「何ももてなせんだったが、無事に旅を続けなされ。」

ねぎらいの言葉に感謝しつつ、あたしは答えた。

「ありがとうございます。村長も、ご婦人もお元気で。」

村長夫婦に別れを述べてからあたしたちは旅立った。

村で必需品を分けてもらい、村を出た。



西に半日歩くと大きな街道に出た。通りには、商業用の馬車、軍の戦車、一般の旅人等、さまざまな人々が北に南に行き来している。

「しっかりした街道ねえ。人の往来も多いし。」

あたしがそう言うのと、ミルが答えて言った。

「いいですねえ、近くに大きな街があるってことですね。」

そう、人の行き来が多いと言うことは人口の多い都市が近いという事だ。そして商業等は盛んになり逆に人が多いうえでの問題も発生する。それはある意味人が生活する上での常とも言えるだろう。

「さて、ではまず北に行きますか。」

あたしは北に向けて歩き出した。ミルがそれに続く。

「あ、待ってくださいよ。」

一陣の風が吹きぬけようとしていた。

## 一陣の風（後書き）

次回「レミアルト王国」。神達<sup>しのかみ</sup>は中堅国家レミアルト王国へと進む。  
彼女達はどういう風を吹き続けるのか・・・。

## レミアルト王国（前書き）

神<sup>し</sup>達はレミアルト王国の王都に近づいていた。そこでは何が待ち受けているのか・・・。

## レミアルト王国

小説 風の吹くままに

### 第四章 レミアルト王国

街の入り口、つまり城門に入ろうとしていた。この辺りは大きな都市はみな都市国家が中心で、それを元に集合体を形成して国家を作っているようであった。そして、その庇護を得るために大小の諸都市を取り合うような状況だと言う。元の世界で言う、「中世」辺りがふさわしいかもしれないと思った。

「さて、あたしたちってすんなり入れるのかしら？」

ふと、疑問に思ってたあたしは言った。ミルはそれに答えた。

「そうですね・・・お隣が紛争を起こしつつある状況では正式な身分証明がないとなかなか入れてもらえないかもしれないですねえ。」

「そうよねえ・・・「力」を使えば入れるでしょうけどそれじゃ、つまらないしなあ・・・」

そう答えたあたしに、ミルが言った。

「つまらないって・・・マスター、楽しむの優先ですか？」

「そうでもないという意味がないでしょ？」

「まあ、それはそうですね・・・。」

あたしたちがそう会話していると、隣から、男性が声をかけてきた。

「お嬢さん方、お二人で旅ですか？」

振り向くと、神官の風体の男性が、にこやかに話しかけてきていた。姿形はきちんとしたもので、態度もしっかりとしている。恐らく修行僧か何かだろう。

「ええ、事情があって今は二人で旅をしています。城門での手続きが結構面倒そうなので、あたしたちは許可証のようなものは持ち合わせていないのでどうしようかと、思案していたところなんです。」

あたしは正直に、男性に答えた。男性はそれを聞いて、ふと目を閉じ、小声で何かを唱えた。その後、目を開き、にこやかな顔をしながら言った。

「お困りのようですね。私はさるお方から、特別に許可を得て通行許可証を発行されております。ご一緒に、中に入ることにしませんか？」

「いいのですか？ 見ず知らずなのに・・・。」

「ええ、神も、良かれと言って下さっていますから。是非、どうぞ。」

そう言って、にこやかに男性は答えた。思案していたときに、ありがたい申し出ではある。今回は、一緒に同行させてもらうか・・・。「ありがとうございます。ご好意、甘えさせてもらいますね。」

「いえいえ、困ったときに手助けを差し伸べるのが、神官としての勤めですから。」

感謝を述べると、男性はすぐさま神官らしい返事をしてきた。

「助かりましたね、マスター。「力」を使う必要もなくなりましたし。」

「そうですね。まずは、彼に感謝しないかね。」

二人でそう言い合った。その後三人は自己紹介をした。

「へえ、アーレフさんは、今まで諸国を旅して修行してたんですか。」

「まあ、この大陸内ですけどね。」

「って、結構いろいろいかれたのでは？」

話は彼の今までの旅の内容になっていた。

「あ、そうですね・・・国家数としては14くらいかな？」

「14ですか。いろいろ巡られて勉強になられたんですね。」

「おかげさまで。たくさん修行させてもらいました。ミルさんや神しんさんも旅の途中と伺いましたが、長いのですか？」

アーレフは、あたしたちのことも聞いてきた。ミルが答えて言った。「あ、えーとですね。ここに来たのは初めてなんです。ですので、

まだ知らないことだらけで・・・」

「なるほど、では、私と出会えてひとつ良かったと言う事で。」

「あはは。(笑)」

そうやって会話をしていると城門の衛兵の前まで、あたしたちの番が来た。

「お前たちは何者か？通行許可証があるなら見せなさい。」

型どおりの言葉で、衛兵は仕事をこなす。アーレフが進み出て、懐にあった許可証を出した。

「私は、レミアルト教会所属、アーレフと申します。旅路でめぐり合ったお嬢さん二人を教会に案内すべくこうやって戻ってきた次第です。」

アーレフがそう語って、衛兵は許可証を見ると、驚いて、言った。  
「これは殿下！失礼致しました。そういうことであればお通りください。」

そう言って、他の衛兵に指示をして道を明けてくれた。

「やれやれ、だからこういう場所は苦手なんですよね。」

アーレフは苦笑混じりにそう言った。どうやら彼は権威者として扱われるのが苦手なようである。そういう彼を見て、微笑んでしまった。

「殿下だったんだ。そう見えないけど。」

あたしがそう言うのと、彼は苦笑混じりに答えた。

「三男坊ですしね。かなり自由にさせてもらっていますから。兄上達など大変ですよ。」

権力者は大変なものである。ただ、経験してないものは大半が理解できないであろうが・・・能力がないと自分のみならず他人も不幸にしてしまうが故に能力を持つことすら義務付けられてしまう。

「力」を持つことの責任と苦悩が見て取れる。それに比べてあたしは・・・。

「気楽なあたしは贅沢をさせてもらってるのねえ・・・。」  
ふと、そう言ってしまった。ミルが答えて言う。

「まあ、マスターの旅も大変と言えば大変ですけどねえ。」

「そんなものかな・・・まあ、これから分かるか。」

そんなことを語りながら城門をくぐっていった。

「で、首尾は？」

「今のところ万全です。襲撃時間、場所、抜かりはありません。」  
人の往来は多いが、人目につかない場所で、男二人が話し合っていた。

「今度こそ成功させねばならぬ。あやつが持つ神器をなんとしても手に入れねば・・・。」

「はっ。」

なにやら、人を襲う算段のようであった。

「いい街ねえ。」

そういいながら、あたしは街を眺めていた。きれいに整えられた町並みがきちんと行政区画してきたことを物語っている。きちんと区画整理がされれば管理も行き届き、不法もはびこりにくくなる。行政の基本だが、意外とされていないのはどこの世界でも共通だ。それが行き届いてるのだからこの統治者はかなりの切れ者だろう。

「曾祖父の時代から決め細やかな街の整備が行われていたそうです。今の街の区画の大半は父の時代にほぼ完成していますしね。」

アーレフはそう言って説明した。家族の偉業である、誇らしい一面もあるだろう。

「わあ、市場もにぎやか。何か買いたいなあ。」

ミルがそんなことを言い出した。あきれ混じりにあたしが答えた。

「買うのは後で。まずはアーレフが案内する教会に行くのが先よ。」

「う・・・はあい。」

しぶしぶミルは返事をする。それを見て、アーレフがくすりと笑った。

「その姿だと、なんと言うか、ギャップを感じますね。神しさんは小

柄なのでミルさんがかしこまってるとうごく違和感があります。」「言われてみればそうかもしれない。身長150cm足らずのあたしが身長2m近くのミルに言い含めているのだ。しかもミルは可愛い言い草をするからなおさらそう見えるだろう。」

「あははは。(^^)」

つい二人で苦笑いをしてしまった。

三人は大きな教会の前に来た。荘厳な建物でかなりの年数がたっていることが見て取れる。

「りっぱねえ。」

「そうですね、約千年前に建てられたと言われています。さて、参りましょうか。」

そう言って、アーレフは中に入って行った、あたしたちもついて中に入る。

中は、さらに荘厳さが増して見えた。装飾もさることながら、日ごろ如何に手入れがされまた愛されているかが分かる。奥に進むと、権威のある神官らしき人物が立っていた。どうやら大神官のようである。

「アーレフ||レミアルトただいま戻りました。」

そう言って、彼はその大神官の前で屈み、神官としての礼であろう、作法をした。それを見て静かに大神官は答えた。

「よく無事に帰ってきました。いえ、もちろん、無事に帰ってくることはわかってはいましたが。修行でますます力をつけたようですね。」

「は。これも神のお導きかと、ご指導も様々あり「力」も数多く教えて頂きました。」

「それは何より。さて、この子達はどちらさまですか？」

大神官があたしたちに気づいてアーレフに問うてきた。アーレフは答えていった。

「はい。城門の近くで出会ったのですが、何かを感じましたので神に問い尋ねたところ一緒に行くよう勧められましたのでこうやって



一緒にこちらに参った次第です。」

大神官はあたしのほうを少し見てから答えていった。

「そうですか。あなたにも分かりますか。分かるのであれば、神のお導きでしょう。神さんと言いましたかな？」

不意にあたしの名前を言われて、あたしはびっくりしたがすぐ答えた。

「あ、はい。あたしは、あかなじめ杜神と申します。」

「よい目をしておられる。彼と一緒にいかせても構いませんか？」

「あ、あたしとですか？」

「はい。」

落ち着いた声で大神官は語った。どうやら本気のようなのである。断る理由もないし、逆に彼がいることでいろいろ旅に役立つのは間違いない。むやみに「力」は使いたくないのでここは一緒に旅をするのが最善と思った。

「分かりました。あたしも旅人としては初心者なので逆にご迷惑になるかもしれませんがそれでもよろしければお願いいたします。」  
そう答えると、大神官は微笑みながら答えた。

「早速の肯定の返事ありがとうございます。彼も、問題を抱えてる身なのであなたのような方とご一緒できるならいささか楽でしょう。」

「え？それはどういう・・・」

あたしが逆に問いただそうとすると、大神官は口に手を当てながら、「あなたのことはよく存じております。今はアーレフの身を宜しく御願致します。」

と、やや小声で言った。つまり彼は、あたしの存在について理解した上でアーレフを託すと言っているのだ。そう言われるならば、こちらは肯定するしかない。

「分かりました。では今後のことを話し合いたいのでこれで失礼させていただきます。」

そう言って一礼をしてあたしは、そこから下がった。二人もその後

あたしの元にやってくる。

「まさか、あたしを知ってる人とはねえ……。」

恐らく、「神」またはそれに近い存在が伝えたのだろうが……

「アーレフ、報告とかは終わったの？」

あたしはアーレフに聞いた。彼は答えて言う、

「ええ、これからはあなたとともに旅をするように指示を頂きました。やはりあなたは特別な方の方ですね。」

それを聞いてミルが言った。

「え？ってことは、はじめからそうじゃないかと思ってたんですか？」

「ええ。あなた方と出会ったときに「祈り」を捧げて答えを求めたら一緒に行くように言われたのでね。」

「啓示をもらったんですね。すごいなあ。」

「あ、いや、私も初めてだったのでびっくりしたんだけどね。」

アーレフは謙遜にそう答えた。たぶん事実だろう。

「さて……」

と、あたしは、話題を変えつつ切り出した。

「これからどうするかな。まずは街中見学かな？」

「あ、そうですね。あたし市場に行きたいです。」

ミルが早速さっ行ききたかった市場見学を申し出てきた。

「ってことなんだけど、いいかしら？アーレフ。」

あたしがアーレフに聞く、彼は微笑みながら答えた。

「ええ、いいですよ。ではまずは市場に向かいましょうか。」

三人は、教会を出て市場方面に向かった。

教会では大神官が祈りを捧げていた。

「彼にも新たな使命が生まれたのですね。かの方との旅が幸多きものとなり、彼に課されている枷が少しでも軽くなりますように。」  
彼は、意味深な祈りを捧げていた。

市場は賑やかだった。店の者の声、客の声、競り合う様子がすぐに分かる。より良い物を探そうとする者、逆に出来るだけ高く売ろうとする者、両者のせめぎあいである。言うなれば、目には見えない死闘であった。

「楽しそうねえ。」

ふと神はそう言った。しばらくこういう喚声には出会っていないかったな。しばし、立ちながらその聞こえる声に耳を傾ける。

「あれ？ マスターどうしました？」

立ち止まった神を見て、ミルがそう言った。神は答えて言う。

「喚声を聞き入っていただけだよ。こういうのは久々だから。」

「ここは国で一番賑やかなところですからね。」

アーレフが説明として語る。なるほど、確かに一番賑やかかもしれない。いろんな意味で。

「待て！」

突然、怒号が鳴り響く。何か騒ぎがあったようだ。少し離れた場所  
で、人々が騒ぎ出している。

「何でしょうか？」

「大した事でなければいいですけどね。」

ミルとアーレフはそんなことを語り合っていた。騒ぎはこちらに向かってくるようだ。どうやら元凶となる人物がこちらに走ってくるようである。

子供だ！何かを抱えている。子供は神を見るとすかさずその後ろに回りこみしゃがんで隠れる動作をした。

「お姉さんちよっと隠れさせてね。」

そう言って、子供は神の髪をうまく自分に巻きつけながら神の後ろに回りこむ。もちろんそのままではばれてしまうが、神がさりげなく「力」を使う。

「くそ！どこにいった。あのガキ、見つけたらただではおかいか  
らな！」

「向こうかもしれん。手分けをして探そう。」

男たちはそう言って、四方に分かれて捜しに行った。

「もう見えないわよ。」

神しんがそう言うのと、後ろにいた子供がすごすごと出てきた。

「あ、ありがとうお姉さん。後ろにいたただけなのに見つからないなんて、何かしてもらったんでしょ？」

子供が恐る恐る神しんに感謝を述べた。しかも、神しんが「何か」をしたことに気づいているようだ。神しんはくすりと笑いながら答えた。

「そうだけど、困って、急に助けてって言われたら、助けたくならない？」

逆に質問されて、子供は啞然とした。

「あ・・・うん。僕もそうするかも、出来るかどうかはともかく。」  
子供が、よい返事をしたのを聞いて、神しんはにこやかに笑いながら言った。

「そう思えるなら、あなたはいいい子ね。やったことがどういふことかはともかく、少し静かなところでお姉さんたちに事情を話してもらってもいいかな？ここだと、またさっきの奴等が来るかもしれないしね？」

そう言われて、子供はしばし周囲を見回した後、神しんのほうに向かって顔を深々と下げて言った。

「うん、ありがとう。じゃあ、僕の隠れ家に案内するからついてきて。」

そう言って、子供は走り出した。

「そう言う訳だから、みんな行きましようか。」  
神しんはそう言って、二人についてくるように言った。

「マスター、いきなりそういうシチュエーションですか？」  
ミルが少々呆れ気味で行く。アーレフも微笑みながらそれについて行った。

子供は、裏路地を通り、さらに倉庫街の裏手に入った。人通りは疎らになっていく。ある建物の横で、子供は立ち止まった。

「ここから入るんだ。」

そう言って、そこにある壁を触ると、多少きしみながらずれていき、大人一人がやつとは入れるぐらいの空間が出来た。そして子供はそこに入っていく。

「へえ、いい感じの隠れ家ね。」

感心しながら神はそこに入っていく、ミルたちもその後に倣った。子供と神たちが入ると先ほどの壁は音を多少立てながら元の位置に戻っていった。どうやら仕掛け扉のようだ。

「これはすごい、よく出来てますね。」

仕掛け扉であることに気づき、アーレフが言う。

「それは、僕たちで考え出したんだ。」

少し自慢げに子供が言った。

「この奥なの、ついて来て。」

そう言って、子供は奥に進んでいく。半地下から地下へそう下っていく感じを受けながら四人は進んでいった。そして、扉が見えてきた。

「到着。ここです。」

そう言って、子供は扉を開け、中に入っていた。神たちも続く。中は質素なものだが、生活が出来るように整えられていた。奥のほうで誰かが寝ている。

「お兄ちゃん？」

どうやらこの子の妹のようだ。そう言って起き上がろうとした。それを子供（少年）が制止する。

「だめだよマリン。まだ熱があるだろう。休んでるんだ。」

そういわれて、マリンと呼ばれた少女は、再び横になった。

「その子の為だったのかな？」

「あ、はい・・・」

神が問うて少年が答えた。

「妹の熱がなかなか引かなくて、司祭様に御願いしようかとも思ったんですけど、僕たちお金なんてないから・・・。」

「ふむ・・・アーレフ、司祭とかって治療とかする時にお金取るの

？」

多少疑問に思っただけでアーレフに聞いてみた。こちらの世界のことはまだ詳しくは知らないから無理もないが。アーレフはいぶかしげに答えた。

「司祭様がお金を？君、司祭様がお金を求めたのかい？お金を求めるなんてことはないはずなんだが・・・」

「え？そうなんですか？ってことは何かおかしいですね・・・」と、ミルが言った。確かにおかしい。間に何かかんでいると見るのがいいのかもしれない。

「あ、えっと。司祭様がそう言ったんではなくて、神官のエルセビア様が・・・」

少年はそう答えた。どうやら、悪事を企んでいる者がいるようである。

「エルセビア・・・彼が・・・」

少年の話を聞いてアーレフが驚いた様子で聞いていた。まるで信じられないといった面持ちで。

「知り合い？」

神がそう聞くとアーレフは無言で頷いた。

「ところで坊や、いったい何を盗ってたの？」

ミルが少年に聞いていた。少年は答える。

「えっと、これなんですけど・・・」

そう言って、盗ったものを見せた。小さなものだが、鮮やかな装飾のある装飾品のようなものだった。神はそれを手に取ろうとして触れた。

「ん？これは・・・」

「どうしました？マスター。」

神が何かに気づき、ミルが問うてきた。

「何か「力」を感じる。普通のものじゃないわね、これは。」

神は「何か」を感じてそう答えた。少年は驚く。

「お姉さんたちすごいんですね。これって高価なものなんですか？」

「え？あ、ああ・・・何と言うか・・・マスターどう説明しました？（へへッ）」

少年に質問されてミルは困り顔で答えた。神しのが言う。

「そうね。まずは自己紹介しましょうか。あたしは杜神あかなめ、多少「力」のある旅人よ。」

神しのがそうだったので、ミルが続けて言う。

「じゃあ、あたしも言わないといけませんねえ。神様しのの付き人でミルⅡフェリシアといいます。」

「じゃあ、私も言わないといけませんね。私はアーレフⅡレミアルトこの国で神官をしています。今は神さんしのと旅を始めたところなんですよ。」

アーレフも自己紹介をした。それを聞いて少年も答えた。

「あ、ありがとうございます。僕はレオンといいます。彼女は妹のマリンです。」

そう言って、自分と妹を紹介した。それを聞いて神しのが満足げにして、話し始めた。

「そうねえ。まずはそれを調べることから始めましょうか。それから少しずつ話を整理していきましょう。」

皆がその意見に賛同した。神しのはそれを手に取り「力」を用いて調べ始めた。

「ん・・・魔道の道具か。しかも結構強いものね。何かの触媒に使うものかしら。もっと調べれば分かるんだけど・・・今はこれくらいにしておきましょう。」

「何か分かりましたか？」

「ええ、結構高価な魔道の道具みたいね。直接扱うものではなく触媒に使われるものみたい。さっきの男たちはお金になるからか、または使う目的だったから怒って追いかけていたのかもね。」

神しのはそれを見せながら説明した。

「さて、どうしましょうかね・・・」

神しのは思案した。ただ、お金を与えるだけでは、実質的にレオンやマ

リンの為にはならない。一時的に助かるだけだ。となれば、どこかで保護してくれる場所を確保するのがいい訳だが・・・

「私が大神官様に掛け合って彼らを保護してもらえるように御願いしましょう。それと同時に先ほどのお金の件も俎上すればいいですし。」

アーレフが提案した。確かに、その方法が最もいいように思われた。「うん、それが一番いいかもね。アーレフ、マリンに治療魔法をかけてあげたら二人を連れて行ってあげてもらえるかしら？ミルも子供につけるから。」

神はそう言った。ミルが疑問に思っして聞く。

「えっと、お話は分かりましたけど、だとするとマスターはどうされるんです？」

「あ、あたし？あたしはもう少しその辺をぶらついてみようかとね。」

はぐらかすように神が答しえた。ミルはそれに気づき言う。

「何か企んでますねえ・・・でも、その方がいいのかなあ、わかりましたあ、ミルはアーレフさんたちの援護に回ります。」

「御願いね。アーレフもいいかしら？」

「ええ、マリンさんを治療し次第すぐ向かいましょう。先ほどの男たちはかなり執拗でしたし早いほうがいいでしょう。神しさんもそれで別行動を提案されたようですし。」

アーレフが物分りよく答えた。神は感心しして言った。

「あら、さすがね。揉め事対処は一人のほうが楽だからねえ・・・」

「って、マスター楽しみたいだけでは・・・。」

「そこ、外野五月蠅いわよ。」

「えー・・・ミルは外野じゃないですよ。」

神とミルが微笑ましいやり合しいをしていた。アーレフはそれを見て、微笑ましく思いながらマリンの治療を始めた。



「レオン、マリン準備はいいかしら？」

神が二人に言う。二人は元気よく答えた。

「はい！大事なものは全部まとめました。」

「いい返事ね。じゃあ、二人ともアーレフについて行ってね。」

神にそう言われて、二人は礼をしながら答えた。

「いろいろありがとうございます。今はもうばかりですけどそのうちお返しを・・・」

そう言いかけて神が制した。

「お返しなんていらないわよ。それより早く行きましょう。あなたは助けを求めたからあたしは助けてる。今度はあなたが助けを求められたときに助けてあげればいいからね。」

そう言って、神はにこやかに笑いながらレオンの頭をなでた。

「じゃあ、アーレフよろしく。ミルもしっかりね。」

「はい。神さんも気をつけて。」

「マスター、初めてなんですから気をつけてくださいね。」

そう言いあって、神は彼らとわかれて移動し始めた。

「ミルさん、神さんに初めてっておっしゃってましたけど、あれはどういうことですか？」

レオンたちを連れて歩いてるときにアーレフは何気なくミルに聞きただしていた。

「あ、えーと・・・」

ミルは返答に迷っていた。あまり露骨に真実は言えないし・・・

「アーレフさんも知ってると思いますけど」 神様は特別な方ですけど特別になられたのがつい最近なんです」 なので、初めて、って言っちゃったもので・・・」

と、多少濁す形でミルは答えた。アーレフはその説明で納得したように、

「なるほど、神さんも大変なんですね。」

と、返答して、それ以上追求はしなかった。彼なりの解決を得たの

であろう。

「さて、っと。」

神は、アーレフたちからは離れて、人気の少ない裏通りを歩いていた。

「そろそろかな？ どうせ、こんなものを探してる連中だから、見つからないとなると、それなりの手段で探知するのが普通だろうし。」  
神がそう言っていると、前方から男の声がしてきた。

「ほう・・・魔道具を探知してるところでこんなところで女性に出会うとは・・・」

姿形のいい男であった。恐らく武術を嗜んでいるのだろう。隙らしい隙はまるでない。もちろん、見た目にはそう見えないのだが。それ故に、かなりのものだど、神は理解した。

「何か用かしら？ おじ様？」

多少、おどけた風に神が言う。それを聞いて、男はやや目を細めて答えた。

「ふん。分かっていると言うとはあえて挑発してるのか、それともただの馬鹿か・・・」

「試してみてもいいわよ？」

神が挑発的に、言った。しかし、男はそれには乗らずに話を続けた。  
「別にやり合うのが目的じゃない。お前が持つてるその魔道具が欲しいだけだ。依頼主からの希望なのでな。」

「へえ・・・上げる気がないって言ったらどうするのかな？」  
神がさらに挑発的に言う。男はさも冷静そうに答えた。

「そうだな、今回は引かせてもらおう。お前は正直、気味が悪い。面と向かっているのに、まったく強さが読めない。そういう対象とやり合うほど私は若くないんでね。」

相当の修羅場の抜けたもののみが言える台詞である。相手が分からないのにやり合うのは愚の骨頂だがそれが理解できないものが多いのも人の特徴である。彼はそれをわきまえているようだった。

「あら、案外賢いのね。でも、あなたの周りの連中は間抜けっぽい  
ようだけど。」

「そのようだな、私は退散するでしょう。巻き込まれるのはごめん  
だからな。」

そう言っつて男は姿を消した。それと同時に、十数人の男たちが現れ  
た。

「ここに反応があったぞ。」

「あらあら、団体客ねえ。」

神しんがそう言っつて、ややあざける口調で言う。男共は周囲を囲みなが  
ら、威嚇するように言った。

「女、お前が持っている魔道具を出せ。出さないと、ひどい目にあ  
わせるぞ。」

彼らから見ると、数で威嚇し簡単に入手できるものと考えていたの  
であろう。しかし神しんは鼻であしらうように答えた。

「ふうん。じゃあ、どういう目にあわせてくれるのかしら？」

要するに、渡さない、どうするかやってみなさい、と挑発しまくつ  
ているわけである。男たちにすれば考えられない状況な訳だ。一瞬  
ひるんだ後で、男たちのリーダーっぽい男が言った。

「罅ひまられてももう文句は言えないな、やれ！」

そう命令されて、ほかの男たちが一斉に神しんに襲い掛かった。

男たちは神しんを捕らえて一斉に服をはぎ始めた。見る見るうちに服は  
はがされていき裸になったあらわな姿が見えるはずであった。しか  
し、服をはぎ終わったかと思つた時そこには誰もいなかった。

「くっ。どこに行った？」

男たちは周囲を見回した。しかし誰もいない。いや、周囲が変だ。  
さっきまでと様相が違う。

「何だここは？さっきまでの裏通りと違う。」

状況が違うことに気づいた男が叫んだ。

「あら。目ざとい奴がいるのね。その通り、あなたたちはあたしの  
結界の中よ。生きて帰れないと思いなさい。」

どこからともなく聞こえる「声」がさっきの女のものであることは明白だった。しかし、彼らはもう何も出来ない。神しんの作った結界の中で右往左往するのみであった。

裏路地には神しんの姿だけがあった。

「全く。これだから男つてのは・・・」

自分が襲われかけたせいもあって神しんはやや不機嫌だった。彼女は襲われる瞬間、「力」を使い結界を張って彼らを閉じ込め、自分はそのまま抜け出して今の場所にいる、という訳であった。

「ま、そこで死ぬまで永遠に彷徨しんっていなさい。」

残酷にそう宣告して、神しんはさらに先へと歩いていった。

「さて、ここですよ。」

アーレフはそう言つて、神しんと出てきた神殿の前に来た。

「あら？ここはさっきいた神殿じゃないですかあ。」

ミルが気づいて言う。アーレフは微笑みながら答える。

「そうですよ。まずは二人を大神官様にお届けしましょう。」

「はあい。二人とも行きましょ。」

彼らは神殿の中へと入っていった。

「ほう、どうやったのかはともかく奴等はあっさり倒されたのか。」

男の声がした。神しんが答えて言う。

「あら、おじ様、お早いお帰りね。」

神しんの前に、さっき現れた男性が現れた。神しんは平然として立っている。

「魔道具を渡して欲しい。といっても、まあ返してはもらえんだらうな・・・。」

男はそう、自問気に言った。神しんが答えて言う。

「今は無理よ。こっちも振り回されて今に至っている以上はね。」

「ふむ、なるほどな。十数人を短時間にしかも街に被害なく倒す人物だ。私如きでは話になるまいな。今回は退散して報告しておこう。私の名前は剣志郎つるぎしろうと言う。よければ御主の名前を聞きたい。」

男はそうやって自己紹介し、神しのの名前を問うてきた。神しのは答えて言う。

「杜神あかたぬめよ。よろしくね。」

「ほう。答えてくれるとは重畳。では、神しの殿、またお会いいたそう。」

男はそう答えて去っていった。

「ふうん。結構いいおじ様だったけど。また会えそうだから、まあいいか。」

神しのは進路を変えアーレフたちが向かった神殿へ向かっていった。

「ほう。神官でお金を強要するものがあると・・・。」

アーレフたちは大神官の前で報告をしていた。

「はい、この子がエルセビアが要求していたことを証言してくれました。」

「そうですか、それに関しては審問会にかけて審査しましょう。よく報告してくれました。して、言うべきことはそれだけですか？」  
そう言われて、ミルが切り出した。

「あ、この子達をしかるべき施設か、里親などに出していただけるように手配を御願いしたいのですけど。」

「なるほど、こちらの話がメインのようですね。」

大神官はそう言って、にこやかに笑った。

「分かりました。手配いたしました。二人とも安心してください。私が責任を持ってふさわしい場所を案内いたしましょう。」

それを聞いて皆は喜んだ。

「よかったですねえ。」

「ええ。しかし・・・」

アーレフはそう言って後ろを振り向いた。

「まだ神しのさんのほうの案件が残っています。すぐ彼女を追いかけてみましょう。」

アーレフがすぐにも行こうとしていたのでミルはそれをとどめな

がら言った。

「あゝ、マスターなら、もう少しすればこの神殿の近くまで来られますよゝ？」

そう言われて、アーレフはきょとんとしながらミルを見た。

「ミルさん、どうしてそこまで分かるんです？」

もつともな疑問をミルにぶつけていった。ミルは答えて言う。

「それは、あたしがマスターの「使い魔」だからですゝ。」

「使い魔ですか・・詳しく話していただけますか？」

アーレフはそう言ってミルに説明を求めた。ミルは、仕方ないといった表情で答える。

「今後、一緒に旅をするわけですし、お話しますが、少し長くなりますよゝ。」

そう言って、ミルは説明を始めた。

「なるほど・・そういう事ですか。それで、私にも啓示があったんですね。」

アーレフは、ミルの話にうなずきながら答えた。ミルのほうが逆に驚いて言う。

「あれ？驚かれないんですね。」

「はは、「力」に係わり深い場所で学んでいますからね。まだ、私自身は「奇跡」などは見いていませんが大神官様からいろいろ教えていただいてますし、耐性があるのかもしれないですね。」

軽く笑いながらアーレフは答えていった。ミルは、逆に感心して言う。

「すごいですねえ。ミルはこれが当たり前なので普通ですけどゝ。いわゆる「普通」の方には大変なお話だと思いますしねえ。」

「そうですね。まあ立场上、私は普通ではなかったですからね。一応「殿下」ですから。」

「あ、そう言えばそうですね。」

二人は笑い合っていた。

神殿の前で神はミルとアーレフに合流した。

「お帰りなさいマスター。追っ手の方はどうでした？」

ミルがそう聞いてきた。神が答えて言う。

「一人素敵なおじ様がいたけど後は烏合の衆だったわね。とりあえず永遠に彷徨ってもらってるわ。」

いやなことを思い出したのか、少し不機嫌に答えていた。

「よほど乱暴されたんですねえ・・・ということは、結構な代物だったって事ですねえ。」

「まあ、そういうことね。後で、詳しく調べてみましょうか。」

「そうですね。こちらのほうは片付きましたよ。」

アーレフは、自分のほうは片付いたことを報告した。それを聞いて神は満足げに答えた。

「それはよかったわ。これでレオンやマリンも困った生活から抜け出せるといいけどね。」

根本的な解決にはならないとしても、当座の解決が出来たことに神は喜んでいた。

「では、とりあえず次の目的地に出発でいいのかしら？」

神がそう提案した。ミルが答える。

「いいんじゃないんですか？市場見物も楽しみましたし。」

「私も依存はないですね。ただ・・・」

アーレフはそう言いかけて戸惑った。

「ん？アーレフ気にせず言っていていいわよ。ミルからあたしのことは聞いたんでしょ？」

神はそう言ってアーレフに語るよう進めた。

「そうですね・・・私もいささか問題を抱えてるので恐らくあなた方を巻き込むことになるかと思います。」

そう言ってアーレフは懷から小さな装飾品を出した。

「これは何ですか？」

ミルが聞く。アーレフはそれに答えて言った。

「これは神器のひとつと言われています。」

「神器ですか。って、神器って何なのでしょう？」

「もっともな質問ですね。まずはそこからお話ししましょう。」

神器、それは、神の器という言葉が指すとおり、神の力を秘めた魔道具のことで、物によっては国家ですら左右しかねない代物である。もちろん、強い力を扱うにはただ持っていればよいというものではない。物にもよるが、大抵は、必要な儀式があったり、使用に手順があったりする。一介の人間が扱うのであるから、所定の手順をふまなければ扱えないのはもちろんのこと、「普通」の人間だと場合によっては、触れるだけで死に至る事もある危険な代物なのであった。

「なるほど。確かに厄介な物ですねえ。でもどうしてアーレフ様が？」

「王家伝来の神器のひとつで、まあ、なんといいますか・・・厄介ごとを押し付けられたようなものです。以前も言いましたけれど、私は三男坊ですから。」

アーレフはそう説明した。事情が理解できた神が答える。

「なるほどね。手に余る厄介な「物」を、比較的被害が少ない、あなたに押し付けたところね。」

「はは・・・簡潔に言うところという事です。」

恐縮そうにアーレフが言った。ミルはそれを聞き憤然とした。

「えー、それってつまり、厄介ごとが無理やり来たってことじゃないですか。」

「まあそうですが、兄上たちが抱えるものに比べれば個人で済みますからまだ楽なほうですよ。」

アーレフは、謙遜にそう答えた。確かにそういう見方も出来るが、結局は押し付けである。対処できなければそれこそ、死ね、といっているようなものだ。

「なるほどね、それで大神官が「御願います」と言った訳だわ。」以前の経緯を思い出しながら神が言った。



「大神官様がそんなことを・・・重ね重ね申し訳ないです。」

アーレフがさらに恐縮そうに言う。それに反応してミルが言った。  
「んゝでも、逆を言えば、いい機会になったってことですよねえ、マスター？」

「そうね。結果論になるけど、「神」のお導きってやつね。まあ、あたしが言うべきことじゃないかもしれないけどね。」

そう、神は言ってくすりと笑った。これから楽しいことが起きる、そういう笑いであつた。

「ところで、その神器はどう言うものか理解してるんですか？」  
ミルが疑問を呈した。アーレフがそれに答える。

「あ、いえ、私も詳しいことは知らないのです。重要なものであることは「分かり」ますが・・・。まだまだ私も未熟なもので・・・」

「まあ、人が知るには大変な代物だしね。無理もないわ。それはそのうち分かるでしょうし、どうせ、あたしの手の内なんだし、ね。」

神がそういった。彼女はこの世界の「神」である以上、確かに手の内にあるものだろう。それを理解して二人は頷いた。

「さて、では、行きましようか。街中で、奴等を相手するのは面倒だしね。」

神はそう言って歩き始めた。すでに次の算段を考えているようだった。ミルとアーレフの二人が顔を見合わせて笑いながら後についていく。

「はゝい。」

「分かりました。御供させて頂きます。」

彼らの旅は始まったばかりである。

## レミアルト王国（後書き）

次回「街道にて」。神達<sup>しん</sup>は王都を出て街道を北上し始める。そこで出会う人物とは？次回もお楽しみに。

## 街道にて（前書き）

北の街道に出た神達<sup>しの</sup>一行。彼女を待ち受けるものは？

## 街道にて

小説 風の吹くままに  
第五章 街道にて

北に延びる街道では、たくさんの人が往来していた。商人、軍人、旅人、さまざまな人がいた。そんな中に神しんたち一行もあった。

「やれやれですねえ、今のところは無事なようですぐ。」

ミルが、多少くたびれたように言う。それに答えて神しんが言う。

「まだ二日目だしね。街道の人々がもう少し減ってきたら、来るんじゃないかな？」

彼女はさも楽しげに言った。どうせなら早く来い、と言わんばかりに。苦笑しながらアーレフが言った。

「早く来て欲しいって言うような感じですね。恋人でも待ってるかのような。」

「んな！・・・」

意表を衝かれた言い方をされて神しんは戸惑ってしまった。

「そんな人はまだいないわよ！」

「まだ・・・ですかあ・・・これは可能性があるかもですよお？」

ミルがからかう様に言う。神しんが顔を真っ赤にしながら言った。

「ミルっ。何の可能性かしらねえ・・・主人で遊ぶとは・・・どうしてくれよう・・・。」

「マスター、怒らないでくださいよ。っていうか、どうして顔が真っ赤なんですか？」

「こらっ！ミル、分かかってて言ってるわねっ！」

とまあ、二人がはしゃいでいた。なんとも微笑ましい光景だ。そうアーレフは見ていた。

「さて、微笑ましいですがそろそろお開きかもしれないですね。」  
アーレフがそういったのを聞いて二人はお互いに顔を見合わせて、

その後アーレフのほうに向き直る。

「そのようね。楽しめるといいのだけれど。」  
神がそう言った。ミルも言う。

「今度はミルも楽しみたいですねえ。」

これから、起こる事に期待を抱いて高揚している様子だった。  
街道の往来がまばらになっていた。丁度、周囲も木々が増え、やや、見通しが悪くなっていく。

「場所的には頃合いですよねえ。そろそろですかね？」

「恐らくそうでしょう。と言うか、お二人ならすでにお分かりでしょうけれど。」

アーレフはそう言って、二人に目配せをした。二人はそのまま手で合図を送る。

周囲にざわめきが広がる。もちろん「普通」の人間には分からないであろうが。

「来るのが分かる、か。やはり只者ではないな。」

そう言って一人の男性が木陰から出てきた。それを見て神が言う。

「あら、志郎おじ様、いらっしゃい。」

「あれ？ マスター知り合いですか？」

ミルが疑問に思っ問うた。神が答える。

「ええ、少し前に出会ったカッコいいおじ様よ。」

「へえ。よろしく御願いますう。」

ミルがそう挨拶をしたのを見て、志郎が答える。

「やれやれ、どこまで「普通」離れしてるんだか・・・」

「まあ、それはお互い様ですよ。」

アーレフがそれに答えて言った。まあ、確かにそうであろう。状況的にはそういう会話をするべきときではないだけに、「普通」の感覚ではないことは明らかである。

「まあ、分かってはいたが、とりあえず今回は少しだけお相手して欲しいのでな。」

そう言って志郎が構えた。武術家らしく隙のない構えである。それ

を見て神しんが言った。

「じゃあ、今回はデートのお誘いはあたしね。みんなは見てて。」

「あ、ずるいですう。」

ミルが異論を唱えたが、神しんがさっさと前に出て、構えに乗ってきた。  
「今回は、神しんさんのやったものの勝ちみたいですよ。それよりも、後ろの団体さん用に二人で準備しませんか？」

アーレフがそうやってミルを説得した。ミルが仕方なしに答える。

「むゝ。またマスターに取られちゃったか。まあまだ始まったばかりだし、次こそはもらいますからね。」

そう言っ、神しんたちから離れて、「準備」を始めた。

「さすがだな。武術の心得があると見える。」

志郎はそう言った。神しんの姿を見て、隙がないことを見て取ったのだ。

「んゝ。でも、実戦はほぼ無いわよ。」

「何？」

「こっちに來てからまだやったこと無いしね。」

「こっち、だと？」

「ああ、あたし個人の話よ。まあ、とりあえず始めますか。」

と、話を途中で断ち切っ、神しんが前に出てくる。志郎は神しんをかわしながら体制を整えなおす。

「聞かれたくないって事か。」

志郎が避けながら言う。神しんが答えて言う。

「今はね。」

そういいつつ。回し蹴りを入れる。もちろん志郎からすれば予想された動きのため余裕でかわす。

「今は、か。どうすれば、教えてもらえる側になるのかな。」

誘うように志郎が言う。それに神しんは答えずに、次は手刀を出す。志郎は予測してるかのようにそれかわす。

「なるほど、そういうことか。」

神しんの行動で、志郎は何かを理解したのかそう言った。そして、志郎が、攻めに入った。

左右から、行動を迷わせるような移動を繰り返した後で、回避しにくい、斜めの斬撃を繰り出す。相手にかわす行動を阻害するために、基本とも言える戦闘示威行動だ。神は慣れていないのか、それを受け止める。

「なるほど、慣れていないと言うのは本当のようだ。しかし動きは「普通」ではない。」

志郎は冷静に判断しながらそう言った。神は答えて言う。

「それがすぐに分かるおじ様もすごいと思うんだけど？」

「まあ、それが商売のようなものだからな。」

そう言って、志郎は神に攻撃を加えていた。

アーレフとミルは、まもなく来るであろう「団体さん」に対しての準備をしていた。

「さっきの方とは違い、つまらない人たちのようですねえ。」

ミルがそう「感想」を述べていた。アーレフも同調して言う。

「そのようですね。では、あっさり片付けますか。」

二人はうなずき、「仕掛け」を作っていた。

神と志郎は、格闘を続けていた。とはいっても二人とも本気と言うわけではない。もちろん、手を抜いてるわけでもない。言うなれば「楽しんで」いるのだ。はたから見れば、見れるならばだが、二人は楽しんでいた。どれだけやり合ったかわからないが、ふと、神の手が止まった。それに気づき志郎も攻撃をやめた。

「どうした？」

志郎が問う。神はそのまま歩いて志郎の前にやってくる。

「おじ様、何がしたいの？」

神が率直に聞いてきた。志郎は突然の質問に戸惑う。

「そ、それはお前と戦って魔道具を・・・」

そこまで言ったところで神に遮られる。

「嘘が下手ね。あたしたちに興味を持ったって所かしら？」

そう言われて、志郎は両手を広げながら答えた。

「やれやれ、さすがと言うか、お見通しってわけか。」

「全部を見るのは嫌だから、多少「読んだ」だけよ。」

そう神は答えた。言い換えれば、見ようと思えば「すべて」知れる、と言ってるようなものである。志郎は呆れながら言った。

「いやはやそこまでとはな。なら、俺は向こうに付く義理も無いな。」

「ん？どういふことか説明してくださる？」

神はそうやって志郎から経緯を聞くことにした。

剣志郎は依頼者の前で依頼を聞いていた。そう、彼は冒険者であり、その並外れた体術を駆使して、数々の依頼をこなしてきたかなり優秀な冒険者であった。

「つまり、この魔道具を取り返して欲しいと？」

志郎がそう言うのと、依頼者は頷いた。

依頼者によると、それは重要な触媒で、それをを用いてある魔道具が完成すると言う。しかも奪われた魔道具は重要な「核」で代用品が無いと言うのだ。

「ぜひ、奪い返していただきたい・・・ほかの者にも頼んだがあなたにも個別に依頼したいのだ・・・」

そう言って、依頼者は志郎に依頼料を提示した。その価格は破格であった。

「そういった経緯でまず街中で出会った、と言うわけだ。」

「なるほどねえ。」

志郎の経緯を聞いて、神は大体を納得した。

「「核」か。と言うことは、魔道具でも意思を持つクラスか、それ以上のものね。」

「意思だと？」

「ええ、付与魔術の上位だと物質に意思を持たせるものがあるから、



その高位応用作品か、ホムンクルスのような魔道生物あたりでしょうね。」

神はそうやって、魔道具を特定した。志郎は驚いて言う。

「たいした魔道検査道具も無いこの状況でそこまで分かるのか？」

そういわれて、神は、けろっとして答える。

「必要ないから。」

「必要ない、だと・・・」

言い換えれば、そこまですごい、と言ってるわけである。

「これはもう話にならん。俺では相手にならん。こう言っただが、しばらく俺もお前のもとで付き合わせてはもらえんかな？」

「あたしはいいけど・・・あなたはそれでいいの？」

神が肯定しつつ、逆に問いただしてくる。それに志郎が答える。

「どうやっても依頼は完遂できそうに無い。それに、完遂できないとなれば追っ手が恐らく来るであろうが、お前たちと一緒に楽しめそうだしな。もちろん、一人で逃げることも出来るが逃げるだけでは楽しくない。御主と同じで俺も楽しみたいのでな。」

「あら、あたしと同意見だなんて、嬉しいわね。では一緒に楽しみましょうか。となればそろそろ向こうも掃除が済んだでしょうし向こうと合流しましょうか。」

「了解した。」

神と志郎は、二人でそう結論付けて、ミルたちがいるであろう方向へと進みだした。

「やれやれ、こんなものも分からずに追ってくるなんて三流以下ですねぇ。」

ミルは、アーレフと二人で仕掛けた魔術罠に引っかかった追っ手たちを呆れてみながらそう言った。アーレフは苦笑しつつ言った。

「まあ、「普通」の人間には無理な話ですよ。先ほど居られた方ならともかく。」

「あのおじ様か。マスター楽しんでるんだろうなあ。」

ミルがそう言ってるよ、

「誰が楽しんでるのかしら？」

と、後ろから声が聞こえてきた。ミルがびっくりして言う。

「あ、あれ？ 一つお帰りになったんです？ マスター。というか、おじ様も一緒？？」

神と志郎と一緒にやってきたのでミルが驚きつつ見ていた。アーレフは微笑みながら見ている。神が答えた。

「まあ、「いろいろ」あって今からしばらく一緒に行動することになったのよ。」

「剣志郎と申す。体術くらいしか取柄は無いのだがよろしく頼む。」  
そう言って志郎は挨拶をした。

「私はアーレフⅡレミアルトと申します。しがな神官ですがよろしく御願います。」

アーレフが返す。それを見てミルも言った。

「あゝあたしも。あたしはミルⅡフェリシア。マスターの使い魔です。よろしくね。」

「なんともすごい顔ぶれだな。」

志郎がそう感想を言う。神がそれに答えて言った。

「だから、ついて来たんじゃない？」

「確かに。」

くすりと笑いながら、志郎は答えた。

「さて、では街道を北上しましょうか。」

神はそう言った。三人は頷いてそれについて行く。

三日目、街道を歩いてるところで志郎が言った。

「ところで、あの魔道具だが・・・」

「ん？ あれがどうかしたの？」

神が答えて言う。志郎が続けて言った。

「そのままだと面倒ではないか？ どうせ奴の事だ、探査しつつ追いかけてくると思うのだが？」

もつともな意見である。神はそれを聞き、答えた。

「ああ、それなら問題ないわよ。これからやるから。」

「これからだと？」

「ええ、ちよつとそこの外れにいきましようか。」

そう言つて、神は街道から少し外れて大きな広葉樹のそばに立った。ほかの三人もついて行く。神は懷から例の魔道具を取り出した。

「で、どうするんですかあ？」

ミルがそう聞いた。神が答えて言う。

「探知されないようにしたいからね。『核』なわけだから、こつちから『創れ』ばいいのよ。」

「なるほど、向こうは使うために探してるわけですから先にこつちで使えばいいという事ですネ。」

アーレフが神の意図を理解して言つた。神が答える。

「さすがアーレフ、鋭い洞察ね。さて、始めますか。」

神はそう言つて、「力」を使い始めた。あたりに、「力」が集まり始め、次第に目に見える形に凝縮していく。眩く輝いて収束していくとそれは人の形を取り始めた。様子を見ていた志郎が感嘆して言う。

「いやはや、これ程とはな・・・形容する言葉が見つからんな。」

「んー、おじ様、マスターはまだ「ちよつと」しか力を使ってないですよ？」

ミルが説明する。そう、神はわずかし「力」を使っていないのだ、言い換えるなら、「力」を発揮すれば何が起こるか人では想像が付かないと言うことである。

「これはますます、ついていくのが楽しみなな。」

志郎はそう言つて、神の様子を見ていた。それは、光がだんだん収まっていき、少女の姿が見えてきた。

「さて、これで完成だけど、このままじゃちよつとまずいわね。」  
出来上がりに満足しながらも神がそう言つた。

「え？どうしてですか？」

ミルが聞く。神が答えて言った。

「裸じゃまずいでしょ？」

そう言われて、皆はそれを見た。藍色の髪、蜂蜜色に輝く美しい瞳、色白の美しい肌、とても可愛い少女だが、確かに素っ裸であった。

「た、確かにそうですね・・・ミルさん、神さんの服で、彼女に合う物を出してあげませんか？」

アーレフもさすがに恥ずかしいと言う表情でミルに言った。ミルは答えて言う。

「あゝそうですね。ちよつと、鞆を調べてみます。」  
そう言つて、ミルは鞆をごそごとあさり始めた。

「さて、あなたの名前はなんと言うのかしら？」

神は、「それ」に尋ねた。「それ」は答えて言う。

「レスフェミュナシユア（神を狩る者）。」

淡々と、そして抑揚が無く答える。機械的な返事だった。

「神を狩る、ねえ。これって偶然にしては出来すぎてる感じよねえ。」

神はそう言った。志郎が言う。

「つまり、そういう目的のために作られたものって事かな。」

「恐らくそうでしょうね、悪魔崇拜もあるそうですね、そっちの関連かもしれないですね。」

アーレフがそう説明した。レスフェミュナシユアは、神に向かって言った。

「マスター、指示を御願ひ致します。」

神は、それを聞いて少し躊躇したがこう言った。

「そうね、まずはミルが持ってくる服を着ること。そして、あなたの名前は長いから愛称を決めるわ。そのまま呼んできると至らない揉め事も起きそうだしね。」

「あゝ確かにそうですね。神を狩る者、って名前では誤解を招きそうですねえ。あ、これを着てくださいねえ。」

そう言いながら、ミルは彼女に服を手渡した。少女は、手渡された

服を多少もたつきながら着ていく。それを見ながら神しが言った。

「ラミア（刃となる者）」と言う名前を与えます。これからは、こちらを使いなさい。」

そう言われてラミアと呼ばれた少女は、軽く頷いて答えた。

「はい。」

「さて、これでいいかしらね。これで「探知」は出来ないし、ラミアに攻撃しかけようなら、彼女自身が反撃をするわ。」

神しはそう言った。得心してアーレフが言う。  
「なるほど、彼女自身を創り出す事で敵にも対応できる武器まで作ったって事ですな。」

「ラミア、彼らはあたしたちの仲間。覚えておきなさい。」  
神しはそうやって、ラミアに指示を出す。

「了解しました。指示を実行します。」

淡々と返事をして、ラミアは仲間を「覚えて」いく。

「しかし、何だな。こうして見ると、まるつきり違うな。」

志郎がラミアを見て感想を述べた。ミルがそれに答えて言う。

「何が違うんですか？」

「ああ、ミルとラミアだよ。全然異なるな、と思ってな。」

そう、志郎は言った。アーレフも同調して言う。

「ああ、確かに。ミルさんは確か、神しさんが直接創られたんですよ？」

「はい。そうですね。ですから「使い魔」なんですよ。」

「ですよ。ですが、今、創られる様子を目の前で見ていたラミアさんは「核コア」のせいか、感情も希薄だし、すごく機械的ですよ。そういう意味で、まるつきり違うって言ってるんですよ。」

アーレフはそう説明した。

「なるほど。確かにラミアちゃんは、あたしとは全然違いますねえ。」

「姿、形、名前、皆異なりますが。」

ミルは得心して答えたが、ラミアが無機質的に答えた。そう、こ

ういう「違い」である。

「それはね、ラミアには、模範的な心しかないからよ。」

神はそう言って、説明し始めた。ミルは神自身による完全な作品だが、ラミアは魔道具による「核」を基本として補完し神が創り上げた、一種の補強作品である。「核」は魔道生物の要と言える機関で、生命維持と心を機能している。それが、神の作品で無い以上、ミルのような存在にラミアがならない所以であった。

「なるほどな、根幹となる機関が異なるからか。そう言われれば納得できるな。しかし、と言うことは、だ。神、やろうと思えばミルのような存在をいくつも創れるという事か。」

志郎がそう言って、神に聞いた。神が答える。

「違うわよ。」

「出来ないんですか？」

アーレフも聞いてくる。神がさらに言う。

「あたしと姿形、そして能力がまるで同じ存在をほぼ無限に創ることも可能よ。」

神の言った台詞に、皆が啞然とする。言うなれば、今の姿は仮のものでやろうと思えば好きなように出来る、と言っているわけである。「いやはや、想像を絶すると言うやつだな……。まあ、楽しませてもらおうでしょう。」

志郎がそう言った。神が言う。

「そうしなさい。せっかくの機会だしね。さて、これでいいわ、皆行きましょうか。」

ラミアの準備も整ったので、神がそういった。皆は頷き街道に戻って北上を始めた。

「後半日程度でレミアルト王国の境界の町であるラミュソスに着きますね。」

アーレフは地図と街道を確認しながら言った。

「そう、ならそろそろかもね。」

神が確信に満ちた様子で言う。

「何がそろそろなんだ？」

分からないので志郎が聞く。神が答えて言う。

「アーレフを襲う算段をしてる奴等がいるって事。」

「私、ですか？」

「そう、正確には、あなたが持つ神器を求めて、ね。」

「ああ、そうか、この問題もありましたね。」

アーレフはそう言いつつ、胸元にしまっている「神器」を取り出した。

「そういえばそっちの問題もありましたねえ。マスターどうするんです？」

ミルが神に指示を仰いで来る。神は答えて言った。

「言わずもがな、よ。」

「マスターは徹底的に叩き潰せ、と言われてます。」  
ラミアが意図を要約する。

「ほう、ラミア、そんなことまで理解できるのか。」

志郎がラミアの反応を見て感心しながら言う。ラミアは答えて言う。

「マスターのご意思は分かりますので。真意までは分かりかねますが。」

淡々と機械的には述べるが洞察力等はあるただの機械的な魔道生物ではない特別な存在であることが分かる。

「なら手っ取り早いし、戦闘時も無駄な指示はしなくていいから楽だな。ラミア、俺たちの意思もある程度は分かるのか？」

志郎がそう言ってラミアに聞く。

「データが少ないので、どれだけ反映できるかは分かりかねますが、最善は尽くします。」

ラミアは模範的回答とも言える機械的な返事を返した。苦笑しながら志郎が言う。

「何ともはや・・・まあ、最善を尽くしてくれ。」

「了解しました。」

二人のやり取りを見てアーレフは微笑んでいた。

木々がまばらに立ち、やや視界が悪い箇所に向は通りかかっていた。

「このあたりのようね。さて、パーティを始めるわよ。」

神しがそう言う。それにあわせて、ばらばらと十数人の人物が一行を囲んできた。

「団体様ですねえ。」

ミルがそう言う。団体の中で、少し後方にいる人物が口を開く。

「アーレフ殿下、あなたのお持ちの「神器」をお渡ししただこう。」  
やや低い、よく通る声だ。そういわれてアーレフが答えた。

「それは無理な相談ですよ。これは、私が守護するように言われたもの、もしお渡しするとすれば確たる方にお渡しするときですから。」

それを聞いて、リーダーらしき男が片手をあげながら言う。

「それは残念だ、では仕方が無い、そこにいる者共と一緒に、私たちにについて来てもらうとしよう。」

男がそう言うと、周囲で囲っていた者達が胸元からなにやら道具を取り出し使い始めた。その道具が輝きだすと周囲の様相が変わり始めた。

「結界発生。解除しましょうか？」

ラミューアが状況を淡々と伝える。神しが答えて言う。

「まだ要らないわ。まずは、少々遊ばないとね。」

「了解しました、マスター。」

ラミューアがそうやって神しの指示に答える。そのやり取りを見て志郎がミルに言った。

「おい、ミル。ラミューアって遊びを理解できるのかな？」

「さく？彼女なりの「遊び」じゃないですかねえ・・・あたしにも分かりかねますけどお。」



「まあそんなものか。」

神たちの周囲にいた者たちは囲いを狭め始めた。神は口に笑みをたたえながら言う。

「さて、楽しみましようか！」

そう言って戦いは火蓋を切った。

「ば、馬鹿な・・・選りすぐりのものを集めたと言うのに・・・しかもこの結界の中をなぜ貴様らは・・・。」

と、言いかけたときに、ラミアが自分で作り出した「剣」で男に止めをさした。

「なぜ、か。一番答えの出ない質問を簡単に言うのが人間の悪いところかもね。」

神は皮肉混じりにそう言った。アーレフが自重混じりに言う。

「まあ確かにそうですね。エゴで生きる部分が多い故に人にはそういう傾向が強いでしょう。エルフたちのように達観はしてませんしドワーフたちのように気長に考えれるほど、心がおおらかでもないですから。」

「確かにな。故に人は事象の責任を自分には向けずに他人に押し付けることが多いからな。」

志郎も賛同しつつそう言った。神がそれに答えるように言う。

「おじ様も長生きしてるのねえ。」

「長生きだけ余計だ。」

志郎がそうやって注文をつけた。

「敵、沈黙。対象消滅、マスター、結界解除行いますか？」

ラミアが淡々と処理をしながら神に指示を請うた。神は答えて言う。

「そうね、御願ひ。あ、そうそう、こいつらは向こう側に放置で、こっちに持ってこなくていいわ。」

「了解しました、実行します。」

ラミアは、無機質に返事をして行動を開始した。

「これでとりあえず、一旦は終了ですかねえ？」

ミルが問うて来た。神が答えて言う。

「まあとりあえずはってところじゃないかな。やつらが何者か、とかはあたしにはどうでもいいし。調べようと思えばすぐ調べられるけどね。殲滅したからどうせ、調べるのに時間がかかって次に手出しできるのはずいぶん先でしょう。」

「まあ、そうなるだろうな。俺が手を出す暇がほとんど無かったからなあ。次は少し増やしてくれ。」

志郎がそう言って注文をつけた。神が答えて言う。

「それは向こうに言わないと。軍隊か、強力な魔術師団でもつれて来いってね。」

「やれやれ、神さん相手では戦争起こす気でないといけませんね。」

アーレフが苦笑混じりに言った。ミルがつられて言う。

「ミルも居るんですけど。」

「私もいます。」

さりげなくラミアも言った。神が言う。

「要するにみんなやる気満々ってことよねえ。」

そう言われて、皆で笑った。

「さて、もう少しでラミュスね。そこで小休止としますか。」

神は皆にそう言って歩き始めた。皆もそれについていく。

風が静かに吹き抜けていた。

「ユアシム様の気が無くなりました。部隊は全滅したと思われま

す。」

呪術師らしき男が呪術用具の前で祈りながらそう答えた。後ろで聞いてた男は戦慄きながら言った。

「何だと！ユアシム以下十七名選りすぐりを揃えて向かわせたのにたった数人にやられたと言うのか?!」

「は、結果ではそうなります・・・」

呪術師はそう答えた。彼の遠見は外れたことが無い、故に間違いは無いであろう。男はそう結論付けた。

「奴ほどの結界術師が、しかも結界内で倒されるとは・・・アーレフの周りにいる者は何者なのだ・・・まずはそれから調べねばなるまいな・・・」

男はそう結論付けて、部下を呼び出し、指示を与えていった。

「あれを早く手に入れなければ・・・」「神」の力を手に入れねばならぬのだ。」

男は自分に言い聞かせるように言った。

## 街道にて（後書き）

次回「国境の町ラミュソス」。神達<sup>しの</sup>は国境に位置する一大交易都市ラミュソスに到着する。そこで待ち受ける事件とは……。次回もお楽しみに。

## 国境の町ラミュソス（前書き）

神達<sup>しの</sup>一行はレミアルト王国の北端、国境の町ラミュソスにたどり着く。そこで巻き込まれる（首を突っ込む）事件とは・・・。

## 国境の町ラミュソス

小説 風の吹くままに

### 第六章 国境の町ラミュソス

国境は交流の場所でもある。資源が行き交い、人も行き交う、交易が発生し人々はそれで生計を立てる。直接それで益を得るもの、間接的に得るもの、真っ当でない方法で利益を得ようとするものなど、様々である。

神たち一行もレミアルト王国の国境の町のひとつであるラミュソスに入ってきていた。

「結構大きな街ね。」

神が感想を述べる。それを聞いてアーレフが言う。

「ここは北の要衝ですしね。交易も盛んですし、軍事的にも重要な場所ですからね。まあ、こちら側は比較的友好な国ばかりですけど。」

「記憶しました。」

ラミュアが機械的に言う。苦笑しながら神が言った。

「まずは見物かな？ミルあたりが言いそうだけどね。」

「えー、あたしが出汁ですかあ？」

不平混じりにミルが言う。ラミュアがそれに答えて言った。

「事実のようです。」

そう言われて、ミルは頬を膨らませながらはぶてた。苦笑しながらアーレフが言う。

「まあ、まずは市場とかのんびり見て歩きましょう。国境が出るのは少々面倒ですが街中は比較的楽に移動できますからね。」

そう言われて、皆は頷き歩き出した。

「賑やかだな。王都よりも賑やかかもしれん。」

志郎がそう言った。そうかもしれない。人も、資源も、数多く出入

りし、様々な富を生み出す場所である。良い考えのものも、悪い考えのものも集まってくる場所だ。おのずと人が集まり、コミュニケーションが出来、そうやって新たなものが形成されていくのである。国家はその骨組みを作り、役人たちが補強をして、市民がその庇護の下で国家の一員として肉付けをしていく。それが本来あるべき、国の姿というものだ。ただし、あくまで理想であって、現実には簡単にいかないのが現実の辛い一面である。それは人の弱さゆえ、また愚かさゆえであるが、悲しいかな、それを自分に当てはめないのが人の業というものであるう。

一行が歩いていると、男が声をかけてきた。

「お嬢さん、仕事を探してるのかい？」

そう言って、ラミアに手をかけてきた。ラミアは、その男に向き直って言う。

「いいえ。」

淡泊に答えられて男は多少面食らったが、食い下がれないのかさらに言ってきた。

「なら観光かな？それにしては軽装のようだが。」

「いいえ。」

またもや淡泊に答える。要領がつかめず男はそこで立ち止まってしまった。苦笑しつつアーレフが声をかける。

「私の連れですがどうかしましたか？」

男はそう言われて、多少驚いたが今度はアーレフに話しかけた。

「あんたの嫁さんかい？」

「いいえ、私と一緒に旅をしてくださってる方の付き人なんですよ、彼女は。」

事実である。ただ、一般人には理解しにくいだろうが。男は、話し始めた。

「そうかい。軽装で歩いてるから仕事探して街に入り込んだ娘さんと勘違いしてしまっただけ。」

言い換えるなら、事実そうやって入ってくる娘たちが居るということ

とだろう。アーレフは、物珍しそうに聞きながら答えた。

「ほう、そんな娘さんが居るのですか。」

「ああ、王国側ではなく北の方の流民が大半だがね。今年は特に北で天候が良くなかったらしくいつもより多いらしい。売春宿に行く子も多いから、かわいそうだね。別の仕事口を勧めてこうやって歩いてるのさ。」

「なるほど、大変ですね。がんばってください。」

そう励ましてアーレフは男性と別れた。

「今の情報は信憑性はそれなりにありそうですね。」

「八割は正しい。」

ラミュアはそう答えた。苦笑しながらアーレフは言う。

「さすがですね。男性の嘘も見抜くとは。」

そんなやり取りもありながら一行は街を歩いていた。

「「金の子山羊亭」か。今晩はここで夕食と宿泊をしましょうか。」  
神しのがそう言った。一向はそこに入っていく。

店はこちらまりとした宿屋兼食堂だった。一般的な旅人宿である。

若い女性が受付に居た。

「いらっしゃいませ。お食事のみですか？」

可愛らしい声で定番の台詞を言う。アーレフがそれに答えて言った。

「宿込みで五名ほど御願います。男女同室で構いませんので。」

「はい。五名様ですね。奥から二番目のシトロンの間をお使いください。この宿帳に記名を御願います。後、代金ですがお一人様食事込みで銀一つになっております。浴場は公共浴場をお使いになってくださいね。」

受付の女性はそうやって受付を済ませていった。アーレフは記帳を始める、神しのがアーレフに物を放り投げた。

「アーレフ、これで払っておいて。お釣りはあなたが持っていて。」

アーレフはそれを受け取った。金一つである。

「神しのさん、こんなにいいんですか？」



「別に、それを持って逃げるわけでもないし。第一あたしはそっち関連は一切無問題でしょ。」

そう、神にすればそんなものを創り出す事は造作も無いことである。もちろん無尽蔵に創ったりすれば経済は混乱し大変なことになる。しかし、普通に旅をする資金として少し創ったところで全体としてはほとんど影響が出ない。彼女はそう言っているのだった。言われた内容を理解してアーレフはそれを受け取った。

受付を済ませ手荷物を部屋に置いて一行は下の酒場に降りてきた。

「さて、まず食事にする？それとも浴場に行く？」  
神が皆に聞いてきた。

「そうですねえ、どうしましょうか。」

「俺はまず風呂かな。」

「私もとりあえず汗を流したいですね。」

「マスターにご一緒します。」

それぞれが意見を言う。神は決めて言った。

「風呂に行く意見が多いからまずはお風呂に行きますか。」  
皆が賛同してそうすることにした。

大衆浴場はもちろん浴場だから体を綺麗にする場所でもあるが、様々な人と交流をする場所でもある。基本的に混浴なのも特徴であった。故に情事に使われることもあるのだが。

「結構いい浴場ですね。」

「そうだな、これならいい湯に浸かれそうだ。」

アーレフと志郎はそういつつ衣服を片付け始めた。

「では、あたしたちも入りましょうか。」

「そうね、ラミアア行きましょうか。」

「はい。」

女性三人組も衣服を片付けて浴場に向かう。

浴場はかなり広く、湯気で向こう側が見えないほどの大きさがあった。深さは大した事が無いのだがこれだけ広く、湯気が立ち上って

いると視界が悪いので、いろんなことが出来るという意味で少々危険でもあった。中では、談笑をする人たち、黙々と体を洗う人たち、ゆっくり湯に浸かって疲れを癒す人たち、情事にふける男女など様々だった。

「いろいろな人がいますねえ。」

「そうね、本来外の目的の人も居るけどね。」

ミルと神しがそう言い合っていた。

「ところで・・・」

志郎が話題を切り出して言った。

「これからどうするのかな？」

「そうね、とりあえず数日ここで遊んでから北のほうへ足を伸ばそうと考えているわ。」

神しは質問にそう答えた。

「北か。ということは、ロウグラント、アウシュモスク、レベンスキネアあたりに向かうことになるな。」

志郎が北にある地名をあげて言った。アーレフがそれにあわせて言う。

「まあそういう事になりますね。直接それらに入るかはともかく。周囲にも楽しめるところはいろいろあると思いますよ。」

アーレフがそういうのを聞いて、志郎がやや顔をしかめながら言った。

「まあ、夜盗たちや怪しい宗教家の集団とかも居るらしいが・・・ドワーフ達の里にまで行くのか？」

そういわれて神しが答える。

「状況次第って奴でしょうね。個人的には行ってみたい気もするけど、急いでるわけじゃないしね。」

「なるほどな。結果次第、行き当たりばったりって奴か。」

「そういう事。楽しむのが目的だし。」

「了解した。まあアーレフの例のこともまだ未解決だしな。」

「そうですね。神しさんに任す方法もあるのですが、まだそれは早い

と思うので。」

「焦る事は無いわよ。」

三人はそうやって今後の方針を固めていった。

「ラミアちゃん肌が白くて綺麗ね。」

「ミルも綺麗でたくましいです。」

向こうでは二人で談笑しているようだ。そんな感じで、浴場でのひと時は過ぎ去っていった。

「ふう。いいお湯だったわね。」

「そうですね。」

「これで後は一杯やればいいな。」

「志郎さんはお酒が好きなほうですか。」

アーレフは志郎が「一杯」といつているのを聞いてそう言った。

「そうだな・・・酒に女、まあ定番だがお金が入ると良くやったよ。お前はどうかい？」

「私は神に仕える身ですから婚姻すれば女性は考えますがお酒はしないですね。病気のときなどの気付けに使うくらいですかね。」

「なるほどな、ところで、神聞いてもいいか？」

志郎が神に疑問を投げかける。

「何？」

「お前も「寝る」のか？」

そう聞かれて、少しきょんとした後、顔を真っ赤にしながら答えた。

「で、出来るわよ。」

それを見て、志郎とアーレフが笑い出した。

「な、何よ、自分で聞いておいて。笑うこと無いじゃない。」

「いや、すまん。その何だ・・・。」

「意外な一面って奴ですね。」

アーレフにそう言われて神はさらに顔を真っ赤にしながら言った。

「馬鹿！あたしだってそういうものはあるわよ。」

微笑ましい光景である。ひと時笑った後、志郎は疑問をさらにぶつけて言った。

「ミルやラミアはどうなんだろうな？」

「え？」

ミルにまで振られて、ミルもびっくりして言った。

「あたしですか？」

「うむ。」

「そりゃ、出来ますけど。」

「出来るけど？」

「したいとは思いませんねえ・・・しろと命令されれば考えますが。」

「ふむ、そんなものか。」

多少、面白くないといった感じで志郎は言った。アーレフがラミアに言う。

「ラミアさんはいかがですか？」

「よく分からない。」

「あ、なるほど。」

確かにそうであろう、情報として知っているとでもそれだけでは意味を成さないからだ。

「全く何を言い出すかと思えば・・・。」

神しが呆れがてらに言った。

「まあ定番だからな、酔って襲うわけじゃないし。」

「そんなことしたら結界内で餓死させるわよ！」

志郎が冗談がてらに言ったのを神しが真顔になって怒って言った。

「怒るなって、望まれない限りしないってば。」

純粹に感情を示す神しを見て志郎も悪いとばかりに正論で答えた。

「全く、これが昨日までと同じ人物とは思えない状況だな。」

志郎がそう言うのとアーレフはにこやかに笑顔をしながら言った。

「だからこそ、でしょう。」

そう言われて、志郎も頷いた。

金の子山羊亭での夕食は一般の旅人としては豪華なものだった。肉料理も多数出て特に志郎は満足した様子だった。もちろん彼は酒も欠かさず取っていた。

「ご馳走様。」

「美味しかったですねえ。」

「終了しました。」

女性三人組はそうそれぞれ食事を終えた。

「あれ？アーレフは？」

「先ほど上のほうにいかれましたよお。」

神しんが問うたのでミルが答えてそう言った。

「お呼びしましょうか？」

「いや、いいわ。」

ラミアが提案したが神しんは断った。

「しかし良く飲むわねえ。」

神しんは呆れながら志郎を見ていた。

「んー。まあ好きだからな。」

「そういうあなたも見ていて楽しいわね。」

ふと、神しんはそう言った。そう言われた志郎は一瞬戸惑いその後大きな声で笑った。

「やはり、お前は面白いよ。ついて行く事にして正解だったな。」

「ふふ、そうかもね。あたしも楽しませてもらってるわ。」

そう言って、神しんは手を組みじつと志郎を見つめていた。

薄暗い中でそれは行われていた。いや、薄暗いからこそ、であろうが。

「今回は以上です。」

小柄な男性が、伝票のようなものを、相対する男に手渡していた。

「ほう、結構いいものがそろったな。」

太くてやや鋭い声で、男は答えた。

「今回は比較的いいものが揃いました。閣下の「実験」にもお役に立てるか。」

小柄な男性がそう言うと、男はそれを制しながら言った。

「軽々しく言うな。監視の「眼」はどこにあるか分からぬからな。」  
そう言われて、小柄な男は一度周囲を見回した後、再び男のほうに向き直って言った。

「お金のほうはいつでもどおり御願います。」

「うむ。」

男はそう返事をして、用意された馬車に乗って去っていった。男を見送った後、小柄な男はいささか悪態をつきつつ言った。

「ちっ、金になるから今はやっているが、あんな不気味な「実験」なんぞに加担し続けるのはさすがに疲れてきたな。そろそろ、逃げ算段でもせねば……。」  
なにやら不穏な空気が漂っていた。

朝。陽光が窓から入ってくると一日の開始を肌で感じる。そういう時の目覚めは心地が良いものだ。神は、肌に当たり始めた朝日に気づいて目を覚ました。部屋を見回すと、ミル、ラミューア、アーレフそれぞれがベットで息を立てつつ寝ていた。が、すでに志郎がベットには居なかった。

「あら、あれだけ飲んだのにもう起きたのかしら？」

そう言って、ベットから出て部屋から出る準備をしていたときに、扉が開き、志郎が入ってきた。

「お？起こしたか？済まないな。」

志郎はそう謝ってきた。神は答えて言う。

「ううん。あたしはもう起きてたところよ。おじ様、朝が早いよね。」

そういわれて苦笑混じりに志郎が答えて言った。

「ああ、長年の修行の癖でな。早朝に起き上がって修練するのが習慣になってるんだ。酔いも醒めて一石二鳥だしな。」

感心しながら神しのが言った。

「なるほどね。あの武術はそうやって支えられてるのね。」

「まあ、生身の人間だからな。魔道武術でも出来れば少しはスタイルを変えられるのかも知れないが、あいにく俺は魔法に関しては縁が無くてな。」

志郎はそう言って、今までの経緯に関しても簡潔に語った。神しのは、閃いた様に言った。

「なら、あたしがこれから手伝いましょうか。」

突然の言い草に志郎は驚き、言葉が出なかった。しばし時をおいてから志郎が言った。

「お前が・・・？」

「ええ。」

「なぜ俺にそこまでする？」

志郎はつい、そう口走ってしまった。悪気は無いのだが素朴な疑問として。神しのは少しうつむきながら答えた。

「それは・・・あたしに「寝る」ことすら言う人だもの。あたしだって興味が沸いたのよ。」

その、意表をついた台詞に志郎は戸惑ってしまった。

「あれは・・・その・・・。」

二人は、言葉を出せずに立ち尽くしてしまった。神しのは顔を真っ赤にしながろうつむいている。

「あれ？もう終わりですか？」

ベットから声が聞こえてきた。びっくりして二人は振り向く。そこにはミルとラミュア、アーレフの三人がベットで聞き耳を立てていた。

「な・・・。」

神しのは、言葉に詰まってしまふ。志郎は顔に手を当てた。

「済みません。状況が状況だけに出るにも出れなくて・・・。」

アーレフが済まなそうに言う。ラミュアは状況はやや分からないが興味津々に見ていた。ミルはニヤニヤしながら見ている。

「あんたたち〜！」

神はつい大声で怒鳴ってしまった。

一行は一階の食堂に居た。神は黙ったまま黙々と朝食を食べていた。

「やはりあれはまずかったですかねえ・・・」

アーレフがミルたちに言う。

「神様怒ってますねえ・・・。」

「怒るといふか、よく分からない感情に包まれています。」

ラミユアが客観的意見を述べた。

「それは、ラミユアが初めて見る感情だからさ。」

志郎が横から声をかけた。ラミユアが答えて言った。

「初めてですか。確かに、基本知識には無い感情表現です。」

「まあそうだな。愛情とか恋慕の気持ちは論理的説明がつかない感情だからな。」

志郎はそう説明した。

「って、神様がですか?!」

驚いたようにミルが言う。

「何を驚く。神だって感情はあるぞ?」

「いや、それはそうですけど。」

「当人の前で何を言い合ってるのかしら?」

神が話しに割って入ってきた。

「お前が恋愛感情を持ってるって話さ。」

ストレートに志郎が答えて言う。神は顔を高揚させながらも答えて言った。

「ば、馬鹿。そりゃ、あたしだってあるわよ。それより、明日から手伝っていいのかしら?」

神にそう聞かれて志郎は素直に答えて言った。

「本当にいいのなら御願いしたいな。応用できれば幅が広がるし、何よりお前との旅がますます楽しくなる。」

素直に言われて神は顔を赤くしながら言った。



「そ、そう、なら明日から手伝うわ。ところで、今日の予定なんだから、けれど。」

そう言って神しんは話題を変えた。

「アーレフ昨日ラミアにあった出来事覚えてる？」

「ああ、仕事探しの男ですか。」

アーレフは、神しんに言われて思い出したように言った。

「そう、ラミアから聞いたけどあの男多少嘘をついていたでしょ。もしかしたら、よくないほうに作用してるような気がしてね。」

「つまり、街にきた女性を使って「何か」をしていると？」

志郎がそう聞いた。神しんは答えて言う。

「あの男自体はただの仲介者の可能性が高いけどね。そいつに依頼している「誰か」が企んでる、と考えるのが筋でしょうね。」

「なるほど。でも女性を使うって何をするんでしょうねえ。」

「悪魔崇拜。」

ミルが言った素朴な疑問にラミアがストレートな答えをぶつけた。

「まあ、それかそれに類する実験ってところね。女性を犠牲にするのは悪魔崇拜はお約束だから。」

神しんはそうやって結論を出した。

「ほぼ間違いないだろうな。しかし、どうやって探す？」

志郎が問うて来た。神しんが答えて言う。

「一番簡単なのは「眼」を飛ばすことだけど、とりあえず足で探してみましようか。出来る限り分かれたほうがいいから三つに分かれましよう。」

「というと、どう分けるんですか？」

アーレフが聞いてきた。神しんが答えて言う。

「あたしとおじ様、ラミアとアーレフ、後ミルの三つよ。」

「え、あたしだけ一人なんですか？」

ミルがやや抗議しんぎして言う。神しんが答えて言った。

「今回はごめんなさいね。相手は魔法を使いそうだから、おじ様一人では危ないし、ラミアは一般知識が少くないからアーレフが居な

いとほかに揉め事を起こしそうだし、単体で動けそうなのはあなただけだから。」

「そういうことなら分かりました。でも、それだけですか？」

ミルはそう言って疑問を呈してきた。

「それだけって？　どういうこと？」

神がミルの質問の意図を聞く。

「だって、今朝のやり取りを見ても……もごもご……」

ミルがそこまで言って、アーレフがミルの口を押さえた。

「はいはい、そこまで。」

そういつつ、神を見た。神は真っ赤になってうつむいている。

「そりゃまあ……そういう気持ちはあるけど……」

神はそういつつ口ごもってしまった。

「今はそういうことも大事ですけど後でやりましょう。あ、私は応援してますからね。」

アーレフがそう言うのと、神が答えて言う。

「ちよっと、勝手に話を進めないでよ。そりゃ……」

と、結局口ごもるのだが。様子を見ていた志郎が言った。

「さて、なら一段落したら、出発しようか。」

全員は、それを聞いて頷いた。

ラミューアとアーレフは並んで歩いていた。街はいつもの通り活気に満ちている。もちろん、多数の人が集まる以上問題が全く無いわけではない。スリ、かっぱらい、乞食、売春婦、など、一般社会では底辺または必要悪とされる人たちも居るからだ。しかし、この国ではそういう人たちは、きわめて少ない部類だった。

「このあたりには、怪しそうな人は居ないようですね。」

アーレフがそう言う。ラミューアは辺りを見ながら人々を観察していた。

「興味深いですか？」

アーレフがラミューアに聞く。ラミューアは無言で頷いた。彼女にとっ

ては、初めての街初めての経験なのだから。微笑ましく思いながらアーレフはラミュアと歩いていた。

神は志郎と並んで歩いていた。しかし、彼女は今朝までの経過から志郎をまともに見れなかった。うまく言葉では言い表せない。素直に認めることも出来ない。そんな感情の渦に入っていた。志郎が歩きながら言った。

「この辺りは静かだな。」

しかし、神は黙ったままだ。志郎は心配になり神を覗き込んで言った。

「どうした？調子でも悪いのか？」

志郎の顔が目の前に来て、神はびっくりしてしまい、きゃあ！と叫んでしまった。少し間をおいて神が答えて言う。

「ご、ごめんなさい。ちよつと気が動転してて・・・。」

「いや、俺のほうが悪かったな。昨日からお前に迷惑をかけてるようだ。」

志郎が今までの経緯から神に謝罪を入れる。神は顔を振りつつ言った。

「そうじゃない・・・。そうじゃないから・・・。」

自分に言い聞かせるように神は言った。それを見て苦笑混じりに志郎は言った。

「お前が何に戸惑っているかは分かるつもりだが、焦ってはだめだ。何をかく言う、俺もあせって失敗した口でな・・・。」

そう言って自分の体験談を語り始めた。

志郎は若いころある女性に恋をした。相手の女性も好意を示してくれたので、お互い付き合い始めた。しかし彼はすでに武術を習得するために修練をしている最中だった。そんな中で、気持ちをぐらつかせていれば、危険な目に自分を会わせかねない。そして事実、彼は修練の最中に事故を起こしてしまった。結果を知った女性は志郎のためにならない、と言い残し去っていったというのだ。

「だから、お前にも後悔はして欲しくないな。」

志郎はそう、述懐混じりに言った。そう言ってくれる志郎に神しのは感情を高ぶるのを感じていた。そして神しのは言った。

「うん・・・ありがとう。うまくは言えないけど、とりあえず、今はやりたいことを少しずつやってみる。もちろん、「あなた」との関係もね。がんばるわよ？志郎。」

志郎、と言われて、意表を衝かれたがにこやかに神しのを手で撫でながら言った。

「分かった。まずは「こっち」からだな。」

神しのは頷いた。二人は今までよりもより固く、並んで歩いていた。

ミルは一人で歩いていた。あたりも賑やかなので周囲を見て楽しみながらである。子供の歓声、店の主人の声、往来の様々な声、街の元気な声が心地よい。

「んゝいいですねえ。やはりこういう雰囲気は気持ちがいいですう。」

ミルはそう言いながら手を伸ばして背伸びをしていた。そんな時、往来から外れた建物の物陰からなにやら「音」が聞こえてきた。女性の声と何か倒れるような音、そして複数の男の声、どうやら誰かが追われてるようだった。ミルは、その声の方向へと走って行った。

「待て！」

男は怒鳴っていた。もちろんそう言われて待つ者など、普通ありはしないが。男たちに追われていた女性は、走り去る途中にある物有道に撒き散らしつつ逃げていた。少しでも追っ手から離れるためであるが、それがほとんど効果が無いことも分かっていた。それでも逃げるのに必死なためそうせざるを得ないのである。そんな女性の前に2mはあろうか、巨大な女性が現れた。

「ひっ！」

女性は驚いて立ち止まり、小さく喚く。ミルは女性を捕まえて魔法をかけた。

「悪戯の妖精よ。不可視の魔法をここに。」

そう言って、女性を見えないようにした。

「しばらくじっとしててくださいね。」

女性にはそう言うっておき、すぐ来るであろう男たちに身構えておいた。

アーレフとラミアは街中を歩いていたが、「異変」を察知してラミアが言った。

「ミルが対象に遭遇。」

そういわれて、アーレフはラミアが言った内容を理解した。アーレフが言う。

「ラミアさん、場所は分かりますか？」

「分かる。移動する。」

ラミアはそう答えて目的地に移動を始めた。アーレフはくすりと笑ってそれについていく。

神はミルから来た「連絡」に気づいて言った。

「ミルが見つけたみたい。そこへ行きましょう。」

そう言いつつ神は走り始めた。志郎は、事態を理解して言った。

「分かった、急ごう。」

二人は、ミルの居る方向へと走っていった。

「何だこの大女は・・・。」

男たちは、村から出てきたと思われる娘を追いかけていたはずであった。しかし今、女が逃げた先には自分たちより大きな女が立ち構えている。

「あなたたちに用があるんですよ。」

ミルは間延びした言い方で言った。男たちからすれば仕事の邪魔をされてるわけである。おちよくられてる様にしか見えないであろう。相手が大女のため、男たちは準備していた武器を取り出し始めた。

「あらあら、やる気満々ですねえ。やっとなたしにも出番ですかねえ。」

ミルの台詞は、これから戦うというよりも楽しむものの台詞である。それを聞いて、若ぶりの男が武器を構えつつ突っ込んできた。

「なめるな〜！」

ミルを狙った武器は、むなしくミルが居た所を薙いでいった。男は周囲を見渡したがミルの姿は見えない。後ろで声がした。

「上だ！」

そう言われて男は上を見た。その時、鈍い音がして男は倒れこんでしまった。ミルに押しつぶされたのである。ミルは退屈そうに言う。「こんなのですか〜。もっと楽しみたいですな〜。」

様子を見ていた男のうちリーダーのような男がほかの男たちに言った。

「俺たちでは荷が重い。一旦引き上げるぞ。」

そういわれて、男たちはばらばらと逃げていった。男たちが立ち去ってすぐ、アーレフとラミアがミルのところに来た。

「到着しました。」

淡々とラミアが報告する。ミルが二人を見て言った。

「お早いですねえ。もう少し早ければ、怪しい男も捕まえれたかもしれないですが〜。」

「ラミアさん、早いですね。お待たせしました。」

アーレフはそうやって到着を報告した。

「少し遅かったようですね。」

「あ、でも一人押しつぶしてるから、それから情報引き出せるかも〜。」

アーレフにミルが答えて言った。

二人が見るとミルの足元に男が一人潰されていた。

「おやおや、ミルさん相手では指し物の男性でも大変ですからねえ。」

アーレフが苦笑混じりに言った。ミルはそういわれて答える。

「えゝ。それってどういう意味ですかゝ？」

「言われたとおりかと。」

ラミュアが補完して言う。ミルは頬を膨らませた。それを見てアーレフは微笑んでいた。

「まあ、まずはこの男を正気に戻して尋問ですかね。」

アーレフはそう言ったが、それに対しラミュアが言った。

「先に女性を対処するべき。」

そういわれてミルが気づいて言った。

「あ、忘れてましたあ。隠しておいた女の人を戻してあげないとゝ。」

そう言って、ミルは解除の魔法をかける。魔法で姿を隠されていた女性は姿を現した。

「えっと、これはいったい・・・。」

状況が把握できずに女性は戸惑っていた。そこに神<sup>し</sup>たちが到着する。「偶然だけど、あなたをあたしたちが助けた、って状況なのよ。」神<sup>し</sup>がそう言った。

「ミル、お手柄ね。」

神<sup>し</sup>はそうやって、ミルを褒めた。ミルは頭をかきつつ、喜んでいる。「でも、男たちはほとんど逃がしてしまいましたゝ。」

ミルはそう報告した。神<sup>し</sup>が答えて言う。

「問題ないわ。そこに転がってる男から情報を仕入れましょう。」

「あ、あのゝ。」

女性がやっと、ある程度理解したようで、声をかけてきた。

「ああ、状況の整理が出来てきたようですね。私はアーレフと申します。旅の途中のしがない神官ですが、どういう状況で先ほどの男に追われていたのか説明をしていただけますか？」

アーレフがすかさずいつものスマイルで女性に声をかけていった。それを見つつ、志郎<sup>し</sup>が神<sup>し</sup>に言った。

「悪気がない分、アーレフのああいうところは優れた武器だな。」

「そうね、本人は自覚してないけど。たぶん、それが逆に災いも招

いてるんでしょうけどね。」

「なるほど、嫉妬や妬みか。」

「そんなところね。」

人のいい部分は、その人にとって、その人を特徴付ける武器ともなりえる反面、優れた能力は、他人にとって嫉妬や妬みともなるのである。人が人たる悪い側面の一つであった。アーレフに丁寧に言われて、女性はアーレフに説明を始めた。

「あ、私はセフィアといいます。ここから少し北のレーベンスの村から来ました。村は飢饉で生活が苦しいので口減らしと出稼ぎをかねてラミュソスにまで出たのですが・・・。」

「そこで、さっきの男の一味に勧誘されたんだな。」

志郎がそう言って、セフィアは頷いた。

「そうです。どうやら人攫いの一団の様で。私と一緒に居た女性たちが多数連れて行かれました。私はその中に入っていなかったのですが、今朝、警備の隙を突いて逃げ出したのですが、途中で見つかったしまい、追われていた最中にこの方に助けられました。ありがとうございます。」

そう言ってセフィアはミルに丁寧にお辞儀をした。ミルは、頭をかきながら答える。

「あゝ。あたしはたいした事してないし。」

それを見てアーレフが言った。

「まあ彼女にとっては感謝すべきことなんですよ。」

「ということは、男たちも何とかするのは当然として、セフィアさんも助けてあげないかね。」

神しがそう言った。アーレフがそれに答えている。

「まあ、その事でしたら私が教会に掛け合いましょう。賃金は非常に安くなるでしょうが、あそこは仕事はいくらでもありますからね。」

「ふっ、天然ジゴロって奴か。」



志郎がそう言う。神しのも苦笑しつつ言った。

「自覚が無いからねえ……。さて、そうするとあれば……。」「神しのはそう言って話を続けていった。

「アーレフとミルはセフィアさんを連れて教会へお願いね。あたしたちはこの男から情報を聞き出すことにするわ。」

「分かりました。」

ミルが答えて言う。アーレフも答えて言った。

「了解しました。教会の手続きはお任せください。」

三人を送ってから神しのが言う。

「さて、ラミューア、そいつを起こしてくれる？」

「了解しました。」

ラミューアが言われて、返事をし、男を起こした。

「う……。くそ……。ここは……」

男は状況が把握できずに周囲を見回した。が、状況を把握して顔面が蒼白となった。

「あらあら、大体状況は分かるようねえ。」

いやみっぽく神しのが言う。続けて言った。

「さて、分かっているなら手っ取り早いわ。あたしたちに分かっていることを説明してもらいましょうか。」

そう言われて、男は生唾を飲み込んだが、一呼吸入ってから答えて言った。

「そ、そんな脅しで簡単には言うわけない、だ、だろう……。」「

怖くてたまらない、しかし言いたくない、そういう感情がありあふれる言い草であった。神しのは苦笑しながら話を続ける。

「まあ、意地を張るのもいいけど、この子は遠慮が無いからあなたの首が離れても何とも思わないわよ？」

そう言って神しのはラミューアのほうに眼を向けた。ラミューアは意図を察して右手から「光剣」を出して見せた。神しのがそれを確認してから言う。

「この子の「光剣」はね。鉄だろうが、ミスリルだろうが、オリハ

ルコンであろうがぼっさり切れるわよう。あなたの首もそうならないのかしらねえ。」

そう言ってるときにラミアが横に転がっていた木製の荷物箱をさくつと切り割ってしまった。

「さあ、どうする？」

神が止めとばかりに言う。そういわれて、男は、失禁してそのまま気絶してしまった。

「ありゃ？・・・」

神がしまったとばかりに言う。

「対象意識消失。思考活動停止状態です。」

ラミアが淡々と報告する。志郎が苦笑しつつ言った。

「肝っ玉が小さい奴だったな。神、どうするかい？」

「仕方が無いから、直接調べるわ。」

神はそう答えて、男の記憶を探り始めた。

「何！逃がしてしまっただど！」

男は部下からの報告を聞いて焦っていた。こんな状況で自分のしていることが明るみに出てはまずい・・・何とかしなければ、そう思っていた。

「起きた事は仕方が無いか。逃げる算段をしないといけないかもしれないな。「狩り」は一切中止する。全員に「片付け」をはじめるように伝えろ。」

そう部下に命令した。命令を受けて、部下たちは騒然と動いていく。

「昨日の今日で、この始末か。あいにく俺は運が無いと見える。」

愚痴っぽく男は自問していた。

「さて、セフィアさんのこととりあえず終わりましたね。」

アーレフがそう言った。ここは教会の前、アーレフは彼女を教会に届けたのである。ミルが答えて言う。

「良かったですねえ。彼女も働き口が見つかりそうですし。」

「そうですね、そういう意味では運がいいほうでしょう。」

アーレフがそう言った。保障される働き口を見つけるほうが大変なものである。働いたのに給与ももらえず雇用主がドロンということもあるからだ。

「マスターのほうもそろそろ終わったのかな。」

ミルがそう言った。アーレフがそれに答えて言う。

「さすがですね、ミルさん。あなたの言うとおりみたいですよ。」

そう言ってアーレフは視線を向こう側に向けた。そこには神たちがやってくる場所であった。

「アーレフたちも済んだ様ね。」

神がそう言う。ミルが答えて言った。

「はい。アーレフ様が手続き等をすべて済ませてくださいました。」

「それはよかったわ。こっちは、ミルが捕まえた奴が気弱で気絶なんかしたもんだからあたしが意識を探って調べたから面倒だったわ。」

神は苦笑混じりに言った。それを聞いて志郎が言う。

「そうは言うが、奴に脅しをかけて気絶させたのは誰だったかな？」  
そう言われて、神は顔をやや赤くしつつ言った。

「あ、いや、それは・・・ねえ、あれよ、やはり定番って奴で・・・。」

神が言い訳をするので志郎が詰め寄る。

「誰だったわけ？」

「う・・・。」

神はそう言われて戸惑う。そして観念して言った。

「あたしが気絶させました・・・。」

しばらく沈黙の後、志郎が噴出して言った。

「あはは。すまん、まあ、そんな事もあったってことさ。」

「楽しそうですね。」

アーレフが微笑ましく見ていた。

「マスター今後はどうされますか？」

ラミアが機械的に指示を仰いでそう言った。それを聞いて、はたと、気づき神が言う。

「おっと、動揺してる場合じゃないわね。そうね、奴の記憶から指示をしていた人物と拠点の場所が分かったからまずはそこに急いで乗り込みましょう。狡猾な奴なら、もう逃げる算段はしてるはずだろうし。」

「ふむ、確かに。人攫いは重罪だからな、さっさと荷物をまとめてると見るのがいいだろうな。」

「ええ、急いで向かいましょう。」

一行は同意して、神が向かう場所に進んでいった。

「進行状況はどうだ？」

男は部下にそう聞いた。部下が答えて言う。

「身支度は七割方終了。記録処分にやや手間取っています。現在約五割です。」

「急がせろ。」

男はそう命令して、自分の部屋の片づけを続けた。そんな中、騒々しい音が外から聞こえてきた。

「何事だ？」

男がそう言うのと部下の一人が中に入ってきて言った。

「何者かが乱入してきました。今、一部の者が応戦しています。」

「何!？」

何者か? いや詮索より逃げた方がいいかもしれない。男はそう判断していた。

「さすが、こういう場面では、志郎やラミアが一番役立つわね。」  
神が二人を見つつそう言った。アーレフが答えて言う。

「お二人とも、状況判断が優れている上に的確な行動をされますからね。人の士気を削ぐという点ではぴかいちではないでしょうか。」

そう、戦う上で最も重要な点は士気を如何に削げるか、である。戦う気が起きなければ戦い自体すら回避できるのでから当然最良の選択といえるであろう。

「マスター、奥の空気が激しく動き始めました。一部脱走するものが居るかもしれません。」

ラミアがそう報告する。神しんは思案した。そして言う。

「分かったわ。とりあえず、結界で封印しましょうか。」

「この範囲をですか?!」

神の言葉を聴いてアーレフは驚いて言った。神しんは答えて言う。

「ええ、逃げられたら面倒でしょ?」

「それはそうですが・・・」

神は「力」を使い周囲に結界を張っていった。

「だめです。ここも使えません。」

部下がそう報告をする。脱出用に造っておいた魔法転送装置が使えないというのだ。

「なぜ使えないのだ?」

男はいきり立ちながら言った。部下は答えて言う。

「強力な結界が張られているものと推測します。転送装置は空間跳躍の機能もありますのでそれが阻害されてるということは結界により空間封印されてると考えれば合点がいきます。」

そういわれて、男は納得はしたが、その後はたと気づいて言った。

「ちよっと待て。と言う事は、この装置を無効に出来るほどの空間制御能力者が居るということか?!」

「は。事実からするとそういうことに・・・」

男は絶句した。高価なこの魔法装置すら無効化するほどの能力を使う存在とは・・・。男がそう考えてるときに、後ろから喧騒が聞こえてきた。

「この部屋みたいねえ。」

女の声だ。部下が倒されながら、数人の人間が部屋に入ってくる。

「あなたが親玉かしら？」

小柄な少女のような女性がそう言った。一瞬躊躇したが男は答えて言う。

「そうだとしたらどうするかね。」

女性は答えて言った。

「なら答えは簡単よ。ラミア、ミル、ほかは始末しなさい。」

「了解。」

「はい。」

女性が声をかけたほかの二人の女性が部下を次々と倒していく。しかも、自分の部下はかなりの手練のはずなのに草を刈るように倒されていく。

「馬鹿な・・・私の部下が・・・」

「まあ、格が違うってことさ。」

女性と一緒に居た男がそう言った。

「お前たちは何者だ？」

男は、侵入者たちにそう言っていた。女性は答えて言う。

「あなたに名乗る名など無いわ。」

そう言って、女性は男に詰め寄ってきた。

「さて、どういう目論見で女性をさらっていたか話して下さいませんか？」

眼下の状況を見れば、話さなければどうなるかは一目瞭然であった。男は答えて言う。

「依頼されたからだ。」

そういわれて女性は得心したようにして言った。

「なるほどねえ。では依頼者についても語って頂きましょうか。ちなみに拒否権は無いわよ。」

選択権を却下されて男は絶句していた。

神は簡単に言いそうに無いのが分かっていたので男に直接触れた。そして、意識に入り込む。男は身動きすらとれず硬直してしまった。

「さて、ちょっと調べさせてもらうわ。」

神はそう言って、男の意識に潜り込んでいった。

しばらくたってから神は戻ってきた。それに気づきミルが言う。

「お帰りなさいマスター。どうでした？」

そういわれて神が答えて言った。

「分かったわ。この街から少し離れたところに屋敷を構えている博士のようね。ここは始末してさっさと行きましょう。結界を閉じて始末するからみんなには外に出てもらうわ。」

そう言って、神は「始末」を始めた。

「あまりいいものじゃなかったようだな。」

志郎が気遣いながら言う。神が答えて言った。

「理屈じゃ分かってはいるけれど、実際に、記憶の中で見せ付けられると「反吐」が出るほど気分が悪いわ。」

神は男の記憶の中で女性を陵辱しているところなど見たくもないところを見る羽目になったことを言っていたのである。志郎はそれを察して言っていたのだ。

「済まないな。」

志郎はそう言って、神の頭に手を置いた。神が答えて言う。

「志郎のせいじゃないわよ。」

「分かってはいるが、俺も男だ。ああならんとも限らんさ。」

志郎が自重交じりに言った。神がそれに答えて言う。

「嘘ばかり・・・」

志郎が示す暖かい感情に神は喜びを見出していた。

「さて、行きましょうか。元凶を叩かないとまた被害者が出るし、まだ助けられる人も居るかもしれないからね。」

気を取り直しつつ神がそう言った。一行は頷き、目的地に向かって進んでいった。

そこは非常に薄暗かった。わずかに灯っている魔法の光源が部屋に何があるのかを知らせているのみであった。眺めてみれば広い部屋

で数十人寝そべっても余裕があるほどであるがそこにいる者は全員その部屋をわざわざ眺めたいとは思わなかった。そう、そこはそれほど「嫌悪」すべき光景が広がっていたのである。「儀式」に使われて人の形をとどめていない肉の塊、異様な魔法の器具、不気味に光る魔方陣、そして、見ただけで恐怖を呼び起こす悪魔像。そんな中に十数人の女性が鎖に繋がれていた。

ひなた あきら日向晶もそんな女性の中に居た。彼女は、叔父夫婦に連れられて行商の手伝いとしてラミュロス手前までを旅をしていたが夜盗に遭い、叔父夫婦が必死で逃がしてくれたおかげで彼女は逃げ切れたのだが叔父達は不明のままであった。兵士らに報告したが、夜盗たちは見つからず、叔父たちが夜営してた場所には多数の血痕が残ったきりで何も見つからなかったと言う。そうして彼女は独り身でラミュロスに入り、男に仕事口の勧誘を受けてついていたのだが、この始末である。気丈に振舞ってきたが、現実の状況からは流石に限界が来ていた。

「流石に、私も気がもちそうに無いかな・・・。」

親が自慢してしてくれた自分の長い髪をかきつつぼやいていた。

そこへ、扉のきしむ音がしてきた。女性たちはそれを聞き、身を怖がらせる。そう、彼女たちに害をなす者が入る合図だからである。

「また失敗か。新たな贄を用意しないといけないな。」

男は入りつつそう自分に言い聞かせていた。手に持った本を開きながら、反対側にあるメモを丹念に調べる。そして、一つの場所に行き着いた。

「よし、今回はこれで行こう。」

そう、男が言ったのを聞いて、女たちは喚き始めた、それも大声で。なぜなら、彼がそう言った後で必ず一人の女性が「人間でなくなる」からである。男は、女たちが喚くのに気を止めず、一人の女性を捕まえた。

「私?!」

自分を捕まえられて晶はそう言った。今度はあたしの番なのか?そ



う思い、気が遠くなりそうになった。晶はそのまま引きづられて部屋  
の中央部へと連れ出された。すでに服はぼろぼろだったが、男は  
それすら剥ぎ取り始める。しばらくすると晶は丸裸にされた。中央  
にある魔法陣の上で鎖で固定される。その後男は手にしていた本を  
めくり、書いてある呪文を読み始める。

「我、汝に言う。この者を贅として捧げ、私の求めに答え応じよ。  
力有る者。知恵高き者、長き時を生き抜く魔族の力たる者よ。私の  
声を聞きたまえ。」

男がそう言うのと、下に描かれていた魔法陣が次第に明かりを帯びて  
いく。外側が次第に輝き始め、中央部に輝きが集まっていく。それ  
を見て晶は恐怖に囚われ始めた。声が出ない。怖くて出したいのに、  
出ない。晶はそんな重圧に押されていた。

「今度こそ。あの方を呼び出すのだ。」  
男は期待を込めてそう言った。

神は建物から「嫌な」感じを読み取っていた。

「気分が悪いわ。」

神はそう言っていた。体の調子が悪いのではない。嫌悪すべきもの  
が居るのが分かってしまう、そういう嫌な気分を言っていた。

「確かに。禍々しい雰囲気だ。」

志郎もそう言う。冒険者故にこういう事例にも幾度か遭遇している  
のであろう。その横で、アーレフがさらに険しい顔をしていた。

「魔族が来ます。」

ぽつりとアーレフが言う。起こりうる事態を察知してそう言ったの  
である。神が駆け出しながら言った。

「急ぐわよ。」

一向はそれに続いて走り出した。

魔法陣の光は晶の下に集まりだした。初め光眩しく輝いていた光は  
次第に色が変わっていった。白色から明るい紫へ次第に七色に変わ

りながら暗い赤へ最後には暗い闇の光へと変わっていった。そう、「闇の光」である。そう表現するしかない。そんなものが晶の体を包もうとしていた。

「あ・・・ああ・・・やめて・・・」

晶は恐怖に襲われながら、必死で最後の言葉を出そうとする。しかし口ですらもううまく動かない。身体が心が闇に浸透していくような不思議な感覚に襲われ始めていた。男は様子を見守りながらその唇は怪しい笑みを示していた。「闇の光」は次第に晶の中に入っていた。そして、すべてが入りきった時。

「パキン！」

そういう、空気が割れたような音が部屋に響いた。それと同時に部屋に立ち込めていた闇が解け部屋は元の魔法の光源による薄暗い状態に戻っていた。

「どうなのだ？」

男は「実験」が成功したのか分からずそう口にしていた。贅となった女は魔法陣の中央で倒れたままである。魔方陣はすでに光を失っている。どうだったのであろうか？また失敗だったのか？まだ分からないでいた。

「我を呼ぶものは誰か。」

低い、それでいて聞いただけで恐怖を呼び起こしそうな声が響いてきた。部屋に居た捕らえられてる女性の幾人かはその声を聞いた途端、口から泡を吹いて倒れてしまった。それほどに「声」だけで力があるのだ。

「素晴らしい・・・。」

男は、その「力」を見てそう言った。そう、彼が望む力がやっと目の前に現れたのだ。しかし、再び声が聞こえた。

「我を呼ぶものは誰か。」

そう言われて男は答えて言った。

「私だ。私はカール・レオシュラーゼ。お前を呼び出した者。お前の「力」を欲する者だ。」

男はそう言った。言われた側は宿にしている女を起こしあげて立ち上がった。はたから見ればさっきの女性だが発する気配が人のものではすでに無かった。「それ」は言った。

「そうか、お前か。また、折角「休んで」いた所を邪魔されたという訳か。」

明らかに、「それ」は気分を害したように言った。男は構わずに言う。

「私と、呪文と贄による契約に基づき「力」を貸して欲しい。」

そう、男は、「それ」から「力」を欲しようとしていたのである。そしてその情報は手にした本から得たものであった。それを聞き、「それ」はため息をしつつ答えて言った。

「まだそんなものがあつたか。「ラヴェルⅡシェントⅡグラウド」あの誤った書物がまだ残っていたとはな。」

男は言われた内容が理解できずに「それ」に向かって言った。

「契約を！私に「力」をくれ！」

「それ」が目を開いた。その瞳は「闇」で渦巻いていた。そして、「それ」が語って言う。

「お前がどうしてそれを持っているかはどうでもいいことだが、それに書いてある事は不完全な情報なのだ。故に、私はお前に契約を結ぶ義理も無ければ、命令されるいわれも無い。」

無残に宣告されて男はやや呆然としつつ言った。

「な、ならば、契約は？「力」はもらえないのか・・・？」

「無理だな。」

「それ」は無残に宣告する。男は身を崩れつつ言った。

「そ、そんな・・・ではこの本の呪文はいったい・・・。」

「それは、我を強制的に呼び出すためのものだ。呼び出す「だけ」の方法が記されている。つまり、呼び出すことしか出来ていないのだ。」

つまり、一方的に呼び出すだけ、使役も契約も出来ないという、非常に危険極まりない方法だったわけである。そんな方法で「力」の

あるものを強制的に呼び出せば……。そう、男は事態を理解した。腰を落とし床に這い蹲りながら必死にその場から逃れようとしていたがすでに身体がいうことを利かなくなっていた。

「わ、私は……」

恐怖に震えながら男は後ずさる。しかし、「それ」は許さなかった。そして言った。

「休んでいた私を呼び出した罪。己の体に受けるが良い。」

そう宣告した。そう言われた時、男の体に「闇」がまとわりつき始めた。

「た、助けて……」

男は最期の嘆願をしたが「それ」は無残に眺めるのみであった。「それ」が呼び出した「闇」によって男は跡形も無く消えていった。

神は「力」を感じる部屋の扉を思いっきり蹴破って入っていった。

「どうなってるのかしら？」

中に入って神はまずそう言った。ほかの一行も次々と中に入る。中は静かだった。音としてはだが。しかし、見える光景はすさまじいものだった。さまざまな儀式をしたであろう痕跡がありありと見えた。また、部屋の端では意識を失い倒れている女性が数多く見えた。しかし、感じる力は部屋の中央にあった。

「女性？」

アーレフは「力」がそこから発していることに気づいてそう言った。志郎が気づいて言う。

「いかん、すでに遅かったか。」

そう言われて、全員が気づく。そう、女性の姿をしているが「中」に別のものが居るということを。そして、「それ」が口を開いた。

「ほう、これは素晴らしい。私ですら敵わぬ者が目の前に居るとは。」

「それ」は神を見つつそう言った。言い換えれば神の「力」を見抜いているわけである。神が答えて言う。

「それから出て頂けないかしら？」

そう言われて、「それ」は、しばらく沈黙した後、答えて言った。  
「御主に言われたのであれば、そうしてやりたいところだが生憎誤った仕方無理やりにこの娘に入れ込まれていてな。私の力ではどうにもならぬのだ。」

つまり、自分の想定外の状況なのでどうにもならない、と言ってる訳である。神はやれやれと両手を広げながら言った。

「つまり、あたしが何とかしないといけないわけね。」

神がそう言ったのを聞いて「それ」が答える。

「その通り。私が頼むのは筋違いだが私も帰りたいが故に御願います。」

「それ」はそうやって謙虚に述べた。神はため息つつ言う。

「全く、人ってのはどうしてこう、無茶苦茶なんでしょうね。」

「全くだな。」

「それ」も同意して言った。神は、全身を広げ、「力」を使い始める。彼女の身体が強い光に包まれ始めた。

「素晴らしい。これが初めて見る「神」の力か。」

「それ」は感嘆しつつ感想を述べた。神の力が「それ」に入っている。それにより、女性から次第に「それ」は離れていった。完全に「それ」が離れたとき女性は崩れ落ち倒れこむ。それを見てアーレフが女性を手早く支えた。神は「それ」に身体を与えた。それにより「それ」は人の形をした存在へと姿を変えて立っていた。

「ほう、私に身体を与えてくれるとは。感謝するぞ。」

「それ」は神に対して謝意を述べた。神が答えて言う。

「別に、あなたの為にした訳じゃないわ。その方が分かり易いからよ。」

「ふむ、確かにな。」

「それ」は納得して言った。アーレフは女性のほうを介抱していた。  
「さて、これからどうするのかしら、あなたは。」

神はそう言って、今後のことを「それ」に聞いた。「それ」は答える。

て言う。

「出来れば、「向こう」に帰らせて欲しいのだから。」

「自分で帰れるなら自由に行って構わないわよ。」

神は「それ」の意見にそう答えた。

「そうか、では帰るとしよう。感謝する「力」の有る者よ。今は「休んで」いるが我の力を欲するときは遠慮なく呼ぶがいい。我の名はグラニデウス。覚えておいてくれ。」

そう「それ」は言って、自分の「力」でゲート（時空門）を開き始めた。神が答えて言う。

「分かったわ。わざわざありがとう。あたしは杜神あかむめまた会いましょう。」

そして「それ」は「向こう」へと去っていった。

「やれやれ、だな。」

神のやり取りを見て志郎がそう感想を述べた。そう、言葉も挿む余地が無かったのだ。巨大すぎる「力」の前で声を立てることすら出来なかったのである。そんな志郎を見て神が微笑んでいた。

「そういえば、宿にされた女性は？」

神がはたと気づいてアーレフのほうに目をやった。アーレフは、必死で魔法をかけていた。自分が知りうる限りの魔法を。しかし、彼女は何も反応が無い。

「私ではだめなんですか……。」

アーレフは焦りつつそう言った。神が近づいてアーレフに言う。

「あれを使ったらどうか？」

神はそう言ってアーレフの懷に指を差した。ラミュアがその意図に気づいて言う。

「神器。」

はたと気づき、アーレフは懷からそれを出した。

「輝いてる……。」

アーレフは驚きつつそう言った。そう、それは輝いていた。これから力を発揮しようとするように。神が微笑みながら言った。

「今が使う機会なのよ。アーレフ、やってみて。」

神にそう言われて、アーレフは軽くなずき、それを手にして「祈り」はじめた。

辺りは静かに輝き始めた。「神器」を中心に。そして「力」が「神器」からあふれ始めそれが女性に静かに入り込み始めた。「力」が女性に入りつくすと輝きは次第に消えていった。

「これでいいんですかねえ？」

ミルが言う。神がそれに答えて言った。

「もう少し待てば分かるわ。」

そう、しばらくたつと女性は咳き込んで息を吹き返し始めた。それを見て皆が安心する。

「良かった……。」

アーレフはそう言った。数回咳き込んだ後女性は目を覚ました。

「あ、えっと……。」

状況が理解できずに晶はその場で自分を抱いている男性を見ていた。「私はいったい……確か、儀式をされて……体に力が入り込んで気が変になって……それから……」

晶は自分がどうした今の状況にいるのか今までの経過を声に出しつつ考えていた。神がそれに答えて言う。

「そしてあなたは気を失い。今気を取り戻してそこにいるって寸法よ。」

「そうなんですか……。」

すべては把握できないが神の言葉で晶は納得したようで、そう答えて言った。

「ま、まずはそのお嬢さんに服でも着てもらったほうがいいかもしれないな。」

志郎がそう言う。はたと気づいて晶は自分に目を留める。そう、素っ裸であった。

「きゃあああああ！」

そう言って、晶はうずくまった。

「な、なんで?! どうして?!」

「まあ、あれだけ巨大なものが入ったんだから無理も無いけど、分らないから無理も無いわよねえ。」

神しがそう言った。ミルが、鞆から衣服を出しつつ言った。

「えっと、とりあえずこれでも着ておいてください。ちょっとサイズは違うと思いますけど。」

そう言ってミルは晶に衣服を渡した。神しは説明しながら言う。

「今回はアーレフのお手柄ね。」

「え? 私ですか?」

「ええ、彼女はあなたのおかげで助かったようなものでしょ。」  
神しはそう言った。アーレフは頭をかきながら言う。

「でもあれは「神器」のおかげで私の力というわけでは・・・。」  
「道具は道具に過ぎないわ。それを使うもの次第よ。あなたはそれを使えた。それで十分じゃないかしら?」

神しがそう言う。志郎がフォローするように言った。

「まあ、お前の助けてあげたいという心が一番大事だったって事だな。それが無ければ無理だっただろうよ。」

「心・・・。」

アーレフは言われたことをかみ締めながら繰り返していた。

「あの・・・」

晶は衣服をとりあえず着終わってすごすごと話しかけてきた。

「ああ、もう大丈夫かしら?」

神しが言う。それに晶が答えて言った。

「は、はい。どうもありがとうございます。こんな場所に連れ込まれてもう助からないかと思っていたところでしたので。」

確かにそうだろう。無力な女性なら尚更そう思うところだ。

「確かにそうですねえ。」

ミルも賛同して言う。ラミューアも無言で頷く。志郎が言った。

「だが、諦めなかったから助かった、と言う訳だな。」

「そうね、諦めたらそこで終わりだからね。」



神も賛同しつつ言った。皆も頷く。

「さて、どうするかしら？とりあえず全員も街に連れて行くとしても今後どうするか役人あたりに話をつけないといけない気もするけど。」

神がそう言うとき、アーレフが答えて言った。

「それなら私が手続きをしましょう。幸いまだレミアルト王国内ですから私の権限である程度は自由が利きますしね。」

「じゃあ御願いですわ。役人たちが来るまであたしたちがここで彼女たちを世話しておくわ。」

「御願います。」

アーレフはそう言って、足早に出て行った。

「本当にありがとうございました。」

晶は神たちを前に深々と頭を下げた。

「当然のことをしただけよ。気にすることじゃないわ。」

神はそう言った。志郎も言う。

「そうだな、困ってるから助けた。そう言うことさ。」

「ところで、晶さんでしたよね。これからどうなさるんですか？」  
アーレフが当然といえることを聞いてきた。晶は答えて言う。

「実は何も当てが無いんです。この街に来る前に一緒に旅をしていた叔父夫婦は夜盗に殺されてしまったようで身近に頼れる知り合いもいませんし。ラミュロスには仕事を探してきましたのですが今回の一件に巻き込まれてしまって・・・。」

女性一人だけでは仕事を見つけるのは難しい。あったとしても売春婦などいかがわしい仕事が多いのが世の常である。

「なるほどね。では晶、あなた旅の経験はあるのね？」

神が聞いた。晶が答えて言う。

「あ、はい。東の皇の国から旅をしてきましたから旅生活は慣れています。」

「皇から？」

志郎が多少驚いたように言った。

「どうしたの？」

神が聞く。志郎は答えて言った。

「皇はこの大陸を出てさらに東にいったところにある島国だ。この大陸に渡るのも結構大変なところなんだが良く来れたな。」

「あ、はい。叔父が旅商人で航海術に優れた人を多数知っていたので無事に来れました。」

「そうか・・・惜しい人を亡くしたな・・・。」

志郎は事情を知って残念そうに答えた。神が言う。

「旅に慣れてるならしばらくあたしたちと行きましようか。」

「それはいいですねえ。」

ミルが早速賛同する。ラミュアも頷いた。アーレフもにこやかに言う。

「そうですね、こうして出会えたのも何かの縁です。どうでしょう。晶さんさえよろしければ一緒にいかがです？」

「まあそうだな、裸も見た仲だしな。」

志郎がからかいながら言う。アーレフが、多少顔を赤くしながら答えた。

「な、志郎殿！私はそう言うつもりでは・・・。」

「ま、いろいろあるかもしれないけれど、どうかな？あたしたちは来て欲しいと思ってるけど。」

神が最後にまとめてそう言う。

「ありがとうございます・・・本当にありがとうございます。助けて頂いて更にこうやって私に構って頂けるなんて私は幸せ者です。」

晶はそう言い、泣き崩れた。

「あ、あら・・・まあ無理も無いか。あんなことがあったんだしね。とりあえず、行くことが決まったし、アーレフ、頼みがあるんだけど。」

神はそう言った。アーレフが答えて言う。

「あ、はい。何でしょうか。」

「あなたのつてを使ってあたしたちや晶のこの国の身分証発行させてもらってくれるかな。ほかの国に移動するときにあると便利だね。」

神はそう言った。得心しつつアーレフは答えた。

「なるほど。確かに。では、早速役所に手続きに行つて来ます。」  
アーレフはそう言って、役所に向かった。それを見送りながら神が言う。

「さて、また楽しみが増えそうねえ。」

「そうだな、いろいろまた面白くなりそうだ。」

志郎も同意してそう言った。ミルやラミアも頷く。  
風が一つ吹き去っていくのであった。

## 国境の町ラミュソス（後書き）

次回「心の闇<sup>トラウマ</sup>」。ラミュソスを抜けて街道を北上していた。そこで神<sup>し</sup>は人間の時代に持つてしまった過去の辛い記憶に触れてしまい・・  
・。次回もお楽しみに。

## 心の闇（トラウマ）（前書き）

レミアルト王国を出て街道を北上し始める神<sup>し</sup>達<sup>の</sup>。  
街道で起こる神<sup>し</sup>の過去にまつわる出来事とは・・・。

## 心の闇（トラウマ）

小説 風の吹くままに

### 第七章 心の闇<sup>トラウマ</sup>

一行はラミュソスの検問を抜けて街道に出ていた。晶が加わったことでお互いに対する意見交換がいろいろとなされていた。

「はあ、聞けば聞くほどすごいですね、皆さんは。」

晶は皆の身の上を聴きながらそう言った。

「まあ「普通」じゃないわよねえ。」

神が答えて言う。志郎が苦笑紛れに言う。

「というか、こんなものどこにも無いと思うがな。」

「複数あると困る。」

ラミュアが補足する。確かに、こんな一行が複数あったら困るだろう。「いろいろ」な意味で。アーレフが話題を変えつつ言った。

「晶さんは皇から来たそうですが向こうでは何をなさっていたのですか？」

そう言われて、晶が答えて言った。

「ああ、私は巫女として働いていました。」

「ほう。それは有能だな。」

志郎がそう感想を言う。ミルは疑問に思っ言った。

「巫女さんって有能でないと無理なんですか？」

「あ、そうですね・・・有能というか、皇では儀式一般は神主と呼ばれるこちらで言う神官職があるんですがその方が責任者として行われます。私たち巫女はその補佐としてあらゆる事柄を手伝う役目がありますので対処できる能力が求められるということです。」

晶はそう説明した。神<sup>しん</sup>が言う。

「何でもそつなくこなさないと役に立たないってことね。」

「んゝ。つまり、あたしやラミアちゃんみたいなのですかねえ・  
・」

ミルは自分に当てはめつつそう言った。志郎が苦笑しながら言う。  
「まあ、大雑把に言えばそうなるな。当てはめる対象が違いすぎる  
が。」

「なるほど、それで合点がいました。」  
アーレフはそう言った。

「え？何がですか？」  
分からないので晶が聞く。アーレフは説明して言った。

「昨日の一件ですよ。晶さんが魔族を宿したことです。あれだけの  
魔族が入ってきたのにあなたの身体は耐え切った。それは今までに  
培ってきたものがあったからなんですね。」

「まあ、そう言うことね。あいつも「休んで」いたから良かったけ  
どね。それに、「神器」とアーレフの祈りで晶も「戻って」来れた  
しね。」

神がそう言ってフォローした。そう、魔族が実力を発揮していたら・  
・。そう思うと晶は末恐ろしくなっていた。ふと疑問に思っ  
て言う。

「あのゝ。神さん？」

「ん？」

「さっき、「戻って」来た。っておっしゃられましたよね？」

「うん。」

「あれはどういう意味ですか？」

晶にそう聞かれて、神はいささかばつの悪い顔をしながら言った。

「あゝ・・。ちょっと表現が悪くなるけど、覚悟して聞いてもら  
えるかな。」

神にそう言われて、晶は一瞬ドキツとした。が、意識をしっかりと保  
ちつつ言う。

「はい。御願います。」

晶がそう言うのを聞いて、神は、一回ため息をしつつ話し始めた。

「実はね。あなたは一度死んでいたの。」

「え?!」

神以外の全員が言った。衝撃的な一言である。

「話を続けるわよ?」

神がそう言って、全員は頷いた。

「あれだけのものが身体に入って耐えていられるだけでもすごいんだけど、魔族は基本的に精神体なの。言うなれば、肉体はあくまで仮の姿、精神体が本体の生命体って訳。」

「ふむ、つまり、召喚とかは強制的に肉体に宿らせる儀式ってことか。」

志郎が得心しながら言う。神は頷きながら話を続けた。

「そうね。もちろん、高位の奴らは、自在に肉体をつけたり出来るのまで居るわ。まあ、そんな奴らが召喚される事象なんてほぼ皆無だけど、あったら困るしね。あ、話を戻すわね。で、精神体として強制的に入るときに問題が必ず発生するの。」

「宿主の精神。」

ラミューアが問題に気づき、ぽつりと言った。神は頷きつついう。

「そう、偉いわ、ラミューア。それを排除しないと完全には宿に入れないってことになるわけ。もちろん、宿に許容量があれば別だけど、まあ一介の人間にそんなものは無いと考えるのが普通だからね。で、昨日も、そうやって晶の精神は追い出されてしまった、と言う事よ。」

「追い出されてしまったその精神体はどうなるのですか?」

アーレフが聞く。神が答えて言う。

「人は生命力を動力として生きる生き物。そして、それが、精神、肉体とそれぞれ関連付けて初めて人足りえる訳。どれかが欠けてもそれは、人の状態とは言えないわ。つまり精神体のみで放り出されたら・・・」

「長時間は存在できず、最終的には消える、ということか。」

志郎がそう言う。神は頷きつつ話を続けた。



「そうね。昨日はたまたまあたしが早く現場に来て「彼」に帰ってもらったからとりあえず宿にされていた肉体はすぐ戻ったわけけど、精神体は追い出されてるわけだから、呼び戻さないといけなかった、という状況だったのよ。」

「なるほど、そこでアーレフさんの「神器」が役立ったのですねえ。」

ミルが気づいて言った。神しのが答えて言う。

「そう言うことね。状況を理解したのか、「神器」が力を発揮してくれたので手早く晶さんを「元」に戻せたって訳よ。」

「なるほど。よく分かりました。皆さんと出会えたのは本当に良い巡り会わせです。」

晶は、涙を流しつつそう言った。死んでいたかも知れない時に生を得る機会が出来たのであるから、尚更そう思えるであろう。

「ところで。」

神しのが話題を変えて言い出した。

「志郎、今朝のあれ、少しは理解できた？」

いきなり神しのに話題を振られて志郎は戸惑ったが答えて言った。

「ん？あ、ああ。まだ、俺には「練気」から進歩はしてないがそのうちモノにして見せるさ。」

そう志郎が答えるのを見て神しのは笑みを浮かべつつ言った。

「早く覚えてね。」

その意味深な台詞に、志郎は少し気になったがそのときは何も言わなかった。

「さて、このまま北上するようになりそうだけど、街道はこれからどうなるのかしら？」

神しのがまた話題を変えつつ言った。アーレフが答えて言う。

「そうですね、まっすぐ北上すれば「北の氷山」方面。東方向に曲がれば「レベンス砂漠」方面、西に行けば「オーソストラム平野」といった感じですね。大きな都市はしばらく無いのでのんびりした旅になるかと。」

「ふむ・・・皆はどう行きたい？」

神がアーレフの内容を聞き、皆に意見を求めた。

「んー、ミルはどこでもー。」

「マスターにお任せします。」

「あ、私は東から旅をしてきたのでそれ以外が良いでしょうか。」

「俺は、氷山のドワーフたちがちょっと苦手なんでそれ以外が良いかな。」

「そうですね、私はどこでも良いのでお付き合いいたしますよ。」

そう、皆は答えて言った。

「ふむ、西方面は行きたくない意見が無い、か。では西にしますかね。」

神はそう結論付けて、一行は皆頷いた。

ラミュソスから出て二日目。街道の分かれ道で西を選択し一行は進んでいた。分岐点を過ぎたためにあたりを行き来している旅人やその他の人々も減ってきた。

「だいぶ静かになりましたねえ。」

ミルがそう言う。アーレフが答えて言う。

「そうですね。もう少しすれば、夜盗や追いはぎも出て来易くなりますから気をつけないといけませんね。」

「ふむ、まあ、彼らが哀れだな。」

志郎が、ついそう言った。皆が苦笑する。確かに、この一行相手には夜盗や追いはぎのほうが「哀れ」であろう。神が言う。

「そうね、まあ、ああいう奴らは来ないほうが良いわ、面倒だから。志郎、今朝はどうだった？」

「ん？ああ、昨日よりはよく分かった。しかし、あれで良いのか？」

志郎が答えて言った。神が言う。

「ええ。覚えてくれればいいのよ。」

「そうか、がんばるさ。」

志郎はそう言った。ミルは不思議に思い聞く。

「何のことですか？」

「ああ・・・早朝に俺は鍛錬をしてるんだが神が最近、魔法に関連した技を教えてくれててね。習得する真っ最中なのさ。」

志郎はそう説明する。アーレフはそれを聞いて言った。

「今でも十分にお強いのにさらに磨きをかけるんですね。」

そう言われて、苦笑しつつ志郎は言った。

「まあ、自分でも強いとは思うが、あくまでそれは武術での話だ。アーレフたちの使う魔法メインの場所では俺は戦いづらいし、そもそも、この中では俺は弱いほうだぞ？」

「んー。あたしたちと比べる時点で間違ってるけどね。」

神がそう言う。苦笑しつつ志郎が言った。

「まあ、そうなんだが。それでも、目の前に高い山があると上りたくなるのが登山家って奴さ。」

「って。それって、あたし？」

自分のことを言われて神がそう言う。志郎がキョトンとして答える。

「ほかに誰がいるんだ？」

「あ、いや、それはそうだけど・・・」

神は戸惑ってしまった。アーレフと晶は二人を見ながらほほえましく思ってしまった。

「お二人は仲がいいのですね。」

晶がそうアーレフに言う。アーレフが答えて言った。

「そうですね。なにぶん「拳で語り合った仲」だそうですよ。」

「なるほど。それなら納得できますね。」

晶は笑みを浮かべつつ見ていた。

夕方。一本のそれなりに大きい木を見つけた一行はそこに野宿することにした。

「いい樹だなあ。昔はこんなものにも良く登っていたんだけど。」

アーレフは樹を見ながらそう言っていた。神しのがそれを聞いて言う。

「へえ、アーレフもそんな時期があったのね。」

「まあ、ずいぶん小さいころですけどね。」

「小さいころ、か・・・」

「神しのさんはどうですか？」

「え？あたし？あたしは・・・」

神しのはアーレフにそう質問されて戸惑ってしまった。アーレフはなんとなく気づいて言う。

「あ、無理に言わなくて良いですから。気にしないでください。」

アーレフはそう言ったが、神しのはそれすら聞こえない様子でつぶやいていた。

「小さいころ・・・姉さんが・・・あれは・・・」

「どうした？」

志郎がやってきた。アーレフが志郎に言う。

「済みません。昔話になったのですが、神しのさんの事を聞いたら神しのさん一人でつぶやき始めて、あんな状態に・・・」

アーレフに言われて志郎は神しのを見た。確かにおかしい。日ごろの明るさが全く無く、ぶつぶつとぼやいているように見える。

「まさか・・・あいつ過去にトラウマがあるのか？」

志郎ははたと気づいてそう言った。アーレフがそれに対して聞く。

「トラウマ、ですか？」

「ああ、本人が直接傷つかなくても、精神的なしこりになって、特定のキーワードで精神的情緒が不安定になる一種の病気だ。正確には病気ではなく精神的な傷跡だな。特に幼少のころに起きた悲惨な事件などはひどい傷になることが多い。自分自身や、身近な者が巻き込まれた事件でよくなるな。」

志郎はそう説明した。アーレフは納得して言う。

「先ほど、幼少の話になったんですよ、で、神しのさんは？と聞いたらあのようになられたので恐らく志郎さんの言うとおりかもしれないですね。」

「やはりそうか。アーレフここは俺に任せてくれるか？」

「ええ、御願います。あなたならより心を開かれるでしょうし。」  
「だと良いがな。」

志郎は苦笑しつつ言った。

「姉さん・・・あたしは何も出来なかった。あたしは・・・あたしはどうしてここに・・・。」

「神。」

神は一人で問答を繰り返している。志郎が呼んでも無反応だ。

「男たちに・・・姉さんは・・・あたしは何も・・・」

「おい、神！俺だ、わかるか？」

志郎は神に強く声をかける。しかし、神は自分で問答を続けていた。  
「いかな。こいつがこうも消極的な考えに対してトラウマがあるとは・・・。何とか戻りたいがどうすればいいのやら。」

志郎はぼやきつつ言った。何か刺激を与えるのが一番だがどうすれば良いのか・・・

「姉さんはもういない・・・あたしは何も出来なかった・・・あたしはどうしたい？あたしは何がしたいの・・・あたしは・・・。」

「くっ。このままにはしておけないな・・・。仕方が無い。神しのかみ済まないが、気づいてくれ。」

志郎はそう決心して、神の肩を抱きゆっくりと抱え上げ接吻した。

「・・・。」

神は我に返った。えっと？今、あたしは何を？・・・。目に前には志郎の顔があった。そして自分は志郎と接吻している。え？志郎と？なんで？？事態が理解できずにいた。

「お、戻ったか。心配したぞ。」

志郎は、戻った神を見てそう言った。神が答えて言う。

「あ、えっと、ただいま。あの、状況が分からないんだけど説明してくれる？」

「あゝ、ああ、えっとだな・・・。」

志郎は説明を始めた。

「アーレフと話していたときに小さいころの話題になっただろう？」  
「ええ。」

「そのときに、お前に過去のトラウマに触れたようだな。情緒不安定になってたんだよ、お前は。何を言っても聞こえないような状況にな。」

「そっか……。姉さんのことを考えたからだね。」

「で、まあ、何だ、その……」

「ん？どうしたの？」

「お前を現実に戻すためにどうするか、俺も悩んだんだが、とりあえず、接吻してみたんだ。で、お前は戻ってきてくれた、という訳だ。」

「そうか、あたしに接吻……って！接吻？！」

神が吃驚して言った。志郎が頭をかきつつ言う。

「まさか殴ったりするわけにも行かないし、気づかせる方法として、これくらいしか思いつかなかった。すまん。」

そう言って志郎は謝った。神は苦笑しつつ言う。

「なぜ謝るの。あたしの為にとっと思ったんでしょ？」

「まあ、それはそうだが……。女性は大事にしてるだろう？そう言うものは。」

志郎はばつが悪そうに言う。神はくすりと笑いつつ答えた。

「大事よ。そうね、責任とってもらおうかしら。」

「責任？ってお前……」

志郎は焦りつつ言った。神は苦笑しつつ言う。

「そうね。何がいいかしらね。」

「俺は独身だが、言っては何だが生き遅れだぞ？」

志郎はしどろもどろになりつつそう言った。神は苦笑しつつ言った。  
「気が早いね。もうその気なのかしら。」

「あ、いや……。その、なんと言うか。俺のほうは問題ない。そう言いたいだけだ。」

意を決したように志郎が言う。それを聞いて神はくすりと笑いつつ

答えた。

「嬉しい一言ね。じゃあ、それを前提にお付き合いしましょうか。」  
「へ？」

志郎が間抜けに言う。神しのが続けて言った。

「だから、結婚を前提に付き合いますよ。って言ったのよ。」

「あ、いや。俺で良いのか？」

「あたしじゃだめなの？」

「俺にはもったいないくらいだ。」

「なら問題ないでしょ？」

「そう言うものなのか？」

「そう言うものの。」

「そうか、ならこれ以上は言わないさ。」

二人はそう結論付けた。そう言い終えると横から声が聞こえた。

「とりあえず、解決ですかね。」

二人は吃驚して横を向く。神しのと志郎を微笑むようにアーレフと晶が、ニヤニヤしながらミルが、興味津々にラミアが見ていた。神しのは一気に顔を赤くし、志郎は顔に手を当てた。

「あんたたち・・・またじっくりと見てたわねー！」  
神しのがそう怒鳴った。

「全く、人を出汁にして・・・。」

神しのはそうぶつぶつ言っていた。ミルが言う。

「そうは言いますけど、結果的にはマスターがお楽しみだったわけ  
ですし。」

そう言われて、神しのはむきになりつつ言った。

「ミル。いい根性ねえ。主人に平気でそう言いますか。」

「や、やだなあ。マスター目が据わってますよ。」

焦りつつミルが言った。苦笑しながら志郎が言う。

「まあ、神しのここは抑えておけ。今回はお前のトラウマの件もあった

んだしな。結果的にいいほうに転んだことは間違いないわけだからここは穩便に行こう。」

「う、まあ、志郎がそう言うならそうするわ。」

ちよつと不満げに神はそう言った。微笑ましく思いながらアーレフが言う。

「さつきと違いいい傾向ですね、神さん。」

そう氣遣われて神は顔を赤らめながら答えた。

「あ、ありがとう、アーレフさつきはごめんね。あたしが話題を振ったのに自分であんなになっちゃって。」

「気にしないでください。誰しも皆思い出はあります。でも必ずしも良いものばかりじゃない。でも、これから自分で創るものはいいのが出来ると思ふんです。もちろん失敗もあるでしょう。でも、諦めればそれで終わりです。そう、神さんが言われたとおりに。それで良いじゃありませんか。」

アーレフはそう結論付けた。その通りだ。皆はそう思い頷いた。「さて、食事にしませんか？先ほどラミュアさんと一緒に用意したんですよ。」

晶がそう言つて地面に揃えたいろいろな食事を指し示していった。

「そうね、頂きましょう。」

神がそう言い、一行は夕食となった。

食事が終わり夜も更けてきた。神は志郎の傍に座り眺めていた。志郎はいつもどおり食後の酒を嗜んでいた。アーレフは晶と談笑をしている。ミルはラミュアと一緒に寝具の仕度をしていた。

「そんなに俺を見て楽しいか？」

志郎が神に言う。神は無言で頷いた。

「そうか・・・」

自分に言い聞かせるように志郎は言った。そんな時、空気が張り詰めた。全員がそれに反応する。



「来たようね。」

神しんがそう言った。全員が頷く。

「ご苦労なことだな。今回はどうする？」

志郎が対処方法を聞いた。神しんが答えて言う。

「今回はぶち殴りましょう。というか、あたしが殴りたいだけだ。」

そう神しんが言ったので志郎は笑みを浮かべつつ言った。

「了解。神しんの気が済むようにしよう。」

ほかの皆も頷き、これから来るものの準備を始めた。

そこには美味しい獲物がいるはずだった。彼らからすれば、そう言う予定だったのだ。しかし結果は散々なものとなった。仲間は徹底的に痛めつけられ、自分も立ち上がれないほどに痛めつけられてしまった。

「どうしてこんなことに・・・」

そう呟いてしまった。意外にも答えが返ってくる。

「お前たちは逆鱗に触れたのさ。」

「逆鱗だと・・・」

「ああ、しかも「神」の逆鱗にな。」

答えた男はそう言った。「神」だと・・・そんなものが・・・。男は信じられないと思ったが、ふとさっき起きた状況を思い出していた。そう、一人の女性がしかも小さな女性がしかもたった一人で自分たちの集団を徹底的に叩きのめしていたのである。

「あ、あれが・・・」

そう、男は言いかけて事切れた。それを見つつ志郎が言う。

「流石にこいつも耐えれなかったか。まあ、しかし何だな。ストレス解消には運動は良いと言うがこの状況を見ると、学者たちはどう言うだろうな・・・。」

「あまりコメントはしたくないですねえ・・・。」

アーレフはそう言った。死屍累々、そう言う状況である。しかも死者はいない。そう、つまり、死なない程度に徹底的に痛めつけられたわけである。痛めつけられたほうはたまったものではない。その痛めつけた張本人は気分良く片づけをはじめていた。

「さて、寝る場所を邪魔されたしほかに移動して休みましょうか。」  
神はそう言った。皆は頷き、その場を後にした。後には、痛めつけられた十数人の夜盗たちが取り残されていた。

「ん、良い朝ねえ。」

神は背伸びをしながらそう言った。平野一面雲ひとつ無い清々しい朝である。

「今日はすっきりしてるのかな？」  
神の後ろから声が聞こえた。志郎だ。

「あ、志郎、おはよう。ええ、今日は清々しいわ。」

神はそう答える。志郎は苦笑しつつ言った。

「そうか、なら昨日の夜盗どももいい勉強をしたってことだな。」  
そう言われて、神は顔を赤らめつつ言った。

「あれは！・・・う・・・そうね。彼らも懲りたでしょうね。」  
神の様子を見つつ志郎は微笑んでいた。

「さて、今日もいいのかしら？」

「ああ、頼む。」

二人の朝の修練が始まる。

「おはようございます。」

晶は、皆に挨拶をした。ミルが朝食の準備をラミアと一緒にしながら答えて言う。

「あ、おはようです。もうすぐ朝食も出来ますからね。」

「ありがとうございます。」

晶はそう返事をした。アーレフが身支度をしていた。晶はそこに近づきアーレフに言う。

「アーレフさん、少しよろしいですか？」

「あ、晶さん。おはようございます。何でしょう？」

アーレフが座るように促したので晶はそこに座る。そして話し始めた。

「昨日の神さんなんですけど。あ、夜盗退治のときです。」

「ああ、あの時の。それが何か？」

「志郎さんもすばらしい体術の持ち主でしたけど、神さんは、そう言う形容すら飛び越えてるような気がするのですが。」

「そうですね。晶さん。あなたにとって「神」とはどういう方ですか？」

「え？神様ですか……。そうですね。理解しようとしても理解できない、あまりに高度な存在故に、形容する言葉が見つからない、そう言う力強い方、でしょうか。」

「なるほど。では、神さんを見てどう思いますか？」

「神さんですか？……。彼女は、非常に魅力的です。女性としても、人としても。でも何か近寄りがたい、そうですね、威厳のようなものが感じます。」

「威厳ですか。なるほど、流石巫女さんですね。」

「え？どういうことですか？」

「神さんは「神」なんですよ。」

「……えっ？」

晶はいわれたことを理解できずにアーレフに問うような返答をしました。アーレフが説明して言う。

「彼女は、元は「人」ですが、宿命付けられて、この世界にやってきた「神」の一人なんです。」

「はぁ……。」

晶はよく理解できずに、中途半端な返事をしてしまった。アーレフが苦笑しながら続ける。

「理解できないのは無理ありません。普通、人は「神」を離れた存在と勝手に解釈しがちです。なぜなら、そのほうが都合が良いからです。悪い意味でね。」

「それはどういふことでしょうか？」

「あなたも巫女をされていたのであれば分かりますが、神に仕える点で、いささか疑問に思ったことがありますでしたか？」

「そう言われれば・・・守るべき規則などで、疑問に思う点が幾らかあります。」

「それです。我々が「神」と形容する方は、単に力が強いだけの存在ではありません。そのような存在はこの世に沢山居ますからね。」  
「そうアーレフに言われて晶は素直に頷いた。そう、この世には魔族、魔族、様々な人より優れ非常に強力な「力」を持つものが居るのである。それと比べれば、人はちっぽけなものである。しかし、自分たちが崇める神は「力」だけの方ではない。「心」を持ち私たちに関心を示されているそう言う方なのだ。そう教えられ、また自分もその方こそ「神」と呼ぶものだと思ってきたのだ。アーレフは続けて言った。

「ですから、そのような強力な「力」を持ち、私たちのような、いえ、私たちと同じ「心」を持つ身近な「神」が、今私達と一緒に居るんですよ。」

「それが神さんだと・・・。」

「そうです、一般の教会などは「神」の定義を曖昧にしがちです。何故ならその方が「人間」の側に都合が良いからです。悪い意味でね。幸い、私の居たレミアルト王国はそう言う傾向が極端に少ない国でしたがそれでも、そう言う「人」の考えが教会の教えに入り込んでいます。これから回るほかの国々では、更に酷いかも知れないですね。不思議なものです。「神」が直接言われたことであれば反論できませんが、普通の人はそう言う言葉自体が理解できないので、我々が教えてあげないといけない訳です。しかし、そこに人としての弱さが入り込みます。人の考えが混ざるというものです。でも、

神さんは違う。人の形を取りながら「神」を体現できるすばらしい方なんですよ。もちろん、「神」の力をフルに発揮すれば、ここには居る事が出来ないのもそんなことはいらないと思いますけどね。極論的にはこの世界をすら自由に出来るはずですよ。まあ、昨日は「人」のころの弱さが出たのでその鬱憤晴らしをしてたようですね。」

アーレフはそう言って苦笑した。晶は、感嘆しつつ言う。

「はあ・・・すごい能力の方とは思いましたが、そこまでとは・・・でも、逆を言えば大変な宿命の方ですね。」

アーレフは晶が言った言葉を聞き、頷きつつ答えた。

「そうです。そこですよ。私が彼女と旅がしたいのもそこにあります。彼女は単に能力があるだけでなく、その宿命に対していつも前向きで、自分よりも他人に、そう弱いものに非常に気遣います。まさしく「神」のような方です。それで居て、自由にされる。人はがんじがらめにされるのは嫌いますからね。そこまで理解しておられる。そして、「人」の面も併せ持っておられる非常に可愛い方ですよ。」

アーレフの言葉を聴いて晶も頷いて言った。

「そうですね、非常に魅力的な方です。このまま私も一緒にしてもいいのでしょうか。」

「それは問題ないですよ。というか・・・。」

アーレフは口籠ってしまった。晶は理解出来ずにアーレフのほうを見る。

「どうされたんですか？」

「あ、いや。私個人としては是非あなたとは一緒に行きたいと思えます。あなたは、その・・・非常に魅力的ですし・・・。」

アーレフにそう言われて、晶はそこで初めて理解した。そして自分でも顔が高揚してることに気づいた。

「あ、あの・・・。その、なんと言うか・・・。」

晶は自分でもしどろもどろになってるのは分かっていたがそれでも、

どうにかできる状況ではなかった。

「朝食が準備できた。」

ラミアがそう言ってきた。二人は驚いて、ラミアを見る。ラミアは二人を見ながら再び言った。

「朝食が準備出来た。こちらに来る。」

向こうではミルが神<sup>し</sup>たちを呼んでいるようだった。アーレフは苦笑しつつ晶に言った。

「晶さん、まずは朝食を食べましょう。急ぐことでもないですし。これから旅をしながら答えを出していきましょう。」

晶は頷きつつ、手を差し伸べてくれたアーレフに手を差し出した。

オーソストラム平野は高い山の無いなだらかな平野だがところどころに丘があり北東方向にある北の氷山付近から流れてきているいくつもの川が大小横切っていた。そのため、木々も多く自然は豊かな平野であった。

「いい場所ね、ここは。」

神<sup>し</sup>は見渡しながら言った。

「そうだな。川が比較的多いから土地も肥えてるし開発すればいい農地になりそうだが、人が住むにはやや不向きか。」

志郎がそう分析した。ミルが疑問に思い言う。

「どうして住むには不向きなんですか？」

「それはですね。川が多いということは、土地を肥えさせる土は数多く運んでくれるのですが、逆にすべてを押し流すほどの氾濫も多々あるということなんです。ですからそこに住居を構えるのは得策ではないんです。もちろん少し離れた場所に住居が構えられるならここに農地だけ作ればいいのですが、この辺りにはそんな便利な場所が無いですからね。」

アーレフがそうやって説明した。神<sup>し</sup>が言う。

「まあそう言うことよ。少数ですむなら問題ないでしょうが、村と

か形成しようとするですぐ問題が発生するでしょうね。」

「そうですね、実際この辺りには、少数民族の移動村が少しあるだけですね。」

アーレフがそう付け加えた。

「さて、ではとりあえず、街道を通りながらそれなりの街に行くまでがんばりましょうか。」

皆は元気に返事をした。

ラミュソスから出て一週間目。

一行は平野の中央部を歩いていて。川もすでに二本渡り、大きな丘も一つ越えている。ミルがぼやきつつ言った。

「ずっと同じような景色だと飽きますう……。」「  
神が苦笑しながら言う。

「まあ、平野はこんなものよ。それとも短縮したい？」「  
神の提案にミルが目を見はって言った。

「え？！短縮できるんですか？」

「ええ、やるのは簡単だけど。ただこれをするると旅の楽しさは半減するわね。」

神はそう注釈を添えた。志郎は何をしようとしてるか理解して言った。

「空間跳躍か。」

「ええ。」

神が肯定して言った。アーレフがそれに意見をして言う。

「まあ、確かに楽ですが、今は危機的状況でもないですし、とりあえずは我慢しつつ進みませんか？」

そう言われてミルはしぶしぶながら答えて言った。

「分かりました。ミルも頑張ります。」「

「しかし何だな。」

志郎がふと気づいて言った。神が答えて聞く。

「ん？どうしたの？」

「ミルの様な大きさで、ああも可愛い仕草をされると、ますます可愛く見えるのはなぜかな。」

そう言われて、神はくすくす笑いながら言った。

「簡単なことよ。人は常識に囚われてるからその差の影響でより効果的に感じてるって訳よ。もともと、ミルはあたしの姉だった人がモデルだからね。」

「え？そうなんですか？」

晶が驚いて聞く。神が答えて言う。

「ええ、この世界に来たときに、モデルとしてあたしの姉の記憶を使ったからね。」

「にしては、お前とずいぶん違うと思うが？」

志郎が素直な感想を言う。神が答えて言う。

「当たり前よ、もともと血は繋がってなかったもの。」

「なるほどな。」

「基本的な性格も姉さんを元にして創ってるからね。」

「ほう……。つまり、お前の姉さんはミルの様だった訳だ。」

「ええ、そうよ。いつも快活で明るくて、ちよつとドジだったけど大きな体格であたしを守ってくれていた。そう、あの日まで。」

神がそう言ったのを聞いて、皆ははっとした。そして神のほうを見る。神は皆が見ていることに気づいた。

「な、なに？」

皆がじつと神を見ていたので神はびっくりして言った。

「今回は大丈夫なんだな。」

安心しつつ志郎が言った。神はそう言われて気づく。

「あ、ああ。大丈夫よ。いつまでも囚われるわけには行かないわ。

それに、今はもう向こうに帰ることなんて考えていないし。」

そう神は言った。

「向こうに帰る？帰れるのか？」

志郎はそう言って神が言った言葉の意味を聞いた。神は答えて言う。



「ええ、やろうと思えばね。ただそれには条件があるけど。」

「条件だと？」

「ええ、この世界を基本的な単位で破壊すること。」

神が言った言葉を聞いて絶句した。アーレフが言う。

「それは、して欲しくはないですね。」

神がくすりと笑いながら言う。

「でしょ。あたしだってしたくは無いわ。だから、過去のことは忘れるわけではないけど対処は出来ないよね。」

「強いんですね。神さんは。」

晶がそう言った。神はそう言われて、頭をかきつつ答えた。

「あたしは強くないわ。そりゃあ「力」は持っているけどね。でも、それは真の意味での強さではないと思うの。「力」を「正しく」使うことこそ強さだと思うな。何が正しさかは、私たちを創って今見ておられる方が決めておられるでしょうけどね。」

「なるほど。神をここに連れてきた方のことか。」

志郎が納得してそう言った。神は頷く。

「だから、あたしはこうやって旅をしてるんだし、またそれがその方の望まれたことだからね。」

神はそうやってまとめて言った。

「ますます、お前との旅が楽しくなっていくな。」

志郎がそう言った。皆も頷く。

「さて、平野もまだ半分あるし頑張りましょうか。」

神がそう言った。一行は張り切って歩き出した。

風が静かに吹き抜けていた。

## 心の闇（トラウマ）（後書き）

一つ問題を自分なりに解決し旅を続ける神達<sup>しのかみ</sup>。

平野部もそろそろ終わりを告げそれなりの街も近づいた時、事件は起こった。

次回「竜族との出会い」お楽しみに。

貴方にも良い風が吹きますように。

## 竜族との出会い（前書き）

オーソストラム平野を旅する神達<sup>しの</sup>一行。平野部は無事に旅を終え次に行く街が見えそうな所に来たのだが・・・。

## 竜族との出会い

小説 風の吹くままに

### 第八章 竜族との出会い

一行はオーソストラム平野を旅して約二週間になろうとしていた。あたりの風景も次第に変わり平野部が少なくなっていっていた。

「そろそろこの平野も終わりのようね。」

神<sup>し</sup>が周囲を見ながらそう言った。アーレフが答えるように言う。

「そうですね、二週間歩いてますからもう少し行けばアーキレストの街に着くでしょう。あそこはそこそこの街なので今までとは違う楽しみがあると思いますよ。」

そう言われて、ミルがはしゃぎつつ言った。

「なら、頑張って進みましょう。楽しみだなあ。」

そんな彼女を見て、皆は微笑んでいた。ふとラミアアが言う。

「遠くで火災を確認。」

「え？」

「どこ？」

「何？」

そう言われて皆が周囲を見る。神<sup>し</sup>も気づいて言った。

「北のほうね。開拓村か何かで火事かしら？・・・ちょっと待って！空に何か居ない？」

「空だと・・・？」

志郎がそう言いながら空を眺めた。何か飛んでる様にも見える。晶が気づいて言う。

「あれは、竜族のようです。大きさはそう大きくないので、下等種かも知れませんが。」

「レッサードラゴンか。獣とほとんど変わらないから厄介なほうね。」

話が基本的に通じないし。しかし、村を襲ってるようなら行った方が良さそうね。被害にあってる人も居るはずだから助けないと。開拓村じゃ、戦える人員なんて居ないでしょうしね。」

神しんがそう言った。志郎が答えて言う。

「分かった、なら急いで向かおう。」

皆も頷いて走り始めた。

天空を舞う竜は怒り狂っていた。咆哮を上げ、体内に宿したエネルギーをここぞとばかりにブレスとして人に向けて吐き出していた。竜が吐き出すブレスは電撃となり建物、地面、木々、動物たち、人間を襲っていた。建物が壊れるとき、人が使っていた火に引火して周囲は炎上し始めていた。しかし、竜はすべて焼きつくさんとはかりに暴れていた。そう、自らは滅びてでも、その場を滅ぼし尽くそうとして。

「出来る限り、地下や洞穴に逃げろ！建物は危険だ。木々もだめだ。奴は電撃を使うから、出来る限り地に近い場所に身を潜めるんだ！」村の自警団と思われる男が周囲を逃げ惑う村人にそう指示をしていた。しかし、村人は混乱しているため、なかなか伝わらない。やきもきしながらも、一人でも助けるため、彼は走り回りながら伝えていた。

「なんてこと……。」

晶は村の傍まで来てそう言っていた。村は悲惨な状況だった。建物の大半は壊滅し、一部からは炎が上がっている。木々は倒され、家畜も殺され、人々も幾人か倒れているのが見える。神しんは、動転している晶を励ますように肩を叩きながら全員に言った。

「さて、行くわよ。ドラゴンには、あたしと志郎が行くわ。ミル達ほかは村人の救援と救出、そして救護を出来るようなら蘇生も御願いね。」

「分かりました。」

全員は肯定の返事をした。そして各自、目的地へと向かった。

「戦うは良いとして、どうやって奴を止める？」

志郎が神しんに竜に向かいながら聞いた。神しんは答えて言う。

「あたしに直接攻撃を向けさせる様にしてから、止めるのみよ。」

「分かった。俺は何をすれば良い？」

「覚えたあれを試して竜の気をこちら側に向けさせること。御願いできるかしら？」

「あれか、分かった。やってみよう。」

神しんにそう言われて志郎はそう答えた。竜に近づく。竜は村の中央部を旋回していた。志郎は「気」を練り始め拳に「力」を集める。次第に拳は輝き始め、そこに「力」が集まっていくのが人でも分かるほどになった。

「行くぞ！」

志郎はそう言い、竜に向かって拳にたまった「力」を撃ち放した。

「力」は意思を持つがごとく竜に向かっていきそのまま竜に当たる。そのダメージで竜は体勢を崩した。竜はすばやく体勢を立て直すと、自分を攻撃したものを探した。その時、

「あたしはここに居るわ。」

声が出た。竜はそこに目を留める。人間だ。竜は、新たな対象を定め地面に着床する。

「ズンッ。」

竜が降り立つとそう地面が揺れた。神しんは竜が降りたのを見て笑みを浮かべる。

「これで村の被害も無くなるわね。」

神しんはそう言った。その時、

（私の子。私の子がさらわれた。私の我が子が居ない。私の子が消えた。憎い。さらった「人間」が憎い。憎い！）

悲しみと憎悪の感情が「聞こえ」てきた。神しんは、いきなり来たその

感情に身を竦ませてしまう。その時、竜は神を薙いでいた。

「神！」

志郎は、神が竜に薙ぎ倒されるのを見て叫んでしまった。しかし、神は体勢を立て直しつつ答えて言う。

「あたしは大丈夫よ。こっちはもうあたしが済ませるから、皆のほうを手伝って。」

志郎は頷き言う。

「分かった。でも、無茶はするなよ。」

「ええ。」

神はそう返事をした。志郎は神を見つつ仲間の元に向かった。

「さて、あなたが可哀想なのは分かるわ。でも、だからといってこうして無差別に攻撃するのを許せるほどあたしは寛容じゃないのよ。」

神はそうやって竜に語ったが、竜は怒り猛りながら咆哮を上げ上半身を上げて神に覆いかかろうとした。

「ズンッ。」

これで邪魔なものは消えた。竜はそう思った。しかし、別の場所から声が聞こえてくる。

「無駄よ。あなたの攻撃は効かないのよ。感情のままに行動しているあなたには分からないでしょうけど。」

神はそう答えていた。目には涙が溢れていた。そう、彼女（竜）には悪いところは基本的には無い。彼女には人間の区別など出来ない。あくまで彼女はわが子を奪った人間に復讐しているだけだ。しかし、それでも関係の無い者を襲っていい理由とはならない。竜はさらに怒り狂い周囲を薙ぎ回していた。

「悲しいね。辛いね。苦しいね。悔しいね。・・・これで、その思いも終わりにしてあげるわ・・・。」

神は自分の涙が流れていることを気づいていたがあえてそのままにしていた。そして、「力」を解放して行く。

向こうで「閃光」が起こった。

「終わった。」

ラミュアはそう報告した。アーレフも答えて言う。

「そのようですね。こちらでも頑張らしましょう。」

ミルは少し悲しみつつ言った。

「マスター……。」

「ミル、気持ち分かるが今はこっちを済ませよう。」

志郎がミルの肩を叩きつつ言った。ミルも頷く。

彼女は何が起きたか理解していなかった。「人間」に憎しみを持っていた。わが子を奪った人間に。しかし、今、目の前にいる「人間」は自分のために涙を流しつつ傍に立ってくれていた。

「わ、私は……。私は、我が子の為に……。」

彼女はそう言いかけて、命の火を落とした。神は彼女の傍にずっと立っていた。

「ゆっくり眠りなさい。あなたの心は「老人」に間違いなく届けるわ。」

神は彼女にそう語りかけた。悲しい、そして苦しい、そんな結末だった。

「神、お疲れ様。」

志郎が帰って来た神に言う。神は答えて言った。

「ただいま……。」

神はまだ、涙を拭いていなかった。いや、拭きたくなかった。彼女への手向けと思うから。アーレフは神を見て言った。

「お帰りなさい。今こちらでも、治療などをしています。もうすぐ終わりますので神さんはゆっくりしててください。」



「ありがとう。無理をしないでね。」

神がそう答えるとアーレフはにこりと笑みを見せながら仕事を続けた。

「辛かったか？」

志郎が聞いた。神が答えて言う。

「そうね。でも、彼女の悲しみに比べれば全然問題じゃないと思うわ。」

「彼女？」

「ええ。あの竜のことよ。彼女は母親だったの。人間が彼女の卵を奪ってしまったので、彼女は怒り狂っていたって訳よ。」

「なるほどな。」

神の説明に志郎は納得して答えた。志郎は続けて言う。

「それは、そうと、竜はどうなったんだ？」

そう言われて神は答えて言う。

「ああ、村の中心部で静かに寝ているわ。永遠にね。」

「そうか。」

志郎はそう答えつつ神の肩を抱いた。神はその優しさに包まれながら目を閉じた。

神は懷から黄色く輝く宝石のようなものを取り出した。

「それは何ですか？」

煌びやかに輝く輝きに気づき晶が言った。神が答えて言う。

「竜の思いよ。それが結晶化したもの。」

悲しげな目で、神はそれを見ていた。志郎が言う。

「ドラゴンドロップ。幻の宝石の一つだな。」

「哀愁が見える。」

ラミュアがそう素直に言う。神はくすりと笑っていった。

「良く見てるわ、ラミュア。これは彼女の思い。「老人」に手渡すべきものよ。」

「老人。ですか。」

アーレフが仕事を済ませてやってきて言った。それに気づいて神しのが言う。

「お帰りなさい。とりあえず手当て等はもういいのかしら。」

「そうですね。この村には幸い、薬師の方もいらっしゃったので応急的なことだけ済ませておきました。」

アーレフはそう言った。神しのはそれに答えて言う。

「そう。ならばばらく逗留して村を立て直すことや治療の補佐を手伝いましょう。その間にあたしはこれを届けてくるわ。」

「お前だけでか？」

志郎が疑問に思っして聞く。神しのは答えて言った。

「あなたにも付いてきて貰もらいたいわ、志郎。」

「あ、ならあたし達も。」

ミルが同乗を述べる。しかし神しのはそれを制しつつ言った。

「ミルやラミアはアーレフや晶を手伝ってあげて欲しいの。村はほぼ壊滅状態だし、たまたまあたし達が来るとはいえ手伝える人は少ないはずよ。いいかしら？」

そう言われて、ミルはしぶしぶしながらも答えて言った。

「はい。残念ですがマスターのご指示に従います。」

「了解。」

ラミアも答えて言う。アーレフは疑問に思っして言った。

「どれくらいかかるのですか？そこに行くのには。」

「せいぜい二週間よ。向こうでそんなに長くは留まらない予定だしね。」

神しのが答えて言う。それを聞いて、安心したようにアーレフは言った。  
「分かりました。ミルさんたちも居ますし、私達は村の手伝いをしましょう。」

「御願ごいするわ。とりあえず、この村の責任者にあたしが彼女を倒したことを告げてからそこに行くつもり。でないと、どうして彼女が死んでるか見当がつかないでしょうしね。」

神はそう言った。納得しつつ志郎が言う。

「確かに。村のど真ん中に居るわけだし、まあ、向こうとしては困るだろう。」

「そう言うこと。対処方法も伝えておくつもり。「老人」に話せば報復も無いでしょうしね。」

神がそう言った時点で、晶は神が何を為そうとしているかに気づいた。そう、被害を最小にするために話しに行く訳である。

「お氣をつけてくださいね。」

晶はそう言った。神は笑みを浮かべながら言う。

「あたしは大丈夫よ。皆も無理をせずに頑張るように。」  
そう言って神は立ち上がった。志郎が付いて行く。

村長は事態が理解できなかった。竜が村を襲って来た時もそうだった。なぜ、竜がこの村を襲ったのか。それすら分からなかった。必死で村人達を逃がしていた。そうすると、今度は村の中心で閃光が起こり来て見ると竜は倒れている。何がなんだか、まるっきり理解できない状況であった。

「いったい誰がこんなことを・・・。」

村長がそうばやいていた時、後ろから声がした。

「竜には眠ってもらったわ。永遠にね。」

そう言われて、村長は声のほうに振り向く。そこには、一人の女性と一人の男性が立っていた。

「御主達がやったのか？」

村長はそう聞く。女は答えて言った。

「ええ、あたしがやったわ。彼は村人達の救出を手伝ってただけよ。」

「そうか・・・しかし、これでまた次が来ることになる・・・。」  
村長は、恐れつつ言った。しかし女は答えて言う。

「そんなことには為らないわよ。あたしが話を付けに行ってくるか

ら。」

「話、だと？」

村長は理解できずに、女に問うた。女は答えて言う。

「ええ、竜たちの長の一人にね。彼に話せば報復は無くなるわ。あなた達は村の再建に力を注げばいいのよ。あたしの仲間も手伝うしね。」

突拍子も無い言い分で、村長は面食らう。もしそれが事実ならありがたいことではあるが……。

「御主達は一体何者なのだ？」

当然とも言える疑問を村長は投げかけた。それに男が答えて言う。

「なに、ちよつとばかり御節介な女性とそれに連れ添う旅の仲間達さ。」

そう言われて女性はくすりと笑いながら加えて言った。

「あ、そうそう、竜の亡骸はそのままにしてあげてね。そのままにしておけば痛まずにそこにあり続けるから。そうすれば村のモニュメントにもなるし、村を脅かしかねない五月蠅い魔物の魔除けにもなるわよ。」

「そうか……。分かった、そう通達しておこう。誰かは知らぬが感謝する。」

村長は、全ては理解できないにしても、この御節介な者達のおかげで村が救われることを自覚した。そして礼を述べた。

「さて、話も終わったし、行きましようか、志郎。」

女は男にそう言った。男が答えて言う。

「ああ、分かった、神<sup>しん</sup>。」

二人はそこを離れて北へと向かって行った。

そこには大きな山があった。険しいというほどではないが高い山だった。そしてその中腹には、巨人も優に入れようかというほどの巨大な洞窟があった。

「ここか。」

志郎がそう言う。神しんが答えて言う。

「ええ。さあ行きましょう。」

そうやって、中に入り始めたその時、

「私の敷地に入るものは誰か？」

そう、頭に響くような「声」が聞こえた。志郎は吃驚して周囲を見回す。しかし何も居ない。神しんはくすりと笑い、志郎を軽く叩いた。そして言う。

「大丈夫よ。これは「彼」の声だわ。」

そう言われて、志郎は理解した。神しんがその質問に答えて言う。

「あたしは杜神あかむめ。あなたに話があつて来たのよ。」

そう答えてから、少しの時間が流れた。そうしてまた更に「声」が聞こえてきた。

「御前が彼の者か。分かった、ゲートを出すゆえ、それに入ってくるが良い。」

「だ、そうよ。」

神しんがそう言う。志郎は苦笑しつつ頷いた。しばしの後、神しんたちの前にゲートが開かれた。二人がそこに入るとそれは消え、後にはただ洞窟が何時もの様に口を開けていた。

「良く来られた。かの方に選ばれし者よ。」

巨大な竜が神しんに対しそう言った。ゲートから出た二人は、その巨大さに目が追いつかないほどであった。苦笑しつつ竜が言う。

「この姿では、そなたらの首が疲れてしまうな。しばし待たれよ。」  
そう言って、竜は身体を輝かし始めた。眩く輝くと、身体が次第に縮み始め形を変えていく。光が収まったときには老人の姿があった。  
「なるほど。それで「老人」か。」

志郎は彼の姿を見て納得しつつ言った。神しんはくすりと笑っていた。  
「ほう。そなたは、人でありながらこの者と一緒に居るのか。」

老人は、興味深そうに志郎に問い尋ねた。志郎が答えて言う。

「ああ、そうだな。今は、俺にとっても大事な奴なんですね。」

「そうか。それは重畳。おお、済まなかったな。私はグランモスキヤメラウル。多少長い名前なのでな。グラルまたはグラン爺とよく呼ばれておる。このあたり一体の竜族を治めておるものだ。よろしくな。」

老人はそう言った。志郎も答えて言う。

「おっと、俺も言ってなかったな。俺は剣志郎。宜しく頼む。」

グラルはそれを聞き笑みを浮かべた。そして、語る。

「言いたいことは先日の件かな。」

「ええ。」

神が肯定して言う。続けて言った。

「これをあなたに渡したくてね。」

そう言って神は懷からドラゴンドロップを出した。それを見てグラルが呻く。

「ルミル・・・そうか、お前は眠ったか・・・。」

「ごめんなさい。彼女を一番楽にさせるのはそれが一番だと思ったの。咄嗟だったしそれが必ずしもいい選択とはいえないかもしれないけれど。それを報告しにここに来たというわけ。後、彼女が襲った村に関して少し御願いをね。」

神はそう説明した。グラルは答えて言う。

「いや、あれが最善であろう。わが子を失い怒り狂う女性を助けるには眠らせるのが一番だ。私からも感謝する。」

そう言い、グラルは礼を述べた。そして続けて言う。

「御願いとは、村を襲わない様にと言う事かな。」

「ええ。」

神は即答して言った。グラルは理解し、答えて言う。

「その点は問題は無い。私からも言い含めておこう。ところで、彼女の身体はどうした？」

グラルの問いに神が答えて言った。

「傷一つつけないように言い含めて村の中央に置いてあるわ。身体はそのままだから痛まずにそこにあり続けるわ。」

それを聞きグラルは答えて言う。

「それは感謝する。ではルミルのこの心は私がしっかりと預かろう。おぬしと出会えて本当に良かった。また、出会いたいものだな。」

「そうね、そんなときは今度はあたしがあなたを直接呼び出すときかもね。」

神は、少しにやりとしつつ言った。グラルは笑みを返ししながら言う。

「確かに。まあ、その時はぜひ呼んでくれ。では、帰りのゲートを開けよう。」

そう言ってグラルはゲートを開き始めた。

「そうだ。志郎と言ったな。」

グラルが志郎に言う。志郎が答えて言った。

「ああ、なんだ？」

「御前がこれから行く道は果てしないものになるかも知れぬがそれでもいいのかな？」

グラルが謎めいた事を言う。志郎は即答した。

「なに、こいつを失うことに比べれば、造作も無いことさ。」

「そうか、お前達の前に幸あらんことを。」

グラルは、二人の前にそう、祝福を述べた。二人はゲートに入ってしまった。

二人は村に向かって歩いていった。志郎が言う。

「なあ、神。」

「なあに？」

「なぜ俺を連れてきた？」

志郎の当然とも言える疑問に神は答えて言った。

「今後も連れて行きたいからよ。」

「ん？それはどういう意味だ？」

良く理解できずに志郎が更に問い尋ねる。神しんははぶてながら言う。

「馬鹿！ グラルの前ではあれだけ啖呵切ってるのに、あたしの言葉は分からないのね！」

志郎は神しんが怒ったことが理解できずにあわてて言った。

「ちよつと待て。どうしてそこで怒るんだよ。そりゃ、お前の言うことが良く分からないんだが、頼むから教えてくれ。」

そう言われて、ため息混じりに神しんが言う。

「はあ。分かったわ。はっきり言います。」

そう言われて、志郎も身構えて言う。

「分かった。」

「志郎はあたしのことが好き？ あたしは大好きなんだけど。」

そう言われて志郎はすぐに返答が出来なかった。しばらく時間が過ぎる。

「志郎？」

神しんが覗き込みながら言う。志郎は後ずさりしながら答えた。

「あ、ああ、すまん。もちろん好きだ。」

「あたしは一緒にになりたいんだけど。あなたと。」

神しんは志郎にそう言う。またもや時間が過ぎて行く。

「しゝろゝうゝ？」

神しんが顔を近づけて志郎に迫る。志郎はあわてながら言う。

「ああ、済まない、その・・・そんな話とは思わない・・・訳じゃないがその・・・心の準備というものがな。」

しどろもどろになりつつ志郎は一生懸命に説明する言葉を搜した。

「あ、いや、お前のことは大好きなんだ。うん。それに今の旅もやめたいとは思わないし。その、なんだ。うまく言えないんだが・・・

神しんははぶてつつ言った。

「何よ。接吻したときには、責任は取れるとか言いながら、いざって時にはしどろもどろで誤魔化すのね。」

そう言われて志郎はあわてて言う。



「いや、そうじゃないんだ。もちろん責任は取らせてもらうさ。じゃなくて・・・あー、くそ。なんて言ったらいいんだ。」

言葉がまとまらずに志郎は自分自身に歯噛みをしていた。

「なんというか・・・俺でいいのか？」

志郎のその質問で神は怒って言った。

「馬鹿！なぜ分からないのよ。あたしは、「あなた」がいいの！こっちは一生懸命言ってるのに、どうして肯定も否定もしないの。そんな生殺しでいいと思ってるの？！」

そう言いつつ、神は涙を流していた。志郎はばつが悪く思い、俯きながら言った。

「あ・・・済まない・・・お前は真剣に言ってくれてるのに。俺は、自分の立場とか、能力とかそんなものを考えて逃げていた様だ。そんなものは下手な言い訳でしかないのにな。俺自身の気持ちは決まってるのに何でそんなことを考えるんだろうな・・・馬鹿だな、確かに俺は・・・。」

それを聞いて神が言った。

「で。そのお馬鹿な志郎さんはどうするのかしら？」

しばらく間が空いた後、意を決して志郎が言った。

「是非、お前と一緒にになりたい。」

少しの間の後、神はため息しつつ言った。

「この言葉が聞きたいがだけに、どれだけ今日は疲れたのかしら・・・。」

「すまん。」

志郎が済まなそうに言う。それに答えて神が答える。

「馬鹿・・・。」

そう言って、ようやく二人は顔を合わせた。そして笑みが広がる。

「やれやれだな・・・。」

志郎がそう言う。その時、手前から声が聞こえた。

「何を言ってるんですか。これからですよ？」

吃驚して二人は前を見る。前にはアーレフたちが来ていた。

「あ、あんた達・・・。」

神しのが手を震わしながら言う。

「また見てたわねー！！。」

「そうは言いますが、神しのさん達が勝手にやり始めたんじゃないですか。」

アーレフが抗議する。神しのが有無を言わず言う。

「五月蠅い！毎回毎回、こっちは恥ずかしいんだからー！」

「え？マスターあれって恥ずかしいことなんですか？」

ミルが突っ込んで言う。神しのは顔を真っ赤にしつつ言う。

「ミルーーーー。今日はあたしは気分が悪いからただじゃ済まないわよーーーー。」

「ちょ、ちょっとマスター、目が危ないってば。」

ミルは逃げ出しながら言った。ラミアがボソツと言う。

「楽しそう。」

晶も微笑みながら言った。

「そうですね。私も同じように言えたらいいな・・・。」

「何が？」

ラミアが聞く。晶があわてて言う。

「あ、いえ・・・何でもないです。」

ラミアがしばらく考えて言う。

「アーレフの事か？」

自分が考えてることを当てられて晶は焦りながら言う。

「あ、えっとその・・・今はまだ・・・ラミアさん黙っててくださいね。」

「分かった。」

ラミアは淡白にそう答えた。晶は胸を撫で下ろしながら言う。

「なんだか、志郎さんの気持ちに分かりますね・・・。」

「そうですか？」

突然アーレフが傍に来てそう言っていた。晶は吃驚して言う。

「きゃあ！」

アーレフもそれに驚いて言う。

「あ、驚かせてしまいましたか。申し訳ない。」

「あ、いえ、突然だったので・・・」

晶はそう言って誤魔化した。アーレフは神たちを見ながら言った。

「本当にいいですね。私もああいう風に言えればいいのですが。」

「何を？」

ラミユアが疑問に思って聞く。アーレフが苦笑しながら答える。

「ああ、ラミユアさん。神さんや志郎さんの様に素直に言い合えたら良いだろうなあと思ひましてね。」

「なるほど。覚えておく。」

ラミユアがそう返答するのを見て、アーレフは苦笑しつつ神たちを見ていた。そして言う。

「神さん、日が暮れる前に村に戻りましょう。今後のことを話し合いたいですし。村長さんに報告もあるのでしよう？」

ミルとじゃれあってた神はアーレフにそう言われて志郎と顔を合わせながら笑って答えた。

「そうね、そうしましょう。まずは村長にも報告しないとね。遅い様なら、明日の朝にでも言わないと。」

そう神が言うとは皆は頷きつつ村に向かって行った。

次の日。早朝。志郎は何時も通り朝の修練をしていた。しかし、今日は珍しく神の姿が居なかった。

「珍しいな、神が起きて来ないのは。」

志郎はそう言いつつ修練を続けていた。アーレフが起き上がって外に出てきた。

「あ、志郎さんおはようございます。何時も修練流石ですね。」

「何、日課さ。」

志郎にとっては何時ものことなので、そう答える。

「ところで。」

アーレフがそう話題を変えつつ話し始めた。

「結婚式はいつされるんです？」

「な・・・！」

意表を衝かれて志郎は手を止めて立ち止まってしまった。

「いや、だって、正式に決まったんでしょ？」

アーレフが追い討ちをかけるように言う。志郎はしどろもどろになりながら答える。

「う、いや、それはそうなんだが・・・。」

「だったら早いほうが良いじゃないですか。」

アーレフはそう言う。志郎は決心したように言った。

「ま、まあ、神しんと話して決めるさ。」

そう言いつつ志郎は仕度をしに戻って行ってしまった。

「相変わらずですねえ。」

アーレフは笑いながらそう言った。

「なるほど。お話は分かりました。こちらでも、竜族の意思を尊重していきましょう。」

村長は神しんの言葉を聞いてそう答えて言った。神しんは、今までの「老人」とのあらしを伝えたところであった。それを聞いて神しんが答えて言う。

「ありがとうございます。あと、彼女の亡骸にはあたしが不用意に触れるものが居ないように呪詛を掛けておきますのでその点も皆さんに伝えて置いてください。」

「分かりました。しっかり言い含めておきましょう。ところで、この後はどうなさるのですか？」

村長は神しんたちの今後を聞いた。神しんは答えて言う。

「街道を西に旅をしていたのでそのまま進もうと思っています。」

「ほう、では、アーキレストの街に行かれるのですな。」

「あ、そうですね、次はそうなるかと。」

「分かりました。どうかお氣をつけて。」

「ありがとうございます。村長も再建は大変ですが頑張ってください。」

「はい。」

村長が返事を返したのを見て、神しはそこを後にして、皆の場所へと向かった。

「皆、仕度はいいいのかしら？」

神しがそう尋ねる。志郎が答えて言う。

「俺はもう終わってるぞ。」

アーレフも答えて言う。

「私も済ませています。晶さんも済んでるみたいです。」

晶は、そう言われて頷いた。

「ミルも大丈夫ですよ。ラミアちゃんも済んでるみたいです。」

「

ミルがそう報告する。ラミアも頷いた。

「そう、なら、街道に戻って西に進んでいきましょう。」

神しがそう言って、皆も付いて行く。村から一行は旅立った。

「アーキレストの街まではどれくらいかしらね。」

神しが問うた。アーレフが答えて言う。

「平野部がそろそろ終わりです。今日明日中には街が見えると思いますよ。」

「楽しみです。」

ミルがそう言った。

風が今日も吹き抜けていった。

## 竜族との出会い（後書き）

志郎に思いを伝えた神<sup>しん</sup>。しかし彼女の旅は始まったばかり。次に向かう場所では何があるのか？

次回「神<sup>しん</sup>の結婚式」お楽しみに。  
貴方にも良い風が吹きますように。

## 神（しの）の結婚式（前書き）

神達一行はアーキレストの街に到着する。そこで彼女達が起こす行動とは・・・。

## 神（しの）の結婚式

小説 風の吹くままに  
第九章 神しのの結婚式

アーキレストの街はラミュソスのような巨大さはないが、それなりの規模のある町だった。平野部の境界に位置するだけあって周辺の村々からの産物がたくさん入りそれを交易する商人や逆に街から村へと貿易をしようとする商人たちが溢れかえっていた。要するに、この周囲の交易中心地として機能している街なのである。

「ラミュソスほどじゃないとしても、賑やかでいい街ね。」

神しのはそう言った。志郎があわせて言う。

「そうだな。人も多く活気がある。まあ、反面、問題もあるんだろうが。」

そう言ってる間にも向こうで喧騒が起きているようだった。街の衛兵が急ぎ足で走っている。人が多くなると揉め事も多くなるのは悲しいかな必然とも言えるべき事であった。

「おっと、ごめんよ。」

ラミュアに、男がぶつかる。男はそう謝りつつそそくさと去っていった。ラミュアは何事もなくみている。晶がはっとして言った。



「ラミアアさん、何か盗られてませんか？」  
「？」

晶の意図が分からずラミアアは不思議そうに見ている。晶が説明し  
て言う。

「人にぶつかるときは、不注意のときもありますけど、あえてわざ  
とぶつかって相手のものを盗んだりするときがあるんですよ。」

そう言われたが、ラミアアはけろっとして言う。

「私は、服以外は持っていない。」  
「あ……。」

晶は、その点に気づかずに顔を真っ赤にしてしまった。

「まあ、たぶん、晶が懸念したとおりの奴でしょうね。でもたぶん  
あいつは素人ね。ラミアアが何も持って無いのが気づかないくらい  
だから。」

神がそう補完して説明する。さらに神は言った。  
神がそう補完して説明する。さらに神は言った。

「あたし達は基本的に、物は持っていないの。というより、人間のよ  
うにわざわざ持つ必要がないからだけだね。その場で創り出せばい  
いから。極論的には、あたしや、ミル、ラミアアは食事とかも要ら  
ないわ。ただ、そうすると、人間との交流が減る上にあたし達自身  
も「楽しく」ないからね。せっかく「楽しむ」ために旅をしてるん  
だから。それくらいはしないとね。」

「はあ、なるほど……。」

晶は説明を聞きつつ、内容の大きさについていけないような返事をした。苦笑しつつアーレフが言う。

「まあ、心配はしなくて大丈夫ですよ。というか、私達が心配するより神さんがしなくてもいい心配をしますからね。」

そう言われて、神が顔を赤らめながら言う。

「ば、馬鹿！余計な言い方はなくていいの！」

それを見て、晶は微笑ましく思った。

「ところで、」

街を歩きながらアーレフが話題を切り出しつつ言った。

「神さん。結婚式はどうされるんです？志郎さんにも声を掛けたんですが神さんと決めるとか言ってられましたけど？」

そう言われて神は立ち止まった。

「神さん？」

アーレフが少し心配しながら言う。神はぼそぼそと答えて言った。

「そうよね・・・どうしたらいいのかしら・・・。」

その様子を見て晶が言う。

「あらあら・・・この間の神さんとは思えない様子ですね。」  
「マスター、悩んでる？」

ラムミアがそう言う。アーレフが苦笑しつつ言った。

「悩むというか。そこまで考えてなかったみたいですね。志郎さんから答えを得られてとりあえず満足しちゃった。というところでしようか。」

「たぶん。それが正解かと。」

ミルが賛同して言う。神はまだ悩みながらぶつぶつ言っていた。

「どこがいかしらねえ・・・。」

「こりゃ、しばらく式を決めることで時間がつぶれそうだな・・・。」

志郎が苦笑しつつ言った。他の者は微笑みながらそれを見ていた。

「何だ、お姉さん、これから結婚式を挙げるのかい？」

酒場の主人は元気にそう言った。神は顔を真っ赤にしつつ指を手当てながら言う。

「ちょ、ちょっと、声が大きいってば！」

それを聞いて、酒場にいたほかの者達も祝辞を言い始めた。神は顔を真っ赤にしてしまった。

「そうだなあ。そこそこ払ってくれば、ここを貸切にして、うちの知り合いを呼んでやるってのもあるぞ？」

酒場の親父はそう言う。客の一人がそれにあわせて言った。

「それはいい、娘が花屋だから花はうちに任せときな。」

それを聞いて別の客が言う。

「なら飾りつけは俺のところだな。甥夫婦がそっちの職人でさ。早いうちに話せば来てくれるぜ。」

さらに別の客が言い出す。

「うちに来なさいな。いいベールやドレスがあるよ。」

呆れつつ志郎が言う。

「なんだか、街の人はもうやる気満々だな・・・。」

微笑みながらアーレフが言う。

「おめでたい席ですからね。皆で祝福して皆で幸せを分かち合いたい。当然の成り行きじゃないですか。」

「そうですね。私の村もそんな感じでしたね。」

晶が皆を見ながらそう言った。すでに酒場は、日取りはどうの、式場に入る人はどうのと、会話が盛り上がっていた。

「ふう……。」

神はそう言ってベツトに倒れこんだ。ベツトは大きくきしみながら神を包み込む。

「なんだか、みんなの気持ちは嬉しいけど、恥ずかしいのよねえ……。」

独り言のようにぼやいて言う。くすくす笑いながらアーレフが言う。

「相変わらず、自分のことになると控えめですよね。」

そう言われて、神はベツトから起き上がり顔を赤くしながら言った。

「な！……そうかしら……あたしは普通にしてると思ってるんだけど……。」

「もしそうなら、神さんの普通が元から控えめってことですね。日頃あれだけ、他人には積極的にされるのに、いざ自分が対象だと「力」の点でもほとんど使われないじゃないですか。」

アーレフからの確に指摘され神は戸惑いつつ答えた。

「そ、そうかもね……。自分だけに使うこともできるけど、そう言う方法は自分で許せないのよ。「楽しく」ないから。やはり、皆のために使ってこそ「楽しい」と思えるしね。」

その答えに、微笑みつつアーレフは答えて言った。

「素晴らしいです。しかし神さん。考えてみてください。私たちは今一緒に旅をしています。そして街の皆さんは、心から、あなたを祝福したいと思っている。そう、皆一緒にいるんです。ならば、私たちもあなたの幸せを見て「楽しみ」たいと思うと思いませんか？」

そう言われて、神ははつとされた。確かにその通りである。別の場所から人々を眺めているのならともかく、今は人と同じ目線で居るのである。で、あるなら、人が自分に対してそう思うのは道理というものだ。

「確かにその通りね。あたしは、変に気を回しすぎていたのかもね。いや、言い訳をしていたのかもしれないわ。日取りに関して、明日にでも主人と話し合いましょう。」

神は決心しながらそう言った。アーレフは喜びながら言う。

「ありがとうございます。あなたならそう言ってくださると思っていましたよ。私たちも祝福したいですからね。」

「ありがとう。」

神はそう謝意を述べた。

一週間後。その同じ酒場で盛大に結婚式が行われようとしていた。初めは、酒場で集まった面々で、という話で進んでいたのだが、めでたい席上の話である。話が伝わり伝わって酒場には到底入りきらないほどの大勢の人が当日は溢れかえる事態となった。

「すごいですねえ・・・通りも人で一杯ですよ。」

ミルが身支度をしながら言った。そう、宿になっている上の部屋から見ているところである。アーレフが苦笑しながら言う。

「街の皆さんも「楽しい」事が好きですからね。しかも人が幸せになる始まりを祝う儀式です。皆で喜びたいじゃないですか。」

「良く分からないが、皆が喜んでいる。」

ラミアアが素直にそう言う。晶が苦笑しながら言う。

「ラミアアさんは相変わらずですね。あ、私は仕度ができました。先に下に下りてますね。」

晶は、皇の巫女装束を新たに仕立ててそれを着ていた。そして道具を準備しつつ下に下りていった。アーレフがそれを見つつ言う。

「私たちも仕度が出来次第降りましょう。というか、私が進行役でいいのですかね。」

「神官だからってマスターが指名したわけですし頑張られないとく。」

ミルが答えて言った。ラミアアがそれに、意外なことを付け加えた。

「たぶん、アーレフの時にはマスターがやる。」

「え?!」

ラミアアの台詞にミルとアーレフはそう言ってしまった。階下から声が聞こえる。

「アーレフ。ミル。ラミアア。皆待ってるから仕度が終わっ

たら降りてきなさいよ。」

神しの声だ。すぐさま返事をする。

「分かりました。まもなくですので。」

苦笑しつつアーレフはそう答えて仕度を済ませていった。

神しは薄い若草色のベールをしていた。彼女の目は鮮やかな赤なので、その緑色でさらに映えて映る。ドレスは少し黄みがかかった白色の生地が使われていた。おかげで神しの白銀の髪が映える。

「美しいですよ。」

着付けている女性はその言った。神しが答えている。

「ありがとう。旅人のあたしにこんなにしてくれて。」

「どこの誰かが問題じゃないんですよ。皆で祝福したい、「楽しみ」たい。ただそれだけです。」

女性はアーレフが言ったのと同じことを述べた。それを聞き、神しは涙を流していた。

「俺は、こんなものが似合うほうじゃないんだがな……。」

志郎はそう言いつつやってきた。彼は、白いタキシードを着ている。微笑みながら神しが言う。



「たまには辛抱しなさい。どうせ、式の間だけだしね。」  
「ああ、それは重々承知。しかし何だな・・・。」

志郎は答えつつ言った。神は先を聞きたくて問う。

「何？」

志郎が答えて続ける。

「お前、元から綺麗だと思ってたが、ここまで更に、美しくなるとはな・・・。」

そう言われて、神は顔を赤くしつつ言った。

「馬鹿。」

そんな様子を見て、着付けをしていた女性は微笑んでいた。ラミユアがやって来て言う。

「式の準備ができた。マスターも用意はいいか？」

神が答えて言う。

「ええ、いいわよ。志郎、行きましょう。」

「分かった。」

志郎が答える。二人は式場へ進んでいった。

酒場を改装した式場はかなり狭いが煌びやかに飾られ二人を祝福して迎えていた。中には神しんを含め旅の一行、酒場の主人の家族、酒場の常連客などが入っていた。他にも街で噂を聞いてやってきた人が酒場の外に集まっていた。二人は式場の中心部、一段高い場所に上がった。そこにはアーレフと晶が宗教上の正装で二人を待っていた。

「ようこそ。この神聖な式へ。皆さんの出席を歓迎します。多くの方はご存知ありませんが、この式はいずれ、後世に語り継がれることとなるでしょう。まあ、難しい話はこれくらいにして、まずは式を進めたいと思います。」

アーレフは初めの言葉をそう述べてから神たち二人に向き直った。

「これより、剣志郎と杜神あかなめの結婚式を執り行います。」

アーレフがそう言うと、ミルとラミアが用意した楽器を演奏した。そして周囲からは拍手が起こる。拍手が鳴り止むとアーレフは次の台詞を続けて言い始めた。

「汝、剣志郎に問う。お前は、この者、杜神あかなめを生涯の伴侶と定め、定めが無い時に至るまで共に歩むことを誓うか？そう、果てしない道を歩むことになるが、良いか？」

そう言われて、志郎はグラムが自分に言った言葉を思い出していた。（「御前がこれから行く道は果てしないものになるかも知れぬがそれでもいいのかな？」）

反芻しつつ志郎は答える。

「構わぬ。俺は生涯、定めが無い時まで神しんと共に歩む。」

アーレフは微笑みながら言う。

「新郎の肯定の返事を頂きました。さて、新婦 あかなめ 杜神。」  
「はい。」

「汝は剣志郎を自分の伴侶として終わり無き時まで共に歩むこと、これに同意するか？」

「はい、あたしの身と名に掛けて。」

「新婦の肯定の返事を頂きました。こうしてお互いの宣誓を私を含めここに居る皆さんが証人として立ち会います。」

アーレフがそう言うのと、盛大な拍手が沸き起こった。晶が進み出てくる。手には指輪を納めてある台があった。

「それでは、お互いに誓いの指輪を。」

晶はそう言いつつ二人に指輪を差し出した。二人はお互いにはめ合う。それを見届けるとアーレフが言う。

「宣誓と共に指輪による契りの儀を済ませることができました。最後に、二人の誓いの証としてここで熱烈な接吻を。」

そう言われて、神しんは顔を真っ赤にしつつ志郎に向き直った。志郎も神しんに向き直る。

「これからずっとよろしく。」

神しんがそう言って背伸びをする。志郎がかみながら答えて言う。

「俺のほうが頼むはずなんだがな・・・よろしく頼むぞ。」

そう言いつつ、二人は熱い接吻を行った。そしてアーレフは宣言する。

「ここに、一組の夫婦が誕生しました！「神」の祝福あれ！「かの方」の恵みのあらん事を。永遠にこの歩みが語り継がれんことを！」

そして、酒場の中、更には外で壮大な喚声が沸いた。皆が二人を祝福したのである。

「さあ、行こうか。」

志郎は神を抱えあげてそう言った。

「ちょ、ちよつと・・・。」

神は焦りつつ言う。

「こうしないと皆に見せれないだろう。」

「それは分かるけど、恥ずかしいわよ。」

「今日は見世物なんだよ、俺たちは。諦めるんだな。」

そう志郎に言われて、神は顔を真っ赤にしつつ言った。

「もう・・・分かったわ。皆が喜んでるのだもの。楽しまないね。」

そう言いながら神は志郎に接吻をした。それを見て、街の人達は更に喚声を上げる。そこでは祝福の言葉と感情が溢れていた。

その通りは人々の喚声で賑わっていた。飲み物が振舞われ、食べ物が渡される。何をしてるか知らない人たちまで参加して騒ぎはより大きくなっていた。

「これは何の騒ぎだい？」

「結婚式だよ。めでたいじゃないか。飲み物や食べ物も一杯振舞われてるよ。皆で楽しまないとね。」

「ほう・・・どちらさんのかな？」

「私も詳しくは知らないけど。向こうの酒場が式場らしいから向こうに行けば分かるんじゃないかね？」

「ありがとう。」

そんな会話も行われていた。志郎は神しを抱きかかえながら酒場を出た。町中の人二人を祝福してくれていた。

「可愛い嫁さんだねえ。大事にするんだよ。」

「格好いい旦那じゃないか。あたしが二十歳若ければねえ。」

そんな、微笑ましい会話もありながら二人は外の通りを一通り歩いてから酒場に戻った。酒場は式場を片付けていつもの状態に戻り披露宴の様相になっていた。

「お、新郎新婦のお戻りだ。」

酒場の常連客の一人がそう言う。

「さあ、こっちにおいで。」

酒場の女将さんが二人を席に誘う。二人が席に着くとすでに飲み始

めている者も居るが新たに乾杯が起きて皆で飲むことになった。

「ささ、新婦さんも。」

そう言つて神しの器にも酒が注がれる。

「あ、あたしは……。」

断りきれずに神しは器を取ってしまった。志郎はすでに幾らか飲みだしている。しかし、志郎はいつも飲む量に比べれば微々たる物、水をあおる様に飲んで周囲の人たちから喚声を受けていた。

「あたしも飲んだほうがいいのかな……。」

神しがそう言う。志郎は答えて言った。

「無理なら飲まなくていいさ。飲めない訳じゃないんだろ？」

そう聞かれて神しが答える。

「飲めないことはないけど、酔った状態なんて覚えてないからどうなるのか……。」

そう神しが言ったのを聞いて志郎は笑いながら言った。

「それは楽しみだ。今夜どうなるか見てやるよ。」

そう言われて神しは、顔を赤くしながら言った。

「馬鹿……。」

そう言いつつ、神は酒を飲んだ。アーレフたちは少し離れた場所で食事をしながら楽しんでた。街の人に声を掛けられて応対したり、逆に街の人たちと談笑したり。彼らにしてもアーレフたちにしても他の場所の人との交流はかけがいのないものであった。

「おされっておいしいろれえ。」

神はろれつが回らないほどに酔っていた。志郎が焦りつつ言う。

「おい、神、大丈夫か？」

「らいじょうぶ、あたしはへいきらろ。」

どう見ても大丈夫ではない。流石に焦ってきたので酒場の親父に言った。

「すまん、このまま酔わせると、危ないから上に上がらせてもらう。」

酒場の親父は頷きつつ志郎を上を誘導する。志郎は神を抱えて階上に上がっていった。

「全く、弱いなら弱いといえぱいいものを・・・相変わらず自分に対しては極端なほど厳しいな。」

志郎は呆れつつそう言って、神をベットに寝かせた。

「あらしは・・・らいじょうぶ。しろお。あらしといっしょに

」。

神はろれつが回らない状況でもいろいろ言いながらベットで横になっていた。その様子を見ながら志郎は微笑を浮かべて言う。

「全く・・・しっかりしてるんだか、甘えん坊なんだか・・・まあ、そこも可愛い所なんだけどな。」

そう言いつつ、神の頬に口付けをした。

「もおはなさいからあ・・・あらしといっしょなの。」

神がそう言ってるのを見て志郎は苦笑しつつ神の髪を撫でていた。

「酔いつぶれるのは計算外でしたねえ。」

「神さんはお酒に弱かったんですね。」

「みたいです、寝顔は可愛いですけど。」

「記憶します。」

二人の様子を見つつ、ミルたちはそんなことを言い合っていた。

「甘い様子が観察できるかと思ってたのになあ。」

ミルがぼやいて言う。アーレフが答えて言う。

「何、今日で終わりじゃないですし。これから幾らでも楽しめますよ。」

「そうですね、今日の状態も明日になればまた楽しめる要素になり



ますよ、きつと。」

晶がくすくす笑いながら言った。ラミューアが賛同しつつ言う。

「今日のマスター、想定外の行動。」

「ですね、明日が見ものですよ。」

アーレフはそう言って、階下の酒場に下りていった。皆もそれについて行く。

「なあ・・・俺のどこが気に入ったんだろうなお前は。」

志郎は寝入っている神しのかみを見ながらそう言っていた。出会って間もない一介の冒険者に過ぎない俺を好いてくれる。しかも相手は「神」の力を持つ女性。どう見ても、似合うとは思えない。しかし、彼女は「俺」を選んだ。もちろん、俺も彼女と一緒にいるのが嬉しいし、逆を言えば離れたくはない。嬉しい反面、なぜ俺が？という自問にも囚われてしまう。以前の出来事から考えないようにしてきたが、こういう一人で自問できるときはつい考えてしまう。

「相変わらず俺の悪い傾向なのかもしれないな。」

神しのかみのトラウマについて対処したときは神しのかみのことだけを考えてやってしたが、思えばあれは自分自身が失敗したことからの自分への戒めも入っていたのではないか？そうも思えるのであった。そしてそれが逆に自分自身に考えなくてもいい考えに囚われてしまう。

「やはり、馬鹿だな俺は。」

神しんに考えるなといいつつ、自分で考えてるようでは意味がないではないか。自嘲しつつそう思った。

「誰が馬鹿なの？」

ふと眼下から声が聞こえ、志郎は焦った。

「起きたのか？ 神しん。」

志郎は神しんに声を掛ける。神しんは答えて言った。

「ええ。あたしってだめねえ……。あの程度のお酒で酔い潰れる様じゃねえ。」

「ん。って言うかさ、神しん。」

「なあに？」

「どうしてお前、ああいう場面では「力」を使わないんだ？ 酔わなくすることくらい造作もないだろう？」

「ん。そうだけど、そうやって楽しめれるのかな。もちろんそれが必要なら多分そうするけどね。今日は必要じゃないと思ったから素のままやってみたんだけどね。」

神しんの答えを聞いて志郎が苦笑しつつ神しんの頭を撫でて、答えて言った。

「なるほどな。まあ、俺からすればお前の可愛い一面が見れて嬉しかったけどな。」

「馬鹿……」

神しんは顔を真っ赤にしつつ言った。そして、甘えつつ言う。

「今日から一緒に寝てくれる？」

そう言われて志郎は一瞬焦るが氣を取り直して言う。

「しないほうがいいのか？」

「分かってるくせに・・・馬鹿・・・。」

神がそう答えるのを見て志郎は神の頬しほを撫でながら一緒になる。

「存分に、相手をしてやるよ。」

そう言って二人は一つになった。

朝。それは清々しい夜明けの印。そう、夜の帳が逃げて行き新たな一日を伝える第一報である。

「んゝ。いい朝ねえ。」

神はそう言いつつ背伸びをしていた。傍では志郎が寢息を立てている。くすりと笑いながら神は志郎の頬しほに接吻をした。

「流石にやり過ぎちゃったかな。」

自嘲気味に神はそう言った。朝の街を眺めしているとアーレフも起きたよう階段から声が聞こえてきた。どうやら晶たちと話してるようだ。

「今日はどうされますか？」

朝食になりアーレフはそう話を切り出して言った。神しが答えて言う。

「街中散策でもいいような気がするわね。」

そう言われてミルが目を輝かせながら言う。

「なら、ミル達は三人でお買い物に行きたいです。」

「三人？」

神しがミルに尋ねた。ミルが答えて言う。

「はい。ミルとラムミアちゃん、晶さんの三人です。」

「そう。あたしはいいけど、晶さんは大丈夫なの？」

神しが尋ねていう。晶が答える。

「ああ、えっとですね。昨日話してたんです。街で、お買い物しましょうって。私が欲しいものがいくつかあったのもあるんですが、それで昨日は話が盛り上がっちゃって・・・。」

「なるほどねえ。なら、晶、これを持って行きなさい。」

そう神しは言っ、晶に手渡した。晶は手にしたものを見る。巾着袋であった。

「これは？」

晶が問い尋ねる。神しが答えて言う。

「買い物するなら資金が要るでしょ。その資金よ。」

そう言われて晶は袋を開けてみる。中には沢山の金が入っていた。吃驚しつつ晶が言う。

「あ、あの・・・神さん、これ沢山入ってるんですけど・・・。」  
「足りるでしょ？」

神はけろっとして言う。晶は苦笑しつつ言った。

「余るほどですよ。こんなになくても・・・。」

と言いかけたところで神が遮って言う。

「ちょっと考えがあつてね。とりあえずそれを持って行って買い物に行ってくれないかな。」

意図を察して晶が答える。

「あ・・・分かりました。では、ありがたく使わせてもらいますね。」

アーレフも神の考えに気づき言った。

「この町にきたときにあった、あれ、ですか。」

「流石ね、アーレフ、その通りよ。」

神はいたずら小僧のように笑みを浮かべながら答えた。

「志郎はまだ寝てるのか？」

ラミアが聞いてきた。神はぼつの悪い顔をしつつ言う。

「あゝ……。ちょっと、志郎はくたびれててね……。」

アーレフと晶がくすくす笑う。神はそれを見て言った。

「そこ！笑うな！」

「まあ、ラミアさんにはまだ分かりませんからねえ。」

アーレフは苦笑しつつ言った。ラミアはキョトンとしている。

「あ、そうそう。私は少しここの教会を見えます。」

アーレフはそう言った。神が答えて言う。

「分かったわ。あたしは志郎が起きるまでのんびりするつもり。」

「起きた後も志郎さんに無理はさせないでくださいね。」

晶が遠慮ない言い草で言う。神が顔を赤くしつつ答えた。

「ちょっと、晶まで！……。もう……。」

そう言って、全員が朝食を済ませ各人はそれぞれの目的に行動を開始した。

神は寢室に戻っていた。志郎はまだ寢息を立てている。

「やっぱりやり過ぎちゃったかな・・・あたしも基本は甘えん坊だからなあ・・・（^^ゞ。」

苦笑しつつ神しはそう言った。志郎の顔を撫なでながら言う。

「あなたを巻き込んだね。志郎はそれで良かったのかな。」

そう、永遠の旅に。自分は嬉しかったが、彼には強しいて決めさせたのではないか？そう言う不安も神しにはあった。神は志郎の横に寝た。

「昨日は本当にやりすぎたかな・・・早く起きて、志郎。」

そう呟しきながら神は志郎の傍に居た。

アーレフはアーキレストの教会に来ていた。そこで、教会が提供する出版物などを調べるのが彼の楽しみの一つだったのだ。彼なりの楽しいひと時が始まった。

ミル達は三人で商店や露店が並ぶ通りに来ていた。朝早くから多くの人で賑にわっていた。

「流石ですねえ。朝からすごい人出ですう。」

ミルが感想を述べる。晶も言う。

「ですね。さて、まずは私が買いたいものがあるのでそれから探すのでよろしいでしょうか？」

「問題ない。」

ラミアが答えて言った。晶はくすりと笑って言う。

「ありがとうございます、それでは参りましょう。」

そう言って三人は賑やかな通りを歩いていった。

今は・・・目を覚ますとすでに部屋は明るくなっていた。薄暗い頃に起きて朝の修練をするのがいつものことなのに・・・。はたと気づいて横を見ると神しのが寝息を立てていた。服装が違うから一度起きた後でまたここに来たということだろう。苦笑しつつ志郎は言った。

「神しの。」

そう言われて、神しのは目を覚ます。

「あ・・・志郎、おはよう。」

「ああ、おはよう。遅くなってしまったな。」

志郎は答えてそう言ったが、神しのが苦笑しつつ言う。

「ごめんなさい。あたしがあなたに無理させちゃった。」

神しのがそう言うのを見て志郎は神しのの頭を撫でつつ言う。



「まあ、俺もやりすぎたわけだがこれからは考えてやるさ。それに、お前が喜ぶのなら、俺にとっては大した事じゃないぞ。」

そう言われて神は顔を赤くしつつ答えた。

「もう・・・馬鹿。」

「ところで、皆はどうしたんだ？」

志郎が神に聞く。神は答えて言った。

「ミル達は三人でお買い物よ。アーレフは教会でやりたいことがあるみたいだから別行動中。」

「なるほどな。じゃあ俺たちも二人でデートと洒落込むか。」

志郎がそう提案する。神は笑みを浮かべつつ答えた。

「いいわね。どこに行く？」

「俺が行きたいところでいいのか？」

志郎がそう聞く。神が答えて言う。

「いいわよ。今日はどこに？」

「道場。」

志郎はそう答えた。神がキョトンとする。志郎が苦笑しつつ言う。

「最近、修練ばかりで自分の強さが分からなくなてな。お前相手だと自分が弱すぎるように見えてな。ちょっとばかり試したいんだよ。」  
そう言われて神は得心する。

「なるほどね。じゃあ、今日は妻として見届け役でもしましょうか。」

」

神はいたずら小僧のように笑いながら言う。志郎は苦笑しつつ答えた。

「永遠にお前が師匠になりそうだがなあ……。」  
「ふふ。」

神は微笑みつつ志郎に寄りかかった。

「では、行こう。」

志郎がそう言うと、神は頷き二人は外へいく準備を始めた。

「晶さん、買いたいものは以上でいいんですかあ？」

ミルが尋ねる。晶が答えて言う。

「あ、はい、しかし、ミルさん、そんなに荷物ばかり持たなくても私も持ちますのに。」

そう、荷物は今ミルがすべて持っているのだ、しかも軽々と。ミルが答えて言う。

「大丈夫ですよ。それにミルはこうやって何かしてるほうが好きですから。」

「そうですか……私では非力ですから申し訳ないです。」

晶がそう言うのと、ラミアが答えて言った。

「晶には、晶のいいところがある。」

「そうですね。ラミアちゃんの言うとおり。あたしにはあたしの晶さんには晶さんのいいところを磨けばいいんですし。」

ミルも賛同してそう言った。晶も納得しつつ答えて言う。

「そう・・・ですね。私も頑張ります。」

そんな時、ラミアが言った。

「警告。晶を狙ってる対象が多数。」

それを聞いてミルは、荷物に魔法を掛けて封印する。そうすればとっさの自体でも荷物に影響がないからだ。その後ミルは言った。

「ラミアちゃんは晶さんの警護御願いします。晶さんは無理をしないように。」

そう言われて二人は頷いた。三人はそうやって、やや人気が減っていく路地へ入って行った。

商業が盛んな場所ではいろんな人が通る。貧乏人も金持ちも居る。盗みなどの仕事を生業にしていると人が買い物をするときの財布の中身も、つい、気になるものである。なぜなら、それこそが彼らの飯の種、つまり資金源自体だからである。だから、一杯持ってる奴を目に付けるのはなおさらである。今回も、おっとりした女性が大

金を持っているのを仲間が目ざとく見つけた。しかも調べてみると一緒に居るのは女ばかり、一名が大女だが、言い換えればそれさえ何とかすれば、美味しい獲物に見えた。

「兄貴、奴ら路地に入って行きますぜ。」

子分がそう言う。兄貴といわれた男が答えて言う。

「数人呼んで来い。うまく追い詰めて、襲うようにしよう。」  
「了解。行ってきたやす。」

子分はそう言って、仲間に伝達に向かった。今回は美味しい獲物にありつけそうだ。男はそう考えていた。

道場は今日も賑わっていた。門下生もそうだが今日は腕試しの人物が来ているというのだ。そうなれば白熱した戦いが見れるかもしれない。そう思うと、皆が興奮するのであった。

「志郎頑張るなさいよ。」

神は、応援席に座って志郎を応援していた。相手は、この道場の師範代。もちろん、任されるくらいだから腕もある程度であろう。志郎は神の応援に腕で答えつつ、構えを入れた。二人の拳が入った、と思ったその時。師範代は鈍い音を立てながら倒れてしまった。

「んー。これは少しまずいかな。」

神はそう呟いた。周囲は騒然としてきた。このあたりでも凄腕とい

われる師範代を一瞬で倒すほどの猛者が現れたのである。騒然としないほうがおかしいであろう。志郎は苦笑しつつ、神しのの前に来た。

「本気でやるべきじゃなかったのかな。」

志郎がそう言う。神しのは呆れた顔をしつつ言った。

「幾らあたしと一緒に居るからといって力の抑制くらいしなないと・・。それに志郎、あなた気づいてないみたいだけど・・。」  
「ん？」

「あたしとの鍛錬で、以前よりかなり腕は上がってるはずよ。」

「何？ そうなのか？」

神しのに言われて、志郎は驚いて言う。

「言ってなかったけど、あたしと結婚したのも影響があるからね。」  
「な、それはどういう・・。」

そう言いかけて、志郎は振り向いた。道場の師範が出てきたのだ。

「師範代を一撃で倒されるほどの使い手、ぜひ御相手して頂きたい。」  
「

「頑張ってね、志郎。」

神しのはそう言って、志郎を突き放して言った。志郎は苦笑しつつ言う。

「了解した。御相手御願い致す。」

そうして、再び戦いの火蓋が切られようとしていた。

ミル達は細い路地を進んでいた。後ろからは数人と思われる人の足音が聞こえてくる。三人が走っていくとひととき広い空間に出た。しかし、そこは行き止まりで周囲には出れる場所が無い。

「わざわざ、行き止まりに行くとは。道でも間違えたかな？」

男はそう言ってきた。晶が答えて言う。

「そのようですね。人通りの多いほうへご案内できますか？」

そう言われて男は怪しい笑みを浮かべながら答えた。

「そうだな、案内はしてやるが、無事にできるかは答えかねるな。」

そう言ってる間に広場に男達が続々と集まってくる。十数人は居る様である。

「まあ、良くこんなに集めましたねえ……。」

ミルが呆れながら言う。男は答えて言う。

「お前が一番邪魔そうなのでな。数を揃えさせてもらったまでだ。」  
「んゝ……。残念ですが、ミルよりラミアちゃんのほうが怖い  
ですよ。あ、結界を張りますから張り終わったらラミアちゃん  
思いっきりやってくださいねえ。」

ミルが答えてそう言う。ラミアはミルの意図を理解して答えて言う。

「了解、確認後攻撃する。」

その言葉を聞いてミルは結界を張り始めた。あたりの様相が変わり始め男達は動揺する。

「な、魔術師だったのか！早く奴等を襲え！」

男は焦りつつ仲間に応じた。言われた男達は襲い掛かる。しかし、男達の手がミルに届く前に、手自体があさつての方向に飛んでいた。男は、青い髪の少女が手から光る剣を出しているのを見た。その剣が一瞬のうちに仲間の腕を切り裂いたのである。しかも、紙を切るよりも容易く。

「な・・・貴様ら何者・・・」

驚異的な状況で男は腰を落としつつそう言っていた。ラミアアが近づいてくる。

「マスターの命令、実行。」

そう言って、ラミアアは男を「始末」した。

「晶さん、もういいですよお。」

ミルに言われて、晶は目を開けた。そこには晶たち以外は誰もいなかった。そう、彼女は、ミルが結界を張ったときに目を閉じておくように言われてそうしていたのである。

「あの・・・さっきの人たちは？」

晶はそう言って、事態の結果を聞く。ラミアが答えて言った。

「ラミアが始末して、ミルが処分した。」

晶は直接的な意味は理解できなかったがラミアが何を言おうとしていたかは理解した。

「そうですか・・・分かりました。私の買い物は済みましたが皆さんはどうするのですか？」

晶はそう言って、二人に聞いた。

「そうですねえ、晶さんの買い物であたしは楽しめましたので、特にもうやりたいことはないですねえ。」

「街を少し歩きたい。」

ミルとラミアはそう答えた。くすりと晶は笑って言った。

「分かりました。では、ラミアさんの意見に沿って少し街を歩きますか。」

そう言って、晶は歩き始めた。二人がついて行く。

道場の師範は志郎に鋭い突きを繰り出した。しかし、志郎にとってそれは「鋭くない」突きだった。喚声上がる中で志郎はかわす。その後、師範は攻撃をやめた。



「？」

志郎は分からずに立っていた。師範が言う。

「これ以上は無意味だな。私の負けだ。」

周囲の観客も大半は何が起こったか理解できなかった。師範の側近の弟子の一人が言う。

「師範は拳を出してお分かりになったのですね。彼が師範よりも強いことに。」

そう、強さを持つ人間は、ある程度、相手の強さも理解できるようになるのである。言い換えるなら分からない人間は例え強くても、真の強さとは言えないのである。

「御主のような者に出会えたことを私は誇りに思うぞ。」

師範はそう志郎に言った。志郎は、戸惑っていたが神しのを見た後で、師範に向き直り握手を交わした。その後、道場から帰る途中。

「結局、分からずじまいだったなあ・・・」

志郎がぼやきながら言う。神しのがそれに答えて言った。

「何が分からないの？」

「俺の強さだよ。師範は俺の方が強いといったけどいまいち分からないし。」

神は志郎がそう言うのを聞いてくすくす笑った。

「な、何がおかしいんだ、神。」

志郎が戸惑いながら言う。神は答えて言った。

「やはり説明しないといけないわね。」

「どうということだ？」

志郎は訳が分からないといった様子で神に問い尋ねた。神が答えて言う。

「志郎はすでに人の域を超え始めてるって事よ。」

「はっ？」

理解できずに志郎は素っ頓狂な返事をしてしまった。苦笑しつつ神が続けて言う。

「まあ、すぐ理解はできないでしょうけどね。実は、あたしが一緒に稽古してる間にあたしの「力」があなたにも入っていたのよ。竜族と戦ったときのあれもそうだしね。」

そう言われて、志郎は竜族と戦ったときのあれを思い起こしていた。

「あの、気を飛ばすものも「力」の一端だど？」

「ええ。それも、あたし独自のものでなくあなたのアレンジが入った独特のね。言うなればあたしの「力」を元にあなたが創り上げた新しい「力」ってところかしら。」

神はそう説明する。更に加えて言った。

「更にね、あたしと結婚したのが大きいのよ。」

「お前との結婚が？どうしてそうなる。」

「忘れたの？あたしは一応「神」なのよ？」

「忘れるわけがないさ。」

「なら、人のままでどうやって一生死なずについていくつもり？」

「あ……。」

神しにそう言われて合点がいく。つまり一緒になると宣言した時点で「人」をやめねばならなかったのだ。弱きとはいえ「神」に為らねば為らなかったのである。

「つまり、俺も弱いとは言え「神」だと？」

「簡単に言うとななるわね。だから、普通の人相手では、まるつきり相手にはならないのよ。そうね、身近で相手になるのはミルやラミアあたりね。」

「そう言うことか……では、そのうち、俺も「力」を使えるようになるのかな。」

「そうね、急いで覚えたいのなら、すぐ「渡す」こともできるけど、あなたのことから自分で捜し求めたいんじゃないのかな。」

神しにそう言われて志郎は苦笑した。

「確かにその通りだな。俺ならそう言いそうだ。まあ、分かってスツとしたよ。そう言うことなら仕方がないな。今後はミルやラミアに頼むでしょう。」

志郎がそう言うので、神しはややはぶてて言った。

「あら。あたしは無視するのね。」

そう言われて、志郎はあわてて言う。

「いや、そうじゃなくて・・・お前相手では俺は勝てないだろう？」  
「それでもあたしは相手して欲しいの！」

神しののその言い草を見て、志郎はつい笑いながら言った。

「分かった分かった。神しのにも相手をしてもらうさ。まったく、甘えだすときりが無いなあ、お前は。」

そう言われて神しのは顔を赤くしながら志郎に寄り添った。

「とりあえず、ゆっくり歩きながら宿に向かうか。」

志郎がそう言った。神しのは頷いて答えた。

風が吹き抜けていた。

## 神（しの）の結婚式（後書き）

街の人々に祝福され、幸せに結婚式を終えた神<sup>しの</sup>。彼女達は暫く此処で逗留する事になる。其処で出会う人々、出来事とは・・・。  
次回「冒険者」をお楽しみに。  
貴方にも良い風が吹きますように。

## 冒険者（前書き）

結婚式も無事に終わり一旦街に滞在する事に為った神達<sup>しの</sup>。  
其処で彼女達が出会う出来事とは・・・。

## 冒険者

小説 風の吹くままに

### 第十章 冒険者

ラミューアは街を歩いていて。それなりに人通りが多い通りを歩いていたが、ふと、ある建物が気になり、そこに入ってしまった。それを見つつミルが言った。

「最近ラミューアちゃんは積極的ですねえ。」

晶はそれを聞いて答えて言った。

「確かにそうですね。でも、いい傾向じゃないですか。お話に聞いたところではラミューアさんは完全な神<sup>し</sup>さんの作品ではないと伺いましたけど。」

「そうですねえ、魔道具を基本に創られてますからねえ。でも、そのうち完全な意味でラミューアちゃんになりますよ。」

晶の質問にミルはそう、意味深に答えた。晶はその意味がよくはわからなかったが、

「はあ、とにかく見守ってれば良いと言う事でしょうか。」

と、答えた。ミルが微笑みながら言う。

「そうですねえ、あ、あたし達も少し離れてラミューアちゃんについていきましょーか。」

そう言いながらミルはラミアが入った建物に入っていった。晶もついて入っていく。

そこは、ただ眺めると普通の酒場にも見えた。しかし、中に居る人たちが一般人には見えなかった。ラミアは初老の男性がカウンタ―に座ってるのを見て隣に腰掛けた。ラミアを見て初老の男性が言う。

「おやおや、こんな場所に可愛いお嬢さんが珍しい。お前さんも冒険者かな？」

そう言われて、ラミアは、自分のこととは思えずその男性を見た。そして言う。

「私のことか？」

ラミアがそう答えて男性は頷く。ラミアは少し考えてから答えて言った。

「冒険者とは何か？」

ラミアがそう言ったので、酒場では大きな笑いが起こった。ラミアは何が起きたか理解できずにきょとんと見ていた。男性が言う。

「なんと・・・そう言うことも知らずにここに足を運ばれたのか。」



お前さんはどういう身分の人物なんだろうな。」

「私か？私はマスターの剣だ。」

ラミアは素直にそう答える。その答えを聞き男性は多少険しい顔をしながら言った。

「マスター。剣。……お前さん、魔法生命体なのかな。」

「詳しくは知らない。私はマスターにより創られた。そして剣としての使命が与えられた。今は、自由に過ごせといわれてるのでこうやって話している。」

ラミアはそう説明する。機械的だが、分かりやすい説明をするので男性は苦笑していた。

「そうか・・・冒険者についてだったな。冒険者とは、普通の人では行わない、戦いや冒険を行う、いろいろな依頼をこなす「万屋」のような商売だな。やる事柄が多岐にわたるので一言で説明するのは難しいかも知れぬな。」

男性はそう言った。ラミアが答えて言う。

「なるほど、記憶する。剣志郎のような存在を指して言うのだろうか。」

ラミアが志郎の名前を出したので酒場はどよめいた。男性が言う。

「その名をなぜ知っている。彼は冒険者でも一流と言われた男。最近行方が知れてないらしいが。御主は知っているのか？」

「志郎はマスターと一緒に行動しているはず。」

ラミューアはそう答えた。男性は驚いて言う。

「ほう。彼が他の人物と一緒にな……。ぜひ会ってみたいものだ。」

「分かった。話をして今度つれてくる。」

ラミューアがそっけなく答える。苦笑しつつ男性が言った。

「そうか。ありがとう。ところで嬢さんお名前はなんと言うのかな？ ああ……。私はデイルサイヴ、もう老齡だが魔法使いという立場のものだよ。」

「私か。私はラミューアという。」

ラミューアが答える。その答えに感心しつつ男性が言う。

「ラミューア（刃となる者）か。良い名を与えてもらったな。」

そう言われてラミューアは素直に頷いた。男性はそれを見た後で続けて言った。

「で、何が知りたいのかな？」

そう言って、デイルサイヴはラミューアと会話を始めた。

ミルと晶は少し離れたテーブルでラミューアを見ていた。

「本当にラミアちゃんは勉強熱心ですねえ。」

ミルが感心しつつ言う。晶が苦笑しながら言った。

「見るもの聞くものが新鮮みたいだからかもですね。」

その意見にミルも頷く。二人が座ってる席にドワーフが一人やってきた。

「お嬢さん方、ご一緒してもよろしいかな？」

二人は頷いた。ドワーフは二人の向かい側に腰を掛ける。そして言った。

「どうして今日はここに来なされたのかな？ここは冒険者ギルドなんぢゃよ。」

そう言われて、晶は納得しつつ言った。

「ああ、なるほど。それでいろんな種族の方が一同にいらっしゃるのですね。」

そう、ここにはいろいろな種族のものが居た。きわめて珍しいものでは妖精族や竜族の亜種と思われるものまで居る。ミルが感心しながら言った。

「ほえー。ラミアちゃんはだから興味を持ったのですかねえ。」

「私には分かりかねますけど。でも楽しく話されてるみたいですよ。」

晶はラミアの様子を見ながらそう言った。ラミアはデイルサイヴといろいろ会話をしているようだった。ドワーフはラミアのほうを見た後でミル達のほうに向き直り言った。

「なるほど、あのお嬢ちゃんと一緒なのか。ところでな、わしはラグレムと言うんぢやが今は暇でう。良ければ話し相手になってもえんかの？」

そう言いつつ、酒場のマスターにエールを注文していた。苦笑しつつ晶が言う。

「長時間でなくて良ければお付き合いいたしますよ。」

「あ、ミルも大丈夫。」

ミルがあわせるように言う。そうしてこちら側でも談笑が始まった。

志郎は周囲を歩いてる人々に目が行っていた。人間以外にも様々な種族が歩いている。ぱつと見ただけでもドワーフ、エルフなどが居た。人間とは全く違う種族としても竜族の亜種、妖精族や小人族など、多岐に渡る。ふと、冒険者時代を思い起こしていた。

「どうしたの、志郎？」

神が、志郎の様子に疑問に思いそう言った。志郎が苦笑しつつ言う。

「何、ちょっと昔のことを思い出してな。」

「へえ。聞かせてくれるの？」

神が興味深そうに言う。志郎は苦笑しながら言う。

「あまり自慢できる話じゃないが・・・そうだな、そこで休みながら話すか。」

そう言って、日よけに立っている樹を指差した。神は頷き、二人はそこに座る。

「そうだな・・・どこから話すのがいいかな。」

そう言って、志郎は話し始めた。

「なるほど。楽しそうだな。」

デイルサイヴから話を聞きながらラミアはそう言った。そしてこう言う。

「私にもできるのかな。」

そう言われて、デイルサイヴは驚きつつ言った。

「御主、冒険者をやりたいのかな？」

「そうだな・・・やれるのならやってみたい気もする。」

そうラミアは返事をした。ラミアの言葉を聞いてデイルサイヴは感心しつつ言った。

「まことに不思議だな。魔法生命体とは思えないほどの反応だ。お前のマスターとやらにも会ってみたいものだ。」

デイルサイヴがそう言ったのでラミアが答えて言う。

「分かった。マスターに聞いてみる。」

そう言って二人は会話を続けた。

「まあ、そんな感じでぢゃな。わしが突っ込んでいったのう。奴に叩き込んだわけぢゃよ。」

ラグレムは過去の自慢話に花が咲いていた。苦笑しつつ晶が言う。

「この手の話はなかなか終わりませんからねえ・・・」

ミルが答えて言う。

「大丈夫ですよ。いざと言う時にはラグレムさんに「寝て」もらいます。」

そう言われて晶は苦笑した。ラグレムは、エールを飲みつつ「話を続けていた。」

「ふうん。」

志郎の話を聞きつつ神しんがそう言った。志郎が苦笑しつつ言う。

「どうした、面白くないか？」

「いや、そうじゃなくてさ。」

「ん？」

「今も大して変わらない生活してるじゃない。」

「ああ、確かにな。」

そう、依頼されてやってるわけでなく、自分たちから問題に突っ込んで、だが。ふと、神しんは考えて言った。

「ならさ。あたし達も「それ」をやりましょうか。」

「え？」

「だから冒険者稼業もついでにやろうってこと。志郎は元々やってたんなら顔も聞くでしょ？」

神しんにそう言われて、志郎は苦笑しつつ言う。

「まあ、そりゃあ、顔は聞くが……。」

「何か問題でも？」

「問題というか……お前をどう説明していいやら。」

「あなたの妻でいいじゃない。」

「そう言う問題なのか？」

「まさか全て言うわけにも行かないでしょ？」

「そりゃそうだがな・・・。」

「一箇所に留まらなければ大丈夫でしょうしね。」

「そうだな。」

志郎がそう言ったのを見て神は結論付けて言う。

「なら今日は帰って、皆で話し合いましょう。アーレフたちの賛同も得たいしね。」

「ああ、そうだな。」

そう言って、二人は立ち上がり、宿を取っている酒場に向かって行った。

「楽しかった。できるなら、また話がしたい。」

ラミアはデイルサイヴにそう言った。会話が一段落つきデイルサイヴもにこやかに笑顔をしながら答えて言った。

「そうだな。私も楽しませてもらったよ。できればまた話がしたいものだ。」

そう言ってデイルサイヴは握手のための手を出した。ラミアが答えて手を差し出す。二人は固く握手を交わした。



「そろそろ「寝て」もらいますかねえ。」

ミルはそう言っていた。晶も頷く。ラグレムはまだ延々と「話」を続けていた。と、突然倒れこむ。晶がいう。

「あらあら、ラグレムさんは寝入って居まりましたか。ご主人、御代はここに置いておきますからラグレムさんの分も取って置いてくださいね。」

そう言いつつ、晶は十分すぎるお金を置いてそこを後にした。

神が帰るとアーレフがすでに宿に戻っていた。

「あ、お帰りなさい。デートは楽しめましたか？」

アーレフがそう言った。神は顔を赤らめつつ答えた。

「ま、まあね。アーレフこそ楽しめたのかしら？」

「はい。貴重な書物をいろいろ拝見させてもらえましたよ。」

アーレフは嬉しそうに言った。神が答えて言う。

「それは良かったわ。そうそう、相談があるんだけど。」

そう言いつつ、今までの経緯を含めて神はアーレフに話し始めた。

「ただいまですう。」

「今、帰った。」

「ただいま戻りました。」

三人は、そうやって帰還を報告した。神が答えて言う。

「お帰り。三人も楽しめたかな？」

「あ、はい。いろいろ楽しませさせて頂きました。」

昴がそう答える。ラミアが神の前に来て言う。

「マスター、御願がある。」

「あら、ラミアが御願って珍しいわね。何かしら？」

「志郎と一緒に冒険者ギルドという場所に行ってもらいたい。」

ラミアの台詞にきょんとして神が聞いていた。そしてしばらくして笑いながら答えて言う。

「あは。これって偶然なのかしら？ね、志郎。」

神はそう志郎に賛同を求めて言う。志郎が言った。

「全くだな。面白い一致だな。」

アーレフは微笑みながら見ている。ラミュアは何のことか分からずにきょとんとしている。神しのかみが笑い終えたと話を続けていった。

「ああ、ごめんねラミュア。あたし達もそこに行こうって、さっき話してたところなのよ。それに関して皆に提案があるから聞いてもらえる？」

皆は頷き、神しのかみの話を聞くことにした。

「という風にしたい訳なの。どうかしら？」

神しのかみはこれまでの経緯と、これからやりたいことを皆に提案した。ミルが答えて言う。

「いいんじゃないですかねえ。あたしはマスターの意見に賛成です。(それに反対しても何か言われそうですし・・・)」

「ミル、何か言った？」

「いゝえゝなにも。」

アーレフが苦笑しつつ言った。

「私も問題ないと思いますね。場所を固定せずに移動しながらであれば冒険者としても問題ないでしょうし。ただ、そのうち伝説化しそうですけどね。」

晶も意見に同意しつつ言う。

「そうですね、神<sup>しの</sup>さんたちは特別ですからあまり派手な活動は控えたほうがいいかもしれないですね。」

「派手、って・・・そんなにあたし派手かなあ・・・。」

神<sup>しの</sup>が答えて言う、ラミユアが付け加えて言う。

「マスター、自覚がない。」

志郎が苦笑しながら言う。

「そりゃ、無理もないさ。昨日今日で「神」になったんだしな。かく言う俺もだから、どうセーブしてよいのやら・・・。まあ、なるようになるしかないんじゃないか？」

「なんだか、いいように言われてるけど、皆同意って事でいいのかしら？」

神<sup>しの</sup>がまとめて言った。全員が頷いて答える。神<sup>しの</sup>がそれを見て言った。

「分かったわ。では明日行きましょうか。今日は、この後は自由にしましょう。とはいってもあまり日が暮れるまで時間がないけどね。」

そう言って解散した。

「んじゃ、俺たちはどうする？」

志郎が神しに聞く。神しが答えて言う。

「そうね。今度はあたしをお願い聞いてもらえる？」

「ん？何だ？」

神しは志郎がそう言ったのを聞いて顔を赤くしつつ言った。

「これから一緒になって欲しいな。」

「へ？」

志郎が分らずに聞きなおしてしまう。神しは真っ赤になりながら言う。

「だから！・・・一緒に寝てって・・・」

そう言われて志郎は、苦笑しつつ言った。

「お前・・・まだ日は高いのに・・・まあいいか。」

そう言って志郎は神しを抱き寄せてベットに入った。

朝。始まりは清しく感じると一日がいい方向に進むように思えてくる。まあ、その場の雰囲気きふきに流されているとも言えるがそこはそれ、都合の良い方への解釈であろう。神しもそう感じながら背伸びし

ていた。

「今日もいい朝ね。」

「ああ、そうだな。」

志郎も一緒に起きていた。そして二人は、いつものように修練を始めた。

「今朝もですか。相変わらずお二人は熱心ですねえ。」

アーレフは二人が酒場の前で修練をしている様子を眺めていた。朝早く起きている街の人たちも立ち止まって見ている。言い換えるならそれ程のものなのである。

「おはようございます。」

晶が起き上がってきて挨拶をする。アーレフが答えて言う。

「ああ、晶さん。おはようございます。階下は相変わらずですよ。」

くすりと笑いながらアーレフは階下を指し示す。そこでは激しく神しのかみと志郎が修練をしていた。その様子を晶も見te微笑みながら言った。

「本当に楽しんでいらっしやいますね。」

「そうですね。神しのかみさんたちはそこが素晴らしいんでしょうね。」

アーレフがそう答えるのを見て、晶は頷いた。

「朝食、始めるらしい。二人も降りる。」

ラミアがやってきてそう言った。アーレフはくすりと笑って晶に言った。

「行きましょうか。」

晶は頷いて一緒に階下に降りていった。

「ふう。久々にすっきりしたわ。」

神がそう言いつつ座席に着いた。志郎がややくたびれた様子で座りながら言う。

「神・・・少しは加減ってものをだな・・・」

「何のことかしら？」

神がとぼけて言う。志郎は呟きながら言う。

「人生の選択を間違えたかな・・・」

そんなやり取りを見てアーレフと晶は苦笑しながら見ていた。ラミアが酒場の主人から手渡された食事を並べていく。それを見つつ晶が言った。

「さ、まずは朝食にしましょう。」

そう言われて、皆は食事を始めた。

冒険者ギルド。そこは要するに冒険者のための寄り合い所帯のようなものである。冒険者という稼業がその性質上まとめる存在が無いと悪い方向に作用しやすいために自立組織として生まれたのが発端である。大抵の中程度の街以上に存在し、街の人の些細な問題から竜族と対峙する様な大冒険までいろいろな案件を扱う組織であった。基本的には街単位でのコミュニティだが情報提供の面では各ギルドは比較的緊密に連絡を取り合っていた。アーキレストのギルドも比較的中程度のギルドでカウンターを兼ねる酒場では大勢の冒険者や依頼者が談笑していた。

「ここだ。」

ラミアはそう言いつつドアを開けて入ってきた。ラミアの姿を見てデイルサイヴが言う。

「ラミアじゃないか。今日はどうした。」

そう言われてラミアが答えて言う。

「今日はマスターたちも来た。」

神たちは中に入っていた。志郎の姿を見て一部どよめきが起こる。

「あいつは、剣志郎じゃないか？」

「姿形は奴だな。だが以前と違って見えるが。」



そんな風にいろいろ言われていた。神しのが志郎に言う。

「そういえば志郎は冒険者だったわね。いろいろ噂が立つほうだったのね。」

苦笑しつつ志郎が答えて言った。

「一応一流扱いだったのでね。お前と出会ってから三流に為りたくなつたよ。」

アーレフがそのやり取りを見て微笑む。ラミアが神しのにデイルサイヴを紹介しつつ言った。

「マスター、彼が昨日話したデイルサイヴ。こっちは私のマスター。」

「あかむの杜神よ。よろしくね。」

神しのはそう言って手を差し出した。デイルサイヴは手を差し出し、握手をする。

「よろしく。こうも簡単につれてくるとは、吃驚したな。」

デイルサイヴはそう言った。神しのが答えて言う。

「単に意見が一致しただけよ。あたし達も冒険者稼業をやってみようかとね。」

「なんと・・・そう言うことか。」

「手続きはどうすればいいのかしら?」

神しがそう言ったので、デイルサイヴはギルドマスターを指差して言った。

「彼がここのギルドマスターだ。まずは彼に聞くがいい。」

「ありがとう。」

神しはそう返事をして、ギルドマスターの元に行った。

「ほう。いきなり六人も登録とは珍しいな。」

ギルドマスターはそう言った。神しは答えて言う。

「あら？ チームとか組めば六人って普通じゃない？」

「まあそうだが、ここは大きな街じゃないからな。比較的少人数のグループが多いのさ。」

「なるほどね。あ、そうそう、六人ワンセットでなくても依頼はこなせるからその点も含めておいて。」

「ほう、相当腕に自信があるようだな。」

「まあね。手続きはこれでいいのかしら？」

「ああ、問題ない。依頼関連はその掲示板にいろいろ貼ってあるから見てみるといいさ。」

「ありがとう。」

神しは手続きを済ませて皆が居るテーブルに戻ってきた。

「お帰りなさい。手続きは終了ですか？」

アーレフが言う。神が答えて言う。

「ええ。依頼関連は掲示板に張ってあるそうよ。興味があるのからやってみるのもいいかもしれないわね。六人全員でやる必要はないから必要であれば何人かに分かれましょう。」

「わかった。」

「わかりましたあ。」

「了解。」

「はい。」

それぞれが返答する。志郎が言った。

「で、とりあえずはどうするのかな。」

「そうね・・・ラミュア、あなたは何がしたい？」

神はそう言ってラミュアに聞いた。ラミュアはしばらく考えてから言った。

「ディルサイヴと仕事をしてみたい。」

「なるほど。彼に興味を持ったのね。なら、そうね。アーレフ、晶、一緒について行ってあげていいかしら？」

神はそう言ってアーレフと晶の帯同を求めた。二人は答えて言う。

「分かりました。」

「ええ、いいですよ。」

それを聞き、神はラミュアに言う。

「じゃあラミア、ディルサイヴと一緒にしてもらえるか御願いでみなさい。」

「分かった。」

ラミアはそう言ってディルサイヴの元に行った。

「どうなるか楽しみな組み合わせだな。」

志郎がそう言う。神は答えて言った。

「多分この経験でラミアは成長するわね。」

「そうなのか？」

志郎が問いつつ言う。神が答える。

「多分、ね。」

ミルが言った。

「マスター、あたし達はどうしましょう？」

「好きなようにすればいいわ。何もしないのも方法よ。」

「え？ そうなんですか？」

「別に掲示板にあるだけが依頼じゃないからね。」

「ああ、なるほどお。」

神に諭され、ミルが納得しながら言った。志郎が補完しながら言う。

「それに、依頼者がこの場に来る場合もあるし、街中で歩いていて事件に遭遇する場合もあるからな、以前がそうだっただろう？」

「ああ、確かに。そう言うのを処理するのも冒険者の仕事に入れ

ていいんですね。」

ミルが答えて言った。神が苦笑しながら言う。

「正確には、仕事にはならないけどね。依頼を受けた時点が本来は仕事だから。」

「なるほど。」

頷きながらミルは言った。神が言う。

「さて、あたしも考えない状態でここに来たし。どうしようかね。」

そう神が言っていると一人の身体つきのいい戦士がやってきた。

「剣志郎殿とお見受けするが？」

戦士は、そう志郎に言った。志郎は答えて言う。

「ああ、以前はそう呼ばれていたな。今は杜志郎あかなしという。俺に何か用か？」

「できるならば、裏の修練場にて対一の試合を申し込みたい。」

戦士は志郎にそう言った。志郎は神に目を向ける。神は頷いた。志郎は答えて言う。

「了解した。すぐ仕度をしよう。」

それを聞いていたほかの連中が騒ぎ始める。

「裏で試合が始まるぞ！」

そう言って裏に続々と人が行き始めた。苦笑しつつ神しんが言う。

「刺激が少ないのか、こういうことには皆目がないわね。」

そう言いながら神しんは席を立ち上がり志郎について行った。

戦士は静かに立っていた。ただ立っているわけではない「気」を練りそれを十分に発揮できるように精錬しているのである。その姿を見て志郎は言った。

「いい戦士だな。」

神しんも同調して言う。

「そうね、まだまだ伸びそうね彼女は。」

神しんの言い草に志郎が焦る。

「彼女?! 奴は女なのか?」

苦笑しつつ、神しんが言う。

「なあに、気がつかなかったの? 女性よあの戦士は。」

志郎は戦士を見る。全身鎧を着ており顔もフルフェイスの兜で完全に覆っている。目に見えるがそれだけでは性別は分らない。しかも非常に体格はよく、知らないものが見れば男と思うであろう。志郎は苦笑しつつ言った。

「俺にはわからなかったな。」

「彼女は無駄に胸がないから理想的なのよ、戦士としてね。逆にそれが彼女のコンプレックスにもなってるけどね。」

神しがそう説明する。苦笑しつつ志郎が言った。

「こういうときはお前がうらやましく思うよ。」

微笑みながら神しが言う。

「なーに。心配しなくても、志郎もそのうち分かるわよ。」

「そうか……。では行ってくる。」

志郎はそう答えて戦士と対峙しに向かった。二人は構えを取る。戦士は手にした刃引きの剣を構える。刃が無いとはいえもろに当たれば大怪我は必須である。志郎は拳を構えた。はたから見れば志郎が圧倒的に不利に見えた。

「どう見ても志郎殿のほうが不利に見えるんだが……」

「しかし、あの志郎殿だぞ？今までだって、試合で負けたことは無いじゃないか。」

観客になった冒険者たちはそう語る。

「へえ、志郎ってかなり強かったのね。」

神しがつい、そう言ってしまふ。それを聞いた冒険者の一人が言う。

「お嬢さん。知らなかったんですか？ 志郎さんは冒険者仲間の間でも結構語り継がれてる方なんですよ。」

「なるほどねえ。志郎があたしと戦うのを躊躇う訳だわ。」

神しのその言葉の意味はその冒険者には分からなかった。神しのほうが強いなど、理解できなかったからである。神しが叫びながら言う。

「志郎！ かつこ悪い真似するんじゃないわよ。」

それに答えて志郎が片手をあげる。それを見て戦士が動いた。

「シュッ！」

すばやい動きで剣が志郎の居る場所に突き刺さる。下手をすれば串刺しである。刃が無いとはいえ金属の武器だ、当たればただではすまない。しかし、志郎はすでにそこにはいなかった。戦士の左側に回る。つまり右手方向戦士にとって利き手側である。はたから見ればそれは不利な移動に見えた。

「なぜ左に？ あれでは不利になる。」

観客の一人がそう言う。神しは志郎の意図を理解した。

「あの馬鹿……。」

神しはついそう言っていた。戦士は右手のみに剣を持ち直し横に薙ぐ。志郎をかすめるか、というところで武器は薙いで行く。志郎はその



まま後方には回らず戦士の前方に進路を変える。武器が右に移動したために戦士は状態が不利になった。そこで戦士は自分の身体を回転させ剣に対して左側に回りこむ。そうやって剣を自分に巻き上げて逆に剣を回転させた。志郎はそれを見て、剣が来ることを読み取り後方に下がる。そして少しずつ「気」を集め始めた。戦士が逆回転で剣を薙いできたので志郎は離れることになった。その様子を見て観客は喚声を上げる。二人とも優れた戦闘を続けているからである。しばらくそうやってこう着状態が続いた後で志郎は戦士の懐に入って「気」を叩きつけた。その反動で戦士は飛ばされ地面に倒れてしまう。それにより勝負はついた。周囲では喚声上がる。

「ふう。終わったぞ。」

志郎は神にそう言った。神ははぶてながら言う。

「馬鹿。」

志郎は面食らって言った。

「な、なんだよいきなり。どうしたってんだ。」

「こんなことなら、彼女のこと説明しなきゃ良かったわ。」

神が不平たらたらで言う。志郎が戸惑いながら言う。

「どうしたんだ？もしかして、俺が彼女にしたことか？」

「分かっているじゃない。」

「いや、神がなぜ怒ってるかがわからん。」

「本当に馬鹿ね。ああいう手の抜き方をされて、相手が喜ぶと思うの？」

「えっ？」

神の意図が分からず志郎は間抜けな返事をする。神が続けて言った。

「志郎。あたしが手を抜いてたときも不満があったでしょ？」

「あ、ああ。」

「なら、彼女もそれなりの腕の持ち主。あなたが、あえて手を抜く動作をしてるのが分かるのなら、どう思うかしら。」

神にそう言われて志郎は得心した。答えて言う。

「そ、そうだな・・・確かに彼女のプライドを傷つけかねないな。俺の配慮不足だった。」

「全くよ。他の一般人にはほとんど理解できてないみたいだけどね。彼女並みの人間には理解してるんじゃないかしら。今度からは気をつけてね。」

「ああ、そうするよ。」

二人がそう話していると戦士が起き上がってきた。そして志郎のほうに進んでくる。

「志郎殿、ありがとう。私ではまるで相手にならなかった。ぜひ今後とも、機会があればお相手を願いたい。」

戦士はそう言った。志郎は戸惑いつつ答えて言った。

「あ、ああ。俺でよければ。」

神は苦笑しつつ二人を見ていた。

「あの娘もいい娘なのね。」

神しはそう言った。

「私と？本気で言ってるのかね？」

ディルサイヴはラミアにそう言った。ラミアは頷く。ディルサイヴはため息混じりに言う。

「この老人と一緒に。そなたも物好きだな。」  
「だめか？」

ラミアが問う。ディルサイヴは苦笑しつつ答える。

「いや。わざわざのお誘い喜んで引き受けよう。して、何をするのかな。」

「まだ分からない。それも聞きたくて、ディルサイヴのところに来た。」

ラミアが率直に言う。微笑みながらディルサイヴは言った。

「そうか、ならこれから探すでしょう。後ろのお二方もそれでいいですか？」

ディルサイヴはアーレフと晶を見ながらそう言った。二人は頷いて答えた。

ミルは一人で酒場の中に居た。そこに一人語りかけてくる。

「あの〜。」

ミルは自分に語られると気づかずしばらくとしていた。その人物は再びミルに語りかけた。

「あの〜。その大きなお姉さん。」

そう言われて、ミルは自分に語りかけられてることに気づいた。

「あ、あたしですかあ？」

ミルが言う。それに応えて語りかけた人物が答えた。

「はい。冒険者の方なんですよね？」

ミルはその人物を見た。純白のドレスを着て長いブロンドの髪。美しい、とまでは行かないにしても清楚で品のある女性だった。ミルは答えて言う。

「そうですね〜。冒険者ですよ〜。」

自分ではないかのような台詞に少々戸惑いもあったが女性は肯定の答えを得たので話し始める。

「依頼を御願いたいたのですが・・・」

ミルは驚いて言う。

「あたしでいいんですか？」

女性は頷きつつ答えた。

「あなたのようなしっかりした女性に御願いたいたんです。」

しっかり、といわれてミルは少々気をよくした。ミルは問いながら言った。

「どういうご用件ですか？あたしにできるものならいいのですけど。」

ここで神しが居れば、あなたにできない依頼なんてあるのかしら？とツツコミが来るであろう。神しは裏手に居るので今はすぐ言えない状態ではあるが。

「私の護衛を御願いたいたのです・・・その・・・詳しいことは別室で二人だけでお話したいのですが・・・。」

女性はそう言って顔を赤らめながら言った。どうやらあまり他人には知られたくない内容らしい。ミルはそれを悟り、ギルドマスターに言った。

「ギルドマスター、お部屋を一つ借りてもいいですか？依頼人の方とお話がしたいのです。」

ギルドマスターはミルにある部屋を指差した。ミルは感謝しつつ女性をそこに案内した。

神と志郎は模擬戦を終えて酒場に戻ってきた。

「あら、皆各自行動したのね。」

神が言う。志郎も答えて言った。

「そのようだな。ミルも何かあったようだ。」

神がため息一つ出して言った。

「あたしもたまにはやり合いたいなあ・・・。」

苦笑しつつ志郎が言う。

「誰が相手するんだよ・・・。」

「それを言わないで・・・。」

はぶてつつ神が答えた。その神を見て志郎は、可愛いな、と思った。

「しかし、まじめにどうするかな。都合のいい依頼なんぞそう簡単には無いなあ・・・。」

志郎がそう言う。神も答えて言った。

「そうね、別にここでのんびり過ごすのも一つの方法じゃない？」

そう言われて志郎も諦め顔で言った。

「まあ、そうだな。よし。マスター一杯くれ。」

そう言って早速注文した。呆れながら神しが言う。

「相変わらずねえ・・・。」

答えて志郎が言った。

「これだけはやめれないさ。」

「いろいろあるがいいものはあったかな？」

デイルサイヴがラミアに尋ねながら言う。ラミアは揭示される依頼を次々と見ていた。その様子を微笑ましくアーレフと晶が見ている。その様子を見ながらデイルサイヴが言った。

「そなたら二人はまるでラミアの両親のようだな。」

そう言われてアーレフが答える。

「そう見えますか？」

「ああ。」

「それは嬉しいですね。私たちも彼女がどう学ぶか楽しみなんですよ。」

「なるほどな。では私も張り切って教師役をやらせてもらおうとしよう。」

ディルサイヴがそう言ったのでアーレフは微笑みながら答えて言った。

「ぜひ御願います。彼女が他人に興味を持つのはあなたが初めてですからね。」

ラミアは依頼を見ていたが一つの依頼に目を留めた。そしてそれを示して言う。

「これがいい。」

そう言われてラミアが示した依頼にディルサイヴが目を通した。そして言う。

「ほう・・・魔道具の探索か。面白いものに興味を持つな。」

彼がそう言ったのを聞いてアーレフと晶はお互いに目を合わせた。ディルサイヴは続けて言う。

「依頼者は、ほう、ここの有力者の一人豪商モンテイオーネ家か。これは難事件かもしれないぞ?」

ラミアが答えて言う。



「私では無理か？」

それに答えてデイルサイヴが言う。

「いや、私も居るし、お前一人ではないからな。だが、時間がかかるかも知れぬ。このことをお前のマスターに報告しておいたほうがいいと思うぞ。」

そう言われてラミアは肯定の仕草をしながら答えた。

「分かった、マスターに報告しておく。」

しばらく目を瞑った後ラミアは言った。

「報告しておいた。マスターもやって来いと言ってくれた。」

ラミアがそう言ったのを聞いてデイルサイヴは驚きつつ言った。

「御主、精神感応で報告できるのか。」

ラミアは答えて言う。

「言われた内容がうまく理解できないが、恐らくデイルサイヴの言ったことのようなだ。」

苦笑しつつデイルサイヴが言う。

「能力と知識のギャップがすさまじいな。確かにこれは教育のし甲斐はありそうだ。さて、まずは依頼主に会いに行くとするか。」

そう言われて、皆は頷いた。

ミルは女性と一緒に部屋に入り扉を閉じた。その後、沈黙の魔法を周囲に掛ける。これで外からはこの部屋の音は基本的に聞こえない。

「これでよしと。もう話しても大丈夫ですよ。音は外に漏れないようにしましたから。」

ミルがそう言ったのを聞いて女性は驚きつつ言う。

「魔法も使われるんですね・・・素晴らしいです。」

ミルは頭をかきつつ言った。

「たいした物は使えませんよ。攻撃ならラミアちゃんとかのほうが役立ちますし。」

女性はミルが遠慮深く言ってるのを見てくすりと笑って言った。

「遠慮深いんですね。あ、申し遅れました。私はエオーネこの街に住む街娘です。今回大好きな殿方との結婚が決まりました。」

それを聞き、ミルは答えて言う。

「あ、ご丁寧にどうもです。あたしはミルⅡフェリシア、マスターの使い魔をしています。あ、そうだ、ご結婚おめでとうござい

ます」

エオーネはミルの台詞に疑問を思っただけで聞いた。

「あの、ミルさん。使い魔って何でしょうか？」

「あゝ・・・詳しく言うことややこしくなるので省いちゃいますけど。マスターが創造した特殊生命体のことです」。

ミルは究極的に省いて説明した。神しんが居れば、そんなのは説明じゃない、と突っ込まれるであろう。エオーネは理解はできなかったようだが納得しつつ言った。

「はあ・・・私には難しい内容なのでさっぱりですが・・・マスターと呼ばれる方はすごい方なんですよ。」

「そうですね・・・すごいというか・・・一緒に居て楽しいですよ」。

ミルは正直に言う。逆にそれがエオーネを混乱させることになるわけだが。混乱しつつもエオーネは依頼の内容を話し始めた。

「あ・・・と、まあ、その話は置いておいて。依頼のほうを進めますね。私はこれから結婚をするわけなんですけど実は私に言い寄って邪魔をしてくる者が居るんです。」

「それはいいけませんねえ。」

ミルが言う。エオーネは頷きつつ話を続けた。

「それで、式まで後二週間あまりなのですがその間、私の護衛を御願いしたいのです。もしかするとあの人は私をさらおうとするかも知れませんので。」

「なるほど。お話は分かりました。マスターにこのことを報告してから、エオーネさんの護衛に入りますね。」

ミルが答えて言う。エオーネがあわてて言う。

「あ、あの・・・ですが、私は、その・・・あまり持ち合わせが無くて・・・。」

「？」

ミルはエオーネが何を言おうとしてるのか分からず首をかしげる。エオーネは、意を決して言う。

「あのですね。あなたに差し上げるお金がほとんど無いんです。それでもいいのでしょうか？冒険者の方にこんなことを言うのはおかしいとは思いますが・・・。」

そう、冒険者はそれで生活をするわけだから代価がもらえない状況で依頼するほうがおかしい。しかし言い換えるなら彼女はそれだけ必死ということである、本当であれば、だが。ミルは微笑みながら答えて言った。

「ミルには無償でも大丈夫ですよ。マスターに報告しますので少し待っててくださいね。」

そう言って、ミルは目を閉じる。しばらくしてミルは目を開いた。そして言う。

「報告は終わりました。マスターも手伝えと言ってくれましたので喜んで手伝わさせていただきます。」

それを聞き、エオーネは涙を流しつつ言った。

「ありがとうございます。本当に、ありがとうございます。頼れるところがなくて、困っていたので、本当に……。」

「ああ、泣かないでください。どうすればいいか、話し合ひましょう。」

ミルはそう言った。エオーネは涙を拭き、ミルと今後について話し合い始めた。

「ふん……。」

神はつまらなそうに言う。志郎がその様子を見て神に言う。

「どうした？」

「ラミアもミルも依頼を受けて二週間くらいかかりそうだって。あたしも何かしようかなあ……。」

退屈そうに神が答えて言った。志郎が苦笑しつつ言う。

「何かってお前……何をする気だよ。」

「そうねえ……竜退治はこの前やったしなあ……魔族もこの前追い返したし……どこかに強い奴はいないかな。」

神がそう言うのを見て苦笑しつつ志郎が言う。

「おいおい・・・話が大きくなりすぎるって。」

「だって・・・・・・・・」

神が頬を膨らませながら言う。志郎はやれやれといった調子で言った。

「全く、すっかりしてると思えば、今度はこうだ。飽きないが疲れるなあ・・・・」

「ふ、ふん！一緒に来る道を選んだ以上あなたにも付き合ってもらいますからね！」

神はふてぶてしく言った。志郎は苦笑しつつ言う。

「それは重々承知してるさ。今夜はとことん付き合うからそれで今は我慢しろ。」

そう言われて神は顔をほころばせながら志郎に擦り寄りつつ答えた。

「うん・・・そうするわ。」

「こうしてるときは可愛いんだけどな。」

志郎がポツリと言う。目ざとく神が言う。

「何か言った？」

「いや、気のせいだろ。」

志郎がごまかしながら言う。そして志郎はついである酒を飲んだ。神は志郎に寄り添いながらゆっくりと時間を満喫していた。

ラミアたちは豪商モンティオーネ家に来ていた。応接間に通され  
四人は椅子に座って依頼主を待っている所だった。

「すごい御宅ですねえ。」

晶が感嘆しながら言う。

「モンティオーネ家はこの都市でも一二を争う豪商だからな。威厳  
を保つためにもこういう調度品は必要になってくる。まあ無駄にあ  
るのはまずいがこの主人は節度があるから好感が持てるぞ。」

デイルサイヴはそう説明した。アーレフが感心しながら言う。

「かなりお詳しいですね。地元で経験が長いのですか？」

「ああ、私はここの生まれなんですね。冒険者としても長くやってる  
し職業柄魔法使いなんぞやってるから情報にはこだわりがあるから  
な。」

デイルサイヴはそう答えた。ラミアがその言葉をかみ締めながら  
頷いていく。晶はそんなラミアを微笑ましく見ていた。そうして  
るうちに部屋に一人の女性が入ってきた。女性は四人が座ってるの  
とは反対の椅子に腰を掛けた。そして女性が言った。

「私が依頼主でモンティオーネ家当主シャルフェイメレオンⅡモン  
ティオーネと申します。長い名前ですのでシャレオンとお呼び下さ  
い。」

そう言いつつ、深々とお辞儀をした。ラミアアがそれを見て言った。

「私は、ラミアアと言う。彼は、デイルサイヴ。そしてその隣がアーレフ。彼女は晶と言う。ぜひ、依頼内容を話して欲しい。」

そう言うラミアアを見てアーレフは驚きに満ちて見ていた。今まで彼女がこのように積極的に話す所は見たことが無かったからである。晶もそれに気づいてアーレフに言った。

「ラミアアさんってあれほど快活に話す方ではなかったと思いますけど?」

「ですね。とりあえず、今は様子を見ましょう。」

小声でアーレフも返し、二人は様子を見守ることにした。シャレオンは用件を話し始めた。

「実は、私の家で、昨年子供が一人亡くなりました。急病ゆえ仕方が無かったのですが知り合いのつてでわが子を蘇らせる事は出来ませんが、似た容姿の魔法生命体なら作れると聞いてそれを依頼したのです。しかし、製作途中で最も重要な核コアと呼ばれる魔道具が盗まれて売り捌かれてしまったのです。その核コアを行方を捜していただきたいのです。それには、印章としてわが家の刻印があるそうなのです。依頼したい内容は以上です。」

そう言ってシャレオンは深々と頭を下げた。アーレフと晶はお互いに顔を合わせた。思い当たる節があったからである。ラミアアが答えて言う。

「内容は分かった。こちらで持ち帰って、依頼が達成できそうなら



後日また訪問する。無理であるなら、無理だと連絡する。それで宜しいか？」

そう言われてシャレオンは頷きながら答えて言った。

「はい。構いません。大変難しい依頼であることは承知していますので。ぜひ御願い致します。」

そう言って、彼女はそこから立ち去っていった。彼女が去った後デイルサイヴが言った。

「えらく大変な依頼だな。どうするのか？」

アーレフと晶はお互い顔を合わせていたがアーレフが意を決して言った。

「思い当たる節があります。まずは一旦宿に帰って神<sup>し</sup>さんと相談したいのですが。」

「マスターに？」

ラミアアが言う。晶が補足して言う。

「ラミアアさんにも関係することなんです。ですから神<sup>し</sup>さんに聞くのが早いかと。」

「分かった。行こう。」

ラミアアはそう言ってそこを後にした。三人もついて出て行く。道中でデイルサイヴが言った。

「なにやら御主達、というよりラミアアに関連がありそうな感じの

ようだな。」

そう言われてアーレフが言う。

「流石の洞察ですね。恐らくその可能性が高いと思います。」

そうして一行は神しが居る宿に向かった。

「なるほどね。」

神しはそう言った。ラミアたちの報告を聞いていたのである。

「と、すると、ラミアのコアを調べないといけなくなりそうね。」

神しが結論付けて言う。晶が疑問に思い言った。

「調べなくてはいけなくなるのは分かりますが、万が一依頼者の物だったらどうするんですか？」

当然の疑問である。神しはあっけらかんと答える。

「ラミアが決めることよ。」

そう言われて晶は納得が出来ず神しに言う。

「しかし、コアが無ければラミアさんは生きていられないんじゃない？」

ありませんか？それを彼女に決めさせるなんて・・・。」

今にも泣きそうな晶を遮るようにラミアアが手を出しながら言った。

「晶泣かなくていい。」

神は微笑みながら言った。

「もう決めてるのね。流石だわ。」

晶はその言葉が理解できなかった。アーレフやディルサイヴは理解していた。ラミアアが言う。

「マスター、コアを調べてもし依頼者のものであれば取り出して返してあげて欲しい。そして私は作り直すなり処分するなりして欲しい。」

神は再度尋ねるように言った。

「ラミアアはそれでいいのね？」

ラミアアは頷きつつ言った。

「構わない。あの人の悲しみを少しでも和らげてあげたい。」

ディルサイヴはラミアアの様子を見て驚いた。先日とはまるで違う、これほどまでに向上するとは。いったい何が？

「不思議なようね。ディルサイヴ。ラミアアは「普通」じゃないからね。」

神がそう言う。デイルサイヴは知りたいが故に聞いて言った。

「「普通」ではないだと？神殿詳しく教えてもらえんかな。魔術を嗜むものとしてはラミユアのような存在は実に興味深い。」

溜息をしつつ神は言う。

「いいわ。教えてあげる。ラミユアが好いたあなただからね。ただし、他言無用よ。まあ、他言しても誰も信じないでしょうけどね。ラミユアはね、盗難されていた魔道具の核にあたしが直接創り上げた魔道特殊生命体なのよ。」

暫く、デイルサイヴは何も言えなかった。目の前で、自分達がやりたいことを「やった」という人物が現れたのだから。少し経ってからデイルサイヴが言う。

「つまり、コアはともかく他は全て神殿が自ら創り上げたと？」

「ええ。」

神は肯定して答える。デイルサイヴは疑問に思い言う。

「しかし、一介の人にそんな力はないはず。どうやってそんなことが？」

「簡単なことさ。神が一介の人ではないからだ。」

志郎がそう言う。アーレフが更に補完して言う。

「あなたは「神」の存在を信じますか？」

「ああ、もちろん。居なければわれわれは存在できないからな。」

ディルサイヴはそう答える。アーレフは微笑みながら続けて言う。

「そうですね、しかし、我々の基を創始された「神」も事実居られますが、我々の生活圏内で我々に関わりながら身近な存在としての「神」も居られるんですよ。」

そう言われて、暫く沈黙が続く。そしてディルサイヴが言う。

「それが神殿しのだと？」

「まあ、そう言うことよ。ラミアはもしコアを除けば一時的には活動は止まる。しかし、コアはあくまで基本的生命維持と心を再現するもの、しかもラミアのコアは心の表現が未完成のものだった。だから、あたしが新たに創れば、記憶はそのまま新たなラミアが出来る。ラミアはそれを「理解」してるから、さらに、新たに覚えた感情を大事にしたいからこの選択が出来るのよ。晶もディルサイヴも全てとは言えないでしょうけれど理解できたかしら？」

二人とも、戸惑いながらも肯定した。ラミアが二人に言う。

「大丈夫。マスターが私を創った。マスターは優しい。そんなマスターは晶たちが悲しむことはしない。」

神しのはそう言われ、顔を赤くしながら言った。

「ちょ、ちょっと、ラミアまで……まったく、何であたしの創るものはこうもお節介なのかしら……。」

志郎が言う。

「お前に似てるからだろ。」

「五月蠅い！」

神は顔を真っ赤にしつつ言った。ラミアが身体を広げつつ言う。

「マスター、御願い。」

溜息を一つ吐いて神が答える。

「分かったわ。皆は少し離れてね。」

そう言われて、二人を残し皆は少し離れる。神の身体が輝き始める。そして「力」がラミアに入り始めるそれによりラミアも神と同じように輝き始め、そうしてラミアの胸からコアが出てきた。コアは完全にラミアから離れそれから後ラミアの包まれていた光が消えた。消えると同時にラミアは倒れる。

「ラミアさん！」

晶がそう言って駆けつける。ラミアは寝息を立てて寝ているようだった。

「良かった、生きてる・・・」

神はちょっと不満げに言う。

「当たり前よ。あたしを誰だと思ってるかしら・・・。」

それを見て志郎が言う。

「まあまあ。晶も悪気があって言ってるわけじゃないんだし。」

それを聞いて神しのが言う。

「逆よ。悪気がなく言ってるから、腹が立つのよ!」

それを聞いてアーレフとデイルサイヴが苦笑した。志郎はやれやれと手を広げて見せた。手に入ったコアを神しのは見た。するとそこにはモンティオーネ家の刻印がしっかりと入っていた。

「なるほどね、盗品としてあれは流れてきてたのか。ということは狙ってた連中は悪用でもしようとしてたのね。」

神しのがそう言う。アーレフも状況を理解して言った。

「恐らくそうでしょう。ここからレミアルト王都までは距離がありますから正規ルートであそこまでいくとは考えにくいですからね。」

志郎が言う。

「そもそも俺の依頼主とラミアアの依頼主が違う点で問題があるしな。俺の依頼主は正規の依頼じゃなかったというわけだ。そう言う意味では神しのの側について正解だったな。」

「ま、そう言うことね。これでラミアアの依頼に関しては一件落着かしらね。」

神しのがそう結論する。

「しかし・・・疑問点が一つある。」

志郎が言う。

「ん？」

「ラミューアの製作されたときの名前だよ。レスフェミュナシユア（神を狩る者）だったよな。結構物騒な名前だったと思ったんだがあれも依頼主の意思なのか？」

神しはそう言われて思い出しつつ言った。

「ああ、あれね。アーレフ、依頼主の名前覚えてる？」

突然アーレフに話を振られ、戸惑ったが、少し間をおいて答えて言った。

「えっとですね・・・シャルフェイメレオンさんでしたね。」

「その言葉の意味は何でしたっけ。」

「墮天使。または哀れみ深き魔女。美人だけど悲哀をこめた女性にたまに使われる名前ですね。」

「ま、そう言うことね。」

神しはそう結論付けた。意味が分からずに志郎が聞く。

「どういうことだ？？」

「だから、そう言う名前をつける家柄ってこと。名家とかではよくあることよ。そして通常では略名を使う。これも大きい家では普通でしょ。」

「ああ・・・そう言うことか・・・」

志郎は得心して言った。



「初めは悪魔崇拝かと思ってたけれどそっち関連で良かったわよ。まあ、別の場所で悪魔崇拝があって面倒だったけどね。」

神は晶に関連したことを踏まえつつそう言った。ラミユアが目を覚ます。晶が言った。

「ああ、ラミユアさん目を覚ましました。良かった・・・。」

そう言いつつラミユアに顔を埋めていた。ラミユアは状況が理解できずに周囲を見ていた。

「私は・・・？」

「お帰りラミユア、気分はどうかな？」

神がラミユアに言う。ラミユアは答えて言った。

「以前よりも爽快、マスター。おかげで心の表現がしやすくなった。」

「それは何より。晶も心配してるから立ち上がって無事なところを見せてあげなさい。」

「はい。」

そう言ってラミユアは立ち上がる。晶はその姿を見て喜んだ。と、同時に顔が真っ赤になった。

「ちょっとラミユアさん！裸じゃないですか！」

「はい。」

「いや、はい。じゃなくて・・・服を着ないと。」

「しかし、今はない。」

「いやそうじゃなくて・・・」

二人の様子を見てアーレフが言う。

「なんだか、晶さんがお母さんでラミアアさんが娘のように見えま  
すねえ。」

「ふむ、いい表現だな。」

「確かにいい表現ね。」

志郎と神しのかみがそう言って賛同した。その様子を見ながらデイルサイヴ  
が言った。

「素晴らしい。私がこんなところを目に出来るとは。本当に素晴ら  
しい。ラミアア殿と出会えて本当に良かった。あなたたちとも出会  
えて本当に良かった。」

ラミアアがデイルサイヴの前に来て言う。

「デイルサイヴ、迷惑を掛けてしまった、許して欲しい。これで依  
頼は達成できるだろうか？」

「あ、ああ・・・だがなラミアア。」

デイルサイヴは年甲斐もなく赤面しつつ言った。続けて言う。

「先に服を着てくれんなかな。」

神しのかみたちはそれを聞いて笑っていた。

風が吹いていた。

## 冒険者（後書き）

冒険者としての道も歩みだした神達<sup>しのかみ</sup>。

彼女達の行く先に何を見る事に為るのか。

次回「宝物」。

貴方にも良い風が吹きますように。

## 宝物（前書き）

神<sup>し</sup>達はアーキレストの街で一時的に冒険者として過ごして居た。ふとした事から自分の貴いものを語り合う事に為った。彼らの「宝物」とは・・・。

## 宝物

小説 風の吹くままに

### 第十一章 宝物

「よし、これで依頼完了だな。おめでとう。」

ギルドマスターにそう言われてラミアは喜んでいた。そう、彼女は初の依頼を完遂したのである。ラミアは笑顔でディルサイヴに報告する。

「ディルサイヴ、報告が済んだぞ。」

ラミアを見つつディルサイヴが言った。

「ああ、良くやったな。これでとりあえず、私との冒険は終わりだな。」

「もうやらないのか？」

ラミアが問う。当惑しつつディルサイヴが言う。

「いや、そう言うわけではないが・・・お前達も何時もここに居るわけではあるまい？」

「そうだな、マスターはいずれ旅に出るはず。」

ラミアはそう答える。ディルサイヴは少し悲しげに言った。

「そうだろうな。私はすでに高齢でな、あまり旅には向いておらん。」

それに研究したい魔法も一杯あるのでな。今回でお別れになるだろう。」

「そうか・・・寂しいな。」

ラミアが悲しげに言う。ディルサイヴが驚きつつ言う。

「ラミア・・・お前分かるのか？」

「？」

ラミアはディルサイヴの言う意図が分からず首をかしげる。

「ディルサイヴ、何のことだ？」

そしてラミアは問いながらそう言った。ディルサイヴは言う。

「お前、寂しいと言っただろう。」

ラミアは頷きつつ言った。

「ああ、ディルサイヴと別れるのなら寂しいのでそう言った。」

ディルサイヴは感動しながら言った。

「そうか・・・そうか・・・それが分かるか・・・素晴らしい！素晴らしい！私もその境地まで行きたいものだ。」

そう言いつつディルサイヴはラミアを抱きしめていた。あまりに強いのでラミアが言う。

「ディルサイヴ、締め付けが強いのだが・・・これはどうしてなの

か？」

ラミアは理解できずに迷っていた。二人の様子を見ながら神しが言う。

「ラミアもえらく進歩したわねえ・・・」

アーレフが答えて言う。

「そうなんですよ。何がきっかけかは分かりませんがかなり自発的になっていきますよ。」

「そう。いい傾向ね。」

神しはそう言って喜んだ。

「ところで、ミルのほうはどうなんでしょうね。花嫁の護衛とか言ってたけど。」

神しがポツリとそう言った。志郎が答えて言う。

「まあ、護衛する必要のない花嫁じゃないんだからさぞ可愛らしいんだろう。」

「何か言ったかしら？」

神しがきつい口調で言う。志郎が答えて言う。

「お前も可愛いってことさ。」

そう言われて、神しは顔を赤くしながら言う。



「もう・・・馬鹿。」

そんな二人をアーレフは微笑ましく見ていた。

「これは？」

ラミアはデイルサイヴが差し出した装飾品を見てそう言った。デイルサイヴは答えて言う。

「これは、私が作った魔道具の一つでな。まあ、能力はたいしたものではないが装備者を若干守護する働きがある。これから一緒に行けないからな、お前に上げたいと思うのだ。」

そう言ってデイルサイヴはラミアに手渡した。ラミアが言う。

「これを私に？くれると言うのか？」

「ああ、ぜひ貰って欲しい。私が喜ぶために。」

デイルサイヴはそう言った。ラミアはそれを手に取った。髪飾りである。しかも手の込んだ装飾が為されており一般に売ったとしても非常に高額で取引されるほどの代物であろう。ラミアはそれを見ながら言った。

「私が貰って良いのだろうか。」

「もちろんだとも。私のためにもぜひ貰ってくれ。お前のような者に使われるのであれば私もその作品を作った甲斐があるというもの

だ。」

ディルサイヴはそう答えた。ラミアはそれを見ていた。が、なぜか、それが見えにくくなった。髪飾りが手の中で次第に濡れていた。そう、ラミアは泣いていた。

「私は・・・どうしたのか。なぜ、泣いている。」

ラミアは自分の行動が理解できずにそう言っていた。それを見つづ、晶も泣いていた。

「素晴らしいです。ラミアさんは。私でも分かるほどに成長されています。」

「当然よ。あたしが創ったんだから。」

神しのかみがそう言う。苦笑しつつ志郎とアーレフがラミアたちを見守っていた。

ラミアは、ディルサイヴから貰った髪飾りをディルサイヴに向けて差し出した。そして言う。

「ディルサイヴ御願いがあ。私にこれをつけて欲しい。」

そう言われてディルサイヴは一瞬躊躇しつつ言った。

「私でいいのか？ 言っては何だが男ゆえにそう言う良し悪しはあまり分からぬのだが・・・」

ラミアは「微笑み」つつディルサイヴに言った。

「ぜひ、あなたにして欲しい。駄目だろうか？」

ラミアのその顔を見てディルサイヴは暫く時が止まったように感じた。そして、言う。

「なんという・・・そのような顔をされて断る男は居ないと思うぞ。ありがたく、その大役を果たさせてもらおう。」

そう言って、ディルサイヴはラミアから髪飾りを受け取り、ラミアの頭に飾っていった。それが終わったときラミアは身体を回しつつ言った。

「どうだ？ 似合うだろうか？」

その様子はまるで娘がお洒落をしてそれを自慢するかのようであった。ディルサイヴはそれを見て感動しつつ言った。

「ああ、良く似合うとも。本当に、今まで魔道具をいろいろ創ってきたがこれほど充実したことはない・・・」

そう言い、ディルサイヴはそこに倒れてしまった。それを見てラミアも含め皆が駆け寄る。

「どうした?!」

志郎が声を掛ける。神が「力」を使いつつ言う。

「彼は病気持ちの様ね。結構重症よ。多分、興奮しすぎたので緊張しすぎて今、それが切れちゃったって所ね。」

「とりあえず、彼をベットまで運ぼう。」

志郎がそう言うところ、ラミアが進み出て言った。

「私がやる。」

そう言ってラミアはディルサイヴを抱えてベッドに連れて行った。それを見ていたアーレフが言う。

「なんだから、もう父娘って感じですね。本当に。」

それに答えて神しが言う。

「それはディルサイヴにとっては最高の賛辞ね。魔法を使うものにとつて自分が創造したものに敬われるほどの喜びはないはずよ。だからこそ、魔道生命に燃える魔術師が多いのだけれどね。」

「なるほど。ディルサイヴさんの今までの言動はそういうわれると納得できます。」

晶はそう言った。一行はディルサイヴを休ませる部屋へと向かった。

目を開けると自分はベッドに寝かされていることに気づいた。そうか、私は倒れて……。自分の上に何かが覆いかぶさっていることに気づいてそこに目をやる。そこにはラミアがいた。彼女は眠っているのか、私の覆っている布団の上に被さる様に倒れこんでいた。

「目を覚ましたのね。」

そう言う声が聞こえた。声のほうに顔を向けると神しが居た。

「ああ、私は倒れてしまったようだ。申し訳ない、ラミアアにも心配させてしまった。」

「全くね。ラミアアのためにもあなたには暫く生き続けてもらおうわ。」

私の答えに構わず神しはそう言った。私は答えていう。

「それはどういう・・・。」

それを遮り神しが言う。

「ま、今回はあなたの意思や意見はまるつきり無視するわ。これからラミアアを連れて行く上でいきなりあなたの死を見せるわけにも行かないからね。最低三十年は死ねないと思いなさいな。」

彼女はそう宣告した。ラミアアのために・・・か。なぜか嬉しく思った。

「それはありがたい。私もラミアアを悲しませたくはないからな。私からもぜひ御願います。それに・・・あと三十年も頂けるなら私の研究もさぞはかどるだろう。」

私はそう言った。彼女は私の答えを予測したかのようににやりとしつつ言う。

「及第点な答えね。ラミアアも喜ぶと思うわ。お節介だけどね。ここは受け入れてもらおうわよ。」

「分かった。」

私はそう答えた。彼女は私に手を伸ばし「力」を私に向けて差し出してきた。「力」が私に入っていくのを私は感じていた。

ラミアは眠っていた。いつ眠ってしまったのかそれすら気づけなかった。それほどまでに気になっていたのだ。そう、デイルサイヴのことが。ラミアは目を覚ますと彼を探した。さっきまで寝ていたはずなのに？そう、ベットには誰も居ない。困惑してラミアは感覚を研ぎ澄ます。彼はどこに？？感覚は酒場に彼が居ることを示した。ラミアは急いでそこを後にして飛び出す。

「お、お姫様が目を覚ましたぞ。」

志郎がそう言う。ラミアはデイルサイヴが居る位置に目を追った。彼は微笑みながらラミアを見ていた。そして彼が言う。

「おはよう。心配を掛けてすまなかったね。」

彼がそう言うのを見てラミアは自分が涙を流しているのに気づいた。そして彼に近づいていく。

「デイルサイヴ。もう大丈夫なのか？」

ラミアはそう言った。デイルサイヴは答えて言う。

「ああ、もう安心しなさい。お前のマスターが私を癒してください

たよ。」

そう言われて、ラミアはディルサイヴの胸に入るようにして倒れこんだ。そして、泣き崩れた。その声は大きく、また、非常に可愛なものだった。そう、娘が喜びの声を上げるが如く。

「ま、何だな。娘にああやって喜ばれるのは父親冥利って奴なのかな。」

志郎がそう言う。神が微笑みながら言う。

「そうね。そうかもしれないわ。志郎もやりたいの？何なら創るわよ？」

「いきなり俺もかよ。いや、今は遠慮しておこう。それに、娘なんぞ出来たらお前が嫉妬しそうだ。」

志郎がそう答えたのを見て神が頬を膨らませつつ言う。

「なによ。あたしが焼きもち焼きみたいに……。」

「違うのか？」

「違わないわよ！」

そう神が言うのを見て志郎はくすりと笑いながら神を抱き寄せて言った。

「だから、お前と一緒にって良かったと思ってるさ。」

神は顔を真っ赤にしつつ言った。

「もう……馬鹿。」

くすくすと笑いつつアーレフと晶はその様子を見ていた。

「本当に素敵ですね。神<sup>し</sup>さんたちもラミアさんも。」

晶がそう言う。アーレフが答えて言う。

「そうですね。私もデイルサイヴさんのように言える日が来るとい  
いものです。そう、横にあなたが居れば十二分です。」

「え？」

晶は、アーレフが何を言ったのか理解出来ずそう尋ねてしまっていた。アーレフは躊躇しつづ言う。

「あゝ。いや、その。詳しいことはまた二人きりのときにでも・・・」

そうやってアーレフは誤魔化して言った。晶は微笑みつつ言う。

「はい。お待ちしてます。」

朝。やはり、清らしい朝はいつ来てもいいものである。気持ちを爽やかにし、また、病んでいる気持ちを癒してくれる。

「さて、今日もやりますか。」

「そうだな、昨日とは違うところを見せてやろう。」



神と志郎はそう言いあっていつもの朝の修練を始めた。アーレフは階上からそれを眺める。いつもの日課になりつつあった。最近はお酒場の前に街の見物客が集まるようになったほどである。今日も二人は激しく修練をしていた。晶が目覚ましてやってきた。

「おはようございます。お二人は相変わらずですか。」

そう言われてアーレフは微笑みながら答えて言った。

「ええ、最近は街の方も定期的に見に来られるファンが増えてますね。」

そう言いつつ階下の様子に目を落としていた。暫く時間が過ぎた後でラミアが部屋にやってきた。

「朝食だ。準備がよいようなら降りてきてくれ。」

そう言う。アーレフは答えて言った。

「分かりました。もう少ししたら向かいますよ。」

「分かった、マスターにも言ってくる。」

そうラミアは答えて階下に下りていった。その様子を晶は見つづけた。

「数日前とはまるで変わりましたね。」

「ええ。彼女はどんどん成長しています。私も負けられませんね。」

アーレフは微笑みつつそう言った。階下ではラミアが神たちに声

を掛けていた。

「では、もうそろそろミルさんも仕事が終わりそうなんですね。」

アーレフは朝食を取りながらそう言っていた。神しのかみが答えて言う。

「ええ、なんでもかなりしつこい奴らしかったけどどうにか撃退したってミルが昨日言ってきたわ。ただ・・・」

「どうかされたんですか？」

晶が聞く。神しのかみが答えて言う。

「ああ、うん。なんかミルの様子がおかしいのよねえ。変というわけじゃなくて。なんて言うんだろ？うまく言えないんだけどおかしいってことだけは分かるって言うか。」

「ふむ、つまり、いつもの様子とは違うって事か。」

志郎が神しのかみの言いたいことを代弁して言う。神しのかみが頷きつつ言う。

「そう、そんな感じ。なんか変なのよ。まあ、あの子はしっかりしてるからその点は気にしてないんだけど。なんか変な虫でもついたのかしら？」

そう言う神しのかみを見ながら晶は微笑みつつ見ていた。

「では、今日はどうするかな。皆はどうする予定なんだ？」

志郎が問うて来る。神が答えて言う。

「あたしは適当にぶらつく予定よ。変な虫でも引っ掛けようかしら？」

「おいおい・・・旦那を前にそれかよ・・・。」

志郎が苦笑しつつ言う。アーレフが言った。

「私はまた教会で資料を読みに行つて来ます。」

「あ、私もアーレフさんに同行します。」

晶がそう言う。神がそれに答えて言った。

「そう、分かったわ。ラミューアはどうする？」

「私か？私は・・・そうだな、またデイルサイヴの元で話をしてこようと思う。」

ラミューアは答えてそう言った。神は納得しつつ言う。

「わかったわ。彼によろしくね。ところで言いだしっぺの志郎はどうするのよ？」

「俺か？そりゃ簡単だろ。」

志郎がそう答える。続けていった。

「女房に変な虫がつかないようにするだけさ。」

そう言われて笑いが起こった。神は顔を真っ赤にしつつ言う。

「ば、馬鹿！さっきのは言葉のあやって言ってねえ・・・」

むきになり言う神を抑えつつ志郎が苦笑して言った。

「落ち着けて。冗談だよ。まあ、お前と一緒にいくことは変わらないがな。」

「もう・・・。」

神は頬を膨らませつつ志郎に寄り添った。

朝食の後、皆はそれぞれの目的に行動を移した。

「さて、どうする？ナンパでもするのか？」

志郎が冗談ぶいてそう言う。神が答えて言う。

「なーによ、浮気でもされたいわけ？」

「いや、そう言うわけじゃないが。まあ、あれだ。刺激が少ないからさ。何か出来ないかとな。」

志郎が苦笑紛れにそう言う。その言葉に頷きつつ神が言う。

「そうよねえ。ラミユアとか皆はいろいろ楽しんでるのだからあたし達も楽しみたいわねえ。」

「そうだろう？いい方法はないものかな。」

そう言って志郎は腕を組み考え始めた。神は暫く外を眺めていた。

アーレフたちは教会の資料室に来ていた。蔵書が沢山あり、基本的  
に閲覧であれば自由に出来るものであった。実際、朝早いのに勉強  
熱心な学生や神官たちが幾人かすでに学習に来ていた。

「初めて入りましたが素晴らしいですね。蔵書がこんなにあります。  
」

晶はそう感想を述べた。アーレフは微笑みながら答えて言う。

「そうですね、貿易が盛んなせいとか、いろんな場所の優れた書物が  
ありました。私も有意義に過ごさせてもらっていますよ。晶さんも  
興味があるものを読まれたらいいかもしれないですね。」

「はい。そうさせて頂きます。」

晶はそう答えて蔵書に眼をやって選んでいった。アーレフはその様  
子に微笑みつつ自分も読みかけていた本を開き求めるべき情報を追  
い始めていった。

ラミアはデイルサイヴの家に来ていた。そして彼の魔法を研究す  
る部屋で彼の研究を手伝うべくいろいろ作業を手伝っていた。もう、  
一緒に居る時間はあまりない。それがお互いが分かる故に普段通り

の様に、はたから見えるが実際は別れが惜しいが故に「普通」に振舞っている二人であった。

「済まぬ。ラミア、その十二番の試薬を取ってくれ。」

「これでいいのか？」

そんな感じで微笑ましい光景が広がっていた。

ミルは困っていた。依頼自体はほぼ完了しているのだが問題があった。

「ミルさま。」

可愛い声でミルを呼ぶ声があった。ミルはその声を聞きうんざりした様子で答える。

「レネアさん。あたしはそう言う趣味はないって言ってるんですけど。」

「何を言ってるんですか。あなたのような素敵な女性を見過ごす事はこのレネアには出来ませんよ。」

レネアといわれた女性はそう言いつつミルに抱きついた。ミルは抵抗できないわけではないが諦めつつ言う。

「も。今はまだお仕事ですから。夜までお預けですよ。」  
「分かってます。お仕事の邪魔はしませんよ。」

レネアは素直にそう答える。そして、ミルを見ながらニヤニヤしつつ言った。

「えへへ。夜になればミル様と♪想像するだけでレネアいっちゃいそう。」

レネアは興奮しつつ耳を立てた。そう、彼女は人間ではなくエルフであった。しかもかなり若い。街中で若いエルフがこうしていること自体が不思議であった。そんなレネアを見つつミルは苦笑しながら言った。

「どうしてこんなになっちゃったんでしょねえ……。」

ミルは、自分の起きた境遇を少し哀れんでいた。

「宝物ねえ……。」

神しがそう言った。志郎しがそれに答えて言う。

「ああ、お前にはそう言うものはないかな？ まあ別に今持ってるとかでなく以前持ってた、とかでもいいが。」

「そうねえ……あたしにとっては今の仲間かな。特に限定するなら志郎、あなたね。」

神しはそう答える。志郎しが答えて言う。

「なるほどな、確かに神らしい答えだな。俺はなんだろうな。昔は、鍛え上げたこの能力が一種の宝物だったが……。」

「なるほどね。で、今はどうなのかしら？」

神は問う様に言った。志郎は苦笑しつつ答えて言う。

「やはり、お前しかないな。」

「あたし？」

「他には代用が出来ないからな。」

「……。」

「どうした？」

「馬鹿……。」

「そう、馬鹿だよ。」

そう言って志郎は神を抱き寄せた。神が言う。

「みんなの宝物は何かしらね。後で聞いてみようかな。」

「そうだな、面白そうだな。」

志郎も賛同しつつそう言った。

「「宝物」ですか。」

アーレフがそう言った。神から質問されていたのである。自分にとつて「宝物」は何か？と。神が言う。



「ええ、あたしや志郎が思う「宝物」はさっき言った通りよ。もちろんこれは個々の基準で異なるからそれぞれ違うものであると思うの。もちろん、言うか言わないかは各人の自由よ。」

「そうですね。私にとつては皆さんが「宝物」と言えるでしょう。素晴らしいものを見せていただける。そう言う「宝物」ですね。かけがえの無いものだと思いますよ。」

アーレフがそう言う。神は間髪いれずに突っ込みつつ言った。

「ふーん。まあ、アーレフならそう言うでしょうけど。肝心な点が抜けてるわね。」

「何か言い忘れていましたか？どこか言葉が足りなかったでしょうか？」

神の意図が分からずにアーレフがそう答える。神が言った。

「誰も気づかないなんて思ってるんじゃないでしょうね。もしそう思ってるのなら自分の管理が甘いわよ。」

そう言われて苦笑しつつアーレフは答える。

「分かりました。しかし、言わなければなりませんか？」

「それはあたしが決めることじゃないわ。でも、いい機会だからこの際言ったほうが楽かもよ？」

神がそう言うて言うように促す。アーレフは溜息を一つ吐きつつ言った。

「確かにそうですね。あえて機会を作ってくださったわけですし、

この際ですから済ませたほうがいいかもしれません。晶さん、お聞きくださいますか？」

晶はそう言われて驚きつつ答えた。

「あ、はい。何でしょうか。」

アーレフは少し間をおいて言い出した。

「私はあなたが好きです。そして是非一緒にいたいと思っている。そう、もっとも大事な「宝物」にしたいのです。初めてお会いしたときからあなたに好意を抱いていました。しかし、一緒にするうちにこの気持ちは間違いないものかけがえの無いものであることに気づきました。ですから、あなたが宜しければ私と夫婦になって頂けないでしょうか。」

アーレフがそう言うのと暫く沈黙が続いた。その後、泣きしゃくる音が聞こえてくる。晶が泣いていた。

「晶、すぐ答えなくてもいいわ。でも、気持ちは早めに伝えたほうがいい気持ちよくなるのは間違いないわね。あたしもそうだったし志郎に言われるまでどんなにやきもきしたか……。」

神は苦笑しつつそう言った。志郎が言う。

「いや……あの時はだな……。」

「あたしは永遠にこれは引っ張るわよ。嫉妬深いですからね。」

神は悪戯小僧のように言う。それを見て晶が口を開いた。

「そうですね・・・答えないと折角の「宝物」を失いそうです。私も言わせて貰います。」

そう言って晶はアーレフのほうに向き直った。そして言う。

「私もあなたと同じように、今の仲間が非常に大事な「宝物」です。私はあなた方に命を救われました。それだけでも非常に感謝しています。それだけでなく、このように一緒に楽しませてもらっています。でも、それだけでなく、あなたが、あなたが私に、私個人に愛情を示してくださるので私は心温まることが出来るのです。この温もりは決して手放したくはありません。あなたの申し出を私は是非受けたと思います。」

それを聞いてアーレフは晶の手を取った。神しが言う。

「よく言いました。志郎にも見習って欲しいくらいね。」

「おいおい、ここで俺が出てくるのかよ。」

志郎が苦笑しつつ言う。神しが続けて言う。

「まあ、その点は後回しにして、アーレフたちのは聞けたわね。あ、その後については後で話し合うからね。次はラミア、あなたはどうかしら？」

「私の「宝物」か？」

ラミアが答えて言う。神しがそれに答えて言った。

「ええ。あなたがそう思うものは何かしら？」

「そうだな・・・ここに居る皆もだが、私にとっては今はこれかな。」

ラミアはそう言って頭にある髪飾りを指した。そして言う。

「私は生まれ変わることが出来た。もちろん、それをしてくれたのはマスターだが、その印としてこれが今私の元にある。大事な思い出。これが私の「宝物」だな。」

「そう。ラミアもいい経験をしたわね。」

神が微笑みながらそう言った。皆も頷く。

「ところで、ミルは遅いわね。話だと今日帰ってくるらしいのに。」

神がそう言う。志郎が答えて言った。

「確かにな。依頼は無事終わったんだろ？」

「ええ、そう伝えてきたわ。ただ、何か面倒なことがありそうな言い草だったけど、あの子何を抱えてるのかしら？」

神が不思議そうに言う。そう言っているときにミルの声がしてきた。

「皆さん。遅くなりました。」

そう言ってミルが入ってくる。しかも、少女らしい女性を抱えて。

「ミルさんお帰りなさい……って、その子はどうされたんですか？」

晶が驚きながら言う。ミルは多少困りつつ言う。

「あゝ・・・実は・・・依頼で護衛をしてたんですけど対象者を付け狙っていたのがこの子だったんですよ。で、あたしが対応したんですけどなぜか好かれちゃって。」

神は噴出して言った。

「ミルったら・・・あははは・・・ああ、もう、おかしくて・・・わざわざエルフのしかも女の子に好かれるなんてミルもやるわねえ・・・あははは・・・。」

「むゝゝ。マスターそんなに笑わないでくださいよ。ミルはこれでも大変なんですから。」

ミルは頬を膨らませながら言う。神が答えて言った。

「その割には彼女を邪険にはしてないようだけど？」

そう指摘されて、ミルは顔を赤くしつつ言った。

「いや、それは。あたしを好いてくれますし。それにこの子は可愛いし、親切なんですよ。能力もあるし。ちよっと、おかしな所がありますけど・・・でも可愛いんですよ。」

「ふむ、つまりミルも気があるということか。」

志郎がそう言う。ミルはあわてて言う。

「志郎様・・・いや、そう言う意味じゃなくて。あゝ、ミルも混乱しそうです。」

神は一通り笑ってから言った。

「はあ・・・良く笑ったわ。まあ、つれて来た以上しつかり面倒を見なさいな。どうせ、そのつもりだったんでしょ？」

「あ、はい。実はそのお許しを貰おうかとつれて来たんですけどね。レネアちゃん寝ちゃったんです。」

ミルはそう答えて言った。神しは言う。

「へえ、レネアって言うのね。可愛いわ。ミルにとって新しい「宝物」になりそうね。」

「「宝物」ですか？何の話です？」

ミルが問いながら聞く。神しが説明して言う。

「皆が大事な「宝物」は何かって話になってね。お互いに言い合っていたのよ。」

「なるほど。確かにレネアちゃんも今では大事ですね。もちろん、マスターも含め皆さんも大事です、そう言う意味では確かに「宝物」ですね。どれか一つにはあたしはまだ絞れませんね。」

ミルは答えつつそう言った。微笑みながら神しが言う。

「ミルらしい答えね。さて、ミルは今帰ったばかりで知らないでしょうけど、アーレフと晶がさっきやっと告白したわよ。」

そう言われて、二人は赤面する。ミルは二人を見つつ言った。

「それは。お二人ともおめでとうございます。ラミアちゃん  
と二人で、いつするのか噂してたんですよ。」

「え？って、皆知ってたんですか？」

アーレフが驚いて言う。神しのかみが呆れながら言う。

「アーレフ・・・今までの状況で気づかないほうがどうかしてるわよ・・・あなた人を見る目は確かなんだからもう少し自分も良く見たほうがいいわ。」

神しのかみにそう言われて苦笑しつつアーレフが言った。

「確かにそうかもしれないですね。別に隠していたわけじゃないです。知られていて当然ですよ。」

ラミアが晶の前に来て言った。

「晶、おめでとう。」

晶は涙を流しつつ答えて言った。

「ありがとう・・・ありがとう・・・。」

そんな彼らを神しのかみは微笑ましく見ていた。

「ん・・・。」

神しのかみは志郎とベツトで一緒になりつつ考え事をしながらそう言っていた。

「どうした、さっきから悩んでるようだが。」

志郎がそう問う。神が苦笑しつつ答える。

「ああ、ごめんなさい。皆いろいろ行動し始めたのは嬉しいのだけ  
どなんか寂しくてね。」

「ふむ、確かにそうだな。」

志郎も賛同しつつそう言った。神が続けて言う。

「この際だからさ。志郎、娘の一人でも創らない？  
「はあ?!」

志郎は神の突然の提案に吃驚して答えた。

「いや、だから、あたしとあなたで「娘」を創らないか? って言っ  
てるのよ。」

神はそう言って、これからしたいことを提案した。志郎は困惑しつ  
つ言う。

「いや、言いたい事は分かるが・・・つまりあれか? 夜のをもっと  
激しくしろとか?」

神は顔を真っ赤にしつつ言う。

「ば、馬鹿! 別にそっちで作るとは言っていないわよ。あたし達「人」  
じゃないのよ? あくまでこの姿は「かりそめ」なんだからね。」



神しが言おうとしていることに気づいて志郎しが言った。

「ああ・・・すまん。どうもまだそっちの認識が疎くてな。ふむ、  
って事は何か。お前、欲しくなったのか？」

神しは顔を赤くしつつ言った。

「ま、まあそう言うこと。ラミアとかそれぞれが自立し始めると  
なんか寂しくてねえ。もちろん今すぐあたし達から離れることはな  
いし、ミルなんかは「使い魔」であることを自称してるからなおさ  
ら離れないでしょうけどね。ただ、元々自立できるようには創って  
いるから最終的には離れていくでしょうね。だからかな、折角あな  
たと一緒になったし二人の「娘」が欲しくなったのよね。駄目かな  
・・・？」

志郎は得心しつつ言う。

「まあ、言いたい事は分かったが・・・なぜ「娘」なんだ？「息子」  
でもいいような気もするが。」

神しは答えて言う。

「その点は簡単よ。あたしについてきてあなたも私の一員になった  
でしょ？つまり「神」に。」

「ああ、そうだな。」

「同じようにさせたいからよ。まあ選ぶのは本人だから「人」を選  
ぶ選択肢を考えるかもしれないけどね。あたしはそれを選んで欲し  
くないからなあ・・・。」

「なるほどな、確かに、男が言うよりは女が言うほうが効果的だな。」

「それに・・・」

「それに？」

「あなたも嬉しいでしょ、娘でも。息子も欲しいなら両方創る？」

「いきなり二人は相手が大変そうだな。そうだな、お前の意見もあるし、俺も興味があるからまずは娘でいってみるか。で、どうするんだ？」

「えっとね・・・」

そうやって、神は志郎と「娘」について話し始めた。

朝。天気が悪いとやはり気は滅入るものである。そんな時には気分を変えてと思うのが心情である。アーレフはそう思いつつ外を眺めていた。

「こういう日は流石に修練は無理ですよね。あ、でも出来なくは無いのかな？」

そう言いつつ外を眺めていた。外は、今にも雨が降りそうな雰囲気だった。

「おはようございます。」

「あ、おはようございます。晶さん。」

晶は、アーレフの部屋に来て挨拶をしていた。アーレフはそれに答えた。お互いにこやかに挨拶を交わす。そんな中、一人の8〜10歳程度に見える女の子が部屋に入って来て言った。

「おはよう！アーレフ、晶、今日は天気がよくないな。」

二人は、いきなりだったので、

「おはよう。」

と、答えただけで立ち止まってしまった。少女はその後すたすたと別の部屋に去っていった。

「今の子は誰でしょうか？私たちの名前を知っているようですけど。」

晶は疑問に思いつつそう言った。アーレフは少し考えてからこう言った。

「私の考えに間違いがなければですが神<sup>しの</sup>さんじゃないですかね、原因は。」

「えっと・・・神<sup>しの</sup>さんが創られたとかですか？」

晶がアーレフの言いたい事を考えて答える。アーレフは頷きつつ言った。

「恐らくですけどね。レネアさんとは違う方ですし彼女はまだ私たちを知りませんからほぼ間違いないと思いますよ。」

「そうですね、朝食のときには分かるかもしれないですね。」

晶はそう言って納得した。アーレフは晶を見ながら微笑んでいた。

「ふう。初めてやったが結構きついんだな。」

志郎がそう言う。神が微笑みながら答えて言った。

「ん。まだ志郎は慣れてないのと「力」がまだあまりないからかもね。しかし、志郎。娘なのになんであんな言葉遣いなよ。」  
「あ、いや・・・その、俺と一緒に修練をしてくれる者が欲しくってだな・・・。」

志郎はややしどろもどろに答えて言った。神は苦笑しつつ言った。

「なあに、あたしじゃ不満なわけ？第一、修練に参加させるのと言葉遣いに何の関係があるのよ。あれじゃまるで男みたいじゃない。」  
「まあ、その見た目は可愛くていいだろう？」

志郎が苦笑しつつ言う。神はキツと睨みながら言った。

「話題を変えて誤魔化すんじゃない！たく、まあでも、志郎の気持ちは分かるけどね・・・」

「何か言ったか？」

志郎が聞く。神が答えて言う。

「な、なんでもないわよ。それよりも慍しずかはどこに行ったのかしら？」  
「皆に挨拶してくる、とか言ってたぞ。」

志郎が答えて言う。神が呆れつつ言う。

「はぁ・・・活発なのは誰に似たのかしら・・・あたし？それとも？」

志郎は両手を広げて答えた。神しのはがっくりと首をもたれていた。

「慍しずかちゃんと言うのですか。よろしくです。」

ミルが慍しずかに挨拶をしていた。レネアはミルにくつついたまま慍しずかを見ている。ミルはそれを見て言う。

「あ、この子はレネアちゃんといいます。今はミルと一緒にいるんですよ。仲良くしてくださいね。」

「慍しずかだ、母上と父上から教わっている。これから宜しく頼む。」

慍しずかはそう言って挨拶をしていた。レネアは黙ったまま慍しずかを見ていた。

「なんだか私に似ているな。」

ラミアはそう言った。神しのは苦笑しつつ言う。

「まあ、志郎と二人で創った初めての子供だからね。ちょっと性格とかが問題あるかも。」

「おいおい・・・慍しずかは十分可愛いじゃないか。」

志郎が抗議する。それに答えて神しのが言う。

「可愛いから困るのよ。あの可愛さでいきなりああい言葉遣いされたらショックが大きいわよ。もちろん、ギャップによる可愛さはあるでしょうけど・・・。」

「お前だってミルを創ってるしな。あ、でも、ミルはモデルが居たんだっけ。」

志郎がそう言う。神は苦笑した。

「母上。」

惺はそう言って神を呼んだ。神は答えて言う。

「何かしら？惺。」

惺は答えて言った。

「朝食の後、父上と修練をしても宜しいか？」

「ええ、あなたなら問題ないわよ、と言うか、あなたのほうがいいわね。あたしでは弱いものいじめになるから。今後は惺に御願いしようかしら。」

神はそう言った。志郎は苦笑しながら言う。

「事実ではあるが、露骨に言われると結構傷つくな。まあ、仕方が無い、別の方面で勝つさ。」

「それは楽しみ。」

神が微笑みながら言った。惺が自身ありげに言う。

「うん。俺に任せてくれ。父上と一緒に母上に追いついてみせる。」  
「あら、頼もしいわね。気長に待ってるわよ。」

神は笑顔でそう答えた。晶が言う。

「では皆さん、食事を始めましょう。」

そう言って皆は朝食を始めることにした。

志郎と惺は表に出ていた。天候は悪いがまだ雨は降ってはいなかった。二人はやや離れて対峙し、構えを取った。志郎が言う。

「いいぞ。惺、来い。」

「父上、いざ、参る！」

惺はそう言って一気に間合いをつめる。志郎の懐に入ったかと思うと「気」を放った。

「いきなりか！」

志郎はそう言いつつ、自分に展開した「気」を使いダメージを軽減しながら回避する。そしてそのまま惺の側面に回りこみながら攻撃を掛ける。惺はそれを受け流そうとする。志郎はそれを「読み」その面に対して「気」を叩き込んだ。惺はそれにより吹き飛ばされるがすぐさま受身を取る。

「やるな、父上。」

惺しずかはそう言って体勢を整える。そこに間髪しずかいれずに志郎は「気」を使って「力」の塊を惺しずかに向かって放った。惺しずかは自らも「気」を練り上げ「力」を受け止める、更にそれを志郎に向けて打ち返した。

「なっ・・・」

志郎はそう言いつつ、帰ってきた「力」を防ぐために「気」を展開した。大きな衝撃がおき周囲の空気が響く。その大きさにより周囲の家の者たちが出て来たり、見に来たりしてきた。

「あら・・・ちよつと派手にやり過ぎたかな？」

神しのが苦笑しつつそう言う。アーレフが微笑みながら言う。

「それだけ真剣ですな二人とも。」

皆は頷いた。二人の「戦い」は続いていた。志郎が「気」を溜め上げて惺しずかに向けて「力」を放った。惺しずかはそれに耐え切れず吹き飛ばされる。神しのはそれを見て言った。

「そこまでよ。二人とももう止めなさい。」

そう言われて、二人は手を止めた。志郎が言う。

「危なかったな。もう少しで惺しずかに負ける所だった。」

「くっ、まだ父上には敵わないか。」

惺しずかは悔しげに答えて言った。苦笑しながら神しのが言う。



「初日から勝ったら志郎の父親としての威厳が無くなるわね。」  
「おいおい、それは御免被りたいぞ。」

焦りながら志郎は言った。皆が苦笑する。そんな時、雨がぽつぽつと降り始めた。

「雨が降り出したわね。宿に戻りましょうか。」

神がそう言い、皆が頷いて宿の中に入って行った。

「ところで、レネアだったわね。」

神がそう言う。レネアが答えて言った。

「はい？何ででしょうか？」

「いつまでミルについて行くつもり？」

神に言われてレネアは少し考えてから言った。

「えーっと、飽きるまで。じゃ駄目ですか？」  
「いいわよ。」

あっけらかんと神は答える。ミルは焦りつつ言う。

「ええー！マスターいいんですか？」

「ええ。嫌ならミルは追い払ってるでしょ？」

神はそう指摘する。ミルは指摘されて苦笑しつつ答える。

「それは、そうですね。でもレネアちゃんの「あれ」はちよつと。」

「「あれ」？「あれ」って何ですか？」

晶が問い尋ねる。レネアが晶の傍に来て言う。

「こういうことですよ。うふふふ♪」

そう言いつつ、晶の胸などを触り始めた。吃驚して晶が言う。

「ちょ！ちよつと！レネアさん、止めて下さい。」

「あ、晶さんも気持ちいいなあ。」

レネアが晶をいじりながらそう言った。アーレフが立ち上がり言う。

「止めていただけませんか？」

それを聞いてレネアは「何か」を読み取り、手を控えた。そして言う。

「はい。お兄さん何か怖い。」

「勘は良いのねえ。まあ、ミルだけで我慢なさいな。晶はアーレフと一緒にいるんだしね。」

神がそう言う。晶は顔を真っ赤にしていた。アーレフは少し不満げに座る。苦笑しつつ志郎が言った。

「何とも面白いのが来たなあ。」

「良いんじゃない？あたしは別に構わないと思うわ。」

神しのはそう言った。慍しずかが言う。

「母上、身体をいじるのに何か不都合でもあるのか？別に問題ないと思うのだが。」

それを聞いて神しのは苦笑しつつ言った。

「慍しずか、自分のものを不用意に犯されたらあなたはと思う？」  
「それは・・・多分怒るな。」

慍しずかはそう答える。神しのは微笑みつつ言った。

「つまりそう言うことよ。彼らもそう言う気持ちだったって事。」  
「ふむ・・・学ぶことが多いのだな。」

頷きつつ慍しずかはそう言った。ラミアアが言う。

「学ぶのは楽しい。」

それを聞いて慍しずかがラミアアに言った。

「よし、ラミアア、一緒に学びに行こう。」  
「どこに？」

「そうだな・・・。」

二人はすでに行動を起こす気で満々であった。苦笑しつつ神しのが言う。

「なんか、騒々しくなっちゃったわねえ。」

「良いんじゃないか？俺は良い事だと思うが。」

志郎が答えてそう言う。神しのは呆れつつ言った。

「まあそうだけどね。ただ志郎・・・」

「ん？」

「慍しづかに負けないでよ。」

「肝かんに銘じておこう。」

やれやれと言った様子で志郎が答えて言った。アーレフたちは微笑ましくそれを見ていた。

雨が外では降っていた。しかし、それは次の晴れを予時しているのだ。

## 宝物（後書き）

お互いに、貴いものを認め合う神達<sup>しの</sup>。彼らはアーキレストの街を旅立つ事になる。次は何処に向かうのか。また、其処には何が待ち構えているのか。

次回「惺<sup>しずか</sup>」。

貴方にも良い風が吹きますように。

惺（しずか）（前書き）

アーキレストの街を旅立つ神達<sup>しのかみ</sup>。彼らは何処に向かおうとするのか。  
そして行く先で何があるのか・・・。

## 惺（しずか）

小説 風の吹くままに

### 第十二章 惺しずか

「んゝ、昨日の雨が嘘のような天気ですね。」

アーレフは、清清しく晴れた空を見ながらそう言った。雲少なく晴れており傍目にも気持ちのいい朝であった。そして階下ではいつもの取り組みが行われようとしていた。ただ、以前とは少し違う形で。

「これでよし。二人とも結界の範囲を忘れないようにね。」

神しのがそう言う。志郎と惺しずかはお互い頷いた。二人を睨み、神しのが言う。

「さあ！かかってきなさい！」

その号令で二人は神しのに襲い掛かった。「気」を練り上げ「力」を放ち神しのに攻撃を加えていく傍目には神しのをぼこぼこにするように見えるかもしれない。しかし、攻撃が終わるとそこには無傷の神しのの姿があった。そして神しのが動く！その速さに常人の目は追いつかず志郎と惺しずかは吹き飛ばされる。しかし二人はすばやく立て直し二手に分かれた。二人は息を合わせて神しのに向かって「力」を叩き込む。しかし神しのはその「力」を弾き返した。間髪いれずに二人は神しのに近づく、そしてすばやい打撃を「気」を載せながら叩き込んだ。が、すぐさまそこで爆発が起こり二人は吹き飛ばされてしまった。そこで「結界」が開放された。

「ふう、流石に二人相手はしんどいわね。」

神がそう言いながら出てくる。吹き飛ばされたが、そこから起き上がりつつ志郎が言う、

「やれやれ、二人がかりでも話にならんな。」

そう言われ、苦笑しつつ神が答えて言う。

「簡単に負けたら「神」としての威厳が無くなるわよ。」

「まあ、それはそうだろうが・・・人間の理解でしかまだ戦えないからな、俺は。」

志郎はそう苦言を呈した。神が苦笑しつつ言う。

「これからじゃない。今度からは慍もいるしね。って、慍は？」

二人は慍が飛ばされた方向を見た。慍はまだ横になっていた。別にダメージで起き上がれないわけではない。単に考え事をしていただけだった。

「慍？どうしたの？」

神が尋ねる。慍はそれを聞き起き上がった。そして神のほうに向かいながら言う。

「すまない、母上。少し考え事をしていた。」

苦笑しながら神が言う。



「どうしたの？」

「いや、俺もまだ「力」の使い方が良く分からないからどうすればよいのか悩んでいたのだ。」

惺しずかはそう言った。言い換えるなら、うまく「力」を使いこなしたい。と言ってる訳である。苦笑しつつ神しのが言った。

「志郎、油断すると惺しずかにすぐわれそうね。」

「ああ、これは気をつけないとな。」

志郎も苦笑しつつ言った。惺しずかは何のことか分からずにきょんとしていた。ラミアが宿から出て来て言った。

「修練は終わったのか？そろそろ朝食らしい。」

「分かった。すぐ行くぞ。」

惺しずかはそう答えて宿のほうに向かって行った。その様子を二人は微笑ましく見ていた。

「では、今日出発でいいのね？」

神しのは皆に聞いていた。皆は頷く。神しのは全員を確認した後でアーレフに向いて言う。

「アーレフ、次に留まるのは彷徨う森のエルフの郷になりそうだけ

どそれでもいいのかな？」

アーレフは答えて言った。

「それは楽しみですね。エルフの文献や伝承も知りたかったんです。」

神は苦笑しつつ言った。

「いや、あなたの楽しみも大事だけど、晶との式の話よ。街中でする手もあったんだけど、ここではすでにあたしがしちゃったし、エルフの郷でもいいかって聞いたのよ。」

「ああ、なるほど。私は構いませんが。王都に戻ってからでも良いですし。」

アーレフがそう答えたのを聞いて、ふと、神が思いついたように言う。

「ああ、なるほど。では一旦戻りますか。」

「ええ?!」

神がそう言ったのを聞いて全員がそう言った。

「おい、神本気で言ってるのか？」

志郎が心配しながら言う。神はけろっとしつつ言った。

「ええ。彼は殿下だし壮大な式が見られるわよ。」

「いや、そう言う問題じゃなくてだな……。」

「なに？」

「レミアルト王都に帰るまで二ヶ月程度はかかるだろう？」

「いいえ、一瞬で済むわよ。何のために空間跳躍の力があると思うの。」

「あ……。」

「全く、あたしを誰だと思ってるのよ。」

神は志郎が理解できていないことに腹を立てつつそう言った。苦笑しつつ志郎が言う。

「いや、旅をするのが当たり前になってたよ。お前が力をセーブしてることを念頭に入れていなかった、すまん。」

「全く……あたしに追いつくんでしょう？これから大変なんだから頑張るなさいよ？」

神はそう志郎に言った。志郎は答えて言う。

「ああ、油断すると慍しずかにも負けるからな、頑張るさ。」

「では、仕度が終わったら宿の裏手に集合しましょう。表通りだと無関係な人間も多数巻き込むからね。」

神はそう言って指示を出した。全員が了解して仕度に取り掛かっていった。

「さて、っと。皆準備は良いわね？」

神がそう言うと全員は肯定の返事をした。

「じゃあ、はじめるわ。」

神がそう言うと、彼女の身体は輝き始めた。「力」が集まり始め彼女の目の前の空間が歪み始めるそして大きな門の大きさになった。光り輝くそれを見ながら神が言った。

「うん、上出来ね。さあ、行きましょう。」

そう言って神からそこに入ってしまった。他の面々も続いていく。全員がそこに入るとその大きな門は淡く見えなくなっていき最後には消え去ってしまった。

光の洞窟を皆は歩いていった。

「なんか不思議な感覚だな。」

志郎がそう言う。神が微笑みながら言う。

「まあ、空間を直接つなぐといろいろ不都合があるからこういう中間点があると何かと便利なのよ。そのための場所だから、ここは。」  
「なるほど、俺も覚えておかねば。」

惺がそう言う。苦笑しつつ神はそれを見ていた。そろそろ出口である。

「見えてきましたよ。」

ミルが言う。レネアがミルを引っ張りながら言う。

「あたし達で一番乗りしましょう。」

そう言って二人で駆け出していった。それを見てラミュアが言う。

「惺しずか私たちも行こう。」

「よし、行くか。」

惺しずかはそう答えて二人で走り出した。その様子を見つつアーレフが言う。

「本当に微笑ましいですね。これも最後になるかと思うと感慨深いです。」

「やはり、王都で最後にする予定だったのね。」

神しはそう言った。アーレフは溜息をしつつ答えて言った。

「やはりお分かりでしたか。第三王子とはいえ長期の王都不在はま  
ずいですからね。そろそろか、とは思ってはいたのですが、神しさんの  
勧めがなければまだずるずるとやっていたかもしれません。です  
から、今回はいろいろ学ばせていただきましたよ。」

「そう、でも、あたしはお節介だからね。また呼び出すかもよ?」

神しは悪戯小僧のようにそう言った。アーレフが笑いながら言う。

「その時は是非御願いますよ。もし私がいけなくてもその子孫が  
いけるでしょう。」

「そうね。是非そうしたいわ。」

神が感慨深くそう言った。そうして一行はレミアルト王都の近くに  
出た。

王都の入り口は相変わらず大勢の人々で賑わっていた。

「相変わらずですねえ、ここは。」

ミルがそう言う。レネアは興味深そうに聞く。

「ミル様。ここに来たことがあるんですか？」

「ああ、レネアちゃん。まだマスターと二人で旅をしたときにね  
。」

ミルがそう答えた。ラミアも感慨深そうに城門を見る。そして言  
った。

「大きいな。」

「確かに。俺もこれを一撃で壊せるほどの力が欲しいところだ。」

惺しずがそんなことを言う。苦笑しつつ志郎が言った。

「いきなりこの大きさか。スケールが大きいというかなんと言うか・  
・。」

そして、一行は城門の衛兵のところまで来た。

「通行証を持っていれば提示されたい。身分等明かせるものがあれば宣誓でもいいのでお願いする。」

衛兵はそう言ってきた。それを聞いてレネアが進み出ていく。

「レネアちゃん？」

ミルが不思議がって言う。レネアは衛兵の前に進み出て言った。

「あたしはレネア。彷徨う森のエルフの郷の長ランヴェルサイラー  
ヴの末娘。これでは宣誓にならないかしら？」

それを聞いて隊長らしき男が答えて言った。

「こ、これは、わざわざエルフの郷からお出ましありがとうございます。  
ます。今回の趣は如何様にて？」

それに答えてレネアが言う。

「こちらに居られるあなたの国の王子アーレフ殿のご結婚の儀よ。」

そう言われて、隊長はアーレフの存在に気づく。

「アーレフ様?! これは居られると存ぜず、申し訳ございません。  
すぐ国王にご連絡いたします。どうか一行の方はこちらにおいでく  
ださい。」

そう言って、一行を城門の中にある大きな休憩室のような場所に案

内した。

「ほえ。レネアちゃんっていいところのお嬢様だったんですね。」

ミルが感心しつつ言う。レネアはけろっとして言う。

「そんなことはどうでもいいんですよ。ミル様。今夜はイイコトしましょうね。」

「え。昨日もしたじゃないですか。」

ミルはレネアとそんなふうに問答を続けていた。神が苦笑しつつ言う。

「結果的にだけどレネアのおかげですんなりは入れてしかもアーレフが直接言わずに王族とコンタクトが取れそうな不思議な状況になったわね。」

アーレフが答えて言う。

「そうですね。レネアさんがエルフのお偉いさんの娘だったとは・  
・見かけに騙されてはいけませんね。」  
「まああたしもその一人よね。」

神がそう言って志郎は苦笑した。

暫く一行が談笑していると城からの従者が来た。



「アーレフ様。国王様がぜひともお会いしたいとの事。ご一行様ともどもお城まで来ていただきたいのですが。」

従者はそう言う。アーレフは答えて言った。

「分かりました。行きましょう。」

そう言って一行は用意された馬車に分乗した。城は王都の中心部にあり大きな堀と巨大な城門また堅固な城壁によって守られていた。それらを見ながら惶<sup>しずか</sup>は言った。

「大きいな。こういうものを作れるように俺はなれるだろうか。」

「頑張ればできる。」

ラムミアがそう答えて言う。そんな様子を見て、神<sup>しの</sup>と志郎は微笑ましく思った。城の近くで一行は馬車から降りた。ここからは徒歩で行くことになる。今まで馬車から見た城が更に大きく見える。神<sup>しの</sup>が城を見つつ言った。

「これだけのものを良く造り上げたわね。」

「確かなな。何年かかったかは知らないが人が造り上げた中では最近のものでは最大の一つかもしれないな。」

志郎が感慨深くそう言った。そうして一行は城に入っていく。城内は広く、無駄がない機能的な造りをしていた。戦闘用の城ではないので内政重視の機能が考えられた城になっていた。アーレフたち一行は正門から入りそのままメインゲートを通り閱兵広場を抜けて王の間に入った。王の間では王と王妃が席に座り王子を待っていた。アーレフは王の前で屈み王家のしきたりに沿った儀礼で挨拶をした。

「父上、母上もお変わりなく。第三王子アーレフⅡレミアルト、不肖の長旅からゆえあつて舞い戻って参りました。」

それを聞き、王が答えて言う。

「良くぞ帰ってきた息子よ。伝え聞く話によるとどうやら、嫁を見つけて式を挙げる意向と聞いたが真か？」

「はい。素晴らしい伴侶を見出し了承を頂きました。出身は皇の国、巫女をされている方で、日向晶と言われます。また、祝福していただくため一緒に旅をしていた方達にも同行を願いました。また、この方達のおかげで王都まで急遽戻ってこれもしました。」

アーレフはそう報告する。同時に晶が進み出て王の前で礼を示した。

「なるほど、素晴らしい女性のようなだ。それにお前が選ぶことには今まで間違いなどなかった。安心して任す事が出来よう。よろしい、数日後正式な発表を王都に発する。式はその後になるがよいな？」

王はそう宣言した。アーレフは一礼を持って返事をする。

「王子の了承は得た。二人の部屋は特別に用意する上、下がって待っているがよい。さて、後ろの一行と話がしたい。前に出てこられるがよい。」

王がそう言ったので全員は前に出てきた。

「これはレネア殿。私がまだ幼い時以来かな。」

王がレネアにそう言った。レネアが答えて言う。

「そうね、もう五十年位前かしら？」

「それくらいになるかな。わざわざ御主まで来てくれるとは感謝する。」

王はそう言った。レネアは答えて言う。

「あたしは、アーレフの式を見に来たというよりはこの一行に同行してきたと言うほうが正解だけだね。今のあたしのいい人はこの方だから。」

そう言ってレネアはミルに寄り添った。苦笑しつつ王は言った。

「相変わらずだな、レネア殿は。ところで、そなたは普通の人とは見えないがお名前を伺っても宜しいかな？」

そう言って国王は神しに向かって言った。神しは答えて言う。

「あかなどめ杜神よ。」

「ほう・・・そなたが。遠見の長が言っていた、新たに舞い降りた「神」とはそなたのことだったか。そうか、アーレフはそなた達に守られていたのだな。ふがない父に代わり心から感謝する。」

そう言って国王は頭を下げた。神しは答えて言う。

「あなたはあなたの責任を負っているわ。あたしにはあたしの責任がある。だから、あたしはその中で彼を手伝っていただけ、気にすることじゃないわ。逆に彼が大きな責任を果たしていることに感謝した位よ。」

「そう言ってくれると助かる。私はこういう身分のためあまり私事

に時間を割けぬが出来るなら御主と話し合いたいものだ。」

王はそう言った。神は答えて言う。

「そうね。話せるときに話し合いましょう。」

そうして一行は王の前から下がり指定された部屋に入った。

「さて。式まで日取りがあるから暫く自由行動ってところかしら？」

神が皆にそう言う。それに答えてレネアが言った。

「なら、あたしはミル様とあまゝいひと時を過ごさせてもらいます。ミル様、部屋に参りましょう。」

そう言ってミルを引っ張りながら部屋を出て行く。ミルは抗議しつつも、それほど嫌がる素振りをせずに一緒に出て行った。苦笑しつつ神が言う。

「なんだかんだ言いつつミルも楽しんでるわねえ。」

「そのようだな。まあ、本人が拒否できるのにしてない以上、俺たちがどうこう言う問題でもないが。」

志郎も苦笑しつつそう言った。惺が言う。

「母上、城を歩いてもよいのだろうか？」

「城内を？国王は自由にしろとわざわざ言ってくださったから問題はないと思うわよ。但し、私たちが知らない人たちも沢山いるから何者か尋ねられたらアーレフの来賓である事を必ず言うこと。分かったわね。」

神は説明しつつそう言った。頷きつつ慍しずかが言う。

「了解した。ラミユアと一緒に行ってもよいだろうか？」

「ラミユアがいいと言えればいいわよ。」

神がそう答え、ラミユアは肯定の表情をした。それを見て慍しずかが言う。

「なら、行こう。」

そう言って慍しずかは手を伸ばしラミユアの手を掴み、一緒に部屋の外に出te行った。

「いきなり静かになったわねえ。」

神がそう言う。苦笑しながら志郎が答えた。

「そうだな。俺たちはどうするかな。」

「そうね、あたしは少しやりたいことがあるから志郎もそこらをぶらついててもらえる？」

神が志郎にそう言った。志郎はやや不思議に思いつつも答えて言う。

「ふむ。何か企んでるようだが、まあ、心配するようなことはないだろうし、お言葉に甘えて俺も少しぶらつくかな。人間時代の知り

合いも多少は居るから旧交でも暖めてくるさ。」

「ごめんなさいね。志郎にもつきあわせたいけどちょっとあたしがこだわりたい所があるの。」

神がそう、謝りつつ言った。志郎が神の頭を撫でながら言う。

「心配するなって。どうせ後で俺たちを吃驚させようって腹だろう。」

「

神はそう言われてギクツとしながら答えて言った。

「う・・・いや、その・・・まあ、お楽しみって事で。」

そう言いつつ、神は部屋を後にした。志郎は苦笑しつつ言う。

「全く何かまた考えてるな。まあ、飽きないから良いけどな。」

そう言いつつ、志郎も友人がいると思われる場所へ移動を開始した。

「レネアちゃん。まだ日が高いですよ？」

ミルがそう言う。しかしレネアはベットにミルを連れ込みながら言う。

「ミル様。愛し合うのに時間は関係ないですよ。あまゝいひと時を過ごしましょ。」

「いや、そうじゃなくて。ちょ、ちょっと、そこはだめだつて。」

ミルが抵抗しつつ言う。レネアがネチネチとミルを弄り回しながら言った。

「またまたあ、これだけ感じておいて駄目なんてないでしょう。今日もゆっくり楽しみましようねえ。うふふふ。」

そう言いながら、レネアとミルはベットの中で楽しんでいた。

傭<sup>しずか</sup>はラミアの手を掴み一緒に場内を歩いていた。時折すれ違う兵士や使用人たちが二人を見ながらすれ違っていく。二人はそうやって歩きながら兵士が訓練する訓練場の前まで来た。そこでは交代で兵士が修練を積んでいた。激しく行う者、緩急を入れて研究熱心に行う者、他人を見ながら研究を行う者、と様々であった。

「何か楽しそうだな。」

様子を見ながら傭<sup>しずか</sup>がそう言った。ラミアも頷く。二人を見つけた兵士が声を掛ける。

「おや、お嬢さんたちこんな場所で見学かな？」

傭<sup>しずか</sup>が答えて言う。

「俺たちも参加してよいのだろうか？」

その質問を聞いて兵士は苦笑しつつ言った。

「ここは兵士が自らを鍛えるために修練してる場所だよ。刃がないとはいえ武器がもろに当たれば怪我をするし、受け手が下手をすれば死亡する恐れもある。まあ、緊急時のためにここでは司祭様が待機してるけどもね。そう言う訳だからお嬢さんたちにさせるわけにはいかないなあ。」

「ふむ、しかし、毎朝、俺は母上や父上と修練しているのだが、この修練よりはきついと思うのだが。それでも駄目なのだろうか？」

惺しずかがそう、正直に答えて言う。それを聞き兵士は驚きつつ言った。

「ここよりもきついだって……。王城の修練はそんなに楽なほうじゃないのにここよりもきつい修練を君はしてきたというのかい？」

「ああ、毎朝してきた。この、ラミアがいつも見ているから証言もしてくれる。」

惺しずかはそう言った。ラミアは頷きつつ惺しずかの意見を肯定する。兵士は驚きつつ考えた。そして暫くしてから答えて言う。

「いいたい事はわかった。隊長に相談するから少し待っていてくれ、今隊長が近くに居ないのでな。少し時間がかかるからここで見てくれるかな？」

惺しずかは頷きつつ答えた。

「分かった。ご親切感謝する。」



そう惶<sup>しずか</sup>が答えたのを見て、兵士は苦笑しつつ隊長を探しに出て行った。

志郎は城内を歩いていた。以前と景色は変わらないな。そう思いつつ知った道を歩いていた。旧友はあそこだ。そう思い、友人がいるであろう場所へ足を進めていた。ドアを叩く。

「どうぞ。」

中から返事が聞こえた。志郎はドアを開けて中に入る。中の人物は志郎を見てしばらく考えたが思い出したように言った。

「剣志郎か？」

志郎が答えて言う。

「以前はな。今は苗字が変わって、杜<sup>あかなし</sup>志郎、と言わせてもらってる。」

志郎がそう答えると、男は笑顔で喜びつつ、席を立ち上がり歓迎の意を示した。

「良く来たな、二年ぶりというところかな。」

「ああ、もうそんなになるのか。久しぶりだな、レオンハルト。」

「それはそうと、今日はどうやってここに？また冒険者の依頼としてか？」

「いや、アーレフ王子の結婚式に出席するためだ。」

「何？王子が結婚されるのか？初耳だぞ？」

「ああ、今日国王に報告したからもうすぐ発表がされると思うぞ。」  
「そうか。まあ、どちらにしてもお前と出会えたのは嬉しいぞ。また、一緒にやれるのかな。」

「まあ、修練くらいはな。今は妻子持ちなんだな。以前ほかまえるかは、断言できん。」

志郎がそう言うと、レオンハルトはきょとんと志郎を見た。そして暫くしてから笑い始める。

「お前が？これは驚いた。お前が妻子持ちになったとはな。その辺も聞かせてもらうかな。」

「あ、ああ・・・少し恥ずかしいがお前なら安心して言えるからな。」

「ほう。まあ、今は仕事中的な。そうだな。明日お前のところに迎えを出そう、そこで話を聞こう。」

「わかった。では、俺はそこらをふらついてくる。またな、レオンハルト。」

志郎はそう答えて、そこを後にした。レオンハルトは志郎を送り出した後、席に座りながら言った。

「あの志郎がな・・・。一番結婚には縁がなさそうだったのにどういう風の吹き回しやら、まあ楽しめそうだ。」

そう言って、手にした書類を再び見始め、仕事に戻った。

神は人目のつかない寂れた部屋の中に居た。侍従からあえてそう言う部屋を教えてもらったのである。そこで神は「力」を使い始めた。空間を曲げて「目的地」へ繋ぐ。繋がった目的地へ向かう。そこには魔族が居た。

「ほう、急な来訪だな。今日は何用かな？」

魔族はそう答えて言う。神は笑顔で答えて言った。

「急にごめんなさいね。今日はあなたの力を少し貸してもらいたくてね。お願いしてもいいかしら？ グラニデウス。」

魔族グラニデウスは答えて言った。

「お前の希望とあれば私としては拒む理由はないぞ。しかし、私の力を使って何をする気かな？」

神は悪戯小僧のように笑いながら言った。

「何、大した事じゃないわよ。あなたの力とあたしの力で一人、私の子供を創ってみたくなっただけよ。」

そう言われて、グラニデウスは興味深そうに言った。

「ほう、それは実に興味深いな。そう言う事例は私は聞いたことがない。恐らく初めての考えかもしれないな。しかし、お前はそれでよいのか？」

「ん？ どういうことかしら？」

「志郎と言う伴侶が居るのだろう？私との間で子供を創ることはいささかまずいのではないのかな？」

グラニデウスはそう忠告する。神は慌てつつ言った。

「な・・・なんであなたまでそんなことを知ってるのよ。まあ・・・言われることはもっともだけど、どちらにしてもあたしの子供には間違いないからね。問題がないわけじゃないけれど、些細なことよ。あなたが気にするほどのことじゃないわ。」

「そうか、ああ、私たちも他の世界に関しては関心があってな。特にお前のような特異な者には様々のものの目が向かっているものだよ。」

微笑みつつグラニデウスは答えて言った。そして続けて言う。

「さて、私の力を渡せばいいのだったな。」

そう言いつつ、グラニデウスは「力」を使い始め神に渡す準備を始めた。それを見て神は笑みを浮かべて答えた。

「助かるわグラニデウス。これであたしの新たな「娘」が出来るわね。」

「ほう。それは楽しみだ。また、私たちの楽しみが増えるということだな。」

グラニデウスはそう言う。神は苦笑した。

「レネア、もう駄目かも、いっちゃう……。」

そう言ってレネアはベットの中に埋まった。ミルは、疲れつつレネアを見つめて言う。

「レネアちゃん。可愛いし、大事ですけど。これだけはまだついていけないですねえ……」

そう言って、ミルはレネアの頭を撫でていた。

「ほう……修練をな。」

隊長は兵士から報告を受けてそう言っていた。

「は。城内に居られる方ですから、恐らく普通の方とは思えませんし、不遜に扱うのも大変かと思いましたので隊長まで意見具申に参りました。」

兵士はそう報告する。隊長は答えて言った。

「よく言ってくれた。お前の判断は正しい。先ほど、国王から通達が出来た。彼らはアーレフ王子のご友人らしいのだ。粗相が無くて良かったな。」

そう言われて、兵士はより緊張した。王子の友人ともなればかなり

の来賓である。無礼な扱いが報告されようものなら厳罰ものだからだ。隊長が苦笑しながら言う。

「まあ、そんなに緊張するな。一緒に旅をされていた方らしくかなり腕も立つらしい、子供のように見えても甘く見るな、という通達までついている。だから俺たちのほうがある意味覚悟がいるぞ。覚えて置け。」

「は。」

兵士はそう言われて短く返事をした。隊長は続けて言う。

「ま、修練自体は許可しよう。ただ、お前達が相手をするかどうかは、確か二人来ていたんだったな。その二人にまずはしてもらってから決めたほうがいいな。もし、我等の方が勝ってるなら問題はないが問題は彼らが優れている場合だ。その時は我等では足手まといにしかならんからな。」

「了解しました。お二人に伝えてまいります。それでは失礼します。」

兵士はそう答えて去っていった。隊長が言う。

「この報告書通りなら、我々では話にならんからな。」

志郎は城内を散策していた。幾人かの旧友とも話が出来た。しかし、特定の目的地があるわけでもないのであちこちをふらついているのであった。

「さて、当てがあるわけじゃないし、レオンハルトは明日まで忙しそうだしな。どうするか……。」

志郎はそう言いながら城内を歩いていた。

「ありがとうグラニデウス。突然だったのに助かったわ。」

神はそう言った。グラニデウスは答えて言う。

「造作もないことだ。今度、その娘を私にも見せてくれ。」

そう言われて神が笑顔で答えて言う。

「ええ。楽しみにしておいて。」

そう言って神はゲートからもとの場所へと戻っていった。それを見つつグラニデウスが言う。

「やはり、実に興味深いな、「天」の奴らとは違い、公平に物が見れている。偶然の出会いとはいえこの関係は大事にしたいものだ。」

笑みを湛えつつ彼は外を見ていた。

「よし、彼からもらえたから後は造り上げるだけね。」

神は帰り様にそう言い、部屋の中で「力」を使い始めた。彼の「力」を包みあげた後に形を整えていく。それは次第に女性の姿に神に似た姿になっていった。

「ふう。もう少しね。頑張らないと。」

神はそう言いつつ、最後の仕上げに入った。長い髪が見え始め、美しい顔立ちが明らかになった、背格好は神に似ているため小さいがスタイルは非常に良く神と大差がない。笑みを浮かべつつ神が言った。

「これでいいわね。さあ、玲目覚めなさい。」

神に言われて、玲は目を覚ました。彼女の両目は色違いで右目が輝く緑色、左目が輝く血の色だった。鮮やかな漆黒というか闇とかさそう言う形容が出来る長い髪、色白の肌、そう言う姿をしていた。

「おはようございます、母上。」

玲はそう答えて言った。神が言う。

「おはよう。気分はどうかしら？」

「問題ないと思います。良くも悪くもないですね。」

玲はそう答えた。神がそれに満足しつつ更に言う。

「そう、では玲、左目を瞑りなさい。」

「はい、分かりました。」

玲はそう答えて、左目を瞑る。神はそれを見て言った。



「今度はどうかしら？」

「・・・そうですね。特には。変わりがなくか。」

玲はそう答えていた。明らかに口調が変わっている。神は満足しつづけた。

「では次は左目は開けて右目を閉じなさい。」

「わかりました。」

玲はそう言って言われたとおりにする。神は確認してから言った。

「さあ、今度はどうかしら？」

「別に、変わりはないわ。」

玲はそう答えた。神は満足そうに言う。

「よし、それなら良いわね。夜にでも皆と合流できたらあなたを紹介しましょう。それまではあたしと一緒に何かしましょうか。」

「分かりました、母上。」

玲はそう答えた。神は玲の肩を抱き自分の与えられている部屋へ戻っていった。

「レネア、寝てたんですね。」

レネアは起き上がって言った。ミルが答えて言う。

「まだ寝てても良いですよ。」

「いいえ、レネアだけ満足しては失礼です！ミル様にも是非気持ちよくなってもらいますよ。うふふふ。」

レネアはそう言いつつ、ミルをあちこちいじり始めた。

「まって、レネアちゃん、あ、駄目だって・・・あ、やだあ・・・あ・・・」

二人はまたベツトで楽しんでいた。

慍<sup>しずか</sup>は兵士達の修練を見ていた。そこへ先ほど隊長に報告していった兵士が戻ってきた。

「許可が下りたよ。ただ、初めは君達二人で修練してもらって、もし我々が参加出来そうなら一緒にやってもいいと言う事だったよ。」

兵士は慍<sup>しずか</sup>にそう報告した。慍<sup>しずか</sup>はお辞儀をしつつ言う。

「これは、大変感謝する。言われることは理解できたので、まずはラミアとやらせてもらおう。ラミア、いいか？」

慍<sup>しずか</sup>に言われてラミアが答える。

「私はいつでも出来る。」

それを聞いて惺しずかが言った。

「分かった、行くぞ。」

そうやって、惺しずかは構えた。ラミアも構える。惺しずかと話していた兵士はそれを見ていた。暫くの間二人は対峙しながら間合いを取っていたが何が引き金になったのか二人してお互いに前進し始めて相打ち状態になった。拳と拳、足と足が、目を追うのが間に合わないほどに叩き込まれる。兵士は絶句しつづ言った。

「これは……。隊長が言われたとおりだな、見た目に騙されてはいけない。」

そう言って、感心しつつ様子を見ていた。また、他で修練していた兵士達も二人の修練に気づいて見学するものが出てきた。二人の修練は更に続いていた。拳同士の打ち合いから一旦離れてお互いに「気」の練り合いとなった。そして、それなりに溜まった所でそれを使うべく間合いの調整に入る。隙をつくようにしてラミアが惺しずかに向けて放った。惺しずかはそれを見てすばやくかわす。「力」は惺しずかをかすめて地面に激突しあたりに土煙が舞った。視界が遮られている中で惺しずかはラミアを「見つけ」ラミアに向けて「力」を放つ。しかしラミアはそれを「見て」手から出した「光剣」で切り裂いた。

「くっ。ラミアにはそれがあつたな。俺のほうが少し不利か。」

惺しずかはそう言った。ラミアは無言のまま惺しずかに向かって「光剣」は使わずに近づいて拳を放った。惺しずかは「光剣」を考えていたので不意を衝かれて吹き飛ばされる。

「そこまでにしとけ、あまりやりすぎるな。」

横で声が聞こえる。二人は手を収めた。あたりの兵士からは喚起の  
声が出た。あまりに素晴らしい戦闘だったからである。

「今のは素晴らしい。」

「いったいあれはどうやったんだ？」

「魔道の一種なのだろうか？」

「しかもあんなに可愛い女の子が・・・」

と、様々に言われている。志郎が苦笑しつつ言った。

「お前達、いきなり全開でやるな。他の人たちに迷惑が行くかも知  
れないだろう？」

そう言われて慍<sup>しずか</sup>が済まなそうに答える。

「申し訳ない、父上。ラミアアが相手だったのでつい本気でやって  
しまった。しかも俺は負けそうだったし・・・」

悔しそうに言う慍<sup>しずか</sup>を見てラミアアが言う。

「慍<sup>しずか</sup>も頑張っていた。結果はまだ分からない。」

「そうかな・・・？」

慍<sup>しずか</sup>は疑問に思いつつ聞く。ラミアアが答えて言う。

「また今度、やろう。今は止めておこう。」

「ああ、またしよう。」

笑顔で惺<sup>しず</sup>は答えた。志郎が苦笑しつつ言う。

「二人で楽しむのは良いが、俺たちは力をセーブするか神<sup>しの</sup>やミルのように結界でも張らないと他所に迷惑を掛けるからな。今度からは気をつけてやれよ。」

そう言われて二人は肯定の返事をした。兵士達の間には志郎を見知っている者もいて今度は志郎の会話にもなっていた。

「あれは剣志郎殿では？」

「間違いない、今城に居られるのか。是非ご教授いただきたいものだ。」

「彼の体術は素晴らしいと聞く、もしかして彼女達は彼と関係があるのだろうか。」

そう兵士らは会話をしていた。志郎が苦笑しつつ言う。

「さて、今度は俺が巻き込まれたな。惺<sup>しず</sup>、ラミア暫く俺と一緒に付き合ってもらおうぞ。」

そう言われて二人は「はい。」と元氣良く返事をした。

神<sup>しの</sup>は玲にいろいろと「教育」をしていた。惺<sup>しず</sup>とは違い神<sup>しの</sup>は玲に別の方法を試していたのである。

「まあ、こんな感じね。」

神しのがそう言う。玲が答えて言った。

「なるほど、母上のこれまでの経緯が良く分かりました。私の誕生の経緯も。」

「そう、やはりあなたを創って正解だったわね。」

神しのはそう答えて言う。そして神しのは玲をまじまじと見つめた。玲はその様子に戸惑いつつ言う。

「母上。私に何か？」

見つめながら神しのが答えて言う。

「玲・・・あたしにそっくりだから食べちゃいたいわねえ・・・」

「は？食べる、ですか？」

神しのの言うことが理解できなくて玲は言う。神しのは苦笑した。

「ああ、別に本当の意味で「食べる」訳じゃないけどね。丁度今、レネアとミルがやってるようなものね。」

「は、はあ・・・」

玲は理解が出来ずにそう答えた。苦笑しつつ神しのが言う。

「まあ、いきなりそこまでいったら志郎がやきもち焼きそうだわ。今回はやめておきましょう。しかし・・・ミル達良く体力が持つわよねえ・・・」

感心しつつ神しが言った。玲は何のことか理解できずにきよとんとしていた。

「ミ、ミルさまぁ・・・レネアはもう・・・。」

そう言いつつレネアはベットに倒れこんだ。ミルもくたくたな様子で座り込んでいる。相当「やった」ようであった。苦笑しつつミルが言う。

「なんだかんだ言いつつ、あたしもやってますねえ・・・いいようにレネアちゃんに染まってるんでしょうかねえ。」

しかしミルはそれでも良いかな、と思っていた。

「そうだな、この場合は・・・。」

志郎はそう言いながら戦闘に対する解説をしていた。惺しずかとラミユアは学びつつ志郎の模擬の模範として演武を披露していた。そのたびに兵士から拍手が起こる。それを感じながら二人は喜んでいた。

「楽しそうですわね。」

後方から声が聞こえた。兵士の一人が言う。

「こ、これは姫様。」

「姫様？」

惺しずかが言う。姫様といわれた人物が志郎のほうにやって来て言った。

「ええ、私はレミアルト王国息女セレナと申します。あなた方のごとはお父様からお聞きしましたわ。兄上のご友人でいらっしゃるか、よろしくお願いいたしますわね。」

王女らしい挨拶をした。それを見て惺しずかが答えて言う。

「俺は杜惺あかなむぎ。よろしく頼む。」

「私はラミアという。よろしく。」

ラミアも合わせる様に言う。それを見てセレナは不思議そうに見ながら答えて言った。

「お二人とも可愛らしいお嬢さんなのに話し言葉が異なりますのね。」

苦笑しつつ志郎が言った。

「すまないな、親の教育が悪くてね。ラミアの場合は育ちの関係で言葉が苦手だったのでね。」

それを聞いてセレナは手を当てつつ答えて言った。

「まあ、志郎様のお子様なのですか？それにしては大きな方ですが。」



志郎様かなり以前からお子様を作られていたんですの？」

ストレートともいえる質問に志郎は顔を真っ赤にしつつ答えた。

「あ、いや・・・ちよつと説明しづらいのだが・・・まあ、しずか惺は俺の子には間違いはない。ただ、ちよつと経緯が特殊でな。そうだな、アーレフ殿と同席しているときにでもお答えしよう。」

そう言っではぐらかした。セレナはやや不審には思ったがそれ以上は言及せずに言った。

「まあ、後からお話いただきましょう。それよりも、先ほどのお二人の演武が見事でしたわ。今度私にも見せて頂けますかしら？」

「ああいうもので良いのなら何時でもやってやるぞ？」

しずか惺がそう言う。ラミュアも頷いた。それを見てセレナが満足そうに言う。

「それはありがたいですわ。最近、城の外にもなかなか出れなくて刺激が少なかったところですよ。」

苦笑しつつ志郎が言う。

「立场上仕方ありませんよ、セレナ姫、あなたは王唯一の娘ですし・・・」

そう言いかけて、セレナは遮って言った。

「あなたはそれで良いですわね。娘と一緒に談義できますし、私など、部下以外で対応してくれる者など、ほとんどいませんわ・・・」

」

悲しげに言うその姿を見て惺しずかが言った。

「ならば、俺がその一人になってやろう。」

「私もよければ参加する。」

ラミアアがそう言って加わった。セレナが驚きつつ言う。

「あなた達・・・私と一緒にお話とかしてくださるかしら？」

「俺でよければ。」

惺しずかがそう言う。ラミアアも頷く。志郎が苦笑しつつ言った。

「セレナ姫、そう言うことですから滞在中は二人とご一緒してください。そうすればご不満も少しは晴れるでしょう。」

それを聞いてセレナは喜びつつ言った。

「では、こっちにいらして、一緒にお菓子でも食べながらお話をしましょう。」

そう言いつつ、二人を自分の部屋へと案内していった。微笑ましく兵士らも見ていたがそのうちの一人が言う。

「最近、いささか物騒になりましたね、姫様は外に出されたことがなかったのです。ですから、相当ストレスが溜まっていたんですね。」

それを聞き志郎が答えた。

「なかなか興味深い情報だな。アーレフ殿が襲われた一件とも関わりそうだな。」

「もしかすると、関係があるかも知れません。最近国王一家を狙う一味がいるらしく、我々も注視はしているのですが敵はなかなか姿を見せないもので・・・。」

兵士はそう答える。志郎は得心しつつ言った。

「余程だな。そう言う意味では我々がここに來たのは運が良かったということか。」

その志郎の言い方に頷きつつ兵士は言った。

「全くです。アーレフ殿下にも信任がある志郎殿達がご一緒なら我々としても心強い限りです。」

そう言われたが、志郎は苦笑しつつ言う。

「ありがたい言葉だが、俺は、一行の中では弱いほうでね。惺しずかに抜かれないかどぎまぎしてるくらいさ。」

志郎はそう言うのだが、兵士はその意味が理解できずに戸惑しずかっていた。志郎は苦笑しながら城内に入っていく惺しずかたちを見ていた。

「アーレフがあたし達と一緒に夕食を？」

神は従者がそう言っていたのでそれを復唱するように言っていた。

「はい。セレナ姫も含め晶様、そして皆様とご夕食をしたいとの仰せです。」

従者がそう淡々と報告する。神は答えて言った。

「分かったわ。ではアーレフに一人分人数は増やしておいてと伝えてくださいな。」

「畏まりました。」

従者は恭しくお辞儀をして下がっていった。神が言う。

「夕食の場であなたをお披露目になりそうね。」

「分かりました。恥ずかしくないように振舞います。」

玲がそう答える。苦笑しつつ神が言った。

「普通で良いわよ。あなたは生まれが特殊だからね。」

「はい。」

玲は素直にそう答えた。それを見て神は微笑んでいた。

夕食会は身内とはいえ盛大に行われていた。大きなテーブルに食事が様々に並んでいる。従者達が次々に食器、食事、飲み物を運んで

くる。一行は席についていたがあまりに豪勢なので絶句していた。

「あの・・・アーレフさん。すごい豪華すぎる夕食なんですけど・・・」

晶が遠慮そうに言う。アーレフが苦笑して言う。

「まあ、そう言わずに。王族ともなると建前上貧相には見せれないという困った環境がありまして・・・。これでも控えめにさせたんですよ。」

「これでもか・・・。庶民と違いすぎるのも考え物だな。」

苦笑しながら志郎が言った。アーレフが同意しながら言う。

「そうですね。ですから私は旅をしていたときのほうが好きなんですけどね。まあ流石にこれからはそんなこともあまり出来ませんけれど。」

「あ、ミル様くこれも美味しそうですよ、あ、こっちもいいなあ。」

レネアはすでに自分の世界に入っているようであった。ミルが苦笑しながら言う。

「レネアちゃんまだですよ。きちんと我慢しないと、ご褒美はお預けですからね。」

「お待たせしましたわ。」

セレナが惶とラミユアを連れてやって来た。二人に席を促してから自分も座る。

「遅かったですね、セレナ。」

アーレフがセレナに言う。セレナが答えて言った。

「申し訳ありませんわ、お兄様。新しく出来たお友達と会話が弾んでおりましたの。」

「ほう、それは良い事ですね。最近セレナは城の者に文句ばかり言ってたそうですから。」

アーレフが皮肉っぽく言う。セレナは顔を赤くしながら答えて言った。

「お、お兄様！それは……。ま、まあ、確かにそう言うときもありましたわ。でも、今は充実していますのよ。」

「ふふ、それは何よりですね。まあ、今度は晶さんもいますからより話し易い人は増えるでしょう。」

アーレフはそう微笑みながら答えて言った。続けて言う。

「さあ、食事の準備もできましたし、人も皆揃いました。これにて夕食を始めることに致しましょう。」

そう宣言して夕食が始まった。

「ところで。さっきから不思議に思ってたんだが。」

志郎が言う。神しのがそれを聞いて答えて言った。

「何？」

「いや、神しのの色違いの子が居ないか？髪の色だけ変えたら神しのそっくり

りに見えそうな子が居るんだが。」

志郎はそう言った。皆がそこに注目する。

「あれ？さっきまで居られましたっけ？ミルは気づきませんでした  
く。」

ミルがそう言う。レネアも頷いた。アーレフが言う。

「先ほど、一人分増やしておいて欲しいとおっしゃってた方ですね。  
どちらさんでしょうか？」

「玲あきつというのよ。仲良くしてあげてね。」

神しのがそう言う。玲が立ち上がり皆に向かって挨拶をした。

「母上の紹介に預かりました。杜玲あかなしと申します。不束者ですが、皆  
さんよろしく御願います。」

そう言って玲は深々とお辞儀をした。志郎は絶句する。

「・・・神しの・・・これは何だ？」

「見ての通りだけど？」

神しのはけろっとして言う。志郎は慌てつつ言う。

「俺は創った覚えはないぞ？」

「それはそうよ、あなたとの娘じゃないもの」

神しのはあっけらかんと言う。アーレフは苦笑しつつ言った。

「神さん。結構それって衝撃発言だと思うのですが、どちらの娘さんですか？」

「そうね、晶と縁が深い人よ。ああ、晶ってのはそこにいる日向晶ちゃんのほうね。発音が同じだからちよつとややっこしいけど。」

神はそう説明した。晶は吃驚しながら言う。

「私ですか？私は全然知らないんですけど・・・」

「まあ、あなたが気づいていないときに「彼」は居なくなったからねえ」

神はそう言った。その台詞でアーレフは気づいて言う。

「グラニデウスさんですか。」

その答えに神は肯定した。志郎は驚いて言う。

「魔族の力と融合させたのか。」

「そうよ。」

神はそう答えた。苦笑しつつ志郎が言う。

「全く、何かやりそうだとは思ったが・・・いきなり浮気かよ。」

「ち、違うわよ！誰が浮気なんかしますか。折角知り合ったからやりたかった「実験」を提案しただけなもの。そんなことする訳ないじゃない。」

神がむきになって否定する。苦笑しつつアーレフが言った。

「まあ、落ち着いてください。志郎さんもいきなりそういう言い方



はひどいかと。傷ついたことは分かりますが男性のほうがまずは讓歩して言い分を聞いてあげるべきですよ。」

アーレフにそう言われて志郎は苦笑しつつ言った。

「ああ、すまない。なんか悪い風に考えてたな。神しのは俺たちを驚かそうとしていたのは分かっていたんだが・・・。すまない、神しの。」

「いや、いいのよ。あなたの気持ちを、あまり顧みなかったあたしも悪いわ。」

神しのもばつが悪そうに答えて言う。その姿を見ながらセレナが言った。

「あらあら、そう言いつつ、夫婦で惚気られては困りますわね。」

「あ、いや、これはそう言うわけでは・・・」

志郎が苦笑してそう答えた。神しのは顔を真っ赤にしつつ俯く。玲が言った。

「私はここに居ないほうがよかったのでしょうか？」

それに答えて全員が言った。

「それは絶対にない。」

少しの間の後、笑いが起こった。しばし皆が笑った後、アーレフが言った。

「まあ、そういう結論ですから問題はないですよ。玲さん。しかし、名前が似てるとややこしいですね。」

「あー、ごめんなさいね。あたしはその場のノリで付けるほうだか

ら・・・（^^ゞ」

神が苦笑しつつそう言った。玲が答えて言う。

「私はその場のノリで創られた訳か。」

「あ、いや・・・玲ちゃん、そんなところで闇の力解放しないで・・・（^^ゞ」

神が焦りつつ言う。晶が驚いて言う。

「あの・・・さっきと話し方が違われてるんですけど・・・」

「私のことですか？」

玲がそうやって答える。晶はそれを見て頷いた。苦笑しつつ神が言う。

「玲は完全に「力」を融合させてないから、右目が閉じている状態では闇の側が左目が閉じている状態では神の側が強く発揮されるようになってるのよ。両目のときが一番融合している状態なんだけだね。」

「ですから、私はこのように眼の色が異なるのです。」

玲はそう言って皆に立ち上がって眼を見せた。慍しずかがそれを見て言う。

「玲、美しい眼だな。見入ってしまいそうだ。」

「ありがとうございます、お姉さま。」

玲はそう答えた。苦笑しつつ志郎が言う。

「確かに、突拍子もない実験だな。神らしいとも言えるが。」

「う、五月蠅いわよ。」

神は顔を赤くしつつそう言った。アーレフと晶は微笑ましくそれを見ていた。

「羨ましいですわねえ。お兄様はこういうのを一杯見続けてたのですね。」

セレナがそう言った。苦笑しつつアーレフが言う。

「まあ、お前は閉じ込めておいて私が外を出歩いていたことは謝るよ。しかし、父上にとってはお前は唯一の愛娘だ。そこは大変だが理解してくれ。」

「理屈は分かりますわ。でも、感情まではついていきませんわ。」

セレナはそう言いはぶてる。ミルがボソツと言った。

「セレナ様、はぶてた姿が可愛いですねえ。」

それを聞いてレネアが言う。

「あー、ミル様駄目ですよ。ミル様はレネアだけを見てくださいね。」

そう言って、ミルに抱きつく。ミルは慌てながら言う。

「ちょっと、レネアちゃん、ここでは駄目ですよ。」

「なら、後でうんとしてくださいよ。」

レネアが言う。ミルは苦笑していた。

「さて、今回集まってもらったのは言うまでもないのですが・・・」

アーレフはそう言って話を切り出した。続けて言う。

「私と晶さんとの結婚式のことです。父上と話し合って五日後に行うことに取り決まりました。」

それを聞いて志郎が言う。

「五日後か、結構早いが準備とかは大丈夫なのか？」

「はい。実は、以前から基本的な準備はすでにしていたんですよ。父上は。」

アーレフはそう答えた。セレナが驚きながら言う。

「兄上、それは本当ですか？」

アーレフは頷きつつ答えた。

「ええ、私だけでなくセレナのものも基本的にはすでに準備されています。元々父上は用意周到な方で私たちが生まれたときからいろいろ準備するのが好きな方なんですよね。言い換えるなら準備することに喜びを見いだしている、見たいな感じでしょうか。」

「なるほどね、町の区画整理でも思ったけどあなたの父上は余程緻密な計画が好きな方なんでしょうね。」

神しのがそう言った。セレナが気づいたように言う。

「そういえば、計画も父上は立てますけど、とっさのときの対応も

素晴らしいですが兄上、あれはどうして？」

「それは簡単です。父上はそこまで基本的に想定されているからです。もちろん全てを行うと大変ですから原則とガイドラインをしっかりと整えるという意味ですけどね。」

アーレフは説明しつつ言った。志郎が感心しながら言う。

「いや、実は一つ一つがんにがらめに規則を作るほうが作るほうは楽なんだがな。守るほうはくそ面倒なんだが。お前の親父さんの方はルールを策定するほうが大変でそれに従うほうが優しいという、優れたやり方なんだが言い換えると非常に難しい方法なんだけどな。」

「とても素晴らしい方なのだな。」

ラミュアがそう言った。アーレフとセレナは照れていた。そんな二人を神は微笑ましく見ていた。

「早いのは嬉しいが、アーレフ、お前はもう聞いているか？ 刺客の話を。」

志郎が話を切り出して言った。アーレフが答えて言う。

「はい。父上や、近衛隊長から聞きました。まさか私だけでなく王族全員かもしれないとは、私も考えていませんでしたよ。」

「もしかしたら、帝国の関連かな。」

神がボソツと言った。志郎が考えつつ言う。

「ふむ、確かに可能性は高いな。政治、経済的に安定しているこの国を無理やり奪う必要を感じるのはそこくらいものだろう。しか

も、王族に数多くの不幸があれば付け入る隙は出やすいからな、向こうはそれを狙ってるのかもしれないし、万が一その仕業とばれたとしてもそれを根拠に攻め入るとでも考えていたかもしれないな奴等なら。」

「志郎さんは帝国の人たちもご存知なのですか？」

セレナが志郎に聞いた。苦笑しながら志郎が言う。

「あまり知りたくはなかったがな。冒険者である以上そっちのほうにも詳しくなってしまうてね。当時は一応人間として一流冒険者だったからな。今は三流の神だが。」

そう言ったので、晶がくすりと笑った。

「ふう、美味しかったわ。五日後か、ならそれまで何をしましょうかね。皆でしたい提案とかある？」

神がそう言った。それに答えて<sup>しずか</sup>惺が言う。

「母上、宜しいか？」

「言いなさい、<sup>しずか</sup>惺。」

「ありがとう。兵士達と一緒に修練がしたい。もちろん力はセーブする。」

<sup>しずか</sup>惺はそう言った。神は面白そうに<sup>しずか</sup>惺を眺めながら答えた。

「いいけど。どうしてそうしようと思ったのかしら？」

「あ、うん。一緒にやると楽しそうだったからだ。もちろん、父上やラミュアとやるときも楽しいのだが、なんと言うか……別の楽しみ、というか……うまく説明できないな。」

惺しずかはそう苦慮しずかしつつ言った。神しのは微笑みながら答える。

「いいのよ、自分なりの答えを見つけたのだからね。じゃあ、惺しずかはそれでいいのね。他はどうするのかしら？」

「ああ、神しのすまない。俺は旧友のところに行つて来る。腐れ縁なのでな、いろいろ積もる話をしてくるよ。」

志郎がそう言った。神しのは頷きつつ答えた。

「分かったわ。昔の大事な人なんでしょうしね。友人は大事にしないとね。」

「すまないな。」

志郎が再度そう言った。ミルが手を上げて言う。

「あのー。あたしはレネアちゃんと一緒に居ますねー。」

「ミルはそれで確定よね。」

神しのは言い切ってしまった。ミルは頬を膨らませながら言う。

「マスターそれはひどいですよー。」

「でも、レネアちゃん捨てろって言ったら出来ないでしょ？」

冷たく神しのは言い放つ。ミルは困惑しつつ言った。

「そんなこと無理に決まってるじゃないですか。こんなに可愛いのに。」

「重症ねこれは。」

神が呆れつついった。皆は微笑んでいた。アーレフが言う。

「私たちは仕度がありますし、王族として戻った以上公務もありますのであまり私的には動けないと思います。」

「でしょうね、気にしないでいいわよ。もとより想定内だから。」

神はにこやかに言った。ラミュアが言う。

「マスター、私も慍しずかと一緒に行動しても良いだろうか？」

「いいわよ。あなたが自分で選ぶのなら問題はないわ。」

神はそう答えた。玲が最後に言う。

「母上。私は母上と共に街に繰り出そうと思うのですが。」

「あら、玲もそう考えてたのね。いいわ、一緒に行きましょう。」

神が微笑みつつ言う。アーレフが苦笑しつつ言った。

「また、何か企んでますね。」

「まあね。」

神が悪戯小僧のように微笑んだ。

「では、食事もそろそろ皆さん終わり始めたようですし、終了した方からお部屋のほうにお戻りください。また五日後にお会いいたしましょう。」

そう言ってアーレフは話をまとめた。



神は志郎と共にベットに入っていた。娘達は別の部屋である。

「しかし、いきなり二人目とは思わなかったぞ。」

志郎が苦笑しながら言う。神は済まなそうに言った。

「志郎、怒ってる？」

「へ？ いや、怒りはしないさ。発想がすごかったから怒るとか以前に、先にやられちゃった、見たいな感じかな。ちよっと表現が変だけれどな。それに、なんていうか、玲も可愛いしなお前にそっくりだし。」

志郎はそう言った。神は顔を赤くしつつ言う。

「馬鹿・・・。」

「ああ、俺は馬鹿さ。お前と一緒にになる選択をした馬鹿な男だよ。」

志郎はそう言って神を抱き寄せた。神はそのまま志郎に包まれていった。

外では風が吹き抜けていた。

惺（しずか）（後書き）

神の独断とも言わべき行動でレミアルト王都に來た一行。今度はここで、様々な出來事に遭遇することになる。何が起ころうとしているのか？

次回「玲」。

貴方にも良い風が吹きますように。

**玲（あきら）（前書き）**

レミアルト王都で神<sup>しの</sup>達は何を見る事になるのか・・・。

## 玲（あきら）

小説 風の吹くままに

### 第十三章 玲<sup>あきら</sup>

レミアルト王都の街の朝は早くから賑やかである。人口数十万は行こうかと言う大陸有数の巨大都市である。早朝と言うより夜のうちからいろいろな人たちが働いている。夜警、早朝の仕事のための準備に奔走する人々、夜勤で遅くまで勤めた人など様々な人々が昼間の喧騒とは違う意味で縦横に働いていた。魔法の明かりが灯り、王都は夜も暗くはなかった。しかし、やはり夜は闇の側が優勢になる世界である。往々にして悪事を働く連中も堂々と跋扈<sup>はつこ</sup>するものである。そこにもそういう連中が居た。

「で、どうだった？」

男が言う。どうやらこの組織では頭目らしい男だった。部下らしい男が答えて言う。

「は、警備が嚴重で今のところ中々入る隙がございません。出入りする人間のチェックも厳しく、幾人か足がつかないように試しましたが全て失敗しました。」

「ふむ・・・やはり、からめ手で行くしかないのかな。確か、アーレフ王子と一緒にいつてきた旅人が居たと言う報告だったな。」

男は報告から新しい情報を元に新しい作戦を考えるべく手下から情報を聞き出そうとしてそう言った。手下は答えて言う。

「は。数人が城に入った模様です。城内に居る情報用の草の情報ですと四十台の男、二十台から十台の女性が多数、後エルフが一名居ましたがどうやら彷徨う森のレネア姫のようです。」

「あいつか、あいつは好かん。あの性癖には辟易する。まあいい、顔は分かっているのか？」

男はそう尋ねた。手下は答えて言う。

「は、全てではありませんが数人は判明しており、魔術用紙による写真があります。」

「よし、それを元に、街に出てきたそれらの人物の確保を狙うでしょう。次の作戦はそれからだ。本国にはその点を連絡しろ。」

男はそう指示を飛ばした。手下は返事をして立ち去る。男は苦笑しつつ言った。

「流石はレミアルト王都というところか。こんなところでも邪魔をするな。ランカスター。」

そう言って、男は闇の中に溶け込んでいった。

「いい天気ね。」

神が背伸びをしながら言う。玲が答えて言う。

「そうですね、母上。で、どうされますか？」

「そうねえ、玲。あなたならどうしてみるかしら？」

神が逆にそう聞いた。玲は暫く考えた後でこう言った。

「闇の波動を利用してそれが多く作用してる場所に移動してみようかと思います。やはり、そういう考え方をする人はその方面の力を利用しようと思えますので。」

「いい答えだわ。実はね、そういう利用方法があるからあなたを創ったのよ。もちろんそれだけじゃないけどね。」

神はそう言った。玲はふと考えながら言う。

「なんだか、適当な言い方ですね、母上。」

「え？ いや、そんなことはないわよ、うん。」

神は焦りながらそう言った。玲は疑問の眼差しで神を見る。神は苦笑しつづけた。

「玲、そんな目で見ないでよ・・・いや、創るときはそりゃ、深くは考えなかったけど・・・出来上がったらいろんな活用方法が見つかったのは事実だから、ね？」

「まあ、そういうことにはしておきます。志郎様が聞かれたら嘆かれますよ？」

玲は苦笑しながら言った。神は言う。

「う・・・それは止めて・・・。」

神はぼつの悪い顔をしながら街に繰り出し始めた。玲がその後ろに行く。

「朝から賑やかですね。」

玲がそう言う。神しのも頷きながら答えた。

「流石王都よね。しかもきちんと区画整理されてるから治安がすごくいいわ。この調子なら玲の探索も楽じゃないかな？」

「はい。かなり限定できると思います。」

玲はそう答えた。神しのは微笑みながら言う。

「じゃあ、順番に怪しい場所を調べていきましょうか。」  
「はい。」

玲はそう答えて、「力」で調べた怪しい場所を調べて回ることにした。

志郎は迎えの馬車に乗りレオンハルトの屋敷に来ていた。彼の屋敷はそれなりに大きく彼の努力が良く分かるものだった。

「あいつも頑張ってるな。俺は根無し草だったが、あいつは家を守るために頑張っていたからな。」

志郎はつい、そうばやきながら言っていた。応接室に居ると女性が入ってきた。そして言う。

「本当に志郎様ですわね。お久しぶりですわ。」

そう言って挨拶をする。志郎はふと考えてようやく気づく。

「エミリア。エミリアか。これは驚いた。たった二年程度なのに美しい女性になったな。」

志郎はそう言う。エミリアと呼ばれた女性はそのまま志郎に抱きついた。そして言う。

「昨晚父上から聞きましたわ。何でも、私ではなく、別の女性の方と結婚されたとか。」

そう言われて志郎は焦りつつ答えて言った。

「あ……いや、それはだな……その……なんと説明したらよいか……。」

志郎がしどろもどろになっていると、奥から笑い声が聞こえた。そして声の主が入ってくる。

「やはり、そういう展開になるか。日頃から志郎にエミリアはゾッコンだったからな。志郎、覚悟しろよ。こいつは中々許してはくれないぞ。」

志郎は苦笑しつつ言う。

「おのれ、レオンハルト。こうなると踏んで仕掛けておいたな。」  
「もちろん。長年の悪友が来るんだ。もてなしはしないとな。」



レオンハルトは悪戯小僧のように言う。志郎も笑っていた。

「さて、それも含めてお前達に説明しないとな。エミリアも聞いてくれ。」

そう言って志郎は話し始めた。

「我々とですか？」

隊長はそう質問していた。質問されていたのは惶しずかである。惶しずかは頷きつつ答えて言った。

「ああ、昨日のようなことはせず、皆に合わせて修練をしたいと思っている。そういうやり方だと俺達の為にならないと思われるかもしれないが、実は俺なりに考えがあって申し出ていることなのでなければ是非御願いたい。」

「私も、是非見て居りたいと思いますわ。どうでしょう？」

セレナがそう言い添える。隊長は少々悩み、兵士達はあれこれ言い出した。

「昨日のはすごかったからな、確かに、我々としては嬉しいが……」

「我々でいいのだろうか？アーレフ王子の来賓なのに。」

「出来るならば、ご教授あやかりたいが……」

隊長が結論を出して言う。

「私達としても、あの素晴らしい数々の技を見せられたものとしてはご一緒したいと思います。たつての願いですし、またセレナ様や私の部下達も希望しています。私からも是非御願います。」

それを聞き、しずか慍は喜びつつ隊長の手を握りながら言った。

「ありがとう、俺頑張るよ。」

それを見ながら、皆が喜び、喚声を上げた。

「レネアちゃんどこに行くんですか？」

ミルはレネアを追いかけながらそう言っていた。レネアは、城内を目的地に向けて歩いていく。

「ミル様〜こっちですよ〜。」

そう言って、ミルを案内していた。二人は、やや見通しが悪いが静かで気持ちのいいテラスの前に来ていた。

「ここは？」

ミルが尋ねる。レネアが説明して言う。

「ここはですね。王族の方や来賓の方が休憩を楽しまれる場所だったんですよ。」

「だった？」

ミルが疑問に思いながら聞いた。レネアが答えて言う。

「城を改装しているときに、ここは形状は残されたんですが使われなくなっただけです。ですから今は、城内にいる子供の遊び場として、そして、あたし達のような者のために、あるんですよ！」

そう言いながらレネアはミルに飛びついた。ミルは勢いで倒れこむ。

「ちょ、ちょっとレネアちゃん、まさか・・・ここでやる気じゃないでしょうねえ。」

ミルは焦りつつそう言った。レネアはけろっとして答える。

「当然ですよ。ミル様。覚悟してくださいね。」

「あ、やだ・・・恥ずかしいったら。レネアちゃん、止めて。あ・・・。」

ミルはそう、途中まで訴えたが、結局は情事にハマっていくようであった。

「ここは違うようですね。」

玲はそう言う。神も頷きつつ言った。

「そうね、恐らく魔道の研究か、何かだわね。」

二人はそう言って怪しげな場所をいろいろと捜し歩いていた。玲の力で「闇」の力を探り当てればより範囲が短縮できると踏んだからである。そう、アーレフたちを狙う一連の一味を。

「次はどこかしらね。」

神が尋ねる。玲が「力」を使いながら答えて言う。

「こちらみたいです。母上。」

そう言って玲は歩き始めた。神もついて行く。しかし、それに追従する影が居た。

「ほう。例の一行の女性が二人、街に居ると？」

男はそう言った。部下が答えて言う。

「はい。周囲を探していた「影」の一人がそう、報告をして参りました。入手した写真の中の一名と同一でした。もう一名はその写真の女性に瓜二つでしたので縁者と思われます。」

「なるほどな。よし、動けるものを集めろ。最低でも二十名以上だ。その二人を確実に確保するぞ。」

男はそう命令する。手下は肯定の返事をして指示をすべく素早く立ち去っていった。

「ほう・・・お前は嘘をつく男ではないが・・・いきなりそういう話には信じられないな。」

レオンハルトはそう言った。苦笑しつつ志郎が言う。

「無理もないさ。かく言う俺だって、神しから説明を受けたときは理解できなかったからな。まあ、俺も馬鹿だったって事さ。お前のように。」

「なに？俺はお前ほどじゃないぞ？」

レオンハルトは、意見に対抗しつつそう言った。苦笑して志郎が言う。

「よく言うよ、シャリーと一緒にになるときに、お前何と言ってたか忘れた訳ではあるまいな。」

「いや・・・あれはだな・・・。」

レオンハルトはそう言って戸惑う。エミリアは疑問に思い父に問い尋ねる。

「お父様？お母様となんと言われたのです？エミリアも興味がありますわ。」

「う・・・いや・・・くそ、志郎め。さりげなくエミリアを使って俺に矛先を変えやがったか。」

レオンハルトが苦々しく言った。呆れつつ志郎が言う。

「そうは言うが、事実は隠せんぞ？まあ、俺の事情も説明はするが、理解できるかは別問題だな。おれ自身ですら始めは戸惑ったくらいだし。」

「まあ、いい。エミリア、説明するからそこにお座り。」

レオンハルトはそう言って、エミリアを促し、話を始めた。

傭<sup>しずか</sup>はラミューアと一緒に兵士達と修練をしていた。二人はそれぞれ複数の兵士についてもらい見事なまでの武技を披露する。見学している兵士達からは感嘆の声が出ていた。

「素晴らしい、流石は志郎殿の娘さんだ。」

「こちらのお嬢さんも素晴らしい。動きに無駄がない上に可憐だ。」

「勉強になるな。なるほど、あの時はこうが効率的か。」

そんな感じでいろいろ言われていた。セレナも感嘆しながら言う。

「あたしもこんな風にやりたいですわねえ。でも父上が許しては下さらないでしょうね。」

そう言っているのを聞いて隊長が苦笑した。

「それだけは控えてください、姫様。流石にそれは、私たちとしても見逃しかねますので。」

「そうですね。今は慍<sup>しずか</sup>さん達を見ることで我慢いたしますわ。」

セレナはそう言って慍<sup>しずか</sup>たちの様子をじつくりと見ていた。

「は・・・レネア・・・もう・・・」

そう言ってレネアはミルの身体に埋もれる様に倒れこんだ。ミルが苦笑しつつ言う。

「相変わらずですねえ。でも、レネアちゃん可愛いですよ。」

ミルはそう言ってレネアを眺めていた。二人は静かにそこで過ごしていた。

「だんだん五月蠅いのが増えてきたわね。」

神<sup>しの</sup>がそう言う。玲が頷きつつ答えて言った。

「母上。どうしましょう？目標を特定の場所に集めますか？」

「そうねえ。玲、あなたはもうどうしたいと思っている？」

神が逆に玲に聞いた。玲はしばらく考えてから答えて言う。

「そうですね、雑魚が一杯来るでしょうからまずはその大半を始末して、その後敵の策略にかかった振りをして、本元に近い人物が出たところでそれを確保しつつ掃除をする。と言うのは如何でしょうか？」

神は頷きつつ答えた。

「上出来ね。いい方法だと思うわ。後はあたし達が如何に役者が出来るか、よね。」

「はい。頑張ります。」

玲は力強くそう言った。二人はそうしてから、やや狭い路地に入り行き止まりになる方向へ進んでいった。二人は行き止まりとなる広い場所に来ると、神がやれやれと言った様子で言った。

「あら、玲、ここは行き止まりじゃない。迷ったのかしら？」

「そうかもしれないです。申し訳ありません、母上。」

玲がそう答える。そんな時、後ろからばらばらといかにも怪しげな集団が現れた。

「何者ですか？ あなた達は。」

神がそう言う。集団の一人が言う。

「我々が何者かはどうでもいいことだ。お前達二人は私たちと一緒に



に来てもらおう。もしご一緒できぬと言うならば強制的に来て頂く。」

そう言って、じわじわと詰め寄ってくる。玲が前に出て言う。

「無作法にそんなことを言っても聞き従えません。お帰りなさい。」

しかし集団はそんなことは無視して二人に襲い掛かった。それで、事は済むはずだった。そう、女性二人を捕まえる任務である。多少暴れたとしても、それは造作もないはずであった。が、襲いかかった瞬間、仲間が次々と倒れていく。

「な、どうした？なぜ倒れる。」

驚いた一人が仲間に向かってそう言う。ふと、見ると黒い髪的女性のほうの目が光っていた。片目が血の色に輝いていたのだ。

「な・・・なんだ、お前は！」

男はそう言っていた。すでに、恐怖に包まれ足がすくんでいる。思うように動けない。女性が言った。

「愚かな・・・我等の力も理解できずに襲うか。さすれば、相応しい滅びをくれてやろう。」

そう、女性が言うと「闇」が現れた。そう、そう呼ぶしかないもの、

「闇」だ。光を通さない「もの」が現れたのだ。闇と呼ぶしかない。それは、倒れていた仲間を次々と飲み込んでいく。飲み込まれた仲間が男の前から「消えて」いった。

「あ……あ……あ……」

恐怖の大きさのあまりに男はすでに言葉すらまともに発せられなくなっていた。もう一人の女性が言う。

「こうもうまく行くとはね。上出来よ玲。そいつは「闇」に溶かさずに置いておきなさい。あたしが調べるわ。」

「分かりました、母上。」

女性はそう答えた。そしてもう一人に女性が男に触る。そうして、女性は男を「調べ」始めた。

「まあ……」

エミリアはウツトリしつつレオンハルトの話を聞いていた。そして答えて言う。

「素敵ですわ、お父様。お母様とのそんな過去が。また一つ、エミリアの自慢話が増えましたわ。」

「あ、いや、できればこの話はここだけにしてくれないか。シャリ―もあまり口外するのを嫌がっていたんだ。」

苦笑しつつレオンハルトが言う。理解できずにエミリアが言った。

「どうしてですか？お父様。素敵な話じゃ御座いませんか。私もそんな愛を培いたいですわ。志郎様はもう相手がいらっしやいますし。どこかにいい殿方は居ませんかしら？」

苦笑しつつ志郎が言う。

「その辺にしておいてくれ、エミリア。レオンハルトも大事な思い出なんadena。できる限り大事な二人の思い出にしたいんだよ。俺が言い出さなければ良かったな。済まないがこれ以上は父上を虐めるのは止めてやってくれ。」

仕方が無い、といった表情でエミリアは答えて言った。

「そうですか。お母様に怒られてもエミリアが困りますから、このあたりで私は失礼しますわ。志郎様、今度奥様をお連れくださいね。」

そう言いつつ、エミリアは部屋を後にした。苦笑しながら志郎が言う。

「本当にシャリーに似てきたなエミリアは。」

「ああ・・・。」

「もう何年になるかな。」

「八年だ。」

「そんなになるのか・・・。」

そう、レオンハルトの妻シャリーはすでにこの世のものではなかった。病で他界していたのである。レオンハルトは苦笑しつつ言葉を

続けた。

「まあ、あいつには感謝している。エミリアも出来たし何より俺にかけがない思い出をくれた。これだけは何にも変えられない。」  
「そうだな。俺も今、それを実感しているよ。」

志郎はそう答えた。レオンハルトは顔をのぞかせつつ言う。

「それだよ、志郎。お前ほどの男が、というか、武道馬鹿だったお前がそこまで惚れ込むってのはどんな人か是非見てみたいぞ。」

「まあ、そのうち嫌でも見れるが・・・言っておくが常識は通用しないからな。」

志郎が苦笑しつつ言った。興味深げにレオンハルトが答えて言う。

「それはそうだろう。何せ、あの志郎が惚れる相手だからな。」

「おいおい・・・えらい言われようだな。俺ってそんなに無骨に見えたのかな。」

志郎が苦笑しつつ言う。レオンハルトが確信に満ちて言った。

「何だ、自覚がないのか？まあ、そこに惚れる女も居るから人生分らないんだがな。」

「言ってる・・・。冗談抜きで、吃驚しても知らないからな、俺は。」

志郎はそう答えて言った。そして二人で笑っていた。

「こういうのも楽しいな。」

慍しずかはそう言った。ラミアも答えて言う。

「新しい発見がある。」

そう言われて、慍しずかも賛同しながら頷いた。二人は修練を続けていた。兵士達は交代で彼女達の相手をしているのだが、一人、また一人と体力がつきへばっていく。すでにあたりにはくたくたになった兵士が沢山居た。感心しつつセレナが見ながら言う。

「お二人ともすごいですわね。まだまだ元気ですわ。」

隊長も感心して言った。

「すごいとは聞き及んでいたが、ここまでとは……。兵士達の刺激にはいいが、今後はきちんと計画しないと兵士達が耐えられなくなりそうだな。」

そう言って、隊長はメモを取り出してあれこれと書き込んでいた。

「あ……。またレネア寝ちゃいましたね……。」

レネアは、赤面しつつミルにそう言った。ミルはやさしく言う。

「まだ休んでくださいね。うんと休んでからまた楽しみましょう。」

そう言われて、レネアは頭を撫でられた。ミルに顔を埋めながら「はい。」とだけ答えた。彼女の耳が真っ赤になっているのにミルは気づいた。そして微笑む。そよ風がそこを吹いていた。

「よし、調べ終わったわ、玲、こいつも処分していいわよ。」

神が男から情報を調べ上げてから、無情にもそう言う。男はすでに常軌を逸しておりすでに言動はおかしくなっていた。玲はそう言われて答えて言う。

「分かりました。」

玲はそう言うと「闇」を使い、男を「消した」。

「さて、本拠地に行きますか。いい男が居るといいけどね。」

神はそう言った。玲は不思議に思い言う。

「なぜ、いい男が居るほうがいいのですか？」

「悪い男よりはいいでしょ？」

神があっけらかんと答えて言う。苦笑しつつ玲は神について行った。

男は連絡が途切れたことを不審に思っていた。たかが女二人の確保に何か不手際でも？そう考えたが、思い当たる節がなかった。無理もない、相手が普通の女性でないとは気付き様がないからである。

「まだ連絡はないのか？」

男はそう言う。傍に居る部下は返事をして言った。

「は。いまだに何も。手配致しましょうか？」

「いや、もう暫く待とう。それでも来ないなら何かあったのかもしれないな。ここは引き払うでしょう、不要な長居は無用だ。」

男はそう答えて言った。そう、無駄に長居をしてはロクな事にはならないからだ。そう言っていたとき、外で喧騒が聞こえた。

「何事か？すぐに調べよ。」

傍に居た側近が言う。男は思い出したように言った。

「もしかしたら手遅れかもしれないな。」

「は？」

「いや、なんでもない。仔細の報告はまだか？」

喧騒がまだ聞こえる。様子を見に行った男もまだ戻ってこない。男は決断した。

「逃げるぞ。恐らくかなり状況はまずい。」  
「分かりました。こちらへ。」

部下はそう言って、脱出経路へ男を案内した。

「まあ、うじゃうじゃと居るわね。玲、遠慮なく「消して」あげなさい。」

神は残酷にそう言う。玲は答えて言った。

「言われなくても、もうやっていますわ。母上。」

そう、襲い掛かる男達を「闇」に包んで「消して」いる。その様子を見ていた男の一人が逃げ出していた。神は目ざとくその男を追う。その時、神は空間波動の兆候に気づいた。つまり敵は空間跳躍で逃げようとしているのである。にやりと笑いつつ神が言う。

「そんなことはさせないわ。」

そう言って神は「力」を使い始めた。



部下が魔道具を操作している。しかし、うまく行かないのか手間取っているようだ。

「どうした？故障か？」

側近が言う。部下が答えて言った。

「機械自体はおかしくありません。しかし、周囲の空間に対し制御できない何らかの「力」がかかっているらしく空間跳躍の術が使用できません。」

「何だと？ここは城でもないのに、術式結界でもあるというのか？」

部下の言葉に側近が声を荒げられて言う。部下は答えて言った。

「それが・・・我々の理解できない「力」なのです。術式結界であれば仕掛けられたのが我々でも分かります。解除は難しいのですが。しかしこれは我々では理解すら出来ません。」

「何だと・・・いったい何が・・・。」

側近がそう言っていると、後ろから声が聞こえてきた。

「教えてあげましょうか？」

女の声である。一同はそちらに振り向く。女性が二人其処には立っていた。

「ほう、これはかなりの美女だな。しかし、女性が二人こんなところまで簡単には入れないはずだが？」

男がそう言う。女性は答えて言う。

「あら？簡単だったわよ。もっと、警備とか厳しくすべきね。」

皮肉っぽくそう言う。男は皮肉を解せず答えて言った。

「全くだな、今度という時があればそうするでしょう。」

「あら、懸命な発言ね。多分今度は無いわ。」

「ほう・・・」

女性の発言に興味深そうに男は答えた。女性は続けて言う。

「玲、この男以外は「始末」しなさい。この男はあたしが捕らえるわ。」

「了解しました。母上。」

相手の女性が答えて言う。部下達は身構えた。男も構えを取る。しかし、その女性が一声を発した。

『うすやく跪くがいい』

その声を聞いた途端、男達は次々と腰を落とし始めた。そして力なく跪き始める。首領と思しき男はその光景を見て驚愕した。

「凄まじい、声で人を従えるか。」

そして女性は「闇」を作り始め次々と男達を「消して」いった。首領と思わしき男の前にもう一人の女性がやってくる。首領はすでに逃げることも敵わなくなっていた。

「あら、それなりにいい男ね。あなたは、王城まで行って貰うわ。」

拒否権は皆無よ。」

そう言って女性は首領と思わしき男に触れた。すると男は事切れたように倒れた。

「さて、ミルが居ると楽だったけどあたしが運ぶしかないわね。」

女性はそう言いつつ、軽々と男を抱えあげて去っていった。残りには何も無くただ風が吹いていた。

神は容疑者としての男を抱えて城の門まで来ていた。係で対応していた兵士が右往左往している。

「で、入っていいのかしら？あたしは男を抱えたままなんだけど？」

神がそう言う。兵士は戸惑いつつ言った。

「申し訳ありません。確認中ですので暫くお待ちください。私はその、一兵卒なものであなたのような方を存じ上げておらず・・・」

そう言う姿を見て苦笑しながら玲が言った。

「母上。あまり、兵士の皆さんを困惑させるのは控えたら如何ですか。昨日の今日ですし、資格のある方とはともかく、一兵士では私たちを知らないのは無理もないかと。」

「そうね、まあ、心配しないでお仕事に戻っていなさいな。あたし

は疲れないから。」

神はそう兵士に言った。兵士の方は恐縮そうに神に敬礼しながら仕事に戻っていった。

「出るときは楽だけど、入るのが面倒なことを忘れていたわね。今はそう言う状態だったのに。あたしも詰めが甘いわね。」

苦笑しつつ神がそう言った。

レオンハルトの元に急報がもたらされた。兵士が急いで報告する。

「おくつろぎの所、失礼致します。先ほど城門より急報があり、街中で王族を狙った一味の首領を捕らえたとわざわざその男を提出された方が城門に來られまして、対応に苦慮しています。將軍の判断を仰ぎたくここに來た次第です。」

驚きつつレオンハルトが言う。

「何だと。すぐ城に向かう。志郎、話はまたにしよう。急用が出來た。」

志郎は話の内容から特定しつつ言う。

「君、その男を届けたというのは女性かな？」

「は。報告ではそう聞いております。それが何か？」

兵士はそう返事をした。志郎が苦笑しつつ言う。

「神<sup>し</sup>か。玲と一緒に行ったな。」

「なに？お前の奥さんが？ということとはさっきの話は……。」

レオンハルトが仕度をしながら驚いて言う。志郎が苦笑しながら言った。

「だから言っただろう。あいつは、そう言う奴だと。人の理解で図っちゃ駄目なんだよ。」

「分かった、とりあえずは城門に向かう。志郎も来てくれ。」  
「了解した。」

二人はそう言い、城へ向かった。

神<sup>し</sup>は城門のところで長らく待たされていた。仕事上仕方がないとはいえ、その立場にいる者としてはやはり面白くは無い状況である。つい、こう言い出した。

「折角の大手柄なのに、この扱いは酷いよねえ。」

苦笑しつつ、玲が言う。

「母上……ある意味私たちのほうがお節介を焼いている訳ですから……。」

「わ、分かってるわよ。でも、愚痴りたくなるのよ。それが間違いととは分かっていてもね。」

神はややはぶてながらそう言った。そんな時、一台の馬車が城門のところに到着した。男が二人降りてくる。そして降りてきた男が一人、神に向かつて言った。

「やはり神か。玲も一緒だな。」

そう、志郎であつた。神が驚きつつ言う。

「志郎？ どうしてここに？」

それに答えて、もう一人の男性が言った。

「そなたが志郎の奥様か。私はレオンハルト。国王の恩寵により將軍の地位を与えられている。志郎の友人でもあるのだ。今日は一緒に談笑をしていてな、そなたがわざわざ国王一家の凶事を未然に防いだ報を聞いて急いで来た次第なのだ。」

それを聞き、神は多少驚きながらも答えて言った。

「それはそれは、わざわざご親切に、丁寧な挨拶を有難う御座います。しかし、あたしに対してはそのような丁寧な話し方の必要はありませんよ。あたしもしないと思いますので。志郎と同じように話してくださいな。」

苦笑しつつレオンハルトが志郎に言った。

「本当に、お前の言ったとおりだったな、志郎。人の理解では図れ

ない方のようだ。」

それを聞き志郎は苦笑した。神しのが言う。

「で、この男はどうでしょうかね？」

答えてレオンハルトが言った。

「そうだな、まずは尋問するべく所定の部署に運ぶとしよう。志郎、神しのさん、そしてお嬢さん、玲さんだったかな。一緒に来てくれ。」

そう言われて、三人は頷きレオンハルトについて行った。

四人はある部屋に入った。そこは監査部が所属する部屋で監査部とは、城内の治安や情報管理、また諜報など正義の味方的なことから公には出来ない「闇」に属することまで「陰」で働く非常に重要な部門の一つである。その部屋で、四人は男を椅子に縛り上げ、意識を戻させた。

「お、気づいたようだな。」

男を見て志郎がそう言った。気づいた男は周囲を見回す。そしてその後呟くように言った。

「そうか。私は捕まったのか。」

「そうだ。ここは城の中にある監査部の尋問室だ。魔法等の特殊な

連絡手段はほぼ出来ないと考えてもらおう。」

レオンハルトがそう言う。男は何かを試したようで、暫くしてから答えて言った。

「そのようだな。私の連絡手段は使えなかった。」

「では、まずお前の名前から聞こうか。」

レオンハルトがそう言うと言った。

「グレイハワード。」

男が答えたのを見てレオンハルトはやや驚いた様子で言った。

「ほう、自分から名乗るとは珍しいな。普通、こういう場所では言わない輩が多いのだが。」

「別に言ったところで問題はないからな。それに、あまりに不利になる情報は元々私は言える様には出来ていない。」

男はそう落ち着いた調子で答えて言った。それを聞き、レオンハルトはやや顔をしかめながら部屋の外に出て行く、そして他の三人を呼んだ。三人が外に出るとレオンハルトは部屋を閉じてから言った。

「どうやらかなりの大物のようだ。しかも、自白できないようにあらかじめ呪詛が仕掛けてあるようだな。」

「下手に喋ろうとすると死んでしまうような奴か。」

志郎が気づいてそう言う。レオンハルトは頷いた。そして続けて言う。



「さて、どうするかな。こと、魔道が絡むと俺のような無骨なもの  
は不利になるな。魔術部に頼むか・・・。」

レオンハルトがそう悩んでいると神しのがこう言った。

「あたしが直接探りましょうか？」

そう言われて、レオンハルトは驚きつつ答えて言った。

「直接?! 神しのさん、そんな事が出来るんですか？」

「ええ、造作も無いわよ。対象を眠らせて、且つ、呪詛を阻害して  
おけばあいつも死ぬことは無いでしょうね。情報は仕入れられるん  
じゃなかしら。ただ、無作為に探るから少し時間はかかるわよ。出  
来るだけ情報は多いほうがいいでしょうね。」

神しのはそう答えて言った。同意しつつ志郎が言う。

「そうだな、その方が手っ取り早い上に確実だろうな。今回はアー  
レフ達国王一家にも絡む大事件だし下手に他の部署にまで伝えて、  
事を大きくしすぎると後々面倒だろう。事態が大きくなる前にこっ  
ちで潰せるならその方がいいんじゃないかな？」

レオンハルトはしばらく考えてから答えて言った。

「確かに。その方がうまく行きそうだな。しかし、そうすると神しのさ  
んや、志郎、お前達に多大な負担がかかるが、いいのか？」

「問題ないわよ。というか、あたし達のほうが好きで首を突っ込ん  
だ案件だしね。じゃあ、やりましょうか。」

神しのが答えてそう言った。玲が言う。

「すでにあの男は寝かせました。」

「あら、手際がいいわね、玲。」

神は微笑みながらそう答えた。四人は頷いて、部屋に戻った。中では男が静かに寝息を立てていた。

「よし、では呪詛を解除しつつ探ってきますかね。」

神はそう言いつつ男触れる。それを見て玲が言った。

「母上、私も手伝います。」

それを聞き、神は喜びながら答えて言った。

「あら、嬉しいわね。じゃあ、志郎、少し時間がかかるけど行ってくるわ。二人はお茶でもしながら待ってて。」

そう言いながら神は男の記憶を探るべく旅立った。もちろん、見た目にはただ神も寝たようにしか見えないのだが。そんな二人を見つつ、志郎は苦笑しながら言った。

「相変わらずだな。自分から首を突っ込みたがる。」

「なるほどな、志郎が惚れるのも分かる気がするぞ。」

レオンハルトが感心しながら言う。そう言われて志郎は焦りつつ答えて言った。

「な・・・何をいきなり。俺はその・・・別に神のことはだ・・・特定の何かがあるからとかじゃなくて、なんと言うか・・・。」

「おいおい、何を焦ってるんだよ。別に、疑う訳でもないんだからそんなに焦らなくてもいいだろう。まあ、お前が惚れ込んでるのは良く分かるがな。」

レオンハルトがからかいつつ言う。志郎は、やや語調を強めて答えて言った。

「レオンハルト！お前って奴は……。相変わらずだな。まあ、そう言うところが好きなわけだが。」

「ふっ……。何を言い出すかと思えば。俺だってそうさ。」

そうお互いに言って、二人は笑い出した。

日は傾き街には夕闇が迫っていた。町の人々は帰路を急ぎ始める者、逆にこれから出かけようとする者、様々な状況の人たちがそれぞれの思いを元に動いていた。志郎とレオンハルトは城から見えるその眺めを見つつ神達しんの帰りを待っていた。

「結構かかるな。」

志郎が何気なくそう言う。苦笑しつつレオンハルトが言う。

「やはり心配か？」

「いや、あいつに心配なんぞ要らないのは分かってるんだが自分が足手まといなのが少々歯がゆくてな。まあ、力不足だから仕方が無いわけだが……」

そう答える志郎を見ながらレオンハルトは言った。

「そう言う話を聞いていると、ますます神しんさんの人物像が分からなくなるな。」

「まあ、そうだろう。いきなり「神」と言われて受け入れられる程、信心深い人間は宗教家くらいのものだろう。」

苦笑しつつ志郎は答えた。続けて言う。

「そもそも俺だって初めに神しんと出会った時はそんな感じだったさ。いや、ある意味敵対関係だったし「恐怖」してたな、あの時は。得体の知れない計り知れない「力」を前にすれば、しかもそれが理解できれば誰もがあんな感情は持つとは思うが。」

そう言って志郎は苦笑した。レオンハルトが感心しながら言う。

「そうか、お前もいろいろあったんだな。それに、そうやってすでに語れるって事はそれだけ関係が変わったって事だしな。」

「ああ、本当に変わったよ。初めは興味本位だったんだ。神しんが不思議でならなかった。あれだけの「力」を持つのに自分の為には殆ど使わない。そんなあいつを見て俺は次第に・・・」

志郎が自問気味にそう言っていた。レオンハルトが割り込むように言う。

「惚れたか。」

「ああ。」

志郎は短く肯定を述べた。顔には笑みが出ていた。レオンハルトは

満足そうに言う。

「それは何よりだ。お前が女性に惚れる自体がある意味すごいことだからな。お前と来たら、女人には夜の情事以外は関心が無いって感じだったしなあ・・・」

「おいおい・・・もう、昔の話だ。今は神しのだけだぞ、俺は。今は、娘も出来てしまったし、なんて言うのかな。まあ、一般の家庭のよ  
うに一家を支えるなんて大した事は出来ないが俺なりに父親として、  
夫として出来れば幸せ、とでも言う感じかな。」

志郎は今の状況を考えつつそう言った。レオンハルトが答えて言う。

「そうか・・・よかったな。お前も家庭の幸せを掴めたか。」  
「ああ。」

志郎は満足そうに答えた。暫く静かに時が過ぎて行ったが神しのと玲が  
起き上がってきた。記憶を探り戻ってきたのである。しかし、表情  
はやや重い。志郎は少し不安になりつつも神しのに言った。

「お帰り。どうだったかな。」

神しのはそれに答えて言った。

「ただいま。とりあえず情報は仕入れてきたわ。しかし、この男、  
反吐が出るほど嫌な奴ね。玲、ただ消すだけじゃ生温いわ。うんと  
苦しめながら「消し」なさい。」

「分かりました、母上。」

玲はそう答えて、男に「闇」を掛け始めた。レオンハルトは驚きつ  
つ言う。

「で、どう言う事なのか教えてくれるかな。」

「ああ、ごめんなさいね。出来るだけ順を追って言うわ。」

神が答えて言う。そして神は説明を始めていった。

帝国は国家決定として他国、特に非友好的な近隣国家に対して侵略行為を策定していた。それに伴い、諜報局は外部部隊として近隣国家謀略部を作成。そこを基にして戦略を進めるべく、各国に対して数々の謀略をしていくこととなったのである。レミアルト王国に対しては直接的な侵略を始める前にすべき事が幾つか存在していた。一つは国王一家の存在。レミアルト王国は長年の歴史からも分かれるとおり神々の祝福を得ているとされる面が多く実際数々の神器も存在していると言われていた。そう、言うなれば国家の存在を神により保証されている訳である。もちろんその保障は無償ではない。きちんと果たすべき義務が存在していた。故に、帝国はその義務を逸脱させるべく妨害工作をしてきたのである。そうやって、神器を破壊または強奪が出来ればレミアルト王国の軍事的奪取は確実と思われるていた。それ故に、国王一家に対する謀略、暗殺が狙われていたのである。グレイハワードと言うこの人物はレミアルト王国の謀略を担当していた帝国軍少佐であった。彼は優れた謀略性能を買われて今回の作戦に抜擢されたのである。現に、城下にはほぼ無傷で忍び込み数々の謀略を巡らせていた訳であった。しかし、城は嚴重であった為、思案している時に神達<sup>しの</sup>がやってきて今回の事態となった訳であった。

「なるほどな・・・帝国の息がそこまで来ていたか。しかし、神さん。こいつ・・・と言うかすでもう形が無くなり掛けているが、これはいったいあなたに何を見せたんだ？」

レオンハルトは納得しつつも神に疑問を呈してそう言った。神は苦笑しつつ言う。

「こいつの異常な性癖よ。女性や子供を傷つけながら喜ぶという異常なね。軍でも余程変態扱いされてたでしょうね。常軌を逸してると思うわ。」

「なるほどな、単なる性倒錯でもある意味嫌悪すべきだが、そこまで来ると人として疑いたくなるな。」

志郎がそう言った。皆も頷く。レオンハルトが言う。

「しかし、当面の危険はこれで去ったわけだ。それに関しては感謝する。問題は今後だな。」

「ええ。恐らく帝国は、部隊が全滅したことを近日中に知るでしょう。定時連絡するものが居ないからね。恐らくアーレフの結婚式の時に何らかのリアクションがあると思うわ。大々的な行動はその後でしょうね。」

神が状況を分析しつつそう言う。志郎が同意しつつ言った。

「恐らくそうだな。そして、向こうからこの王都が近い以上何らかの軍事行動の準備を素早く始めるだろう。レオンハルト、早いうち

に国王に上申したほうが良さそうだな。」

「ああ、報告書を作り上げて早めに報告しておこう。お前達はどうする？」

レオンハルトは答えてそう言いながら志郎たちに意見を求めた。苦笑しながら志郎が言う。

「お前・・・こんな状況になって俺たちがそのままどこかに行くとでも思うのか？」

「いや、全く思わん。」

レオンハルトははっきりと答えてそう言った。そのレオンハルトを捕まえて志郎が言う。

「まったく、分かってて言いやがるな、こいつは。まあ、だからこそこでもあるが。俺たちは、帝国の脅威が去るまでは多分居座ることに為りそうだよ。まあ、神が「切れたら」分からないが。」

「ちょ、ちよっと、何でそこにあたしが出てくるのよ!」

話題に出されて、神があわてて抗議をする。志郎が苦笑しつつ言った。

「だって、神。この状況だどこかに鬱憤晴らしそうじゃないか。」

「う・・・いや、それはその・・・。」

言い当てられて、神は言葉に詰まってしまふ。微笑みながら志郎が言った。

「まあ、俺で付き合えるところは付き合うさ。心配するな、お前一人じゃないんだから。」



「わ、分かってるわよ・・・馬鹿・・・。」

神は顔を真っ赤にしつつそう答えた。その様子を見てレオンハルトが言う。

「本当にいい、似合いの夫婦だな。今度は非うちに来てエミリアにも神さんを紹介したい所だな。」

「ああ・・・そういえば、彼女にそう言われていたな。神、レオンハルトの娘に今度会いに行こう。」

志郎は神にそう言った。神は肯定の返事をする。志郎はそんな神を優しく抱いた。

「母上。」

玲は神を呼びそう言った。神は答えて言う。

「どうしたの、玲。」

「私達は暫くここに滞在することになるのですか？」

玲は神にそう聞いた。神は答えて言う。

「そうね、アーレフ達が比較的平穏を得るまでかな。でも、どうしたの？そんなことを聞くなんて。」

「あ、いえ。私はまだ生まれたばかりですし母上に教わったとはいえまだ知識も不足しています。外で色々得たいものがありましたの

でその機会が得られれば良いと思いました。」

玲はそう、自分の思いを吐露して言った。納得しつつ神しのが言う。

「確かにそうね。滞在中にそう言う関連のものを参照できるかアレフか国王に相談してみよう。」

「有難う御座います、母上。」

玲がそう答えるのを見て神しのは喜びつつ言った。

「あなたも旺盛に学ぶといいわ。慍しづかもラミアも今は元気に学んでるし、まあ、ミルはあの状態だけどレネアちゃんもいい子だからそのうち動くでしょうね。」

「はい。」

玲はそう答えて神しのに寄り添った。神しのは微笑みつつ玲の肩を抱く。志郎はそんな二人を微笑ましく見ていた。

外では夜の帳が下りようとしていた。風が吹いている。

玲（あきら）（後書き）

様々な出来事に遭遇する神達<sup>し</sup>一行。もう間も無くアーレフと晶の結婚式が始まろうとしていた、しかし、帝国では別の動きもあったのである。

次回「帝国」。

貴方に良い風が吹きますように。

（注意。次は人物紹介です。）

## 人物設定 e i n s (前書き)

人物設定 第一回目です。内容にもあるように十三話目での分かっている部分で記載してあります。小説を楽しむ参考しにどうぞ。神しのイラストは勇様から頂きました。有難う御座います。

## 人物設定 e i n s

小説 風の吹くままに

人物設定(第十三話時点)

>i2191<r u b y><r b>326<  
杜</r b><r p>( </r p><r t>あかなしく</r t><  
r p>) </r p></r u b y>神しの

当物語の主人公。「かの方」により「神」としての力を強制的に与えられ、別世界「ノンテースンザード」にて旅をすることになった女性。現実主義的で前進的な考え方の女性。悲観的に考えることに對してトラウマがある。外見年齢は16〜20歳程度。身長149cm 体重46kg スリーサイズは86, 62, 87 白銀の美しく長い髪と鮮やかな赤い瞳が特徴の美しい女性である。杜志郎あかなし(剣志郎)と婚姻する。

>i2254—326<  
ミルⅡフェリシア

神しのによって創られた「使い魔」。楽観主義の能天気娘。ただし、与えられた命令はそつなくこなす能力者でもある。神しのが世界を旅するに当たり助け手及び話し相手として創られた。外見年齢は20台。身長199cm 体重102kg スリーサイズは104, 76, 105 やや浅黒い肌と燃えるような赤い髪、エメラルドグリーンの綺麗な瞳が特徴的。実は神しのが元居た世界の姉がモデル。

かの方

当物語の裏主人公 真の「神」といえる存在。神が旅をする原因となった張本人。神しの

初老の人物

かの方に仕える存在。直接かわりのある人物のようだが、現時点では詳細不明。

アーレフルレミアルト

レミアルト王国第三王子。よく言えば「いいとこの三男坊」(笑)。温和な人物で信仰心が厚く国が立てた教会の神官として修行をしてきた。身長179cm体重80kg黒い髪黒い瞳の好青年である。今現在の年齢は18歳。日向 晶とお互いに思いを伝え合った。

大天使

ノンテーサンザードの「天」にて責任ある立場にある人物。大天使は称号であり名前ではない。詳しいことは現在不明。

>i2253<ruby><rb>326<  
杜</rb><rp>(</rp><rt>あかなしく</rt><  
rp>)</rp></ruby>志郎 (剣 志郎)

優れた体術を習得し、それを武術として磨き上げ、冒険者として名を馳せている人物。ある依頼から神に出会うが依頼遂行より神についていくことを選ぶ。基本的に現実主義的で神曰く「カッコいいおじ様」。身長167cm体重70kgやや褐色がかった黒髪にモスグリーン系の瞳を持つナイスガイである。外見年齢は40歳。神と婚姻した。それにより彼も「神」の一員となる。今は能力が低いが神と共に居ることとでその能力は高められるであろう。

>i2327<ruby><rb>326<  
ラミア</rb><rp>(</rp><rt>レスフェミナ  
シア</rt><rp>)</rp></ruby>

神が入手した魔道具である「核」を使用して創り上げた、特殊魔法生命体。元の名前はレスフェミナシア(神を狩る者)という名前であったが神がラミア(刃となる者)と言う名を与えた。「核」が神の作品ではないため感情表現が希薄で神曰く「模擬的な心」の持ち主。外見は非常に可愛い少女の姿をしている。身長155cm体重50kgスリーサイズは88, 68, 89 藍色の髪に蜂蜜色の美しい瞳、透けるような色白の肌が特徴的な少女である。外見の年齢は13-17歳程度。十話の時点でコアは取り除かれ神により新たなコア(完全品)が入れられて生まれ変わった。

ひなたあきら  
日向晶

レイグランド大陸の東にある島国　皇<sup>すめらぎ</sup>の国の巫女。叔父の勧めで世界見聞で叔父の仕事を手伝いながら旅をしていた矢先に叔父と死に別れしかも悪魔崇拜の一団に拉致されてしまう。魔族を宿すという驚異的な事象を経験するもアーレフの神器を使った行為で九死に一生を得る。実は、魔術も武術もそつなくこなす女性。非常に長い黒髪を持ち、淡く輝く灰色の美しい瞳をしている。身長162cm体重58kgスリーサイズは78、58、80。今現在の年齢は17歳。アーレフとお互いに思いを伝え合った。

## グラニデウス

ある人物が書物に書かれた方式で強制召喚された魔族。非常に強い「力」を持っており、声を発するだけで耐性の無い人間は気絶するほど。彼曰く「休んでいる」時らしく、あまり「力」を発することは無かった。神<sup>し</sup>の力で無理やり召喚された状態を解除されて「元」の世界へと帰って行った。彼が「起き上がった」時はどうなるのか・・・。補足として、魔族とは天界の住人には属さない知的精神生命体全般を主に指しており、一般的に言う悪魔は、その中でもかなり低級なものである。彼らの中には「神」に匹敵する者たちもあり「魔神」と呼ばれる。因みに神<sup>し</sup>から与えられた姿でダビデ像の様な筋肉たくましいダンディーな外見をした肉体を今はつけている。勿論これはかりそめであるが。

## グランモスキャメラウル（グラム　グラン爺）



オーソストラム平野など、一定地域の竜族を束ねる長の一人。古代  
ドラゴン  
竜の一人でもある。三千年程度は生きている長老竜で高い「力」も  
有している。普段は、ある山の中腹にある洞窟内で結界を張ってそ  
こで静かに暮らしている。人型に変身することもありその時は老人  
の姿をとっている。

## デイルサイヴ

冒険者の初老の男性。魔法使いを自称している。アーキレストの街  
でラミアと出会う。ラミアの成長に貢献する。また彼自身、魔  
道具の探求者でラミアに好意を寄せる。それは父親のような愛情  
でありそれがラミアに対して優れた働きをした。重病で余命が少  
なかったが神しの介入で余分な寿命を得ることが出来た。

## ラグレム

冒険者のドワーフ。男性である。アーキレストの街でミル、晶と出  
会う。

## >i2325—326<

## レネア

非常に若いエルフ。出身はアーキレストの北にある彷徨う森のエル  
フの郷。淡いブロンドの髪に耳が鋭く立ち非常に優れたスタイルを

している。瞳は淡い緑色。身長150cm体重44kgスリーサイズは72, 60, 73。今現在の年齢は98歳。明るく快活な女性だが、同姓愛好者という変わった側面を持つ。ミルが依頼していた女性に御執心だったがミルを見て一目惚れしてしまい今はミルにゾッコン状態となっており付きまとう毎日を過ごしている。実は彷徨う森のエルフの郷の長ランヴェルサイラーヴの末娘である。人間的な外見年齢は16歳程度に見える。

>i2276<r u b y><r b>326<  
杜</r b><r p>(</r p><r t>あかなしく</r t><r p>)</r p></r u b y>怪しずか

鮮やかな長い黒髪、綺麗な銀色の瞳をした少女。身長130cm体重30kgスリーサイズは65, 54, 66。外見年齢は8~10歳程度。言葉遣いが「俺」言葉を使うのが特徴。怪しずかは神しのと志郎の二人によって「創られ」た娘で彼女も「神」の一人である。生まれたばかりで能力は志郎とあまり大差がない。

>i2277<r u b y><r b>326<  
杜</r b><r p>(</r p><r t>あかなしく</r t><r p>)</r p></r u b y>玲あきら

鮮やかな漆黒とも闇の色ともいえる髪、右目が輝く緑色、左目が輝く血の色をしている。外見年齢は16~20歳程度。身長149cm体重46kgスリーサイズは86, 62, 87。神しのがグラニデウスの「力」を貰いそれを使用して彼女の「娘」として造り上げた存在。左目のみが開いているときは「闇」の側の性格が、右目のみが開いているときは「神」の側の性格が、両目が開いているときは「

融合した」性格が出る特異な性格の持ち主。姿形が神に非常に似ているため、髪の色が違わなければ見間違えるほどである。

> i 2 3 2 4 — 3 2 6 <

セレナⅡレミアルト

レミアルト王国息女。現国王の唯一の愛娘。箱庭育ちの典型的なお姫様だが教育をしっかり受け入れて育ってるのかかなりののしっかりものである。最近は、国王一族が命を狙われているため自由が少なくそのことがストレスになっていた。身長160cm体重54kgスリーサイズは81, 65, 85。黒い長い髪黒い瞳をもつ美しい女性である。現年齢は14歳。実はレオンハルトが舌を巻くほどの武術など戦闘系能力に長けた人物だったりする。詳しくは後の話にて。

レオンハルトⅡフエイグラシェイム

レミアルト王国筆頭將軍。40台で国軍のトップに躍り出ている超エリート軍人。もちろん能力も高く軍では驚異的な支持がある。政治面などには全く興味を占めさない無骨な性格で真面目な人物。しかし、遊び心を忘れないナイスガイでもある。現在の年齢は42歳。身長190cm体重93kg淡いプラチナの髪にダークグレイの瞳が美しい好青年である。志郎とは長年の友人で親友、悪友とも呼べる間柄。八年前に奥さんと他界しており現在娘一人と生活している。

> i 2 3 2 6 — 3 2 6 <

エミリアⅡフェイグラシエイム

レオンハルトの娘。現在16歳。幼い頃から優れた父を見てきたせいで一般の男性には興味が無い側面がある困った少女である。以前までは志郎を結婚相手に考えていた。母親に似て非常に美しい女性でしかも、「お嬢様」である。身長156cm体重51kgスリーサイズは81, 65, 84。綺麗なシルバーの髪に鮮やかなマリンブルーの瞳が美しい少女である。

## 人物設定 e i n s (後書き)

以上。第一回目人物設定でした。基本的にどんどん増えていくので如何に減らすかが課題です（^^）

ご意見、ご感想、ご忠告もどしどしお寄せいただければ幸いです。

## 帝国（前書き）

レミアルト王国で色々な出来事を体験していた神達<sup>しの</sup>。  
隣の帝国でもやはり色々な思いで活動している者が居た・・・。

## 帝国

小説 風の吹くままに

### 第十四章 帝国

「報告は以上です。」

淡々と部下は上司にそう報告した。その報告を聞き上司は戦慄わななく。

「何と言う事だ・・・陛下に何と報告すれば良いのだ・・・。」

そう、望まれない報告がやってきたのである。作戦が失敗した事を示す報告が、目的地に送った部隊が丸ごと消息を絶った事を示す報告が、であった。

「其のまま言うのは難しい・・・しかし・・・隠せばそれはそれで私の義務違反と言う事になる・・・それは不味い・・・一体どうすれば・・・。」

上司はそう悩みつつ部屋を右往左往していた。そんな中、けたたましい音と共にドアを開けながら入って来る者が居た。その人物は入りながらこう言う。

「おい！聞いたか？グレイハワードが失踪したらしい。」

それを聞きながら上司である男は答えて言った。

「ああ、今報告を聞いたところだ。陛下にどう報告するか悩んでる最中だよ。」

そう答えて、突然入ってきた男を咎めもせずにそう言った。入ってきた男はそれを聞き答えて言った。

「このままでは、開戦派が台頭し始めるな。折角、諜報と謀略でいい具合に行きそうだったものを・・・何かいい手はないかな・・・。」

「全くだ・・・私も如何に陛下に報告するか、それで悩んでるよ・・・。」

男はそう答えて、二人は意気消沈していた。

サディルウム帝国議会は国民の意見を代表者たちが伝え皇帝に<sup>そじよう</sup>俎上する場所のはずであった。しかし、現実には帝国内での覇権争いの縮図と化しているものであった。今、議会では以前より取り沙汰されていたレミアルト王国に関する問題で紛糾していた。議員の一人が言う。

「謀略において為せば良いと言っていたにも拘らず工作員全員が失踪するような失態。諜報局はどう責任を取られるのですかな？」

「別に諜報局だけの責任と言うわけでもありませんまい。我々が相手国に対して認識が甘かったと言うことも事実でしょう。久しく戦争もしていないような国だから大丈夫と甘く見るような。」

「いや、そもそもはさっさと軍事準備をして攻めかからない点が問



題なのだ・・・」

「大仰な軍事行動は帝国の疲弊を招きますぞ？あなた方はそんな事もお分かりにならないのですか？」

「いや、この行動は帝国の屋台骨を太くする為の計画であるから・・・」

「そうは言いますが、それだけの費用を工面し兵士を鍛え実際に投入して戦線を維持ししかも占領政策まで行う。そこまでの作戦立案をすでに立てておられるとでも？」

「いや、そう言うことを議論するのではなく、今は現進行の問題が紛糾している事柄に対し・・・」

「そもそもは何故にこう言う討議をしているか、そこから戻らないといけないのではありませんかな。」

「皆さんは、まずは自分の事ばかり考えなさる。帝国の本当の未来のことを考える方は居られないのか。」

「何を言う、私は真に帝国臣民と思ってだな・・・」

と、まあ、こんな風に、目も当てられない状況になっているのであった。そんな議會を一人の青年が出て行くところであった。副官としてついて来ている女性が傍により、声を掛ける。

「閣下、もう終わりで宜しいのですか？」

男は呆れながら答えて言う。

「構わん。あのあほ共に付き合っているとこっちがあほになりそうだ。早く帰って部下を見ているほうが余程かいわ。」

副官は苦笑しつつ言った。

「相変わらずですか、あちらは。皆さん、そこまでして己の権力が

大事なのですかね。」

「まあ、失う物だから必死なのさ。そんな物に何の価値があると言  
うんだ。そんなくだらない物よりも大事な物は一杯あるだろうにな。  
」

閣下と呼ばれた青年はそう言った。副官は肯定の答えとして軽くお  
辞儀をする。青年は続けて言った。

「まあいい、ここは帰ってうちの連中を集めて今後を協議しないと  
いけないな。遅かれ早かれこの状況では戦が始まるのは間違いない。  
」

「とうとう始まりますか。相手がレミアルト王国では大きな戦に為  
りそうですね。」

副官は気を引き締めるように言った。頷きつつ青年が答える。

「ああ、そうだな。では、中佐以下のうちのメンバー将校クラスを  
全員召集しろ。時間は、そうだな2000までだ、いいな。」

「は。2000までに集合するように至急連絡致します。」

副官はそう復唱しながらすぐさま指示を伝えるため立ち去っていっ  
た。青年は空を見上げて言う。

「空はこんなに綺麗なのにな。我々はいまだに血の罪からは抗えぬ  
か。」

詩的にそう言い青年は苦笑しながらそこを立ち去っていった。

サディルウム帝国。レイグラード大陸において最大の勢力を誇る軍事国家でもある。皇帝を頂点とする帝政を敷いており絶対権力者として皇帝が支配している国家である。一応民意機関としては帝国議会が存在するが機能は形骸化しており権力者達が己の権力を伸ばすために日々奮闘する場所と化していた。一方一般市民は大都市においても多数の税に悩まされ生活の頻度はあまり良いものとは言えず悪事に染まるものも少なくは無かった。農村部では役人が横暴を振るい、街では闇組織が裏で跳梁跋扈ちようりやうばっこしていた。もちろん、はたから見ただけではそんなに悪いとは思えないであろう。しかし、定住して住み着けば誰しものが、「悪い」と思う環境であった。

「今日も景気の悪そうな雰囲気だねえ。」

酒場でマスターをしていた女性はそう言いつつ外を見ていた。朝早くから客となっている男性が答えて言う。

「また議会で都合の悪い報告が出たらしいからな。議会は紛糾するだろうし色々揉めて、しわ寄せは俺たちに来るんだろうさ。」

手にしている飲み物をそう言った後で飲みだした。溜息をしつつマスターが言う。

「志郎はどこに行ったのかねえ。ああいうのがここに戻ってくれば少しは良くなるんだがねえ。」

彼女はそう言って外の空を眺めていた。

「ちっ。今日もしけたもんだぜ。」

男はそう言って、現在の状況に不満を述べた。そう、今回の稼ぎが良くなかったのである。彼は盗みを生業としていた。しかし、折角の情報を高く買ったにも拘らず肝心の獲物は大した金にならなかった。であった。

「今回はいけそうだったのになあ。諦めたあの置物のほうがよかったのかな。」

盗みに入っても全てを盗むことは理論的に不可能である。もちろん大部隊で行けば可能であろうがそんなことをすれば実質的な手取りが減ってしまう。つまり、盗みの稼業にしてもそんなに楽に稼げるわけではないのである。男はそう呟きつつ、次のいい仕事が無いか考えつつ歩いていた。そんな所に一人の女性が近づいてきた。

「景気が悪そうだね、アイランズ。」

女性がそう言うのと苦笑しつつ答えて言った。

「ああ・・・今回もあまり儲からなかったさ。お前のほうはどうだい、レミーナ。」

「こっちもだめだねえ。ちょっと金持ちのところに入ろうとしたんだけどさ、もうちょつとで火傷しそうだったんで逃げ出してきたよ。」

レミーナと言われた女性は答えてそう言った。アイランズと呼ばれ

た男性は苦笑しつつ言った。

「お前、身体には気をつけろよ。これ以上傷がつくと俺以外貰うところなくなるぞ。」

そう言われてレミーナは顔を赤くしつつ言った。

「な・・・なに言ってんだい！あたしはまだそんなに売れ残りじゃないよ！それより、戦の噂が出てるらしいね。」

「あ、ああ。上の連中も馬鹿ばかりだからな。もちろん一部はいい奴もいるが一部だけじゃな全体としてはそのうち組織が崩壊するさ。」

アイランズはそう溜息しつつ言った。苦笑しながらレミーナが言う。

「まあ、あんたもそれで軍を辞めたんだしね。」

「昔の話さ。」

そう言って、アイランズは空を眺めていた。

「で。」

男は短くそう言って部下に続きを言うように促した。部下は焦りつつも続けて言った。

「は・・・以上のことから謀略に出した部隊はすべて全滅したと思

われます。」

「ふむ。レミアルト王国に潜入させたのは百人以上しかも、レベルはそう低くも無いものばかりを送り込んだはずだ。」

「は。はい、そうです。」

「それが、この短期間に全員消息不明、魔法探査をしても全くの生命探知も出来なくなった、そう言うのだな。」

「はい・・・」

「さて、どうすべきか。諸将に尋ねる。いい提案があれば報告せよ。」

そう、彼は皇帝であった。レミアルト王国に潜入した謀略部隊が全滅した報告を受けていたのである。ある将軍が進み出て言った。

「全員ともなればちよつとした取締りとは思えません。こちらと全面的に構える意思があるとも思われます。こちらとしても然るべき準備をすべきかと思われませんが。」

「ふむ。将軍はそう言うが皆の意見はどうか。」

皇帝がそう述べたので他の一名が進み出て言った。

「一言述べさせて頂きます。ただの戦闘部隊が全滅したのであれば無能とでも謗られますが、潜入部隊はアジトがばれでもない限りまず全滅の可能性は低く、しかも、例えばそれでも通常はすぐ逃げ出すので全滅はまずありません。つまりこれは、余程の取締りが行われたか、私たちの理解を越える何かが働いていると見るほうがよいと思われませんが。」

「為るほどな。確かに、貴公の言うことももっともだ。他にもあるかな。」

他の一人が進み出て言った。

「現時点では、情報が不足しております。まずは軍備を整えつつ再度諜報員を派遣し諜報するのが宜しいかと思われませんが。」

「ふむ、とりあえずはそうなるか。皆の者、とりあえず現行ではこの意見を持って最善と為す事とする。諸将はそう理解してくれたまえ。」

皇帝はそう結論付けた。会場に居る全員が恭しく敬礼した。

「陛下の言われることはもつともだが、こう言う事態だ、素早く軍事作戦を遂行すべきだと思うのだがな。」

皇帝の前から退出した男の一人がそう言う。それに答えて別の男が言った。

「しかし陛下の言い分ももつともだ、一番の懸案は補給がいまだに悪すぎるのだ。レミアルト王国方面は帝国に協力的な都市がないからな。補給路の確定が苦勞する。」

「確かに、其れで何時もお前には苦勞を掛ける。」

「分かっているも掛ける癖によく言うよ。」

そう言って、男達二人は笑いながら歩いていった。

レミアルト王国筆頭將軍であるレオンハルトは執務室で仕事に追われていた。

「ここまでになるとはな。これで戦争状態になったら俺は無事に家に帰れる日は来なくなりそうだな。」

苦笑しつつレオンハルトは言った。副官である女性が言う。

「閣下、今からそんな不吉なことは言いなさいますな。エミリア殿が悲しまれます。」

「ああ、すまんすまん、こうも色々物事が進展するとどうしても都合が悪く考えがちになるな。志郎たちが羨ましいよ。」

レオンハルトは遠慮しつつそう答えた。副官が答えて言う。

「志郎殿でしたら今晚閣下のお宅に参られると伺いましたが。」

「あ、ああ。エミリアにあいつの奥さんと会わせる約束でな。昔から志郎が好きだったあいつだから是非あいつの妻が見たいと言いつてな。」

苦笑しつつレオンハルトは言った。副官は微笑みながら言う。

「エミリア様は一途な方ですから・・・それはそうと閣下、新しいご夫人は探されないのですか？」

そう言われてレオンハルトは苦笑する。

「俺はシャリー一筋だよ。他の女に現<sup>うつ</sup>が抜かせるほど器用じゃないからな。それに、エミリアが納得しない限り俺はそんな女性は選ば



ないだろう。それよりも、ライザお前のほうが相手を探すほうが先だろう。」

副官<sup>ライザ</sup>は自分が言われたのを聞いて顔を赤らめつつ答えて言った。

「わ、私はそんな・・・閣下のお傍で働けられるだけで満足です。」

そう答えるライザを見てレオンハルトは苦笑した。そして彼は溜まっている仕事をこなし始めた。

「流石はレミアルト国王だな。こう言う事態に対してもしっかり準備をしていたか。」

志郎は感心しつつそう言った。アーレフが答えて言う。

「そうですね、父上は南方が安定化すると帝国は我々のほうに矛先が向くことを预期されていましたから。もちろん、先見の長の言葉もあったでしょうが冷静に分析できる者ならば父上の判断が最良だということとは分かるはずですよ。」

「そうね。当面の問題は其れでいいけれど、いざ開戦となったらどうしましょうかね。」

神<sup>しの</sup>がそう言った。志郎が言う。

「俺は参戦したいんだがな。」

苦笑しながら神しのが言う。

「あなたや慍しずかはそれでもいいけれどあたしはね・・・力をセーブしながら戦うってのもなあ・・・かといって使いすぎるのも納得は出来ないしなあ。」

そう言ってるのをみてアーレフと志郎は苦笑した。晶が言う。

「ということは、もう少しすれば戦争が起こるということですか？」  
「こちらが起こす気はありませんが、帝国側ではもう準備を始めていると見て間違いないでしょうね。そう言う意味ではほぼ確定事項でしょう。」

アーレフが答えてそう言った。晶が悲しげに言う。

「始まってしまおうのですか・・・皇の時でもそうでしたが戦争は辛いです。」

「まあ、巻き込まれるものにとっては辛いな。俺とかは好きで首を突っ込むほうだからいいが、関わりたくない者にしては迷惑極まりないからな。」

志郎がそう言う。苦笑しつつ神しのが言った。

「もし、どうしてもというのならば、だけど、一瞬で帝国を滅ぼしましょうか？」

衝撃的な発言に晶は慌てた。

「ちょ、ちょっと神さんしの待ってください。帝国内にも真面目に働いている方も居られます。十把じっばひとからげにそうやるのはどう考えて

もおかしいと私は思います。」

そう言うのを見て神は微笑みつつ言った。

「良く分かってるじゃない。あたしもそう思うから、ちょっと一般兵よりもすごいくらいで動いてるのよ。」

「ちょっとね……。」

志郎が突っ込みつつそう言った。神が不満げに言う。

「なによ、志郎文句でもあるの？」

「いろいろと。」

志郎はそう答える。神はショックを受けつつ言う。

「ぐ……いいもん、あたしもぐれてやる。」

「ちよっと神さん……。」

晶は焦りつつ言った。ミル達は苦笑しつつそれを見ていた。惺が言う。

「どちらにしてもアーレフの式が終わってから色々揉めそうだな。」

その意見に全員が頷いた。

帝国首都サデイルウムでは大々的に宣伝が為されていた。「北伐」

の布告が為されていたのである。今から約一月後、帝国軍の半数を持って大々的に侵略をすると言うものである。その報告は一般市民にまでに広められていた。つまり、諸外国にまで広めるのが目的なのである。

「また戦争かい。」

街中で女性がそう言ってきた。男は答えて言う。

「今度は北伐らしい。肥沃な土地を狙うらしいな。」

「どの道そんなことをしてもうちの生活が良くなるわけじゃないのにねえ。」

女性はそう言った。苦笑しつつ男は答えて言う。

「まあ、権力者は余程有能でない限り俺ら一般市民の事なんか考えないさ。」

「このままじゃ、望みは無いのかねえ。」

女性は嘆きつつ空を見上げていた。

セレナは何時も自分の部屋に来るドレスの仕立て人と話をしていた。

「こんなのはどうかしら？彼女きれいな黒髪だし、似合うと思うわ。」

それに答えて仕立て人が言う。

「確かに良いですわ。更に、こうされたいかがでしょう。」

そう言って、手元にあったボールを付け足して見せる。それに満足しつつセレナが言った。

「いいわね、これを私のプレゼントドレスにしましょう。至急仕立て上げお願い致しますわ。」

「畏まりました。極力急いで仕上げます。」

仕立て人はそう言って、引き下がった。それと前後してアーレフがやってくる。

「おや、さっきのはドレスの仕立て人ですね。セレナ、また新しいドレスですか？」

アーレフがそう言う。セレナは答えて言った。

「あら、お兄様。私ではありませんわ。先ほど、彼女と話し合って晶さんに差し上げるドレスの相談をしていたのですわ。」

「それは楽しみですわね。あ、そうそう、セレナ、済みませんが晶さんと暫く御相手して頂きたいのです。私はちよつと仕事が増えそうなので晶さんとゆっくりする時間が少なくなってきたようなのですよ。御願ひ出来ますか？」

アーレフがそう問うとセレナは笑顔で答えて言った。

「分かりましたわ、お兄様。では、私のほうから晶さんのお部屋に参りましょう。」

「有難う。御願いますよ。」

アーレフは微笑みながらそう言った。セレナが疑問に思いつつ言う。

「そういえば、慍<sup>しずか</sup>さん達はとうされるのでしょうか？」

「ああ、確か・・・慍<sup>しずか</sup>さんはラミアさんと一緒に兵士達と修練を続けるそうです。ミルさんはレネアさんと、まあ何時も通りですね。志郎さんは神<sup>し</sup>さんや玲さんと一緒にレオンハルト將軍のところに行かれるようですよ。」

アーレフはそう答えて言った。セレナはそれに答えて言う。

「そうですか、では、晶さんと話が合えば慍<sup>しずか</sup>さんのところに遊びに行こうかしら。」

「それもいいかもしれないですね。ちょっと気落ちしているので励ましてあげて欲しいのです。」

アーレフは済まなそうにそう言った。セレナは答えて言う。

「分かりましたわ。それでは行って参ります。」

そう言ってセレナは足早に出て行った。アーレフは微笑みつつその姿を見守っていた。

「いらっしゃいませ。御待ちしておりました。志郎様も、ご家族の方もどうぞお入りくださいな。」

エミリアはそう言って一行を迎え入れた。志郎が苦笑しつつ言う。

「おいおい、エミリアがわざわざ迎えに出てくるなんてどうしたんだ？」

エミリアはくすくす笑いながら言った。

「志郎様が奥様を連れて来ると聞きましたからね。是非拝見したいと思いましたのよ。」

「え？ あたし？」

神が驚きつつ言う。エミリアが微笑みながら言う。

「はい。素敵の方ですわ。是非こちらにどうぞ。」

そう言って、エミリアは一行を案内していった。応接間に入るとレオンハルトが待っていた。

「よく来たな志郎。神さんや玲さんもようこそ。拙い我が家だが楽しんでいてくれ。」

レオンハルトがそう言う。答えて神が言った。

「有難う。今回はお招き感謝するわ。」

「有難う御座います。私などが来ても宜しかったのでしょうか。」

遠慮しつつ玲がそう言った。エミリアが答えて言う。

「何を言うんですか。あなたのような方が来られて私は嬉しいです

わ。是非お友達になってくださいな。」

そう言って、エミリアは玲の手を取った。玲はエミリアに微笑を返しながら答えた。

「有難う御座います。私でよければ是非。」

「あら、子供同士早速意気投合かしらね。」

神しがそう言う。志郎も微笑みながら見ていた。

「エミリア、彼女が神しさん。志郎殿の奥しさんだ。」

レオンハルトはそう言って神しを紹介した。

「えっと・・・こちらが玲さんでこちらが神しさんですよね・・・？」

エミリアはやや当惑しつつそう言った。志郎はそれを見て苦笑しながら言った。

「二人はよく似てるからな。見間違えそうになっても無理は無い。髪の色が同じなら恐らくすぐは見分けがつかないくらいだろうからな。」

「そう言われれば・・・確かにそっくりですわね。親子以上に似ていらっしますわ。」

エミリアがそう言う。苦笑しつつ神しが答えた。

「まあ、親子ではあるけれど普通の親子とは事情が違うからねえ。」  
「えっと、それはどう言う事なのでしょう？」



エミリアは言われた事が理解できずに問いただす様に言った。神が答えて言う。

「あら？志郎、説明しなかったの？」

「あ、いや・・・説明はしたんだが俺の説明では理解してくれるのは難しくてな。まあ、今回神が来れば一番手っ取り早いかと・・・」

苦笑しつつ志郎がそう言った。呆れつつ神が言う。

「なによ、それって、あたしに丸投げって事じゃない。」

「あゝ、いや、そうとも言うんだが・・・すまん。」

志郎はそう言いつつ謝った。それを見ながらエミリアが言う。

「本当に仲むつまじいんですね。羨ましいですわ。」

「え？そうかな・・・そう見える？」

神がそう問いただす。レオンハルトとエミリアは肯定して頷いた。

「まあ、それは兎も角として。神さん、ご質問があるのですが宜しいでしょうか？」

エミリアが問い尋ねる。神は答えて言った。

「どうぞ、あたしが答えれる事なら何でもいいわよ。」

「それでは、遠慮なく。志郎様に惹かれた初期の理由と御一緒になるきっかけについて伺いたいですわ。」

「え・・・」

唐突な質問に神は言葉に詰まってしまった。戸惑いながらも答えようとする。

「その・・・何と言うか・・・正直に言わなきゃ駄目かしら？」

その質問にエミリアは頷いて答えるように神に勧めた。溜息を一つ吐きながら神が言う。

「あなたも、志郎に気があったのね。そうね、初めは志郎があたしの立場を知ってるにも拘らずあたしに「寝るのか？」と聞いたからよ。」

その答えにエミリアはきよんとする。

「えっと・・・寝る、ですか？」

「ええ。」

「どうして、寝ることを聞かれたことが興味になるんですか？」

エミリアの質問にレオンハルトが苦笑した。そして言う。

「それはなエミリア。ただ単に寝ると言う意味じゃないんだ。男と女が愛し合うために寝ると言う意味なんだよ。」

それを聞き、エミリアは顔を赤らめつつ言った。

「まあ！志郎様、神さんにそんな事をお聞きになったんですか？」

苦笑しつつ志郎が答える。

「ああ・・・そういえば言ったなあ。疑問に思ってた、な。あの

ときに神しのの顔は可愛かったぞ。」

「な・・・この馬鹿！」

神しのは顔を赤らめつつ志郎に向かって言った。志郎が苦笑しながら言う。

「そうそう、こんな感じの顔になってな。」

「く・・・言ってなさい。知らないんだから！」

神しのははぶてつつそう言った。エミリアは感心しながら見ている。そして言った。

「まあまあ、お二人とも当てられますわ。為るほど、そう言う事でしたのね。では、神しのさん。御一緒になるきっかけと為ったのはどういう事だったのでしょうか？」

「そうね。一緒に居てあたしの気持ちを理解しようとしてくれた事と、志郎が言った言葉が最後にはあたしの意思決定になったかな。」

神しのはそう答えた。志郎が問いながら言う。

「俺の言葉？何を言ったかな。」

「それはね。「なに、こいつを失うことに比べれば、造作も無いことさ。」と言う台詞よ。」

と、神しのは言った。志郎は思い出しながら言う。

「あ、グラムの前で言ったあの台詞か。」

神しのは頷いた。そして言う。

「すごく嬉しかったの。あたしを見つめてくれる人が居るってことが。基本的にあたしは、この世界では一人だ、と思っていたから。だから、嬉しかった。そして手放したくなかった。」

顔を赤くしながらしかしとても幸福そうに神は答えていた。それを見ていたエミリアが言う。

「羨ましいですわ。私もそんな出会いや心を通わせる殿方を見つけたいですわ。」

「おいおい、エミリア・・・お前まだ16だと言うのにもうそこまですんでるのか・・・。」

苦笑しながらレオンハルトが言う。エミリアは憤然としつつ言った。

「まあ！お父様！私だって素晴らしい殿方と結ばれてお父様や志郎様の様に幸せな家庭を築く楽しみを得たいですわ！志郎様はすでに神さんのものになっておられますし・・・」

「分かった分かった・・・全く言い出すと押さえが利かないのはシヤリーと同じだな・・・。」

苦笑しながらレオンハルトが言う。微笑みつつ志郎が言った。

「そういえばよく似てるな。確か、お前が大佐に特進した時だったな。シヤリーが、パーティーで・・・」

「ちょ、ちょっと待て志郎！それは・・・。」

レオンハルトは焦りつつそう言いながら志郎を遮った。エミリアが疑問に思いつつ聞く。

「どうなさいました？お父様。」

「あ、いや、その・・・。」

歯切れ悪くレオンハルトが言う。苦笑しながら神しのが言った。

「まあ、思い出としては美しいけど披露するには恥ずかしいところよね。」

そう言われて、レオンハルトは素直に頷いた。エミリアは呆れつつ言う。

「もう、お父様ったら。自分はそんな素敵な物語を描いておいてあたしにはまだ早いだなんてずるいですわ。」

「あ、いや、そうは言ってもだな・・・。」

レオンハルトはどう言っているかわからずしどろもどろに答えて言っていた。神しのが思いついたように言う。

「そうね、まずはお友達で同じ年くらいの男の子でも作ればいいんじゃないのかしら。エミリア。」

「まあ！名案ですわね。でも、最近出歩いていないもので中々そういう方には出会えてませんのよ。」

納得しつつエミリアは答えつつ疑問も呈してそう言った。神しのが答えて言う。

「気持ち分かるけど、焦らないことも大切ね。あたしだってこんなに早く相手が見つかるとは思ってなかった訳だし。」

「そうですね。今回の事でお父様も少しは真剣に私の事を考えてくださるでしょうし。」

エミリアはそう言いながらレオンハルトのほうに向いて軽くウインクをして見せた。レオンハルトは溜息をしつつ志郎に言う。

「あれだよ。シャリーとそっくりだよな。」

「本当だな。よく似てきたなエミリアは。」

志郎は苦笑しつつ眺めていた。

空はどこでもその姿を地上に映し出していた。

## 帝国（後書き）

帝国の思惑、神達しんの様々な思い。  
人々や「神」の思惑をよそに物語は進んでいく。  
次回「アーレフと晶の結婚式」。  
貴方にも良い風が吹きますように。

## アーレフと晶の結婚式（前書き）

レミアルト王都では盛大にアーレフと晶の結婚式が行われようとしていた。

そこで神達<sup>しのかみ</sup>はどう行動するのか…。



## アーレフと晶の結婚式

小説 風の吹くままに

### 第十五章 アーレフと晶の結婚式

その日は何時もと違った街の顔を見せていた。街の人々は表に出て賑やかに騒いでいる。人々の顔には笑顔が溢れ、また幸せそうに見えた。そう、他人の幸せを喜んでいるのである。今日はレミアルト王国第三王子アーレフ殿下とその妻となる日向晶との結婚式が行われるのだ。

「準備はもういいのかしら？」

神しのがそう言って部屋に来る。アーレフは答えて言った。

「ええ、私は大丈夫です。と言うか：神しのさん。式はまだまだ先のはずなのにえらくはしゃいでますね。」

「そお？まあ、自分の式じゃないからね。気楽に出来るのがいいわ。」

神しのはそう答えた。苦笑しながらアーレフが言う。

「まあ、確かにそうかもしれない。自分がいざその立場となると、少なからず緊張しますね。」

そう言ったのを見て神しのはくすりと笑った。志郎がその場に来て言う。

「お、アーレフはもう着替えたのか、早いな。しかしなんだな、俺はいまいちだが、流石王子というか、様になってるな。」

「志郎さん。これが似合わない王子に憧れてる女性方に失礼じゃありませんか。」

アーレフが生真面目に答えて言った。苦笑しながら神しんが言う。

「だそうよ。王族も面倒よねえ。」

「まあ、私は楽しんでますけどね。」

アーレフは微笑みながらそう言った。そこにラミアがやってくる。

「マスターここに居たのか。大神官様が探していたぞ。」

「あ、いつけない。式の段取りの約束忘れてた。志郎、アーレフ、行って来るわ。」

そう言って、神しんは部屋から飛び出していった。志郎はやれやれといった様子で言った。

「相変わらずだな。今度は何をするつもりなのやら。」

「ラミアさんの言った通りに為りましたね。」

アーレフはそう言ってラミアに微笑んだ。ラミアもそれに答えて頷く。そして言った。

「玲も行ったからマスターのことだ、何かしそうだな。」

「なに？玲まで？神しんの奴、何を企んでる？」

志郎が苦笑しつつそう言った。アーレフは微笑ましくその状況を見ていた。

晶の部屋では着付けのメイドや従者など人々が走り回っていた。

「これは、式場まで運びなさい。」

「こっちの衣装は式場の着替えの間に。」

「こちらはどうでしょうか？」

とまあ、こんな感じで右往左往していた。当人の晶はそこに座っている様にと言われて部屋の片隅で静かに待っていた。そんな中セレナがやってくる。

「あら、晶さんごきげんよう。心の準備は大丈夫かしら？」

「あ、セレナ様お早う御座います。はい。準備は整っております。」

晶はそう答えた。セレナは不満げに言う。

「もう！セレナと其のままお呼び下さいな、と申し上げたではないですか。あなたは私の義姉になるのですよ？」

「は、はあ：そう言われましてもいきなり王族の仲間入りと言う事が自覚できなくて：。」

晶は苦笑しつつそう答えた。セレナは一つ溜息をつきつつ言った。

「御義姉様！しっかり為さって下さいな。兄上を支える身近な存在はすでに義姉様なのですよ。義姉様も兄上の負担には為りたくは無いですよね？」

そう言われて、晶はたと気づきセレナを見上げた後でしっかりと頷いた。それを見たセレナは微笑みながら言う。

「それでこそ義姉様ですわ。仕度はこれから忙しいでしょうから私は他で用をして参りますわね。」

そう言ってセレナは部屋を後にした。晶はそれを見届けた後独り言のようにつぶやいて言った。

「皇から出るときはこんなこと考えてもなかったわ…」

そう言って、今日の前で右往左往している人々を見ながら微笑んだ。

「よし、そこはその位だな。こっちの飾りはもう少し奥側に移動してくれ。」

惶<sup>しずか</sup>は式場の装飾を見て色々指示を出していた。その装飾を手伝っているのは城内の兵士達である。

「惶<sup>しずか</sup>さん、これはどうしましょうか？」

兵士が装飾品を見せながら聞いてくる。惶<sup>しずか</sup>はそれを見つつ言った。

「こいつはさっき飾った奴と同じのだな。向こう側だ。あっちの奴と一緒に飾ってくれ。」

そう言って、方向を指差した。兵士は「了解。」と返事をしてすぐに取り掛かる。様子を見ていたレオンハルトが傍で指揮をしている隊長に声を掛けた。

「これはこれは：兵士までが総出なのか。」

「これは將軍閣下。お見苦しいところをお見せします。惺殿しずかの提案で私達も王子を祝福しようとのアイデアに全員が賛同いたしました。このような事に為りました。」

「なるほど、彼女の提案なら兵士達は賛同するな。それならば問題はない。逆に、彼らにはいい刺激になるだろう。これから大変になるからな。今のうちに明るい雰囲気は残して置きたいものだ。」

レオンハルトはこれから起こる不吉な事を予見する様に言った。隊長はそれを悟って言う。

「やはり、帝国は動きますか。」

「ああ、遅くともこの一月以内だろうと言う考察だ。式の時はい羽目を外すだろうがそれが終わったら引き締めはしっかりと頼む。」

レオンハルトがそう厳しい口調で言った。隊長は意を決した様に答えて言う。

「は。了解致しました。して、閣下お尋ねしたい儀があるのですが。」

「ん？何だ、言ってみろ。」

「志郎殿一行の件です。彼らはアーレフ殿を祝福される為に留まられていた筈。今後戦争が起きるわけですが彼らはどうされるのでしょうか？我々としては彼らが御一緒して下さると非常に頼もしいのですが。」

隊長はそう質問した。苦笑しつつレオンハルトが答える。

「もう、その質問に俺は何回答えたかな…。志郎達は暫く逗留するそうだ。帝国との一戦が一段落するまではな。それに、神しさんが怒ると帝国が滅ばされかねないからな。」

「は？ 神殿しと言うと志郎殿の奥様の？」

疑問に思いつつ隊長が言う。レオンハルトが答えて言った。

「ああ、まあ戦場で分かるさ。我々が神の加護を受けている事がな。」

「はあ…。」

隊長は要領を得なかったが志郎達が残存することを聞いて安心していった。

「ミル様、こっちですよ。」

レネアはそう言いつつミルを案内していた。

「レネアちゃん、どこに行くんですか？」

ミルはそう言いつつレネアについて行く。二人は城の目立たない一室に入った。

「ここは？」

ミルはレネアに聞くがレネアはそれに答えずごそごそとあたりを探し始めた。

「えーっと、どこにやったかな？」

ミルは何か分らず様子を見守っている。暫くしてレネアは目的の物を探し当てた様で言った。

「ありましたー。これです。」

そう言って、手にしたものをミルに見せる。ミルはそれを見つつ言った。

「えっと、これは何でしょうか？」

「えへへ、これはですねー。レネアの母上がこの城に来たときに、将来レネアがつけて立派な式に出るようにと残して下さったものなんですよー。」

レネアは少し自慢げに説明しながらそれを胸につけた。そう、非常に美しいブローチである。レネアが小柄なので非常に大きく見える。

「可愛いですねえ。でも、どうして、エルフの郷ではなくこの城に？」

ミルが感想を述べつつ、さりげない疑問を言った。レネアは苦笑しつつ言う。

「実はレネアが悪戯をしてここに隠しちゃったんですー。」

苦笑しつつミルが言う。

「だめですねえ。あ、でも、結果的にはこの式で使えるのだからいいのかな？」

「そう言うことにしましょう。式が終わったらまた楽しみましょう。」

レネアはそう言った。苦笑しつつミルが言う。

「仕方が無いですねえ。レネアちゃんはミルが可愛がらないといけないですからねえ。」

そう言われてレネアは耳を赤くしながらミルの身体に抱きついた。

「なるほど。分かりました、神しのさんのお好きになさって構いせんよ。」

大神官は頷きつつ答えて言った。神しのはやや驚いた様子で答えて言う。

「いいの？アーレフの結婚式なのに。」

「構いませんよ。逆にそれによりアーレフも含めて民全体にもあなたのことが理解できるようし、また、今後起きる大事に対してあなたの力が如何に助けになるかみんなが理解できる助けとなるでしょう。」



大神官は微笑みつつそう答えた。神は呆れつつ言った。

「流石ね、あたしの考えすらお見通しだったか。」

「いえいえ、全ては「かの方」のお導きですよ。」

落ち着いた様子で大神官は答えた。神はやれやれという調子で手を広げながら言う。

「なるほどね。それなら仕方が無いわ。ありがたく、式を進行させてもらうわね。」

大神官は微笑みながら頷いた。玲が言う。

「其れで母上。どうされるおつもりですか？」

「ああ、あなたの「声」が要るわね。」

神が答えて言う。玲が問い尋ねつつ言った。

「「声」ですか。」

「ええ、全員に一度に効果があって、且つ、誰もが理解できる「力」の一つだからね。まあ、最終手段としては「あたし」を千人位一度に創る方法もあるけど。」

神がそう言うとき晶は苦笑しつつ答えて言った。

「母上：それは効果的でしょうが、戦場ならともかく一般民衆の前でやると無用な混乱になりますよ…。」

「だよねえ：戦場でやることにしましょう。」

「やるんですか…。」

「最近、鬱憤が溜まってるからね。ここら辺で発散しないと、山一

つくらい吹き飛ばさないと気が済まなくなりそうよ。」

「母上……。無茶言わないで下さい。」

玲は顔に手を当てつつ呆れた口調でそう言った。神はペロッと舌を出して苦笑いをしていた。大神官は微笑みを湛えつつその様子を見ていた。

今日は城も大々的に開放され大勢の一般人が閱兵場に集まっていた。いつもなら、少々の部隊がいても広いと思える閱兵場なのだが今日は異様に狭く感じるのであった。

「ここってそんなに狭かったかねえ？」

「いや、狭いんじゃないかって人が集まりすぎなんだよ。いてっ！足を踏むなって。」

そう、ひしめき合うほどに人々が集まっていた。無理もない、久々の王族の結婚式があると言うのだ。しかも、一般市民までその式が見れるとあれば否応にも人が増えると言うものである。純粹に式が見たい者、煌びやかな王族が見れると楽しんでいる者、何か振舞われるのではと期待する者、様々な者が入り乱れていた。

「こりゃすごいな、見るだけで壮観だ。」

志郎は城から見下ろしつつそう言った。閱兵場から城門まで至る所、人、人、人、であった。見慣れていない者が見たら圧倒されるであろう。

「確かにすごいですねえ。ところでマスターはどちらに？」

ミルが、レネアと一緒に歩きながら志郎にそう聞いた。志郎が答えて言う。

「ああ、打ち合わせがあるとかで玲と一緒に大神官様の所に行ったよ。」

「そうですか。ミル達はとりあえず待ってればいいのでしょうか？」

ミルはそう尋ねる。志郎は思案しつつ答えて言った。

「恐らく神しのの事だ、何かサプライズをするに違いないさ。まあ、指示がない以上ここで待つとしよう。」

それを聞き、他の者は頷いた。志郎は眼下で行われている式の準備の様子に目を追っていた。

「もうそろそろだな、神しのの奴何をする気だか……。」

苦笑しつつ、志郎はそう言っていた。

「まもなく式典が始まります。ご来場の皆さんは静粛に。」

各地で立っている警備の兵士が大声でそう言っていた。それを聞き、

群衆の声は次第に小さくなっていく。仮にも式典自体は神聖な儀式である。それを各自がわきまえているからこそ出来る事であった。

「もう始まるか、急いで席に行かねば。」

レオンハルトは席に急いでいた。朝、仕度そのものが遅れた訳ではないがつつい、仕事上の指示をあれこれしていたら遅れてしまったのである。

「お父様！早くなさらないと。式はもうすぐですよ。」

エミリアがそう促す。レオンハルトは走りつつ答えて言った。

「分かってる、それよりエミリア、お前こそ気をつけろよ。その格好で走ると危ないんだからな。」

そう言って二人は式場へ足を早めていた。

「さて、そろそろ始めますか。玲、「声」の方はサポート御願いね。」

神は玲にそう言った。玲は答えて言う。

「お任せ下さい、いつでもどうぞ。」

それを聞き、神は笑みを浮かべた。そして彼女は「力」を使い始め

る。それにより彼女の身体は見る事が出来ないほど輝き始めた。

「母上、今回はえらくやる気ですね。」

その様子を見ながら玲はそう言った。神しのの身体の輝きは激しさを増し、暫くそれが続いていた。暫く続いた後、その光の塊は幾つにも分かれ始め全部で三十位になった。

『さて、これでよしと。』

神しの×三十人以上はそう言った。その状態を見た玲は言う。

「母上：これは、またすごい事を考えましたね…。」

『そお？まあもっと増やしてもいいけど皆に見せ付けるのならこれくらいでも十分でしょう。』

神しの×沢山はそう言って微笑んだ。そして、そのうちの一人と玲は式場に向かって歩いていった。残りの神しのは城の上の方に移動して行った。

式場は整然としていた。中央には国王夫妻が居り、その周囲には王族一族が並ぶ、その近くには各国から来た大使、来賓などが並んでいた。また、国内の優秀な部下達も一部並んでいたのであった。また、志郎たち一行もいっしょにそこに居た。

「もう始まるわけだが神しのはどこに行ったんだ？」

志郎が心配しつつ言った。苦笑しながらアーレフが答えて言う。

「神<sup>し</sup>さんの事ですから恐らくとんでもない仕方に来るんじゃないですかね。」

「違うない。」

志郎は苦笑しつつそう答えた。そうしているうちに軍隊の雅楽隊が演奏を開始し始めた。まもなく式が開始するのである。

「さて、行きましょう。晶さん。」

アーレフはそう言って晶の手を取った。晶は頷きつつアーレフについて行った。二人は共に白い衣装で着飾っていた。黒髪により衣装は更に映えて見える。

「お二人とも綺麗な黒髪ですから白い衣装で際立ちますねえ。」

ミルが二人を見ながらそう言った。レネアが言う。

「いいですねえ。あたしもミル様と式を挙げたいですねえ。うふふふ。」

そう言われてミルは躊躇しつつ答えて言った。

「え?! レネアちゃんそれはちょっと…(へへ)」

そんな二人を志郎は苦笑しつつ見ていた。

『静かに!』

強力な「声」がそこらじゅうに響いた。それを聞いた者達は一斉に静まる。「声」の正体に気づいた志郎が言った。

「玲か。神<sup>しの</sup>め、何をする気だ？」

そう言いつつ、志郎は式場を見ていた。

『皆の者。聞くが良い。この度、第三王子であるアーレフⅡレミアルトは伴侶を見出し結婚の儀を行うことと為った。お相手は皇から参<sup>ひなた</sup>られた日向<sup>あきら</sup>晶。我々は彼らを祝福し、その今後の幸福を願い、それによって我々も幸福を得るものである。我は杜<sup>あかむめ</sup>神、彼らを祝福すべく「神」の力を見せにそなた達の前に現れるものである。』

そう、「声」が響いた。式場に居る全員に、しかもはっきりと聞こえて五月蠅くない音量で聞こえるのであった。

「何だ、この声は?!」

「あたしにも聞こえたよ。」

「皆に聞こえているのか。」

「おい!上を見ろ!」

「何だ?」

そう言いながら皆は上のほうを眺めた。上には光るものがあつた。中央に一つ周囲に幾十もの光るものがあつた。その光の中に、人が居るのを認めた人が叫んでいった。

「人だ！さっきの声の人物か？！」

そう、白銀の髪を持ち鮮やかな赤い瞳を持つ美しい女性がそこには浮いていた。しかも、光を纏いながら。

『これより、結婚の儀を始める。皆の者、お黙りなさい。』

そう、「声」で威圧されて、人々は黙り込んでしまった。言いたくても言えなくなってしまうのである。女性は上空に浮いたまま、式の言葉を進めていく。

『さて、新郎アーレフⅡレミアルト。御主は生涯新婦日向晶を妻として迎え、愛し尽くす事を誓うか。』

その言葉に、アーレフは進み出てから答えて言う。

「はい。」

『宜しい。相応しい肯定の答えが得られた。ついで、新婦日向晶。御主は生涯アーレフⅡレミアルトを夫として付き従い、愛し尽くす事を誓うか。』

その言葉に、晶は進み出て答えた。

「はい。」

『二人の相応しい肯定の答えが得られた。式場にいる者も聞いたであろう。天上に居る神も御照覧あれ。私、杜神あかむすめが「神」として二人に祝福を授ける。例え苦難の道に歩もうとも、数多くの祝福を与えたもう。』



神がそう言うと、天空に眩い光が発生した。あまりの眩しさに人々は目を覆った。その光が収束し大きな塊となりアーレフと晶に入っていた。それを見ていた人々からは感嘆の声が出る。

『二人は祝福を受け入れた。故に、この祝福は確たる物となるであろう。さあ、二人の思いを皆の前に示すが良い。』

そう言われて、二人は向き合い、暫くお互いの顔を見つめた後、熱い接吻を行った。それを見つつ神は言った。

『ここに、神聖な行いの元、一つの夫婦が誕生した。皆も祝福せよ。また、皆も歓べ。神が定めた婚姻の儀にまた一組加わったからだ。』

そう、総括して神は式辞を終えた。神を覆っていた光は終息し神の姿は次第に人々から見えなくなっていた。暫く沈黙があった後、城を震わせるか、というような大歓声が起きた。

「おめでとう御座います！」

「アーレフ王子に祝福あれ！」

「晶姫様に祝福を！」

「レミアルト王国永遠為れ！」

「いやゝめでたい。」

「嬉しいねえ、皆で楽しまないかね。」

式場に居た人々はそれぞれがそれぞれの祝辞を述べていった。アーレフ達は身近に居る人からの祝福に答えていた。そんな賑やかな中で神が姿を現す。玲も一緒に居た。

「さて、こんな感じかしらね。」

悪戯小僧のように微笑みながら神しんは言った。その神しんを見つけながら国王が言う。

「おお、こんなところに居られたか。素晴らしい式を感謝するぞ。まさかこの様なものになるとは思ひもよらなかった。」

そう言われて神しんは恐縮しつつ言った。

「そう言われると考えた甲斐があるわね。あたしが与えた「祝福」については後日の楽しみにしてね。」

「分かった。そうするとしよう。」

国王は笑顔でそう答えた。志郎が神しんに近づいて言う。

「おい、神しん。あの何十人ものお前もあれもお前の仕業か？」

「ええ。」

「あんなに出して…皆面食らうんじゃないか？」

「それが目的だもの。」

神しんがけろっと答えてそう言った。志郎が呆れつつ言う。

「相変わらずだな、お前は。まあ、これから起こり得る事を考えての事なんだろうが。」

「流石はあたしの旦那様♪」

神しんはそう微笑みながら答えた。苦笑しつつ志郎が言う。

「そう言う言い方は自画自賛だろう…。」

そう言われて神しんはペロツと舌を出して見せた。挨拶がそれなりに終

わったアーレフと晶が神の方にやってきた。

「神さん。」

「おめでとう、二人とも。これで晴れて正式に夫婦ね。」

「有難う御座います。」

二人は丁寧にお辞儀をした。晶がその後、神に向かって言う。

「ところで神さん、あの「祝福」はいつたい…。」

そう言いかけた所で神は口止めながら言う。

「それは後でのお楽しみよ。そうね、数年後あなた達の子供が出来たときに分かるでしょうね。」

そう言われて、アーレフは気づきながら言った。

「なるほど。神さんらしいお節介ですね。」

神はそう言われて、アーレフにウィンクして見せた。つまり、その考えは当たっているわ。という意味である。

式場周辺はお祝い騒ぎで溢れかえっていた。城から配布される酒、食事など様々に振舞われ、来ていた民衆はそれぞれが楽しんでいた。そんな状況を見ながら神が言った。

「今の内だけだからね、これからが大変だもの今は皆で楽しまなきゃね。」

そう言っていたが、歓びの喧騒の中でその声は他人には届かず喧騒の中に消えていった。

明くる朝。閱兵場は以前の静けさを取り戻していた。夜遅くまで騒いでいた騒ぎも終わり、今は、後片付けに侍従達が忙しく働いていた。

「お早う御座います。」

アーレフはそうやって出会う人々に声を掛けていた。傍らには晶が居る。二人は共に初夜を過ごし清しい朝を迎えていた。

「今日もいい天気ですね。これから大変ですが頑張っていきたいと思います。」

アーレフがそう言った。そう、これから国家を巻き込んだ大事に為るかもしれないのである。晶はその言葉に真剣に頷いた。それを見てアーレフは微笑む。

「これはこっちでいいのか？」

そう言っているのは慍しずかであった。ラミアと共に侍従たちに混じって後片付けを手伝っているようであった。侍従はあれこれと指示を出しつつ手伝ってくれる彼女達と楽しんでいるようであった。

「お早う。アーレフ。今日もいい天気なようね。昨晚は楽しめたかしら？」

振り向くとそこには神しが居た。

「あ、神しさんお早う御座います。あ、はい。二人で楽しませてもらいましたよ。」

アーレフは答えてそう言う。つまらなそうに神しが言う。

「もう。アーレフはそうやって真面目に答えるから、言い甲斐が無いわねえ。晶みたいに顔を真っ赤にしてるくらいが可愛いのに。」

そう言われてアーレフは晶を見た。彼女は顔を真っ赤にしつつ俯いていた。苦笑しながらアーレフが言う。

「そうは言いますが神しさんだって志郎さんと昨日も、でしょ？」

そう言われて、神しは顔を真っ赤にしつつ答えた。

「そ、そんなのは当たり前じゃない！って、なによ、あたしは何でここで赤くならなきゃいけないのよ！」

自分が納得できないのか、不満げに神しはそう言うのであった。そんな神しを微笑みながらアーレフは見ていた。

「さて、壮大というか。意表を衝かれた結婚式だったわけだが、まあ、めでたいことは良い事だ。が、今はそれだけに浮かれていますわけには行かない。諸将も知ってるとは思うが近々帝国が我々に対し

牙を剥こうとしている兆候がある。故に我々としてもただ食われてやるわけには行かない。もちろん、負けるつもりは毛頭無いがっぷりと組み合えば被害は相当なものになる。故に、今日は皆に集まってもらい検討することにしたのだ。皆の多大な意見に期待する。」

レオンハルトはそう述べて軍事会議を開始した。そう、対帝国戦に向けての準備である。自分から攻め入るわけではないから多大な手間と費用はかからないとは言え、相手が相手である受ける被害も半端ではない。如何に回避し、如何に相手に打撃を与え、如何に有利に講和、または終戦させるか。それに関して様々な意見が交換されることとなった。

「ふう。お父様は暫く帰れそうに無いですわねえ。」

エミリアは議会で熱弁をふるう父親を見てそう言っていた。立派な父であり誇るべき軍人、将軍である。しかし、忙しい故に構って貰えない娘としては不満が無い訳ではなかった。

「どうかしましたか？エミリア。」

そう言われてエミリアは振り返る。そこには玲が居た。

「あ…玲さん。いえ、お父様が忙しくて構ってもらえそうにないので少々寂しくて…。」

頷きつつ玲が答える。

「それはお辛いですわね。私もまだ父上にはお会いしていないので今度母上に御願いしないといけませんわね。」

「え?! 玲さん、父上は志郎様じゃないんですか?」

驚いてエミリアが言う。苦笑しつつ玲が答えて言う。

「母上の思いつきでね。私は魔族と神との間で生まれた特殊な存在なのです。」

そういわれたが、エミリアにはいまいち理解が出来なかった。無理も無い、普通の娘が子供が出来ると言う事ですら神秘的なのに、魔族と神の子供などと言われて、うんなるほど、等と納得出来る筈が無いからである。微笑みながら玲が言った。

「分かりづらいかもしれませんがね。でも、私の眼を見て下さい。」

そう言われて、エミリアは玲の眼を見た。鮮やかで美しい緑と血の色。瞳。それを見てエミリアはポツリと言った。

「綺麗だわ……。」

「有難う。この眼は私の力を現しているのです。右の緑は「神」の力を左の血の色は「魔族」の力を。そう、私には二つの異なる力が働く特殊な存在なのですよ。」

玲はそう言った。戸惑いつつエミリアが聞く。

「あの…玲さん。そう言う特殊な環境に生まれてお辛くはありませんの？」

それに玲は微笑みつつ答えた。

「環境は問題ないのです。唯一、私が愛されている事それが私が分かりさえすれば他には何も要りません。エミリア、あなたもそうじ

やないかしら？」

そう言われて、自分の事をエミリアは考えてみた。父は自分の事を一生懸命考えてくれている。もちろん疎ましく思うこともあるがそれは私を愛しているが故である事も私には分かっている。そのこと自体は嬉しい事なのだ。そう思い起こしながらエミリアは頷きつつ言った。

「そうですわね。私もそう思いますわ。なぜ、今までそう考えなかったのか不思議な位ですわね。」

くすくす笑いながら玲が言う。

「それはね、いつの間にか、自分の事だけを考えるようになったからですよ。」

「あ…。」

エミリアは気づいた。そうだ、私は構って貰えないと文句を言っていた。しかし、父は色々な形で自分に愛を示していたのだ。逆に自分の方がその示した愛を気づかずに居たのではないか。そう気づいて、自分が恥ずかしくなった。

「恥ずかしいですわ。お父様には私を分かって下さらないとかぼやいていたのに結局は自分が一番分かっていたのですわね。」

エミリアは素直にそう自答した。玲が微笑みながら言う。

「そう分かったのですから、もう大丈夫。さあ、お父様の邪魔にならない場所に移動してお父様に愛を示しましょう。恐らくお父様もあなたを分かって下さいますわ。」



そう促されエミリアは素直に頷いた。そして二人は別室へと移動していった。

「あゝあ。折角アーレフにニヤニヤ出来るチャンスだと思ったのになあ。」

神が不満げに言う。志郎は苦笑しながら答えて言った。

「それは無理って相談だろう。神の方が顔に出すぎるから分が悪いってもんだ。」

そう言われて、神は頬を膨らませてはぶてていた。そんな神を見つ、そして頭を撫でながら志郎は言った。

「まあ、そう言う風に無理にしなくてもいいさ。これからまた大変だしな、レオンハルトの奴今日から会議詰めみたいだしエミリアが不満出さなきゃいいがな。」

そう聞いて神が気づいて答えて言った。

「エミリアの件なら大丈夫よ。玲が話してたみたいだし。」  
「ほう。」

「あの子も生まれが特殊だからなんか話になったみたいだね。さっき通りかかったけどなんだか二人で盛り上がっていたわよ。」

「それは良い事だな。あの子も一人っ子でなきゃ楽なんだがまあ、

仕方が無い面もあるか。」

「そうね、こればかりはね。むやみに死者を生き返らせるのも問題だしね。」

「いや、それはしないでくれ…。」

苦笑しつつ志郎はそう言った。

アーレフは部屋で神器を取り出してみていた。自分に押し付けられたものだが結果として晶が自分の伴侶と為る事に為ったのである。

「そう考えてみると、これに導かれたと言っても過言ではないですね。」

ふと、そう言っていた。それに答えるかのように後ろから声が聞こえた。

「流石に神官ね。詩人のような台詞だわ。」

吃驚して振り向くと後ろには神が立っていた。アーレフが苦笑しながら言う。

「聞いていたのですか。恥ずかしいですね。」

「あら。それならこっそり来た甲斐があったわね。」

神は、にやりと笑いながらそう言った。ふと気づいてアーレフが言う。

「しかし神さん。先ほど志郎さんと下のほうに降りたばかりだったと思いますが…。」

「ああ、それは簡単よ。まだ式のとくに創った三十人分の「あたし」が居る状態だからね。」

と、けろっとして神が答える。呆れつつアーレフが言った。

「神さん…もしかして、戦場で更に増やすつもりですか…。」

そう言われて悪戯小僧のように笑いながら神が言った。

「さすがねえ。そこまで分かるとは。やはり皆には生き残って欲しいからね。レオンハルトには後で言うけれど恐らく戦場で暴れることに為ると思うわ。」

「神さんらしいですねえ。その考えは非常にありがたいです。私から父上にも申し上げておきましょう。」

アーレフは微笑みながらそう言った。神が答えて言う。

「それは助かるわね。そうそう、神器はどうするのかしら？」

「これですか？」

アーレフが手にしている神器を神に見せながら言った。神は頷きながら言う。

「ええ。そろそろあたしに預けておく？まあ、基本的に王族の状態だから安全といえは安全だけれど。必要ならあなた専用の使い魔でも創るわよ。」

そう言われて、苦笑しながらアーレフが答えて言った。

「神さん：相変わらずですねえ。お気持ちは嬉しいですがお断りしておきましょう。あれだけ「祝福」まで頂いたのにこれ以上貰うと他の方から羨ましがられますよ。」

「アーレフらしい答えね。やはりお節介だったわね。いいわ、そうしましょう。」

神は諦めるようにそう言った。アーレフはそんな神を微笑みながら見ていた。

風はどこからともなく流れていた。

## アーレフと晶の結婚式（後書き）

無事に結婚式を終え幸せの内に終えた神達<sup>しの</sup>。

しかし、其れは次に来る大きな嵐をも現していたのかも知れない。

次回「嵐の前の静けさ」。

貴方にも良い風が吹きますように。

## 嵐の前の静けさ（前書き）

間もなく行われようとしている対帝国との会戦。

しかし、其れ迄には少しの幕間があった。

其処では何が行われるのか…。

（若干H描写が入ります。苦手な方はご注意ください。）

## 嵐の前の静けさ

小説 風の吹くままに

### 第十六章 嵐の前の静けさ

嵐は来る前は何故か異様に静かに為るものである。いや、静かに感じるものである、の方が正しいのかもしれない。

自分の部屋からアーレフは眺めつつそう思った。ドアを開けて晶が入ってくる。

「あら？ぼうっと眺めて。どうかされましたか？」

アーレフに向かって晶はそう言った。アーレフは振り返り晶に向かって微笑みながら答えて言った。

「ああ、晶。嵐の前の静けさだなと思っているんですよ。これから大きな嵐が来ますからね。」

そう言われて、晶は俯きながら言った。

「あの…戦を回避する方法は無いのでしょうか？」

その質問にアーレフはにっこりと微笑みながら答えた。

「そうですね、やり方は沢山ありますよ。」

「なら！その幾らもある方法を使うことは…。」

晶がそう言おうとしていた所をアーレフは遮りながら言った。

「確かに方法があります。しかし、それは大抵大半の人々が納得できない方法であったり、方法がありますが私たちでは実行できないものばかりなのですよ。」

「それはどういう事なのでしょう…。私は、なんだか混乱してしまっ…。」

「無理も無いですね、そうですね。先日神<sup>しの</sup>さんが言われたことが一例ですね。晶はあの方法は選択しなかったでしょう？」

「え…？」

そう言われて、晶は一生懸命に以前神<sup>しの</sup>に言われた事を考えていた。何を言われたのだろうか…。しばらく考えて、晶は思い出した。

「もし、どうしてもというのならば、だけど、一瞬で帝国を滅ぼしましょうか？」

そう、以前神<sup>しの</sup>はそう言っていた。自分はそれを否定したはずだ。帝国にも良い人は居るから、と言う理由で。

「そうですね、私は神<sup>しの</sup>さんの提案を拒否していましたね。確かに、神<sup>しの</sup>さんが言われる方法であるなら「帝国」は滅ぼせます。しかし、それだとなんだか根本的な解決にはならないような…。」

晶はそう言った。微笑みながらアーレフが言う。

「いい点に気づきましたね。まあ、人が人の根本的な問題を解決できる程、立派な存在であれば、今頃、当に「神々」の仲間入りでもしてるでしょうけど。まあ、其れは兎も角として、晶が述べている部分も真実の一面なのです。ですからあえて神<sup>しの</sup>さんは一旦会戦を



起こさせてから我々が勝利をすると言う形を作りその上で我々に有利で且つ、帝国の一般の人々が今までよりは苦しまなくていい結果が得られる選択肢を選ぼうとされてるのだと思いますよ。もちろん、彼女自身がやってみたい事も含んではいますけどね。」

そう言いながらアーレフは苦笑いをしていた。晶はそれを聞き、何故か泣いていた。その涙を静かに拭いながらアーレフが言う。

「自分がやりたいと言うものもあるんでしょうが神<sup>しの</sup>さんは優しすぎますね。心配なのは唯一其処だけです。少なからず、心は私たちとほぼ同一ですからその優しさが仇に為らなければ良いのですけどね。」

そう言われて、晶は頷きつつアーレフに寄り添っていた。城下では人々が自分の仕事のために縦横に歩いていた。

神<sup>しの</sup>は一人、いや数人か、レミアルト王都から少し離れた荒涼とした丘の上に来ていた。遮る物が殆ど無くしかも、周囲が開発されていないここは格好の会戦地と思われた。

「いい場所だわ。恐らくここが会戦の一つになりそうね。」

そう言い、神<sup>しの</sup>ズ（笑）は更に行動を広げながら戦場所の確認をしていた。

レオンハルトは今日も長々と続く会議を終えやつと食事でありついた所だった。みな有能な将校達が考える作戦だ、そう言う意味では非常に心強い。しかし、相手は戦を重ねてきた帝国軍である。近年会戦らしい会戦をせず模擬戦闘に明け暮れていた我々とは経験の上でどうしても差が出てしまう。それが、軍として致命的に為らな  
いか、レオンハルトはそこを非常に心配していた。

「やはり、実戦経験が無いのが不安かしら？流石の色男も悩みだすと顔が歪んでるわよ。」

そう言われて、レオンハルトははつとなり声の方向に顔を向けた。

「神殿か：急に、驚かせないでくれ。まさに、貴女の言う通りだな。我が軍は近年大規模な合戦はした事が無い、勿論模擬訓練は年に数回とやってはいるがね。だが、実際に衝突するとなれば予想外のことが起きるものだ。いや、起きるほうが戦場では普通なのだ、それが私には恐ろしくてな。」

自嘲気味にレオンハルトはそう言った。そう、個人技的には絶対の自信が持てるレオンハルトだが軍隊でと為ると厄介なものを操作しなくては為らないからだ。そう、人の士気である。これを操作するのは並大抵ではない。まだ一人で戦うほうが楽である。例え最前線でも。それほど、軍で士気を預かるのは重圧なのだ。維持できなければ負けに直接繋がるから。神しのはそう悩んでるレオンハルトを見ながらやれやれと手を広げつつ言った。

「もう！何の為にあたしがアーレフの式場で「神」を喧伝したと思

っているのよ。やっぱりここに来て正解だったわ。」

「其れはどういうことだ？」

神の意図が分からずレオンハルトはそう言ってしまふ。神は呆れつつ答えて言った。

「今回の会戦、あたしが直接的に介入するわ。一発で滅ぼす方法もあるけど、提案したら晶姫に拒否されたからね。あたしを幾つも創って個々に撃退するわ。」

そう言われてレオンハルトは啞然とした。言われた内容が、人の理解を超えていたからである。

「あ、いや…その申し出は有り難いのだが…神殿が幾つもと言うのが…。」

レオンハルトは戸惑いつつそう言っていた。神は悪戯小僧のように笑いながら言う。

「こう言うことよ。」

そう言って、ドアを開ける。其処から神が何人も入ってきた。それを見てレオンハルトは吃驚して椅子から立ち上がる。

『こうやって奴らと対峙しようって訳。いいかしら？』

神ズがそう言った。顔に手を当てつつレオンハルトが言う。

「は、ははは。志郎…。本当にお前の奥さんは素晴らしすぎる…。神殿、貴女の好意有り難く受けさせてもらおう。明日、一人会議に

参加して欲しいが宜しいかな？」

『ええ、いいわよ。』

神ズがそう答えるとレオンハルトは笑みを湛えながら言った。

「これで対帝国戦の対策は出来た様なものだな。」

『そうね、期待してていいわ。』

そう言っ、其処では笑いが起こっていた。

「ちょ、ちょっと待ってください。」

ある部屋からそう言う声が聞こえていた。傍を通る使用人達は聞こえはするが何時もの事の様に其処を通り過ぎていく。

其処ではミルとレネアが何時もの様に楽しんでいたのだった。

「またまたあ、ミル様も好き者の癖にい。」

レネアはそう言いつつ、ミルが感じる部分を攻める。

「ああ！やだ、レネアちゃん、首筋は駄目！」

「うふふ、可愛いですわ。ミル様、気持ち良くなって下さいね。」

そう言いつつ、胸から次第に手を下に持っていく。始めは些か抵抗していたミルも気持ちよいせいか次第に快感に身を委ねる様になっ  
て行く。

「あ…は…ミルばかりじゃ…駄目です。」

そう言っミルもレネアを弄り始めた。

「ひゃん！ミル様が、あたしに。」

レネアはそう言っミルに更にくっついた。お互いがより感じ合う様に為ろうとして。二人は相手を気持ち良くさせようと思いつく方法で弄っていた。

部屋からは甘い声が聞こえていた。しかし、それを聞いても使用人達は、何時もの事のように其処を通り過ぎているのだった。

「そうだ、段々良い感じに為って来たな。」

傭は兵士達と一緒に修練をしながらそう言っていた。傍ではラミアも別の兵士達と修練をしていた。その様子を見つつセレナが隊長に言う。

「皆さん素晴らしいですわね。最初の頃と比べて、素晴らしい進歩振りますわ。」

そう言われて、隊長も満足そうに答えて言った。

「ええ、これも傭さん達のお陰です。我々は殆ど実戦経験が無い者ばかりですからこの様に修練で鍛える以外殆ど無い訳ですが、中々、

理想的な方法は見つからないもので。」

「帝国が来るとしても彼女達が居れば安心ですね。」

セレナがそう言うのと隊長は得心しつつ頷いた。そんな中、<sup>しずか</sup>惺がこちらにやってくる。

「セレナ、君も楽しまないか？」

<sup>しずか</sup>惺はそう言いつつ手を差し伸ばしてきた。セレナは躊躇しつつ言う。

「え?! 私ですか? 申し出は有り難いのですが、その…。」

顔をやや赤らめつつセレナは言葉に詰まってしまった。<sup>しずか</sup>惺が優しく言う。

「別に、俺達のようにやろうと言ってる訳ではない。セレナもこの皆の中に入って楽しめればもっと楽しめれる、そう思ったただけだ。」

ぶっきら棒だが、心から自分を思ってくれている事が分かる言葉で言ってくれてる事にセレナは感動していた。暫く其のままで立ち止まっていたが突然城の方に走り出しながらこう言った。

「分かりましたわ。私も用意して参ります。」

そう言って城の方へ走って行った。苦笑しながら<sup>しずか</sup>惺と隊長はセレナの後姿を見ていた。

「もうレオンハルトには言ったのか？」

志郎は寄り添う神しにそう言っていた。神しはくすりと笑いながら答えて言う。

「ええ、別の「あたし」がすでに彼と交渉しているわ。」

「別の?? と言う事だ。」

理解できずに志郎が問い尋ねる。苦笑しながら神しが言った。

「結婚式の時に何人もあたしが居たでしょ。あの時の数人が彼の所に行ったのよ。」

「な…。お前…まさか、あれは本気だったのか…。」

「何よ、冗談とも思っていたの？一撃で滅ぼす方が楽だったのに晶に却下されたしね。まあ、彼女の気持ちも分からない訳じゃないから、今回はこの方法でやってみようと思ったのよ。」

そう言われて、志郎は苦笑しつつ答えて言った。

「相変わらずだな、お前は。レオンハルトが苦笑してるのが想像つくぞ。」

「あら。流石ね、良く分かってるじゃない。」

「そりゃあ。奴とは20年以上の付き合いだからな。」

感慨深く志郎はそう言った。そんな志郎を見て神しはより彼に寄り添うのだった。志郎はそれに気づいて神しを優しく抱くのであった。

「玲様、書物はこのような物で構いませんか？」

エミリアは玲と共に王城にある書庫に居た。そこに沢山埋蔵されている文献を玲が見たいと言って来たので案内をしていた所だった。案内された文献を眺めつつ玲が答えて言った。

「ええ。素晴らしいですわ。これから暫くの間、いろんな書物を読みたいのですが宜しいかしら？」

そう言われてエミリアは頷きつつ答えた。

「ええ、構いませんわ。ごゆっくりし易い様にお茶でも用意致しますよう。」

そう言って、其処を離れていった。玲はエミリアが見えなくなっ  
てから「力」を使い始め「闇」の姿で成る自分の影を幾人も作り出した。

「さて、これでいいですわね。さあ、今の内に沢山読みましょう。」

玲がそう言うのと影達は頷き沢山の蔵書を読み始めるのであった。尚、暫くして書庫で叫び声が上がったのは言うまでもない。（笑）



神しズの三人が街中を歩いてた。はたから見ると三つ子とでも見えるのだろう周囲から興味本位の目で見られていた。

『まあ、仕方が無いわね。こんな姿じゃ。目立つのは。』

そう言いつつ神しは歩いてた。そしてある建物の所で立ち止まった。暫く立ち止まった後、其処に入って行った。

「おや、誰だい？」

中のカウンターの向こうから年配の女性の声が聞こえてきた。神しが其れに答えて言う。

「お邪魔するわ。私達の名前は杜神あかむめよ。」

そう聞いて年配の女性は目を細めながら答えて言った。

「ほう：お前さんがあの神しさんか。噂は色々聞いているよ。ここらで活躍しているらしいじゃないか。」

そう言いつつ神しに椅子に座るように促した。神しは其れに答えて座る。勿論三人全員が。

「しかし、お前さん三つ子だったのかい？」

老女は不思議そうにそう聞いた。苦笑しながら神しが答える。

「そうじゃないわ。三人ともあたしよ。ちょっと事情があってね。今は三十人位になっている所なの。」

そう言われて老女は啞然とした。暫く呆けていたが氣を持ち直して言い始める。

「噂ではすごいと聞いていたがここまでとはね。で、このシェレーヌに何の用だい？」

「貴女が腕利きの情報屋でしかも情報操作にも優れている工作人員でもあると聞いてね。」

「ほう、誰から聞いたのかな？」

「剣志郎といえは分かるかしら。今は、あたしの旦那になって杜<sup>あかなし</sup>つて苗字だけどね。」

「何と…志郎の…お前さんが奴を捕まえたのかい。」

シェレーヌは驚きつつそう言った。苦笑しながら神<sup>しの</sup>が答える。

「捕まえたって言うか…どう言えばいいのかしらねえ…。」

そう言って神<sup>しの</sup>はシェレーヌに経緯を話し始めていった。

セレナは意気揚々と惺<sup>しずか</sup>たちの居る広場へと走っていた。久々に好きに動くことが出来るのだ。この最近大好きだった武術も馬術も戦術も様々な好きな学問がことごとく出来なくてストレスが溜まっていたからである。

「お、姫様だ。あのお姿は久しぶりだな。」

兵士達からそう言う声が漏れる。惺<sup>しずか</sup>は不思議に思っ<sup>て</sup>隊長に聞いた。

「セレナは普段ああいう格好でやっているのか？」

そう聞かれて隊長は苦笑しつつ答える。

「実は、王族の中でセレナ姫が一番武術では御強いのです。意外と思われるでしょうがレオンハルト將軍もお認めになるほどの腕前ですよ。」

「ほう。其れは楽しみだな。」

隊長の言葉を聞いて惺<sup>しずか</sup>は嬉しくなっていた。セレナは走り着くと、軍方式で敬礼しながら言った。

「セレナⅡレミアルト、これより修練を開始します。杜惺<sup>あかむぎ</sup>殿、ご指導御願致します。」

「あ、ああ、宜しく頼む。」

きちんとした挨拶に呆氣に取られつつ惺<sup>しずか</sup>はそう答えていた。セレナはくすつと笑いながら修練用の武器を構えていた。

「では、行くぞ。」

「はい！」

そう言って二人は修練を始めたのであった。そんな様子を気づいた周囲の兵士達は自分の修練の手を止めて其方を見る方に気が移っていくのであった。

エミリアはようやく目を覚ました。そう、彼女は書庫に居た沢山の影を見て叫び声をあげて倒れてしまったのである。目を覚ますと自分は寝ていることが分かった。しかも頭が非常に柔らかいところに横たわっている。膝枕だ。恐る恐る上に目を上げると玲が見えた。

「玲さん：私：書庫に一杯影を見て怖くなって気を失っていましたわ。あれは幽霊か何かだったのでしょうか…。」

エミリアは玲にそう言った。玲は苦笑しながら言う。

「エミリア、申し訳ないですわ。予め伝えておけば良かったですわね。彼らは私の影「ガイスト」と呼んでいます。一人お呼びしますわ。」

そう言って玲は一人近くににいるガイストを呼んだ。彼は傍に来て玲に挨拶をする。

「お呼びですか？ マスター。」

「御免なさいね、アイン。あなた達を見てこのエミリアが驚いてしまったから自己紹介をしてもらいたいの。」

「畏まりました。」

アインと呼ばれたガイストはそう言って恭しく礼をした後でエミリアに向かって挨拶をしつつこう言った。

「申し遅れました。私、玲様の影として仕えさせて頂いております。ガイストのアインと申します。皆様とは違った身体を持ちます為、驚かれる方が多いかと存じます。今後はどうかお見知りおきを。」

影である事を除けば至極礼儀正しい執事のようにであった。エミリアは状況をようやく理解して玲の膝枕から起き上がった。

「アイン有難う。本を読む作業に戻って頂戴。」

「了解致しました玲様。」

玲がそう言うときアインは礼儀よく返事をして指示された作業に戻っていた。一つ溜息をしつつエミリアが言う。

「神<sup>しの</sup>さんもそうでしたけど玲さんもすごい方なのですね。」

そう言われて玲は苦笑しつつ言った。

「母上程の事は出来ませんよ。彼らは私を手伝ってくれる影です。今は、私の為に本を読んでくれます。一人でこの蔵書を読み漁るのは大変ですから彼らは其れを手伝ってくれているだけですよ。」

エミリアは感動しつつ言った。

「いえ！素晴らしいですわ。ご自分の力で忠実な僕<sup>しもべ</sup>を創り出される程の力だなんて。私、あなたの事が大好きになりました。」

「え?!」

玲はそう言われて吃驚する。エミリアは興奮しながら続けてこう言った。

「これからは玲御姉様と呼ばせてくださいませ。私、エミリアは忠実な妹として御姉様を御手伝い致しますわ。」

「あ、いやちょっと…。」

突然の宣告に玲は躊躇してしまう。まさか自分の創った影を見てこんな反応が来るとは……。想像してない事だったのだ。焦りつつ玲が言う。

「待ってくださいなエミリア。どう勘違いしたのか分かりませんがこのガイスト達は私が創り出した存在です。ですから私に忠実なのです。貴女が私にその様にする事は無いのですよ?」

そう言われたが、エミリアは首を振りながら答えて言う。

「いいえ!是非ともエミリアを玲御姉様の僕しもべの一人にして頂きたいですわ!」

「ちよつと…どうしてそう言う結論に為るの:」

玲は興奮して近寄るエミリアに躊躇しながらそう答えていた。そして、影の一人にある事を命じた。影は頷いてそこを立ち去っていた。

「ちよつとお待ちになって、エミリア、まずは落ち着きましょう。」

玲はそう言ってなだめようとする。しかし、エミリアは興奮しつつ玲に迫るのであった。そんな感じで書庫は静かな筈の場所が賑やかな場所と化していた。

「へえ、流石は「神」と言う所だねえ。」

シェレーヌは神しのの話を聞きながらそう答えた。神しのは苦笑しながら言う。

「そうは言うけれど、貴女もすごいじゃないシェレーヌ。」  
「そうかい？」

シェレーヌは惚とぼけた様に言った。神しのは多少語調を強めながら言う。

「まさか、あたしからばれないとでも思ってる訳じゃないわよね？」

シェレーヌはやれやれと手を広げながら答えて言った。

「やはり「神」相手には流石にこのシェレーヌ様も誤魔化せない様だねえ。分かったよ。」

そう言って、彼女の周りが突然光り輝く。その光が収まるとさつきとは違い非常にスタイルがよく長い淡いピンクの髪を持つ美しい美女が現れた。

「なるほど、其れが貴女の本当の姿ね。いい女じゃない。」

神しのは彼女の姿を見つつそう言った。しかしシェレーヌは苦笑しながら言う。

「自分でも自慢だったんだけどね。其れでも志郎は口説き落とせ無かったよ。」

「あなたも狙ってたのね。こりゃ、あたしは何人の女に恨まれるのかしら……」

「そうね、軽く両手じゃ追いつかない位だろうね。」

そう言われて、神は肩をすくんで見せた。軽く笑いながらシェレーヌが言う。

「さて、本題に入ろうか。その「神」様があたしなんかは何の用だい？」

「簡単よ。これから帝国を翻弄するのに一役買ってもらおうわ。」

神にそう言われてシェレーヌはにやりと笑いながら答えて言った。

「楽しそうだねえ。あんたがただ帝国を叩くのではなく私等にも活躍の場があるんだね。」

「まあ、あたしだけで事を果たすほうが楽ではあるけれど、其れをしたら多分、その後200年以上ここは問題だらけになるでしょうからね。あたしはそんな事にはしたくは無いわ。」

「流石だね。ここの王様もそうだが、こう言う人、ってあんたは人じゃないけど、そう言う実的な存在が治めてくれれば皆が安心できただけだねえ。」

「それよ。帝国内の有力人物のピックアップをあなたにお願いしたいのよ。あたしが直接調べる方法もあるけれど、あなたのような人物が其れをやって、その資産を生かす様出来れば貴女も得でしょ？」

神にそう言われてシェレーヌは笑いながら答えて言った。

「流石だね、いや、流石すぎる。あたしに損得まで言いながら交渉するとは。あたしもあんたが好きになったよ。その話乗った。今後はあたしに任しといてくれ。」

シェレーヌがそう言って引き受けたのを見て、神は微笑みながら答えて言った。



「其れは良かったわ。今度志郎と一緒に来るわね。」

そう言つて、神は其処を後にした。神が出て行つた後でシェレーヌが言う。

「志郎が惚れるわけだ、「神」でありながら人を考える存在か。これはまた面白くなりそうだねえ。」

そしてシェレーヌは暫く笑い続けた。

「すごいなセレナ、君がそんなに凄いと俺は知らなかったぞ。」

慍はセレナの技を受けつつそう言っていた。そう、彼女は兵士達よりはるかに上手く慍は手を余り抜かなくても対峙出来る程だったのだ。セレナは答えて言う。

「わ、私は本気でやってますのに、軽々とかわされてるんですから、凄くはありませんわ!」

自分が本気で掛かつてるのに軽々かわされる現状を知ってセレナはやや興奮気味だった。自分でもレオンハルトに認められる程の技術は持っている自慢があつた。しかし、慍の前ではその技術ですら子供同然にあしらわれているのだ。気分がいいはずは無い。

「セレナ、少し無理をしているな。」

ラミアはセレナの様子を見ながらそう言った。隊長も心配して言う。

「姫様は素晴らしく強い方なのですが、慍さんやラミアさんとの差があり過ぎるのが気に入らないご様子ですね。」

突然、慍が攻撃をやめた。セレナは其れに合わせるのに遅れて慍に武器を当ててしまい慍は吹き飛ばされてしまう。

「な!!」

驚いて声を上げるのはセレナの方だった。吹き飛ばされた慍は途中で体勢を立て直し地面に叩きつけられる事は無かった。驚きと、自分が武器で殴ってしまった恐怖で震えながらセレナが言う。

「な、何故、攻撃を止めてしまいますの？私、気づけずに慍様を叩いてしまいましたわ！私、私…。」

そんなセレナに近づき慍は優しく言う。

「済まないセレナ。俺が君を傷つけていたようだ。君の自尊心を傷付けていたのであれば謝る。許してくれ。」

そう言われるがセレナはそんな問題より自分が慍を傷つけた事に酷く打ちのめされていた。

「私が慍様を…私が…。」

俯きつつ、自分の手を眺めてセレナはそう繰り返していた。慍は溜

息をひとつ吐いてからセレナの手を取りそして、彼女の目の前に顔を持ってきた。そして言う。

「セレナ。しっかりするんだ。何時もの君は何処に行った。こんな事で毎回自分を見失っては将来自分が直面する事柄に対処できずに自分だけでなく周りの人間も苦しめる事になるぞ。」

そう言って惺しずかはセレナを見つめ続けた。暫くその状態が続く。暫くした後ようやくセレナは我に返った。

「あ、惺しずか様：済みません。私取り乱してしまいましたわ。そうですね、貴女の言われる通りです。これからは氣をつけますわ。」

セレナはそう言った。惺しずかは穏やかな顔で微笑みながらセレナを見つめつつこう言った。

「良かった。今日はこれで修練は終わろう。君がこれ以上傷つかないほうが良い。」

そう言われて、セレナは顔を赤くしてしまった。自分でも分からないほどに。そして其れに気づいて、

「失礼致しますわ。」

そう言って急いで城の中に走り去っていった。其れを見ながらラミユアが言う。

「まるで、惺しずかに恋をしている様だな。」

兵士達の間では動揺が起こっていた。惺しずかは良く分からずきよとんと

していた。

レオンハルトは突然現れた使者に驚いていた。彼は人では無かったからだ。そう彼は「影」だった。

「突然の訪問、不躰に失礼致します。私、玲様の影ガイストのフィアと申します。」

フィアはそう丁寧<sup>ていねい</sup>に礼をしながら述べた。その様子<sup>ようす</sup>と玲の、と言う台詞からレオンハルトは落ち着きつつ答えて言った。

「なるほど、玲さんのか。で、何用かな。」

「はい。実はエミリア様のことで少々。」

「む、エミリアがどうかしたのか？」

フィアの台詞にレオンハルトはやや緊張した。フィアは其れに答えて言う。

「実はエミリア様が私共を見た後で驚いて気を失われたのですが、気がつかれた後で玲様の説明を聞いた後、玲様の妹になる、僕<sup>しもべ</sup>にしてくれとお騒<sup>さわ</sup>ぎになられまして玲様も対応を苦慮<sup>くろ</sup>なさって居られます。ここは、父上にも御知らせせねばと玲様が私を御遣<sup>つか</sup>わしに為ったので御座います。」

そう言って丁寧にお辞儀をした。レオンハルトはやや苦笑しつつ答えて言った。

「エミリアが……。あいつめ、志郎の次は神しのさんの娘に惚れ込んだか。相変わらず、あれの好みは理解しかねるな。フィアと言ったな、玲殿に伝えてくれ。玲殿さえ良ければエミリアを好きに扱ってくれと。」

そう言われて、少々フィアは焦りつつ答えた。

「其れで宜しいのでしょうか。」

苦笑しながらレオンハルトが答える。

「志郎に惚れ込んだ時にもあいつは言うことを聞かなかった。恐らく俺では今回も無理だろう。残念だがな。シェリーが生きていればとこう言うときは思うよ。まあ、玲殿は神殿しのの娘で問題がある人物ではないし、彼女さえ良ければエミリアをお願いしたいと伝えてくれ。」

そう言われて、フィアは恭しくお辞儀をしながら答えた。

「畏まりました。玲様にはその様に御伝えして参ります。」

そう言って、フィアは部屋の影に溶け込むように消えていった。フィアが去った後でレオンハルトが自嘲気味に言う。

「やれやれ、俺も驚異的な存在に惚れ込んでエミリアにあれこれ小さい頃から教え込んでたからな。まさかこんな風に開花するとはな……シャリーに怒られそうだ。」

そう言って肩をすくんで見せた。

外では、嵐の静けさとも言わべき様に静かに空気を湛えていた。

## 嵐の前の静けさ（後書き）

会戦までの幕間に人々のいろいろな思惑が交錯する。  
愛に、欲望に、希望に、色々なものに。

次回「それぞれの想い、それぞれの企み」  
貴方にも良い風が吹きますように。

## それぞれの想い、それぞれの企み（前書き）

帝国との会戦に備え準備を進める神達<sup>しん</sup>、

また逆に侵略の意志を示す帝国、

それぞれの思惑を秘めながら物事は進んでいく。  
為り行く結果は如何なるものに為るのか…。



## それぞれの想い、それぞれの企み

小説 風の吹くままに

第十七章 それぞれの想い、それぞれの企み

玲は困っていた。自分の力を少し示しただけでこうも人に影響があるとは思ひもなかったからだ。そう、今彼女の傍らにはエミリアが畏まっている。しかも、今までのお嬢様ドレスの格好ではなく、城内で忙しく働いている使用人達と同じ様なメイドのような格好で。

「あの…玲御姉様？」

エミリアがそう言う。玲が苦笑しつつ思いに耽<sup>ふけ</sup>っているので戸惑いつつ、恐る恐る声を掛けていた。そう言われて玲はハツとなりエミリアの方を向きながら答える。

「ああ、何時までも呆けていては行けませんわね。文献を読む作業を進めましょう。エミリア、またお茶を持って来て下さるかしら？」

玲はそう、優しくエミリアに言った。そう言われてエミリアは嬉々としながら答えて言った。

「あ、はい！ 畏まりました！ エミリア、玲御姉様の為に美味しいお茶を淹れて参りますわ。」

そう言ってエミリアはステップを踏むかの様に喜びながらお茶を淹れる為に別室へと向かって行った。彼女が出て行った後。アインが

玲に近づいて言った。

「マスター。宜しいのですか？此の俣だとずっとエミリア様はマスターに付いて行くと思われますが。」

そう言われて玲は苦笑しつつ答えて言った。

「そうね…でも、彼女の気持ちも分かるから無下には出来ないのですよ。私も母上が素晴らしく離れそうに為れないのと同じでエミリアも私を見て「力」に感動したのでしょうか。レオンハルトが良いと言う訳ですから私は此の俣行こうかと思っています。」

それを聞きアインは答えて言った。

「マスターがそう仰られるなら私共が意見を言う立場では御座いません。差し出がましい事失礼致しました。」

そう言いつつ、恭しく礼をする。玲は苦笑しつつ答えた。

「いえ、いいのよアイン。貴方にもこれから苦勞を掛けると思うわ。ま、大変だけれど楽しい日々がね。」

そう言って玲は微笑んだ。アインは更に恭しく玲に礼をするのだった。

レミアルト王国国軍の軍略会議では皆が驚いて今日来ている来賓を

見ていた。そう、神が其の中に居るのである。レオンハルトが言い始める。

「さて、式場に参列した者なら知ってる者も居ると思うが、彼女が志郎の妻でもあり、先の式場で「神」として宣誓された杜神あかむめ殿だ。」

そう言ってレオンハルトは神を紹介した。神は促されて挨拶をする。

「宜しく。今回あたしは帝国軍との戦いに介入する事にしたの。そこでその事を皆さんにも熟知してもらいたくてレオンハルトに頼んでここに居る訳よ。これから暫く付き合ってくださいな。」

神はそう挨拶していた。普通の人の様に話している神を見て素直に納得する者、懐疑的に見る者、色々居た。苦笑しながらレオンハルトが言う。

「先日のあれを見たと言うのにお前達の間ではまだまだ、事実に対する認識が薄いようだな。まあ、この俺も中々受け入れるのは大変だったが。神殿、済まないが外に待たせている「あなた」も中に入れて話を進めようじゃないか。」

そう言われて神は部屋の外に居る「自分」を呼び寄せた。その後、会議場から大きなどよめきが起きたのは言うまでもない。

セレナは窓の下で修練を兵士達に続けている惶しずかを見ていた。そして

たまに、気づいたかの様に溜息を吐く。ここ数日、これを繰り返している毎日だった。それを見つつ、メイド長の一人が苦笑しながら言う。

「セレナ様。なんだか恋する乙女ですわね。」

そう言われて、セレナは、顔を真っ赤にしつつメイド長のほうを向いた。そして言う。

「わ、私は…其の…別に、しずか惺様のことは何も…。」

それを聞いてメイド長はくすくすと笑いながら答えて言った。

「あらあら。しずか私は別にお相手が惺様とは言っておりませんですよ。そうですか、しずか惺様に。あの御方は凛々しいですからね兵士達にも人気ですし。」

顔を真っ赤にしつつ、セレナが答えて言う。

「え、ええ。大人気ですわ。見かけは少女のようですが示される行動、思い、何気ない気遣いが素敵ですわ。本当に素敵で…。」

そう言いつつ、セレナはまた窓の下に見えるしずか惺に目を落とす。それを見ながらメイド長は微笑みながらその場を去っていった。そんな時、ふとしずか惺がこちらを見た。そしてセレナに微笑んでくる。セレナは吃驚して窓から飛び退いてカーテンの影に隠れてしまった。

「しずか惺様が、私に…。」

セレナはそう言って真っ赤だった顔を更に真っ赤にしつつうずくま蹲っている。

た。

何時もの様に兵士達と修練をしていた<sup>しずか</sup>惺はたまたま見えたセレナに微笑んでいた所だった。しかし、彼女は奥に下がってしまった。不思議に思いつつ<sup>しずか</sup>惺が言う。

「最近、セレナの様子がおかしいのだが何故だろうか？」

そう質問されて、隊長が苦笑しながら答えた。

「<sup>しずか</sup>惺様、まだお分かりになりませんか？」

隊長の言う意味が分からず静かが尋ねる。

「何をだ？俺にはお前の言うことがよく分からないのだが。俺は何を分からねば為らぬのだろうか。」

苦笑しつつ隊長が答えて言った。

「セレナ様は<sup>しずか</sup>惺様に恋をしていらっしゃるのですよ。もしかしたら其の先まで考えておられるかも知れませんがねどもね。」

<sup>しずか</sup>惺はその意味が暫く分からずにキョトンとしていた。暫く経ってから思い出したように言い始める。

「何?! セレナが俺に? でも何故俺なんだ? 城の中ではいい男が沢

山居るだろうに。」

苦笑しながら隊長は其の意見に答えて言う。

「残念ですが、この城内では志郎殿やレオンハルト閣下以外でセレナ様の目に叶う御仁はほぼ居ないと思いますよ。其の、姫の期待する方はそう言う方ですので。しかも、志郎様にはお相手がすでに居られますし、レオンハルト閣下はシェリー様を亡くして以来妻を迎える気は無いと公言していらっしやいますからね。」

そう言われて、惺しずかは暫く悩んでいた。そして答える様に言う。

「そうなのか。俺はどうすればいいのだろうか。」

それに答えて隊長が言った。

「惺しずか様がしたい様にされるのが一番ですよ。セレナ様の期待に答えるのも良し。逆に、答えなくても問題は無いでしょう。」

「何？ そう言うものなのか？ 期待には答えるべきと思っていたのだが。」

疑問に思いつつ惺しずかはそう答えた。苦笑しながら隊長が言う。

「まあ、全てそう出来ればいいのですが実際は何もかも手に入れる事は叶いません。ですから、より大事、または失いたくないものを自分で選んで決める必要があると思います。あ、こんな事は私共が言うべき事でもありませんでしたね。差し出がましい事失礼致しました。」

そう言いながら隊長は惺しずかに恭しく一礼した。惺しずかは答えて言う。

「いや、俺にとっては有り難い助言だ。皆から聞くことは非常に有益で為になる。そうか、今度セレナと話をしてみよう。」

惺しずかはそう結論付けた。隊長は其の様子を微笑ましく見ていた。

「何？玲にエミリアが、惺しずかにはセレナが、付いて行きそうだと言うのか？」

志郎は驚きつつ神しのにそう言った。神しのは苦笑しながら答えた。

「ええ、どうもそんな様子。エミリアはもう数日間玲にべったりよ。しかも、自分のドレスを捨ててメイド服を着てね。セレナの方は惺しずかを見ながら溜息ばかりの毎日らしいわ。辺りでメイドたちの噂になってるわよ。」

そう言われて、志郎は苦笑した。そして言う。

「考えてみれば二人とも、強い者に興味津々だからな…。玲のあの驚異的な力を見ればエミリアの態度は理解できるし、惺しずかは生真面目にやるからセレナみたいな武術好きには惚れてしまうのだろうな。」

そう結論付けた。神しのも納得しつつ言う。

「恐らくそんな所でしょうね。まあ、問題はこれからよ。この問題が片が付いたら、彼女達付いて行きそうだわ。あたしが心配なの

は其処くらいかしらね。」

そう言われて志郎はハッとさせられた。ミルに付いて来るレネアもそうだが、実質人員増加に為りそうだった。苦笑しつつ志郎が言う。

「やれやれ、アーレフ達が離れて少しは静かに為ると思いきや、逆に賑やかに為るのかな。」

「恐らくね、まあ、帝国にはラミユアを置いていくからそんなに人数は増えないでしょうけれど。」

神しのが意味深なことを言う。志郎が疑問に思い尋ねて言った。

「其れはどう言う事だ？」

「えっとね…。」

そう言って神しのは予かねてよりの「計画」を語り始めた。

軍略会議場では些か賑やかに為っていた。無理も無い、来賓として現れた二十人もの神しのを見たからである。

「これはどういう事だ…。」

「なるほど、式場で見た姿はこう言う事だったのか。」

「流石に「神」であるだけあられる。素晴らしい。」

理解出来ない者。理解出来る者。更に、其の素晴らしいさに感動出来る者。反応は様々だった。そんな様子を見ながらレオンハルトが言



い始める。

「さて、驚いてる最中だが神さんの提案を入れて我が軍は方針を大きく転換する。勿論軍としてはあくまで専守防衛で攻める事はしない。しかし、神さんが帝国に攻める事になるのでそれに関し、若干修正を加えながら国家としてサポート出来る様に軍は展開する事に為る。先ずはこの事を諸将は理解してもらう。」

「閣下、神さんが攻める、と言うのはどう言う事でしょうか？ 非凡な身としては直ぐに理解しかねるので御教授して頂きたいのですが？」

一将校が理解しづらい内容だ、と言うことを訴えた。レオンハルトは頷きつつ答える。

「理解しづらいのは無理も無い。俺もこの話を聞いた時は暫く理解できなかった。先ずは神さんの話を聞いてもらおう。神さん、御願います。」

そう言ってレオンハルトは神に話す様に促す。神はそう促されて話し始めた。

「では、話すわね。まず、基本方針としてあたしは「帝国」を完全に手中に収め「帝国」を解体する事を計画しているわ。」

そう言われて、会議場は騒然とした。レオンハルトが一同を静める。静まった後で神はどう行うかについて話し始めた。

帝国では着々とレミアルト王国侵攻作戦の準備が行われている筈であった。が、事態はそう上手くは行かない。様々な理由はあるが、最大の問題は帝国内の人心の腐敗であろう。権力者は己の権力に執着し、市井の市民は自分達の生活が改善しない故に権威に対して不遜に為る。そう言う悪循環が出来上がっていたのである。勿論帝国内でも良識的な者や献身的な者も居た、しかし、全体として既に帝国は自浄作用以上に国内の腐敗が蔓延<sup>はびこ</sup>っていたのであった。

「全く話にならない！」

そう文句を言いつつ帝国議会から退席をする青年の姿があった。苦笑しながら女性副官が近づいて言う。

「議会は相変わらずですか、グラハム閣下。この様子では侵攻計画が出来ても実行時に更に問題が起き結果的に責任問題に直結しますね。」

鋭く、今後に起き得る点を考え、意見を述べる。舌打ちをしながらグラハムと言われた青年が答えて言った。

「ラーナ、俺のことはセイルと呼べと言っただろう！何度も言わせるな。しかし、此の件ではお前の言う様に折角育て上げた部下を死地に向かわせる様なものだ。また、皆で話し合わないといけないかな。」

セイルに注意をされラーナは多少怯んだものの悩む上官を見てさかさず述べて言った。

「其の件に関しては既に主要メンバーを何時もの場所に集めてあり

ます。後はセイル様が来られれば何時でも出来ます。」

そう言われて、セイルはラーナを見つつ笑いながら言った。

「ふっ、相変わらず見事な手腕だ。分かった、早速行こう。この様子では我等も安心して寝ている状況ではないからな。いい解決方法を探らねば。」

そう言ってセイルは、目的地へと向かって行った。ラーナは付かず離れず付いていく。

「やれやれ、揃いも揃って我が帝国内の者共は無能の巣窟と化しているのかな？　どう思っかね、ランカスター殿。」

玉座に座る男はそう言って近くに居る男に尋ねた。ランカスターと呼ばれた男は暫く黙っていたが考えを纏めたのか口を開きこう言った。

「全てが無能と言うわけでは御座いませんが、其の無能者が有能な者の足を引っ張り、結果として帝国を揺るがしているのは事実で御座いますな。」

そう言われて、玉座に座っている男は笑い出した。暫く笑った後に言う。

「やはり、お前を傍に置いて正解だな。今までの奴等は太鼓持ちに

過ぎぬ。玉座の傍に居るべきなのは、都合の良い脚本家ではなく毒舌な批評家であるべきなのだ。」

そう言った後で、侍従を呼ぶべく手元にあったベルを鳴らした。それにより、素早く待機していた侍従が出てくる。それを見て男は言った。

「グラフェルト將軍を呼べ。立場上あいつが最高位だ、最高責任者としての責務を果たさせてやろう。」

そう言われて、侍従は短く「はっ。」と返事を言ってから素早く下がって指示を果たしに向かった。それを見届けた後、男はこう言い出した。

「さて、この数百年、帝国内でも禁忌とされていた事をやろうとするのだ。栄光に繋がるか、それとも、私を含めて帝国の滅亡に繋がるか。楽しみだな。」

帝国の存亡ですら、この男にとっては既に、意味が無い物の様であった。そう言って男は、また、なにやら考えに耽<sup>ふけ</sup>るのであった。そう、彼こそがサディルウム帝国第四十四代皇帝ヴェルザイライド十四世であった。傍に居たランカスターという男は、そんな彼を見て少し哀しい目をしていた。

「相変わらずだな、お前は…」

志郎は、神しのから「計画」を聞かされて呆れつつも、楽しそうに聞いている。

「あら、反対はしないのね。」

神しのがそう言う。苦笑しつつ志郎が言った。

「反対したら、お前やめるのか？」

そう言われて神しのは見事に首を振った。苦笑して志郎が言う。

「だよなあ…。もう既に俺も諦め気味さ。まあ、本当に大事な事とか、俺達をもろに巻き込む事は必ず相談に来るから気にはしてないんだけどな。」

そう言われて神しのはやや顔を赤らめつつ言う。

「ちょ…ちょっと何よその言い方は…あたしは、そんなに良い人じゃないですからね！」

既に「人」では無い筈なのだが、焦ってその辺の間違いに気づかない辺りが可愛いな。志郎はそう思った。

「しかし、内部からも同調者を探すか。アイデアとしては良いな。シェレーヌなら任せれるしな。帝国内では結構不満もあるらしいから後はやり方次第ってところか。ところで、ラミューを置いていくと言ってたが、統治組織の一部に組み込むと言うことなのか？」

志郎は疑問点を神しのに聞いた。神しのが答えて言う。

「組み込むと言うより、側近に置いておこうと思っただけ。帝国支配用の、ああ、解体するから帝国じゃなくなるけど、新国家用の新しい存在を創るからね。其の補佐的役割に置くのよ。そうすればディルサイヴを連れて来て一緒に生活も出来るでしょうしね。」

ディルサイヴと言われて志郎は納得した。そして言う。

「なるほどな、彼は旅が出来るほどの身体ではないから、新国家で安定した環境下にラミューアを置くと言う理由でこっちに呼び寄せて一緒にさせる腹か。」

「そう言うこと。彼の寿命も延ばしたとはいえ長くは無いからね、ラミューアが慕った彼だもの出来るだけ一緒に置いてあげたいのよ。それに……」

「ん？」

「其の方が彼にもいいでしょうからね。研究が進むという理由で。ラミューアとまでは行かなくても彼なら素晴らしい研究結果が将来出来そうな気がするわ。」

神はそう、起こるかも知れない未来に期待を寄せながら言った。志郎は苦笑しつつ言う。

「相変わらず、お前は優しいな。」

そう言われて、神は顔を真っ赤にしつつ言う。

「馬鹿……」

二人は何時もの様に互いを暖め合っていた。そう、身体も、心も。

「為るほど…。」

軍の作戦会議場では神しのの説明が続けられていた。予め神しのの数人が調べておいた合戦予想地を示しながら神しのは軍としてはどう防衛しながら神しのがどう攻めるかについて話していたのである。其の論理的な話の展開に聴衆はみな聞き入っていた。

「と、言うわけよ。以上が今回のあたしの侵攻計画「帝国解体作戦」よ。まあ、最終的にはあたしが創った存在を国王とする神権国家を樹立させる目的だけだね。」

締めくくりに、神しのの壮大な目的が発表され会場は騒然としていた。レオンハルトは苦笑しながら言う。

「神しのさん…そこまでは先日、俺に言わなかったじゃないですか…。」

神しのはペロツと舌を出しながら答えて言った。

「ええ。言えば、国王に刎上るとか貴方なら言いそうだからね。まあ、例え国王に言っても通る議題ではあるけれど。時間がかかって面倒になるから先にここで発表したのよ。」

そう言われて、レオンハルトは笑いながら答えて言った。

「流石だな、俺は無骨者ゆえ真面目に考えすぎるが、確かにその方が、時間的にも無駄が無い。分かった、会議の結果として神しのさんの意見である事を踏まえながら国王に申し上げよう。」

「御願ひするわ。レオンハルト。」

神はそう言った。会議は円満に終了し、各将校は内容を良くかみ締めながら退出していった。

セイルは何時も仲間が居る建物へと入っていった。そこはこじんまりした場所で傍目には普通の酒場である。入り口には貸切と看板が下がっていた。セイルとラーナは其処に入る。中には十数人の男女が居た。

「閣下、先にやってますよ。」

「お、ラーナ嬢もや々と来たか。」

「セイル様、早くこっちに。」

どうやら既に、出来上がっている者も居るようだった。苦笑しつつセイルは席に着いた。そして言う。

「楽しんでる所を悪いが状況はかなり芳しくない。此の俣では、我々は前線で無闇に翻弄され、せっかく育て上げた部下達を死地に送らせかねない。其処でだ。お前たちの意見を聞きたい。意見がある者は進んで述べてくれ。」

そう言われて一人が手を上げた。それを見てセイルが言う。

「ジェネット、言ってみろ。」

「はい。最近不穏分子、要するに現政府に反抗する者達ですが其の



者達の中へどうも工作員らしい者が紛れ込んでいるようでかなりの意思操作が見えます。で、個人的にコンタクトを図ってみた所、レミアルト王国からの工作である事が分かりました。ただ、その内容的には帝国は崩壊するかもしれませんが我々としては有益そうなのでこの場で言おうと思い上層部には報告せずにおきました。」

ジェネットと言われた男はそう述べた。彼は諜報関係のエキスパートで其の情報はかなり頼りに為る。故に信用に足るとも言える。其の彼が、有益とも言える情報を入手したと言うのだ。セイルも興味を持った。

「面白そうだな、ここには我々しか居ない、話してくれ。」

セイルがそう言ったのでジェネットは内容を事細かに話し始めた。

「あの…玲御姉様。」

おずおずとエミリアが言う。玲は其の姿を可愛らしいと思った。そして答えて言う。

「何かしらエミリア。私に何か用でも？」

そう言われて、エミリアは言葉を言うことが出来ずに俯いてしまう。くすりと、笑って玲が更にこう言った。

「やれやれ、私が言わないと言えないようでは貴女の其の大好きな

僕の地位も取り上げないといけないかしらね。」

そう言われて、エミリアはハッと為り急いで答えてこう言った。

「い、いえ、それは困ります！私は玲御姉様のお傍に居たいのです！何時でも：其の：何時もお傍に居たいのです：ですから：。」

其処まで言ってエミリアは言葉少なく止まってしまった。ふう、と息を吐きながら玲が立ち上がり言った。

「はっきり言わないなんて、僕として失格ですわね。追い出して差し上げても宜しくてよ？」

そうきつく咎められエミリアは今にも泣きそうな状況になった。そして、懇願するように言う。

「す、すみません。玲御姉様、エミリアはその、玲御姉様とずっと一緒に居たいのです。朝から夜まで、ずっと一緒に：ですので、一緒に置かせて頂けませんでしょうか！」

精一杯とも言える、叫びとも言える、自分の思いをようやっと言い出したかのようにエミリアはそう言った。其の後エミリアは呼吸が苦しくなったのか、ぜいぜいと息をしている。余程思い詰めて言ったのであろう。苦笑しながら、玲は答えた。

「まあまあ、そんな事を悩んでいらしたのね。御出でなさいな。私はずっと可愛がってあげるわ。」

そう言ってエミリアに手を差し伸べる、其の目は特に左目は美しく血の色に輝いていた。其の目に引き込まれるようにエミリアは手を

差し出しながら言った。

「は…い。玲御姉様。私をお好きになさってくださいませ。」

「可愛いわ。あなたは永遠に私のものよエミリア。」

妖しく玲はそう言った。其の玲の顔を見ながらウツトリしつつエミリアは答えて言った。

「はい…。エミリアはずっと玲御姉様のものです…。」

「いい子ね。じゃあ、暫くお待ちなさい。文献をもう少し読んだら、貴女を可愛がってあげるわね。」

玲が微笑みながらそう言った。エミリアは答えて言った。

「はい…。御待ち致しますわ…。」

「セレナ、居るのだろうか？」

惺<sup>しずか</sup>はセレナの部屋の前でそう言っていた。暫く待つと小さな声で「はい。」という声が聞こえてきた。おかしい。セレナはそんなに元気無く返事を言う子では無かった筈だが…。心配になり惺<sup>しずか</sup>は、

「セレナ、心配だから済まないが入らせて貰う。」

そう言って部屋に入った。入って直ぐに周囲を見直す。何時も居る

机の周りには姿が見えない。惺しずかはセレナの姿を探した。

「セレナ、何処に居るんだ？」

そう言いつつ、惺しずかはセレナを探した。書斎や普段部屋には居ない、惺しずかは寝室に入った。セレナだ。彼女はベットに倒れこんでいた。惺しずかは急いで駆け込む。

「セレナ！調子でも悪いのか？」

惺しずかはそう言う。しかし、セレナはうつ伏せにベットに横に為ったままだった。心配に為り惺しずかはベットに座りセレナに手を掛けた。震えている。

「どうしたんだ？セレナ。俺で良ければ言ってくれないか？」

惺しずかはそう言った。セレナはベットに顔を向けたまま、もごもご何かを言っていた。しかし、上手く聞き取れない。

「どうしたんだ、セレナ。聞こえないぞ。教えてくれ、何があった？」

「あな…す…なの。」

「え？」

よく聞こえないので惺しずかは聴き直してしまう。セレナはいきなり起き上がり惺しずかを捕まえて言った。

「私、貴女が好きなの。放したくない程に。」

惺しずかはいきなりそう言われて面食らってしまった。暫く間があった後、

セレナが言う。

「貴女の答えが聞きたいわ。」

更に暫くの間が空く。惺しずかはその後答えて言った。

「ああ、済まない。其の俺もセレナは大事だが、放したくないとは  
どう言う意味なのだろうか？」

そう言われてセレナはくすりと笑って答えた。

「そうですわね、例えるなら、志郎様と神しのさんのような関係に惺しずか様  
と私も為りたいと言う事ですわ。」

しばらく考えた後で惺しずかが答えて言った。

「つまり、永遠に一緒に居る関係と言う事でいいのか？」

そう言われてセレナは頷いた。惺しずかが答えて言う。

「それならば問題は無い。俺もセレナと一緒に居たい。セレナがそ  
う思うのであれば是非一緒に行こう。」

そう言って、惺しずかは手を差し伸べた。セレナは泣き出しながら言う。

「本当に、本当に、いいんですね？私でも。」

「ああ、是非一緒に行こう。」

惺しずかはそう答えてセレナの手を握った。セレナはぎゅっと其の手を握  
り返し、そのまま泣き崩れてしまっていた。其の姿を見ながら惺しずかは

言った。

「これでセレナの気持ちに答えた事に為るのだろうか…？」

自分でいまいち納得できないと言った様子で慍<sup>しずか</sup>はセレナを見ていた。

窓の外では静かに風が流れていた。

**それぞれの想い、それぞれの企み（後書き）**

想いを確かめ合う者達、企みをする者達、  
それぞれの思惑を余所に状況は展開する。

次回「Beziehung」ベツイーウング「関係」。  
貴方にも良い風が吹きますように。

（注意！次回は話の展開上やや強いH描写が入ります。苦手な方は  
御注意下さい。）

## **Beziehung** (ベツィーウング) 「関係」 (前書き)

帝国との会戦は間近に迫っていた。

そんな中、お互いの関係に答えを求める者達、見出す者達、様々に居た。

今、其処では何が行われ様としているのか…。

(注意！ 関係を描写する上で今回はかなりH描写が入ります。苦手な方は注意して下さい。)



## Beziehungen (ベツィーウング) 「関係」

小説 風の吹くままに

第十八章 ベツィーウング Beziehung 「関係」

レミアルト王国国王レミアルト二十四世は現在56歳、壮年期に入り国王として更に箔が付く歳に入っていた。しかし、今日、王の間で前にしている出来事はやや事情が異なっていた。隣には妻が腰を掛けている。此れは何時もと大差は無い。しかし、彼女も動揺している様だ。そう、目に前に並ぶ者が問題なのである。いや、それぞれは問題では無い。問題は其の「関係」であった。

「セレナ、本当にお前は其れで良いと言うのか？」

国王は自分の娘にそう尋ねた。そう、セレナは今、自分の素直な気持ち<sup>しずか</sup>を父親に述べた所なのである。惺<sup>しずか</sup>と共に歩んで行きたいと。父に尋ねられてセレナは顔を上げて答えて言った。

「はい、父上。私は、惺<sup>しずか</sup>様に永遠に付いて行きたいと、そう思っております。」

確信に満ちた言葉でセレナはそう言っていた。しかし、言っている内容が問題なのである。彼女が、一青年に対してそう語っているのであれば二つ返事程度で了承出来たかも知れない。しかし、相手が：女性なのだ。しかも「神」の。内容が突拍子も無いので暫く国王は何も言えずにいた。

「あの…父上？」

セレナは不安げにそう言う。国王はたと気づき、軽く咳払いをした後こう言った。

「お前の気持ちは良く分かった。まず、それは置いておくとして、<sup>しずか</sup>惺殿、そなたにも伺いたい。そなたはセレナをどう思っているのだろうか？」

そう言われて、<sup>しずか</sup>惺は顔を上げて答えて言った。

「俺は、セレナが非常に大切な存在だと思っている。だが、それが、具体的にどのようなものか上手く表現出来る程、俺は言葉が巧みではない。ただ言えるのはセレナが俺を永遠に離したくないと言っている様に俺もセレナに対してそう思っていると言う事だ。其れだけは間違い無い。断言できる。」

そう言われて、国王はまた一つ溜息を深くついた。そして言う、

「やれやれ、アーレフの事がやっと片が付いたと思えば、今度はセレナか。しかし、二人の思いは分かったが基本的に此れは余り公に出来る事では無いな。無論、時間と共に広まる事ではあるが、式を挙げたり出来るような事柄ではない。一応二人共が女性だからな。故に、式関連は一切行わない。が、私としてはお互いの気持ちから其処まである以上、わざわざ二人の仲を引き裂こうとは思わない。であるから、二人の関係は認める事とする。以上だ。」

王妃は何か言いたげではあったが国王がそう裁断した以上、口を挟むことは出来なかった。恭しくセレナと<sup>しずか</sup>惺は国王に頭を下げた。二人が下がった後で国王がぼやきつつ言った。

「アーレフもそうだが、セレナも神殿達の影響でまるっきり変わってしまった様だ。しかし、悪く変わった訳ではない、これがどう言う事になり我々の、延いては人の為に為るのか楽しみな事だ。」

国王はそう言って遠くを見ていた。そう、遙か未来に期待を込めて。

「此れで良かったのか？セレナ。」

セレナと二人で歩きながら惶はそう言った。セレナは頷いて答える。

「はい。有難う御座います。惶様。」

惶はふと立ち止まった。セレナはそれが理解できず惶に向いて言う。

「どうかなさいましたか？惶様。」

ふと考えてから惶が答えて言った。

「そう、それだ。其の言い方だよ。セレナ。」

「はい？」

「何故、俺のことを惶様と言うのだ？」

「え…」

セレナは惶に急にそう質問されて言葉に詰まってしまった。どう答えて良いのか分からなくなったのだ。

「あの…其の…<sup>しずか</sup>惺様は素敵で、敬愛すべき方ですし、やはりそうであるなら「様」と付けて言上すべきと思いましたので…。」

セレナは考えつつそう言った。<sup>しずか</sup>惺はセレナの両肩を捕まえて言った。

「セレナ、君は俺と一緒に為りたいと言わなかったか？」

そう言われ、行動されて、セレナは赤面した。そして答えて言う。

「は…はい。父上にもそう申し上げた通り私の気持ちは変わりません。<sup>しずか</sup>惺様と御一緒に為りたいと思っております。」

溜息を一つ吐いて<sup>しずか</sup>惺が言う。

「セレナ、言わせて貰うが、此の俣では一緒に為れない。無論、さつき国王の前で言った事は偽りでは無い。しかし、君がその様な考えでは俺との「関係」は正しいとは思わないぞ。」

<sup>しずか</sup>惺にそう言われてセレナは戸惑った。顔がやや青ざめながら言う。

「あ、あの！私何か<sup>しずか</sup>惺様に悪い事をしているのでしょうか？何かあれば言っして下さい。私、出来る事であれば何でも致しますから。」

<sup>しずか</sup>惺は苦笑しながら答えて言った。

「セレナ、君は俺との「関係」はどんなものの様にしたいと、先日部屋で俺に言ったか覚えてるか？」

そう言われて、しばし考えた後でセレナは答えて言った。

「はい、覚えております。志郎様や神しのさんの様な関係に為りたいと  
…。違ったでしょうか？」

「いや、合っている。では、父上に対し母上は「様」を付けて呼んで  
いるだろうか？逆に母上に対して父上はそう呼んでいるだろうか  
？」

「い、いえ、お二人とも名前で呼び合ってて、非常に微笑ましい間  
柄ですわ。」

「では、何故セレナ、君は俺を「様」付けで呼ぶんだ？そんな他人  
行儀な仕方、しかも対等に見ない仕方をして父上や母上のような  
関係に為れると本気で思っているのか？」

惺しずかにそう言われて、セレナはやっと気が付いた。能力が高く「神」  
である惺しずかと一緒に為りたいが故、敬語で言うべきと思ひ込んでいた  
が逆にそれが、本来自分が求めて行くべき所とは別の所へと誘って  
いたのである。しばし俯いた後でセレナは答えて言った。

「お恥ずかしいですわ。惺しずかにそう言われるまで気づきませんでした。  
そうですわね。本当に二人の「関係」が正しくある為にはそうでな  
くては為りませんよね。」

惺しずかと言われて、惺しずかは笑顔を見せながら答えて言った。

「そう！其れで良いんだ、セレナ。俺たちは一緒に為るんだ。であ  
るなら、能力に差があろうとも、二人は一緒だ。分けるべきじゃな  
いんだよ。」

そう言われてセレナは惺しずかに抱きついて答えた。

「はい。セレナ、此れから頑張りますわ。」

惺しずかはそう答えたセレナをしつかりと抱きとめていた。

レオンハルトは苦笑していた。自宅に久々に帰ると状況が一転していた為である。どういう事かと言うと簡単に言えば、今後自分は独り身だということであった。家は、引越し騒ぎと化していた。エミリアが自分の持ち物をあれこれと整理していたのである。

「おいおい、エミリア、此れは何の騒ぎだ？」

あえてレオンハルトはそう言う。ガイストからの報告で事情は知っているがあえてそう言ってみたのだ。エミリアは意気揚々に答えて言った。

「あ、お父様、お帰りなさいませ。私は此れから玲御姉様について行く為の仕度をしていますの。最低限の物だけ揃えて来いと仰られたのでどれにするか迷っている所ですわ。」

苦笑しつつレオンハルトが答えて言った。

「ついて行くって、お前、父親の了承は無しかよ。」

そう言われて、エミリアは即答して言った。

「ええ、勿論。私が決めた事ですわ。父上にも色々思われる事は御有りでしょうが私の意思は変わりませんのよ。ですから今、仕度を

していますの。」

呆れつつレオンハルトは言う。

「やれやれ、シャリーと同じか。母娘揃おやこって同じだなお前達は…。」

「え？お母様も？」

「ああ、シャリーも俺がいいと言う前に既に結婚する気だったからな。本当にお前達は似てるよ。」

感慨深くレオンハルトは答えた。エミリアはそれに答えて唐突に言う。

「では、お父様。母上も私も居なくなるのですから、今度はライザさんでもお招きしたら良いのですわ。」

突然、ライザが話題に上がりレオンハルトは焦って答える。

「ちょっと待て。何故其処にライザが出て来るんだ。いや、そりゃあいつは副官として有能だが…。」

今度はエミリアが苦笑しつつ答えて言う。

「お父様。母上が亡くなられた事は哀しい事ですわ。でも、母上は、そして私も、お父様が幸せに為られた方が良いと思っていますわ。勿論、今でもそうでしょうけれど、其処に何時も一緒に仕事を為さっているライザさんが入る余裕はあるのではありませんかしら？」

そう言われて、レオンハルトはやれやれと両手を広げつつ答えて言った。

「本当に、お前達母娘おやこはそっくりだよ。分かった、其の件は考慮するさ。しかし、本当にお前はそれで良いんだな？」

そう言われて、エミリアは顔を赤らめつつ答えて言った。

「はい。私、玲御姉様に「愛され」ました。この上なく幸せです。この「関係」は失いたくは無いのです。ですから一緒に行くと決めましたの。」

軽く溜息を吐きつつレオンハルトは言った。

「そうか。なら俺からはもう何も言うことは無いさ。お前の人生だ、ただ、選んだ以上後悔だけはするな。」

「はい。」

エミリアはそう答えてレオンハルトの胸に飛び込んでいた。レオンハルトは苦笑しつつ言った。

「嫁に出す気分だな此れは。」

「そう、上手く言えたのね。可愛いわ、エミリア。」

玲はガイストの報告を聞きながらそう言っていた。そう、エミリアを心配してガイストの一人をエミリアに付けていたのであった。そして、定時の報告を受け取っていたのである。彼女はいまだに書庫で本を読んでいる所であった。ガイストのアインが近づいて言う。



「マスター。とりあえず、この書庫内の基本的な書物は明日中には全て終われると思われます。」

「そう。よくやったわね。恐らく、母上の感じから行くと、明日か明後日には戦が始まりそうだから、今晚で終わる事に致しましょう。」

「はっ。戦に関しては神様しんからご指示が？」

「そうね、基本的に高みの見物で良いそうよ。ただ、それだと私も面白くないわね。エミリアを連れてどう遊べるか考えましょうか。」

「畏まりました。」

アインはそう返事をして、元の仕事に戻っていった。玲は不敵に笑みを湛えながら言う。

「母上も楽しまれそうだしね。私達も存分に楽しみましょう。」

書庫では妖しい笑い声が響いていた。

サデイルウム帝国帝都のある酒場其処にセイルは居た。其処に来て  
いる老婆と話す為である。

「あんたがセイルかい？」

セイルにそう話しかけてくる者が居た。老婆であった。セイルが答えて言う。

「ああ、俺だ。貴女がシェレーヌ殿か？」

そう言われて、老婆はセイルの傍に腰を掛けた。そして答える。

「ああ、あたしがシェレーヌさ。で、ジェネットから何処まで話は聞いたんだい？」

「ほぼ全部だろうな。」

「そうかい、なら、あんたの意思は決まったと思って良いんだね？」

「まあ、決まると言うか、必然だな。部下を無下に死なす愚を犯す位なら一時的に反逆者と言われ様と国に楯突いた方がましと言うものだ。」

セイルがそう答えたのを聞いてシェレーヌは笑い出した。暫く笑ってから話し始める。

「ああ、済まないね。かなり腐った帝国でもここまでまともな台詞が聞けるなんてね。嬉しいじゃないか。今後の新国家樹立が楽しみだね。」

シェレーヌが新国家と言っているのを聞きセイルが驚きながら言う。

「新国家だと?! 帝国打倒まで考えているのか、お前の依頼主とやらは。」

セイルの反応に気をよくしてシェレーヌは微笑を湛えながら言った。

「そうさね。多分、あんたでも驚愕する様な方だからね。その方が来た時は恐らく度肝を抜かれるだろうさ。まあ、時間も無いことだ、其の件は会戦が済んでから本人から聞くがいいさ。了承したと言うことで良いのなら、帝都中枢部内の速やかな鎮圧の件よろしく頼む

よ。」

そう言われてセイルは答えて言った。

「ああ、任せておいてくれ。帝国軍の「切り込みのグラハム」シャイレフオンとま  
で言われた俺だ。帝国内部ですら切り込んでやるさ。」

それを聞きシェレーヌは満足そうに答えて言った。

「それは有り難いね。依頼主も喜ぶだろうさ。あたしも嬉しいよ。  
あんたの様な良い奴がまだ残ってるなんてね。んじゃ、あたしはこ  
れで。また今度会うとしましょうかね。」

そう言ってシェレーヌは立ち去っていった。セイルが呟きながら言  
う。

「賽は投げられた、か。」

そう、一世一代の大博打が、彼にとっては始まったのである。帝国  
に反旗を翻すと言う、大博打が。

「ただいまですわ!」

書庫に入るなりエミリアはそう言っていた。そこはエミリアの家で  
もなければ部屋でもなかった。しかし、今の彼女にとっては「帰る  
場所」なのであった。其の姿を見て玲が答えて言う。

「あら、お帰りなさいエミリア。父上にはきちんと言えたのかしら？」

「はい。了承も頂きましたわ。」

「そう。それはいいことね。では御褒美に今晚は可愛がって上げますわね。」

玲がそう言うのとエミリアは赤面しつつ玲に抱きついた。そして言う。

「嬉しいですわ。私、沢山甘えさせて頂きますわ。」

そんなエミリアを見つつ玲は答えて言った。

「まあまあ、はしゃぐのは宜しいけれど、今は駄目ですよ。私もこの本を出来るだけ読まないといけませんからね。」

そう言われて、エミリアはたと気づいて玲から離れつつ答えて言った。

「あ、申し訳ありませんわ。玲御姉様、直ぐに御茶を淹れて参りますわね。」

そう言って、すたすたと走っていった。其の様子を微笑みながら玲は見ていた。

「さて、仕度はこれでいいかしらね。」

神はそう言っていた。ここは、レミアルト王都から少し離れた平野の一部、開拓もされていない一面原っぱな場所であった。神はそこで戦のために役立つ仕掛けを仕掛けていたのである。勿論ここだけではない。可能性のある場所で沢山。神ズとなって数々の仕掛けを作っていたのだった。溜息を一つ吐きつつ神は言った。

「やれやれ、ここまで面倒な事をわざわざするなんてあたしも物好きよねえ。」

神がそう言っていると後ろから声が聞こえてきた。

「お前は優しいからそうなるのさ。」

神は其の声に振り向く。志郎だった。

「な…なんで志郎、ここに？」

神が尋ねる。志郎は苦笑しつつ言う。

「旦那が妻の元に居ちゃいけないのかな？」

そう言われて神は首を振る。そう、当然の事だ。しかし、気づかない内に後ろに立っていると言う事が驚いた原因だった。苦笑しながら志郎が続けて言う。

「相変わらずだな、お前は。俺が近くまで来たのに作業に一生懸命で気が付かなかっただろう？」

そう言われて神は赤面した。つまり、言ってる事は正しいと言う様

なものである。

「あの…つまり…」

神は何か言おうと戸惑ってしまふ。苦笑して志郎は言った。

「別に、何も言わなくていいさ。神は神だ。それを俺は知っている。其れで十分さ。」

そう言つて志郎は神を抱き寄せる。神は其の感覚に満足していた。

「どういふことだ？ セレナ。」

惺はセレナがしようとしている事が理解できずにそう言つていた。今二人はベットにいる。セレナは薄着を纏つて惺の隣に居た。

「どういふ事って…。せつかく父上からお許しを頂きましたもの。セレナも惺と愛し合いたいですわ。」

顔を赤くしながらセレナはそう答えていた。惺は答えて言う。

「済まない、セレナ。君の言う愛し合ふという事が何を指すのか俺には理解出来ないんだが。」

そう言われてセレナはくすくす笑いながら答えて言った。

「では私が教えてあげますわ。慍、こうするのですよ！」

そう言ってセレナはベットに慍を押し倒した。突然の事で慍は吃驚する。

「な、何をするセレナ。う…。」

慍はそう言いかけて口を塞がれた。そう、セレナの唇によって。暫く二人はそうした後、口を離して大きく息を吐いた。そして見つめ合いながらセレナが言う。

「私が慍に教えて差し上げますわ。」

そう言ってセレナは慍の身体を弄り始めるのであった。慍が答えて言う。

「こ、これは…待ってくれセレナ、あ…待って…うあ…。」

「うふ、何時もと違って可愛いですわ、慍。」

慍が悶える様子を見てセレナは興奮しつつそう言っていた。慍は顔どころか全身がやや赤くなりつつあった。

「あ…は…やめて…く…駄目…。」

初めて感じる感覚に身悶えしながら慍は訴えた。しかし、セレナは止めずに答えて言う。

「うふ、慍に勝てる唯一の方法を見つけましたわ。これだけはセレナが主導権を握りますわよ。」

そう言ってセレナは妖しい笑みを浮かべて惺しずかの身体を更に弄もよほり始めた。セレナの手が胸から次第に下に下りていく。

「ちょ…ちよつと待って、セレナ、駄目だ…そこは…ひゃん!。」

惺しずかの反応を見てセレナは興奮していた。そして言う。

「か、可愛いですわ、惺しずか。此れから永遠に貴女は私のもの。そして私は貴女のもの。気持ち良くなって下さいな!」

そう言ってセレナは更に惺しずかを弄いじっていった。惺しずかが叫びながら答える。

「や…やだ…何か来る。止め…あ…ああ! ああゝゝ!!」

全身を強張こわばらせながら惺しずかは快感に身を委ねてベットに沈み込んだ。それを見てセレナが言う。

「惺しずか、可愛いですわ。其のうちこれを覚えてセレナにもして下さいませ。」

セレナはそう言って気を失っている惺しずかに優しく接吻をしていた。

セイルは先ほどの酒場を出て何時ものメンバーが居る場所に戻って来ていた。メンバーを見渡してから言う。

「さて、ジェネットの報告した者と交渉して来た。」



セイルがそう言ったので全員は真剣にそれを聞いていた。セイルが続けて言う。

「俺は、向こうの意見を受け入れ帝国に反旗を翻すことにした。」

そう言われて、全員が喚声を上げた。暫く騒いでいたがセイルが制したので更に続きを聞くことになる。

「でだ。近日中に軍は動き出す。其の俣だと我々はまた遊撃隊として切り込み役をやらされる羽目になるだろう。しかし、今回は切り込む対象を変える。そう、帝国帝都中枢部を狙う。」

「セイル殿、方針は良いとして具体的にどうされますか？」

大柄な男が具体策を求めて具申した。セイルが頷いて答える。

「ローギユンターの言う事は尤<sup>もつと</sup>もだ。まずは聞いてもらおうか。」

セイルはそう言って自分が立案する考えを言い始めた。其処では、活発な話し合いが行われようとしていた。

「あの…玲御姉様。此れは一体どういう事なのでしょう？」

エミリアは事態が掴めずに居た。無理も無い、今は二人で与えられた部屋に居るのだが、エミリアは裸の状態でガイズト達に身体を捕らえられている状態だからである。

「ふふふ、可愛いわ。何が起きるか分からない恐怖に歪んでいる貴女の顔が。」

玲はそう言って妖しい笑みを浮かべる。エミリアは、何が起きるか分からず恐怖していた。そして言う。

「あ、あの…玲御姉様、一体何を…？」

くすくす笑いながら玲が答えて言う。

「さあ？何をしてあげましょうか？私は貴女を可愛がると言いましたよ。だからうんと可愛がってあげるわ。」

そう言って、玲はエミリアにまず接吻をした。甘く濃厚な接吻を。それが終わるとエミリアは目が虚ろに為っていた。

「あらあら、お楽しみは此れからだと言うのに、もうそんなに為っては早すぎますわね。」

そう言いながら今度は玲がエミリアの胸を弄り始める。其の気持ちの良い感覚にエミリアは悶えつつ言った。

「あ…ああ…いいですわ…玲御姉様…。」

「うふ、可愛いわエミリア。」

玲はそう言いながら手を次第に下に持っていく。エミリアは快感に身を委ねながら答えるように言う。

「は、はい…エミリアは気持ちいいのです。玲御姉様に可愛がられ

て…ああ…そ、其処…いい…。」

エミリアが快感に浸っていると玲は突然エミリアを弄<sup>いじ</sup>るのを止めた。何が起きたか理解できずにエミリアはキョトンとする。そして言った。

「玲御姉様？どうしたのですか？エミリアを、エミリアを可愛がって下さいませ。」

そう哀願するエミリアを見ながら妖しい笑みを浮かべて玲は答えて言った。

「如何<sup>いかに</sup>し様かしらね。簡単に悶<sup>もん</sup>えては楽しくないから少しお預けしようかしら？」

折角の御褒美が貰えなく為りそうになりエミリアは更に哀願してこう言った。

「そ、そんな…エミリアは玲御姉様が欲しくて堪らなくなっております。御願いです。玲御姉様、貴女の其の優しい手を、そして貴女全てを欲しいのです。」

エミリアは涙を流しつつ、そして快感を飢えている下の方もいやらしい液を垂らしつつ哀願していた。玲はくすくすと笑いながら答えて言った。

「やれやれ、だらしが無いですわね。床がびしょびしょに為ってますわよ。エミリアは甘えん坊ですわね。まあ、此の俣放<sup>はな</sup>って置くと狂いかねませんわ、お相手してあげましょうか。」

そう言ってガイストから開放させたエミリアを抱き寄せてからベツトに引き込んだ。そして二人は愛し合うのであった。

「そうか。明日未明には開戦となるか。」

レミアルト国王は神の報告を聞きながらそう言った。神が答えて言う。

「ええ、ほぼ明日中に開戦となるでしょうね。既にレオンハルトが手配済みなので迎撃は問題ないわ。あたしが会戦地となる場所に全て「仕込み」もしたからね。」

そう言われて、国王は苦笑しながら答えて言った。

「相変わらずだな、アーレフが言っていた通り神殿は優しすぎるよ。うだ。」

優しいといわれて神は顔を赤くして答えて言った。

「な！……つたくもう。お節介が多いわね。と、とにかく。侵攻作戦の為に会戦地に帝国軍の大半を引き付けておく必要があるからあなたからもきちんと言い添えておいてね。」

「ああ、レオンハルトから報告を受けているからな。明日の出陣式の時に特にきつく命じておこう。」

国王は微笑みながらそう答えた。神がそれに答えて言う。

「有難う。ならあたしはこれで下がらせて貰うわ。それでも忙しいのでね。」

「そうだな。志郎殿によろしくな。」

国王がそう言う。神は顔を真つ赤にしつつ其処から下がって行った。其の様子を見ながら国王が言った。

「わざわざ、自ら面倒を負い、自ら手を下すか。我々の傍に来た「神」は物好きだな。」

そう言いつつ国王は笑っていた。

城の外では次に来る嵐を前に静かに風が舞っていた。

## **Beziehung**(ベツィーウング)「関係」(後書き)

お互いの関係を確認合う者達、様々な思いが交錯しつつ会戦のときは近づいていた。

この戦いの行く末はどのようなものとなるのか…。

次回「クリークKrieg」戦争」第一部」

貴方にも良い風が吹きますように。

## **K r i e g**（クリーク） 「戦争」第一部（前書き）

ついに帝国から宣戦が布告され戦争が始まる。  
神<sup>し</sup>達は忙しく準備をはじめ各人はそれぞれの思いを秘めながら準備を進めていた。

たどり着く先には何が待ち受けているのか…。

## Krieg（クリーク）「戦争」第一部

小説 風の吹くままに

第十九章 <sup>クリーク</sup>Krieg「戦争」第一部

レミアルト二十四世の前に一人の使者が来ていた。サデイルウム帝国からの者であった。

「以上、我が帝国からの宣戦布告の報告、お伝えいたします。」

使者はそう言っていた。そう、帝国から正式に宣戦布告が為されていたのである。この世界では基本的に侵略行為を行う際、目的や統治者の用途により其の方法が異なるとは言え、人の社会では一般的に統治者が変わる事を争うために戦争と言うものは手段として用いられていた。つまり、町や農地など統治者達の直接利益のある場所では争わずに、会戦地を荒野などの一般に被害の無い場所を選びそこで、文字通り力でぶつかり合う事を主眼と置くのである。その結果により勝ち負けが算定し勝敗がつくのであった。そう、戦争はあくまで生存競争的に行われるのでは無く「政治」の中の「手段」として行われていたのである。故に、軍人の政治に対する発言力も強くなるのであるが、レミアルト王国では筆頭将軍がレオンハルトと言う事もあるが、軍部が政治に口を挟むことは無く、政治機構として上手く機能していたのであった。

「承知した、と皇帝陛下には伝えてくれ。」

短く国王はそう返事をした。つまり開戦がこの時点で確定したのである。布告を受諾した時点で戦争は始まったのである。歴史上の記



録は何時もそう書き留められていた。使者は短く答えて言う。

「分かりました。ご報告いたします。」

そう言つて国王の前から引き下がった。下がっていく途中。神しの前を過ぎる使者が神しに向かつて何かを手渡した。神しはそれを受け取つて見るなりくすりと笑つて使者に軽く返事をした。使者はそれを見届けた後、謁見の間から下がって行つた。

「国王、して布告の内容は如何に？」

レオンハルトがそう聞いてくる。国王は説明を始めた。

サデイルウム帝国は本日未明よりレミアルト王国に対し軍事行動を行う旨決定したことを報告する。故に会戦地として帝都とレミアルト王都を結ぶ街道より西にあるレウネキアス丘陵を合戦地として希望する。其処は広く両軍が展開しても十分な広さであり、また、両国の資産に害を為さない為である。合戦開始時はこの布告が伝えられて約四日後、満月であるアウソウイムの日とする。以上、これを我が帝国からの布告とし貴国の返答を求める事とする。

国王はそうやって布告文を読み上げた。それを聞きその場に居たも

のは答えて言う。

「これまで、帝国が向かって来る事を予期して準備して参りました。其の成果をこの会戦で示しましょう。」

「レウネキアス丘陵か。あそこは広い上に基本的に何も無いからな。真っ向からの力と力のぶつかり合いになるぞ。」

「何、我々も只待っていた訳では無い。準備はしていたのだ。後はそれを発揮するのみ。」

彼らはそう言っていた。国王は指示を出す。

「さて、諸君らの気持ちは良く分かった。受けた以上は勝たねば為らぬ。幸い我々は防戦に掛けては負け知らずではある。しかし、今回は勝たねば為らぬのだ。しかも、出来るだけ敵に被害を与えずにな。」

そう言われて、レオンハルト以外の城内の将は動揺していた。レオンハルトがそれを制しながら言う。

「落ち着け、皆の者。先日アーレフ王子の式の時の事を忘れたのか。我々にはありがたい事に「神」の恩寵がある。しかも其の神の提案により帝国を解体する案が出されたのだ。」

彼がそう言うのを見て安心したように国王が言い添える。

「そうだ、我々には神殿しんが居られる。わざわざ我々の様な者に關心を示される優しい神がな。彼女の提案に従い、我が軍は帝国を引き止めておき其の間に神殿しんに帝国解体の行動をして頂く事になった。我々は帝国軍を出来る限り引き付けておく事だ。無論戦闘はするが、がっぷりあって殺し合う様なものとは為らないであろう。無論、戦

である故に死者や怪我人は出るであろう。しかし、それを出すのが目的ではない、我々は只戦に勝つのではなくそれより先の事を考えておられる神を支持するが故に戦うのだ！」

国王はそう激励した。それに対し其処に居る者が全員、大きな喚起の声を上げて応える。それを国王は満足しつつ見るのであった。神は国王の前に出て来て言った。

「では、あたしは予定通り行動を開始するわ。他のメンバーは将軍と行動を一緒にさせるから後はよろしく。」

そう言っ、神はスタスタとその場を去っていった。それを見ながら国王は苦笑しながら言った。

「本当に優しい方だな。ああいう場では、自分に栄光を帰させても良いものであろうに。」

国王は神が見えなくなるまでじっと彼女を見続けた。

神は先程の使者がくれた手紙を見ていた。それはシェレーヌからの物であった。

「なるほどね、かなり有能な将校を仲間に出来たようね。これなら帝国内の安定化も早いでしょう。」

シェレーヌの報告を見ながら神はそう言っていた。そう、其処には

セイル以下帝国軍第三遊撃部隊が神しのに加勢する旨が記してあったのである。神しのは前途に起きる事を楽しみにしつつ城下を歩いていった。

「とうとう始まるのか、楽しみだな！」

惺しずかはセレナにそう言っていた。セレナは今部屋で惺しずかと一緒に仕度をしている。そう、今回は自分も出るつもりで居た。仕度をしながらセレナが言う。

「惺しずか、今回はどの様に為さいますの？」

「ん？戦に参加する場所のことか？」

「ええ、レオンハルト將軍から何か指示でもあるのでしょうか？」

「母上の話では本陣で戦えとの事だったぞ。恐らく母上以外は皆そうなのではないかな。」

惺しずかはそう答えていた。セレナは不思議そうに言う。

「どうして神様しのだけ違うのでしょうか？」

其の答えに惺しずかは微笑みながら言った。

「俺も同じ質問を父上にしたな。父上は笑いながら言ってくれたよ。神しのは優しいからだ、とね。」

其の答えに、セレナは頷きつつ答えて言った。

「そうですわね。「神」で在られるのにわざわざ私達に目を向けて下さるんですもの。優しい方ですわ。」

「よし、俺は仕度ができた。セレナ、先に兵士の所に行って来るかな！」

惺しずかはそう言って走り出す。セレナが不満げに言う。

「ああ、惺しずか！待って下さいな……。もう！こう言う時は子供に為るんだから！」

そう、文句は言いつつも顔は微笑んでいた。そう、自分の愛する人と一緒に自分が好きな事が出来るのだから。

「戦争ですか。人間は政治ショーが好きですよねえ。」

レネアは皮肉気にそう言っていた。エルフは生存競争でも無い限り争う事はしない。基本的に話し合いで事を解決するからである。故に、知的で知識と知恵に満ちる事こそが強さとなるのである。そう言う文化的違いもありレネアはそう言っていたのであった。ミルは苦笑しながら答えて言う。

「まあ、そうですが。今回はマスターが大々的に介入なさるので只の政治ショーでは終わらなくなりますよ。レネアちゃんもミルと一緒に手伝って下さいね。」

ミルにそう言われて、レネアはミルにくつつきながら答えて言う。

「ミル様が張り切るならレネアは進んでお手伝いしますよ。また後でレネアを可愛がって下さいね？」

手伝うことを表明しつつさりげなく御褒美を期待するレネアであった。ミルは苦笑しながらレネアに優しく手を置き、撫でた。其の感触にレネアは満足しているようであった。

志郎とラミアはレオンハルトの元に居た。神しが居らず、またラミアは慍しずがセレナと一緒に為っている為にとりあえず一緒に行動する者が居ないので志郎の傍に居たのであった。

「さて、今回は楽と言えば楽な訳だが、志郎、まさかここまで神しさんが介入するとは俺には考えられなかったぞ。」

レオンハルトはそう言った。苦笑しつつ志郎が答える。

「あいつは自分で決めたらとことんやるからな。優しすぎるんだよ。「力」があるからいいのだが、時折俺も心配になるさ。」

そう言うのを見てラミアとレオンハルトはお互いに頷いていた。ラミアがふと言う。

「志郎。私たちは今回どうすればいいのだろうか？」

それに志郎はふと考えた後、話してこう言った。

「そうだな、極力敵は殺さずに戦闘能力を奪う形で倒して行くのがベストだろうな。恐らく神しの事だ、帝国解体後に今の帝国軍を其の俎組み込むことを計算に入れてるだろうしな。それにラミア、お前も帝国に残ることに為るとあいつは言っていたぞ。」

「マスターが？志郎、それは本当か？」

疑問に思いラミアがそう尋ねる。志郎は苦笑しつつ答えて言った。

「ああ、俺も全貌はまだ教えて貰ってはいないのだがな。帝国を解体後に神しが新たに創り出す存在を国王とした神権国家を樹立させるのが目的らしい。で、其の元でお前は補佐として其処に居ることに為ると言っていた。更に、神しはディルサイヴをお前の元に呼ぼうとしているらしい。」

ディルサイヴと聞いてラミアは驚きながら言った。

「彼が、ディルサイヴが来るのか？！」

「ああ、神しは其のつもりらしい、どうせ神しの事だ、彼の意味は無視して無理やり連れて来るだろうけどな。」

苦笑しながら志郎はそう答えた。ラミアは微笑を湛えながら言う。

「そうか…彼が来るのか…。」

其の様子を見ながらレオンハルトが言った。

「まるで、父親を待つ娘のようだな。ラミアを見ているとエミリアの昔の様子を思い出したよ。」

そう言うのを聞いて志郎が苦笑しながら言う。

「いい表現だレオンハルト。ラミアにとって彼はそんな人なのさ。」

「なるほどな、やはり神<sup>し</sup>さんは優しすぎるんだな。」

レオンハルトがそう言う、二人は頷いていた。

玲は部屋で準備をしていた。エミリアが傍でせっせと歩き回っている。ガイストたちも無言で仕事をこなしていた。

「さて、仕度はこの辺りで良いかしらね。エミリア、あなたは城でお待ちにするのかしら？」

玲がやや嫌味っぽく言う。エミリアはキッと玲の方に向かい、玲を見つつハッキリと答えて言った。

「いいえ！私は玲御姉様と何時も一緒に居ますわ！」

「それは宜しいけれど、私は必ずあなたを守れるとは保障出来ませんわよ？」

玲はやや突き放すようにエミリアにそう言った。エミリアは毅然と答えて言う。

「分かっておりますわ。玲様に付いて行く以上、危険は自分でも出来る限り回避出来る様に致しますわ。私も些か魔術を嗜んでいる身。



少しは自分の事が守れますわ。」

其のエミリアの様子を見ながら玲は微笑みつつ答えた。

「可愛いわ、エミリア。そんな可愛いエミリアにあなたを守る騎士<sup>リッター</sup>を創って差し上げましょう。」

そう言うと、玲の周りが急に明るく輝きだした。エミリアは何が起きていのか分からず「きゃあ!」と叫んでしまう。暫くして其の眩しい光は収まった。エミリアが玲の方に目を向けると輝く翼を持つ三人の男性が浮いているのが見えた。

「此れは一体…。」

エミリアが呆然としつつ言う。苦笑しながら玲が答えて言った。

「此れは貴女を守るリッター達よ。シエルエル、ライエル、ウイサウレルと言うの。覚えてあげてね。」

玲がそう言うとしリッター達は地面に降りて翼をしまい込んだ。すると其の見た目は執事の様であった。恭しくエミリアに三人がお辞儀をする、そして代表としてシエルエルが話し始めた。

「お初にお目に掛かります、エミリア様。玲様の命によりあなた様を守護する事に為りました。シエルエル、ライエル、ウイサウレルの三名で御座います。今後は我々に何事でも御命じ下さいませ。」

畏まってそう言われて、エミリアは「は、はあ…。」と呆けた<sup>ほう</sup>ように答えていた。其の様子を見ながら玲がくすくすと笑いながら言う。

「あらあら。突然の事だから、吃驚したかしら？これで貴女も私と一緒にに行けますわね。」

そう言われて、エミリアは嬉々としながら玲に抱きつきこう言った。

「有難う御座います！玲御姉様。私の為に、私を守る為にわざわざこんな事まで…エミリア、どこまでも玲御姉様に付いて参りますわ！」

そんなエミリアを見ながら玲は微笑んでいた、ガイストやリッター達も彼女を見て微笑んでいた。

グラフエルト將軍は帝国国軍最高位である帝国大將軍の地位に居た。が、彼は政治色の強い男で実戦経験は殆ど皆無と言って良かった。若い頃には何度も戦ってはいたのだが、政治に深く係わり出してからは前線に出る事はまるっきり皆無でありほぼ部下に丸投げの状態であった。ところが今度は皇帝陛下の勅命で帝国軍の半数も動員する戦いの総大将として行って来いと言われたのである。無駄に出た腹がぶるぶると震えながらグラフエルトはブツブツと文句を言っていた。

「何故、私がこんな事をしなければ為らないのか…。私は、後方でのうのうと過ごしておきたいものを…。」

傍に居た側近は何も言わずに立っていたが恐らく彼に思う所があったであろう。そんな中、一人の部下が彼の部屋に入ってきた。

「閣下、レミアルト王国への侵攻の件、陛下の勅命が下ったの事、私も伺ったのですが真ですか？」

其の男を見てグラフィェルトは喜びつつ彼を迎えながら答えて言った。

「おお！よく来たな。グラハム殿、其の通りだ。陛下は私に総指揮をしろと言われたのだ。さすがに陛下の勅命だけあって、無下には断れぬ。其処でだ、そなたの第三遊撃部隊を我が本陣の近衛クラスとして置いて欲しいのだが、どうかな。」

彼は有能なグラハムを引き留めて置きたくてそう言っていた。しかし、それが実に無能な決断であるかは彼は気づいていなかった。そう、遊撃部隊しかも最も有能な者を本陣の守りになど最も愚かしい事だからだ。しかし、セイルはグラフィェルトに笑顔で返しながら答えて言った。

「分かりました閣下。このセイルⅡグラハム、閣下の守護としてお傍に居りましょう。そう言うことでしたら、部隊の指示もありますので私は此れにて失礼させていただきます。」

そう言って、一礼をしてからセイルは下がって行った。其の姿を見てグラフィェルトは言う。

「よしよし、あの小僧を手元に置いておけば当座の危険は回避できるよう。問題はこの会戦がうまく行かなかった時だな。責任問題になれば私に白羽の矢が立つ。どうすべきかな…。」

政治色に染まりあげたグラフィェルトはそう言って、自分の頭を既に政治謀略の方に頭を回しているのだった。傍に居た側近は思う所は

色々あるであろうが無言で静かに立っていた。

廊下を歩きつつ、セイルは不躰に言っていた。勿論聞く相手は何時も通りラーナである。

「あの豚め！さっさと肉屋の元に行けば良いものを。今度はこの俺を豚小屋の番をしろと言いつ出したわ！」

苦笑しつつラーナが答えて言う。

「セイル様、お気持ちは分かりますが折角の好機です。この機会は是非使うべきかと。我が部隊も被害がほぼ無くなるでしょうから神殿しんでしたっけ彼女の提案がうまく行くと思われますが。」

それに答えてセイルが言う。

「そんなことは分かっているさ。俺だってこの決断をした時から皆を出来るだけ死地に送らせないアイデアを練っていたもんさ。だがな、ラーナ。豚小屋の番だぞ？！あのグラフィエルトの。政治色に溺れた大將軍様のだ。あんな馬鹿のお守りをするなど、俺の堪忍袋が持てるのやら……」

これから起こる大事に憂うセイルを見ながらラーナは微笑みながら答えて言った。

「セイル様、確かに豚のお守りは大変ですわ。しかし、我々の計画

がうまく行けば恐らくセイル様は軍内部で重職が間違いない任命されるでしょう。そうなれば、肩に掛かる重責は今の比ではなくなると思われますが。」

そう言われてセイルは感情を露あらわにしていた態度を止めラーナに向き直り答えて言った。

「ま、確かにそうだな。神殿しは結果として俺に何をくれるとは言っていないがこれ程の壮大な計画だ。向こうもそれなりのポストを準備してくるだろう。確かにお前の言う通り其れに応えねば為らないだろうな。仕方が無い、今回は豚のお守りでも我慢するか。よし、ラーナ。至急、シェレーヌに連絡をつけろ。我々の着任位置を報告し神殿しの活動に有利にする為の手助けをせねばな。延いては其れが我々の益に為るのだから。」

セイルにそう言われてラーナは軍形式の礼を取りつつ答えて言った。

「はっ。それでは早速その旨を知らせて参ります。」

そう言ってラーナは駆け出して行った。其の様子を見ながらセイルは言った。

「結果として、良い方に転がってるとも言えるがさて、我々に加担する女神はどう言う答えを与えてくれるのかな。」

其の答えに、今は何も答えてはくれなかった。

「いよいよですか。私達も忙しくなりますね。」

隊長が国王からの報告を部下に伝えた所であった。ここはレミアルト王国の王都の城にある兵士達の待合室であった。兵士達が意気揚々として答える。

「大丈夫ですよ隊長。我々も伊達にしずか惶さんと特訓した訳ではありませんから。」

「そうです、以前よりは活躍出来る自信があります。」  
「専守どころか攻める事だって。」

気の逸る兵士達も居たので隊長は苦笑しながら彼らを制しつつ言った。

「お前達の気持ちは分かるが基本的に我々は専守防衛だ。志郎殿達も我々に加わって下さるしな。其れに……」

そう言いかけて隊長はやや口ごもった。其処へしずか惶が入ってくる。

「お、皆ここに居たか。今度は実戦に為るぞ。皆、頑張ろう！」

しずか惶がそう言ったので兵士たちは喚声を上げた。其の中で隊長がひっそりと言った。

「攻めるのは全て神殿しのがやられるからな。わざわざ自らそんな事をしなくても宜しいでしょうに……」

隊長はそう言いつつ苦笑していた。兵士達の喚声はまだ続いており、其処にセレナも入って来ている所だった。

レオンハルトの所にミルや玲たちも集まって来ていた。

「おお、ミル殿達も来たか、エミリアも来たな……って、おい、エミリア其の男達は何だ？」

レオンハルトはエミリアが連れている三名の男を指差してそう言っていた。エミリアが自慢げに答えて言う。

「あら、お父様。ご機嫌麗しゅう。この者達ですか。玲様が私の為にとわざわざ御創りに為って下さったリッター達ですよ。お前達、お父様に自己紹介を為さいな。」

エミリアにそう言われてリッター達はレオンハルトに恭しく挨拶をし始めた。其の姿を見つつ志郎が苦笑しながら言う。

「いやはや、しずか しずか惺は惺である意味驚かされるが玲も玲で驚かされるな。」

それを聞き、玲は微笑みながら答えて言った。

「あら、志郎様。私はまだ、「魔族」と「神」の力のそれぞれしか使っていませんのよ。」

つまり其れは玲としての力、すなわち「融合した力」はまだ使った事が無い。と言っているのであった。それに対し志郎は両手を広げ

つつ答えた。

「やれやれ、神もそうだが玲も度肝を抜かれると言う奴だな。まあ、相手がグラニデウスだから致し方が無いか。俺では話にならん。」

志郎がグラニデウスと言っていたのを玲は聞き取り、玲は志郎に向かって言った。

「志郎様、志郎様は父上をご存知なのですか？」

「あ、ああ、だが、あまり詳しく知っている訳ではないぞ？」

突然質問されて志郎は戸惑い一つもそう答えた。玲は溜息を出しつつ答えて言う。

「私、まだ父上にお会いしておりませんから惺姉様が少し羨ましいですわ。」

そう言う玲の姿を見て志郎は玲の肩を抱きつつ言った。

「心配するな。このドタバタが済んだら神が奴に会いに行くさ、きつとな。」

玲はそう言われて、安心しつつ答えて言った。

「そうですわね。母上は、優しい方ですものね。」

「ああ、そうさ。」

二人の傍ではエミリアがレオンハルトにリッター達を紹介しながら色々楽しんでる所だった。志郎と玲は微笑ましく其の様子を眺めていた。



「へっくし！」

神はくしゃみをしていた。自分が風邪を引くような身体では無い筈だが……。そう思っていたが、ふと思い当たる節を思い出した。

「また、志郎辺りが噂してたわね……」

当たりであつた。（笑）まあ、其れは兎も角として神は神ズを集め始め合戦場と為るレウネキアス丘陵に向かつている所だつた。しかも、歩いてでは無く空を飛んで。空間跳躍で行く方法もあるが周りが見たいが故に神はそうやって移動していた。しかも其の移動方法ならば「全体」は良く分かるからだ。そうやって全体を見ながら神は言つた。

「そうね、一名程こうやって上空で監視させましようかね。そうすれば戦局も理解しやすいわ。」

其の意見に神ズも頷いていた。神達（？）はそうやって目的地に向かつていたのであつた。

「ほう、グラフィェルトの豚がそんな事をねえ。分かつたよ、あたし

がしっかりと伝えておくさ。セイルの旦那には了解したと伝えておいてくれ。」

シェレーヌはラーナからの報告を聞きそう答えていた。ラーナは報告が済むとすぐ其処を立ち去っていた。無駄に長居はしない。軍での諜報の定石を踏まえたしっかりした行動だった。其の姿を見つつシェレーヌは言った。

「ふうん。あのお姉さんも、上官狙いか。何処も彼処も競争率が激しいやねえ。あたしにもいい男はいないかねえ。」

そうぼやきつつ、シェレーヌは手元にあったアイテムを使い始めた。其れこそが神とコンタクトを取るものであった。其れで彼女は神に伝えた後、其処から離れて再び「仕事」に戻っていった。

「さて、神が戻ったらアーレフが呼んでるからまた夕食会かな。今回はレオンハルトたちも同席だそうだ。」

志郎がそう言う。セレナが其れに答えて言った。

「まあまあ、其れは楽しくなりそうですわね。もう少しすれば惺も来ますからお伝えしますわ。」

そう言ってセレナは少し離れた所に行った。志郎は苦笑しつつ言う。

「惺、か。なんだかな…。神を呼び捨てにした時はそう思わなかつ

たんだが、自分の娘をそう呼ばれるとなんだか取られたような気になるのはどうしてかな。」

軽く笑いながらレオンハルトが答えて言った。

「そりゃあ簡単だよ。志郎、神しのさんの時はお前が取る側だったが、今度は取られる側だからさ。」

「なるほどな…取られる…か。レオンハルト、お前もそうか？」

志郎が苦笑しながらレオンハルトに聞く。レオンハルトはやれやれと手を広げながら答えて言った。

「言うな。エミリアが言うには寂しくなるだろうから今度はライザでも引き込め、だとさ。」

そう言って二人は苦笑しつつ、娘達を見ていた。彼女たちは談笑が進んでいた。其処に、更に慍しずかがやってくる、セレナが抱きつき談笑は更に賑やかに為って行くのであった。

城では豪勢に夕食会が催されようとしていた。主催は国王。そして主賓は神しのであり、また其の一行であった。人数は少ないながら盛大なパーティーとなっていた。其れは即ち彼女達すなわがここを後にする事を意味しているのである。国王が司会として立ち上がりこう言った。

「今晚はよく皆集まってくれた。特に、ライル、シメオン、お前達二人は多忙な折良く駆けつけてくれた、感謝するぞ。」

国王はそう言って、皆をまた、久々に集まった二人の王子を<sup>ねぎら</sup>労いを持って迎えるのであった。其れに答えてライルが言う。

「いえ、アーレフの式にも間に合わず、長子として、このライル不徳が増すばかりですよ、父上。」

「いや、兄さんなんか良い方だよ。俺なんて、この城に帰るのは半年振りだもんな。セレナに無視されて焦ったよ俺は。」

シメオンが苦笑混じりにそう言う。セレナは自分が話題に出されたことで赤面しつつ答えて言った。

「まあ！シメオンお兄様。無視等していませんわ。只私は<sup>しずか</sup>惺ばかり見ていたものですからお兄様に気が付かなかっただけですわ。」

まあ、何と言うか、言い訳にも為らない言い訳を言うセレナであった。苦笑しつつ国王が言う。

「まあ、其の辺りはその辺で止めておけ。まずは夕食会を始めることにしよう。其の間でお前達を紹介し合いたいと思う。」

そう言って国王が仕切るにより夕食会は始まった。集まる人数として国王一族が七名、フェイグラシェイム家（レオンハルトの家）が二名、<sup>しの</sup>神達一行が七名。総勢十六名である。こじんまりとはしていてもやはり豪勢な夕食会となってしまった。

「しかし、この忙しい中、良く王都に戻ってこれましたね、ライル兄さん、シメオン兄さん。」

アーレフがそう言う。苦笑しながらライルが答えて言った。

「そうは言うがなアーレフ。私としては、私より早く妻を迎えたお前の姿と其の妻を早く見たかったのさ。」

シメオンも同調しながら言った。

「全くだよ、何時も修行や何やで走り回ってたお前が一番先に妻を得たと聞いたんだ。本来なら仕事を放り出してでも行きたかったんだからな。」

苦笑しながらアーレフが答える。

「其れは申し訳ないです、兄上達。ですが、兄上達も此れからではありませんか。」

「さて、どうかな……。先例が出来る中々な……。」

「全くだね。晶さんも非常に素敵だし、こうなると求婚しても遠慮する女性が増えそうだ。」

二人の兄はそうやって弟を褒めつつ、さりげなくけん制して見せるのであった。苦笑しながらアーレフが答える。

「兄上：相変わらずですねえ。其れは兎も角として一旦戻ることが出来たと言う事は、東西各砦の懸案はとりあえず収まったのですか？」

其れに答えてシメオンが言った。

「ああ、其の件に関しては問題ない。ライル兄上も私も何とか済ませて来る事が出来たよ。」

「そうですか、其れは良かった。」

アーレフは安堵しつつそう言った。国王が其れに加えて言う。

「まあ、そう言う訳だからな久々に一家揃うと言うわけだ。」

「イイコトじゃない。」

神<sup>しの</sup>が其の話に加わってきた。苦笑しつつ、国王が言う。

「しかし、神殿<sup>しの</sup>、そうなって嬉しい場面でセレナが出て行くのだ。私としても辛いがな。」

「あゝ：其れはねえ：本人の決定だし、あたしではどうにも為らないわ。」

両手を広げつつ神<sup>しの</sup>は苦笑した。セレナが話題に出てきたのでライルたちが疑問に思いながら聞いてきた。

「セレナが出て行く？父上、私たちは帰ったばかりでそんな話は聞いておりませんが？」

其れにセレナが答えて言った。

「其れはですね、お兄様方。私、慍<sup>しずか</sup>と一緒に生きる事に致しましたの。ですから、慍<sup>しずか</sup>と一緒にいきますのよ。」

そう言ってセレナは慍<sup>しずか</sup>に接吻をする。突然の事に慍<sup>しずか</sup>は驚いた。そして接吻の後に言う。

「ちょっと、セレナ。いきなりだと吃驚するじゃないか。俺にも分かるようにやってくれ。」

「まあ、済みませんわ。お兄様方に分かりやすいと思ってやりまし

たの。」

そう言ってセレナは微笑む。其の事態を見て兄二人は上手く理解が出来ずキョトンとしていた。

「まあ、そう言う風に為るよなあ…普通は…。」

志郎は苦笑しつつそう言った。暫くして、シメオンが言う。

「えっと…つまり、セレナは、このお嬢さん、慍しずかさんだったわけ。この人と一緒に為ると？」

「どうもそうらしい…私には理解できない、状況だな。でも、セレナの意思だから尊重はするよ。」

ライルがそう言った。セレナが感謝しながら答える。

「感謝いたしますわライルお兄様。シメオンお兄様、理解は難しいかもしれませんが此れがセレナが決めた歩む道です。宜しくお願い致しますわ。」

「あ、ああ、理解するよう努力するさ…。」

シメオンは呆気にとられつつもそう答えていた。苦笑しながらアレフが言う。

「お兄様方、セレナが我が兄弟の中で、と言うかこの城の中でレオンハルトの次に剣の才能があった事はご存知ですよね。」

「ああ、其れは知っている。俺も何度も負かされたしな。」

シメオンがそう答えて言う。アレフが続けて言った。

「其処です。惺<sup>しずか</sup>さんはセレナよりも強いのですよ。しかも、素敵な方なのです。セレナが惚れこむほどにね。セレナが付いて行くのはそう言う方なのですよ。」

「なるほど、そう言う言い方をされれば我々でも良く分かるな。アーレフ分かりやすい説明を感謝するぞ。」

ライルが感謝しつつそう答えた。アーレフはそれを見ながら微笑んでいた。神<sup>し</sup>が話し始めて言う。

「しかし、まあ、皆仲の良い兄弟ね。微笑ましくて良いわ。」

そう言われて、ライル達は喜びつつ答えて言った。

「有り難いお言葉ですね。最近は仕事が忙しくて皆がこうやって集まる機会が中々ありませんでしたから、家族でこう集まり合える事が嬉しいのですよ。」

「そうですね。公務が忙しくなり、ライルやシメオンが成人した頃から中々集まれなくなりましたものね。」

王妃がそう言った。其の肩を優しく抱きながら国王が言う。

「だからこそ、神殿<sup>し</sup>が行かれる最後の今日、家族全員で集まり合うことが出来た事は非常に喜ばしいのだ。さあ、みな楽しもうではないか！」

そう言われて、其処には更に談笑の輪が広がり、楽しい夕食のひと時と為った。明日から来る、暫くの間の嵐を忘れるかの様に。



窓の外では風が柔らかく、次の便りを運んでいた。

## **K r i e g**(クリーク) 「戦争」第一部(後書き)

着々と会戦への準備が進む神達<sup>しのかみ</sup>。

力と力がぶつかり合う其の戦いは如何様に為るのか…。

次回「K r i e g<sup>クリーク</sup>「戦争」第二部」

貴方にも良い風が吹きますように。

(次回、登場人物が増えた為、第二回登場人物紹介と数々の魔法が作中に出る為、魔法や術式に関する設定を公開する予定です。(別話形式で)宜しく御願致します。)

**K r i e g**（クリーク） 「戦争」 第二部（前書き）

会戦が始まろうとしていた。  
そこで神達は何を為すのか…。

## Krieg（クリーク）「戦争」第二部

小説 風の吹くままに

第二十章 Krieg「戦争」第二部

合戦の舞台となるレウネキアス丘陵では神ズが着々と仕込みを済ませていた。

「こっちはこれで良いわね。」

「向こうは済んだわよ。」

「あっちはまだだったかしら？」

そんな感じで事が為されているのだった。其の「仕込み」が何かは合戦が始まって明らかに為る。そう、神の「計画」である「帝国解体作戦」が。

「さて、皆準備はいいのかな？」

レオンハルトが全軍に対してそう言った。皆は答えて言う。

『Ja！（はい！）』

其の返事を聞きレオンハルトは神に向かって言った。

「では、神さん、お願いします。」

「分かったわ。では行くわよ。時空門が出来次第全軍行動開始してね。」

神はそう答えて「力」を使い始める。それにより神の前に巨大な光の門が出来上がっていった。本来、この「時空門」は魔術部が両方に立会い魔道触媒を用いて魔術により空間を繋げる手間の掛かる技なのであった。しかも距離があればあるほど其の手間と労力が掛かる代物であった。しかし、神はたった一人でそれを行っているのである。しかも、到着地には誰も居ない状態で。其れが如何に凄い事かは目の前で見ている全員が理解していた。そうして、神が創り始めた時空門が完成した。

「全軍、進軍開始せよ!」

レオンハルトがそう指示を出す。其の号令によりレミアルト王国国軍は進軍を開始した。そして次々と「時空門」に入っていく。志郎たち一行も中に入っていた。

「此れが「時空門」ですか。初めてです。不思議な感覚ですわ。」

セレナがそう言う。慍が答えて言う。

「そうか、セレナは初めてか。俺は二回目だからな。慣れたものだ。」

そう言われてセレナは少しはぶててしまった。其の様子を見ながら志郎微笑みながら見ていた。エミリアは感動しつつ言う。

「素晴らしいですわ。此れ程までの「時空門<sup>ゲート</sup>」をお一人で創られるなんて…流石は神様<sup>しの</sup>ですわ。」

感嘆しつつ歩いているエミリアを見つつ玲は満足そうに歩いていた。全軍が完全に入り、入り口側の「時空門<sup>ゲート</sup>」は閉じていった。其の様子を見つつ神<sup>しの</sup>が言う。

「さて、第一段階は終了、次に移らないとね。」

神<sup>しの</sup>はそう言うと「力」を使い空へと飛び出していった。其の様子を眺めつつアーレフが言う。

「言っても無駄かもしれませんが無理はしないで下さいね。」

何に対しての「無理」か、分かってはいるがあえて言いたくは無い、アーレフであった。

帝国軍は緊急招集を終え、レミアルト王国軍との会戦をすべく部隊を揃えていた。集まった事を伝えるために伝令が大將軍の元に来る。

「大將軍閣下。帝国軍侵攻部隊全軍総員86753名準備完了しております。」

其れに答えてグラフエルトは言った。

「分かった、魔術部隊が開く「時空門<sup>ゲート</sup>」を確認次第、全軍進軍せよ。」

」

そう命令され、兵士は「Ja!（はい!）」と答える。そして魔術部隊は詠唱を開始し魔法により「時空門<sup>ゲート</sup>」を開き始めた。

「さて、とうとう始まるか。俺の天下の分け目の大舞台になるな。ラーナ、しっかり付いて来い。」

セイルはラーナに対してそう言った。そう、彼は戦場にも彼女を連れて行っているのである、逆を言えばそれ程彼女は有能なのであった。ラーナは答えて言う。

「はい。しっかりと付いて行きます。ラーナにお任せください、セイル様。」

其の返事を見届けて、自分の部下に指示を出しながらセイルは此れから行く自分の希望に期待を込めて足を進めていた。

「時空門<sup>ゲート</sup>」を抜けてレミアルト王国軍はレウネキアス丘陵に到着した。レオンハルトが点呼をする様に命令を出す。それにより、各隊の隊長達が自分の兵士達の点呼を開始し始めた。丘陵を眺めながら志郎が言う。

「何も無い場所だな。此れは完全に帝国に分がある地形か。まあ、守りに徹してれば問題は無いが向こうは其れで満足はしないだろうな。」

レオンハルトが答えて言う。

「ああ、問題は其処<sup>しこ</sup>だけだ、だが神さんにお前達が居る。だから俺は何の問題も抱いていない。」

「そいつは重畳<sup>しゆじやう</sup>。まあ、神の手腕<sup>しゆ</sup>を拝見しよう。あいつは何時も驚かせてくれるからな。」

志郎はそう笑顔で答えた。そうしている内に点呼を終えた隊長達が人数の報告をして来ていた。それをライザが集計しレオンハルトに報告する。

「レオンハルト閣下、レミアルト王国軍、今回動員した全ての人員47281名無事到着しております。次の指示を。」

其の報告に頷きつつレオンハルトは声を上げてこう言った。

「さあ、神殿<sup>しん</sup>が作られた作戦を遂行し我々も神の恩寵を受けて勝利を得るのだ！作戦開始！」

そう言われて、各部隊は作戦通りに部隊を展開していった。

帝国軍も「時空門<sup>ゲート</sup>」を抜けてレウネキアス丘陵に到着していた。周囲を確認しながらグラフィェルトが言う。

「まずは部隊の点呼だ。それと、敵軍の配置の確認をしろ大至急だ



！」

側近が「はっ！」と答えてすぐに移動する。グラフフェルトは手にした遠眼鏡を使いながら言う。

「既にレミアルト国軍は展開しつつあるな。我等も急がねば……。グラフフェルト、守りは頼んだぞ。」

「はっ。お任せあれ。我々で防ぎ切れない事態が起こりえない限り將軍閣下を安全にお守り致します。」

セイルはそう丁寧に答えた。グラフフェルトは其の答えに満足したようだった。しかし、セイルの答えには逆の意味も含まれていたのだ。

「我々で防ぎ切れない事態が起こりましたら將軍閣下を安全に守ることは出来ません。」

と言う趣旨である。勿論、「普通」の事態しか想定していないグラフフェルトがそんな意味など考えるはずも無かった。しかしセイルは違う。彼は既に保証を得ていたから。そう、此れから「神」が「普通」でない事を始めると言う保証が。心の内にそう言う思いを秘めながらセイルは仲間達に指示を飛ばしていた。

上空では神の一人が見守っていた。

「両軍が来たわね。展開の速さはレミアルト軍のほうが少ないだけあってやや早いか。まずはどう出るのかな。レオンハルトのお手並

み拝見ね。」

そう言いつつ、神は上空で此れから起こる事柄を事細かく見つめているのであった。そう、上から見ているので様子はまるで将棋や囲碁の様に兵士達が動く様が見て取れるのである。一部始終見れるこの状況であれば素早く指示が出せるな、神はそう感じていた。

「やはり向こうはこちらの約倍か。我々が先に攻めるのは不向きだな。」

レオンハルトはそう言っていた。しかし、横に立つ志郎は違っていた。

「いや、攻め時期だろう。」

「何?!」

レオンハルトが驚いて言う。しかし、しばし考えた後レオンハルトは気づいて言った。

「なるほど、各個撃破する気か。」

「ああ。やはりお前も気づいたか。」

志郎はそう言って微笑んでいた。どう言う事か？通常の軍隊の考えで考えてはこの二人の言葉は理解できないのである。要するに彼ら二人は個人的感性で考えていたのだ。そう、軍単位では前進して攻撃の意思を示す。まず其処まですれば敵方は何らかの反応を示すの

である。無論守りに入れば此方から敵陣に楔のように食い込んで崩壊させれば其の俛勝てる。敵が分散して方位殲滅を狙ってくるなら敵本陣を急襲して指揮系統を失った後に同じく殲滅できる。また、敵軍が二つに分かれて一方（本陣側）がこっちの攻撃を受けて別働隊が挟み撃ちをする作戦で来れば別働隊側を本体で相手をして本陣側に志郎達が行けば良いだけの事なのである。つまり、志郎達が居るから出来る作戦であり、レオンハルトは其処に気づいて言ったのである。苦笑しつつレオンハルトが言った。

「俺も馬鹿だな。お前達が居る事を計算に入れないとはな。」

「それだけお前が軍人暦が長いってことさ。若い頃ならすぐお前も考え付いただろうがな。」

志郎がそう答えた。レオンハルトは頷く。そして、全軍に対し命令した。

「全軍、敵本陣に向かって進軍を開始せよ！」

単純で分かりやすい命令が発せられた。そう、真っ直ぐ進んで敵を討つ。簡単なものだった。

「おいおい、このまま進んで行っているのかよ？」

レミアルト軍最前列に位置している兵士の一人サイスは友人のガイルにそう言っていた。ガイルは答えて言う。

「しかし、そう命令があるんだし、問題は無いと思うが？」

「いや、敵軍は俺たちの倍って言うじゃないか、このまま叩きあったら俺たちが不利じゃないのか？」

サイスがそう意見を述べる。其の意見に異論が出た、別の場所で。

「ばかだねえ、サイス。レオンハルト様がそんな事も分からずに命令される筈が無いじゃないか。」

「そうは言うがよお、ジェニー。一応俺たち最前線なんだぜ？真っ先に死にかねないじゃないか。」

サイスはそう不安を述べた。ガイルが答える。

「お前、セレナ姫や惺様しずみを見た事が無いのか？」

「あゝ…遠巻きにしか見た事が無い…。」

サイスはそう答える。溜息を吐きつつガイルが言った。

「なら暫く見てろ。もう少ししたら最前線に彼女達や志郎様たちが来る。レオンハルト閣下は責任ある立場だから行きたくても来れないだろうがな。もう少し、お前は俺達の上官の事を覚えたほうがいいぞ。」

ジェニーが其の意見に口笛を吹きながら賞賛して答えて言った。

「ヒュー♪流石だね、ガイル。良く見てる男は違うねえ。サイスも少しは見習いな。」

「五月蠅い！俺は今の状況だけで精一杯なんだよ…」

サイスはそう言って行軍する最前線で歩きながら愚痴を言っていた。

それを見て二人はやれやれと手を開いて表現していた。

「て、敵軍進軍してまいります！如何致しましょうか、將軍閣下？」

敵軍を観察していた偵察兵がそう報告をしてきた。グラフィェルトは其の報告に驚いていた。敵は縮こまって専守防衛に徹すると思っていたからだ。

「何：何故、敵は我が軍に其の俟進軍してくる？状況は圧倒的にこちらが有利なはずなのに、何かあるのか？」

グラフィェルトは驚きを隠せずに声を荒げながらそう言った。側近が答える。

「閣下、魔術隊の報告では、周辺には我々を阻害する術式結界等は発見できなかったとの報告であります。まずは、魔術部隊による遠距離攻撃から開始して、弓部隊、それから本隊と側面に待機する別働隊2部隊を回して包囲殲滅、というのは如何でしょうか？」

基本的な迎撃作戦を側近はグラフィェルトに提唱した。まあ、複雑な提案をしたとしても彼に理解できるか問題であろうが。彼は其の提案に満足しこう言った。

「よし、其の作戦を基本として行動を行うとしよう。伝令！基本迎撃体勢の後、側面に居る左右2部隊を敵部隊の包囲殲滅用に回す事を、各個伝達せよ！」

「了解致しました、早速向かいます。」

伝令は素早く命令に応じ、すぐさまその場を走り去っていった。状況を見守るべくグラフェルトは遠眼鏡を手にしていた。傍でセイルは苦笑しつつ其の様子を見ているのであった。

「セイル様、レミアルト軍の動きどう思われますか？」

ラーナがセイルの傍に近づいて聞く。セイルが答えて言った。

「簡単な事だ。こっちが迎撃で来ると見込んで其の裏をかく作戦で行くんだろうさ。勿論俺が総大将ならそんな事は百も承知で対応するが豚將軍様には其れは分からないだろうからな。恐らく、向こうも其れを知ってるから、あえてこんな作戦を使うんだろう。」

「しかし、そうなるとレミアルト軍は初めに多少被害を受けませんか？」

ラーナは危惧をしつつそう言う。セイルは答えて言った。

「ジェネットが報告をしてくれたんだが、軍所属とは別に常人以上の優れた戦士や魔術師が参加しているらしいのだ。恐らく神殿の縁者だろう。と為れば、あの女神の関係者だ。只者ではあるまい。」

其のセイルの結論にラーナは納得しつつ答えて言った。

「なるほど。そう言うことであれば敵軍の行動も理解できますね。さすがはセイル様、今後の為にも今回の作戦は是非成功させます。」  
「ああ、頑張るぞ。」

セイルはラーナにそう答えた。そして、まもなく来るであろうレミ

アルト軍のほうへ顔を向けるのであった。

「よし、俺たちは最前線に行こう。セレナ、ラミア、行くぞ！」

惺しずかはそう言って飛び出していった。慌しずかてながらセレナが言う。

「ちょっと惺しずか、待ちなさい！ ああ、もう！ ラミアさん、行きましよう。」

セレナはラミアにそう言いながら自分も走り出した。ラミアは其れに頷いて答えながら二人を追いかける。其の姿を見つつ志郎は苦笑して言った。

「やはりそうなるか。俺と同じ考えだよな惺しずかは……。よし、俺も行くかな、ミル、レネアお前達も一緒に行くか？」

志郎はそう言ってミル達に声を掛ける。ミルは答えて言った。

「はい。私達も参りますよ。ミル達は魔法で皆さんのサポートに回りますね。」

そう言って、ミル達は惺しずかたちを追いかけるようにして走り始めた。志郎が其れを見つつ言う。

「既に己の役割をそれぞれが考えるか。既に、俺達は一つの家族となってるのかもしれないな。」

感慨深くそう言いながら志郎も走り始めた。そんな志郎達の姿を見ながらレオンハルトが言う。

「くそ！俺も総大将じゃ無ければなあ…。前線で戦いたいぜ。」

くすくすと笑いながらエミリアが言った。

「お父様も相変わらずですわね。ライザさんがお困りになってますわよ。」

そう言われて、ライザが顔を赤らめながら言う。

「な！ちよつと、エミリア様。私はそんな…。私は部下としてレオンハルト様に御仕えするだけです。」

期待しない答えが返ってきてエミリアはやれやれと両手を広げつつ言った。

「定番過ぎる答えですわね。私も玲御姉様と前に出ますので、少しはお二人の中も進展して下さらないと、困りますわよ？」

「おい…エミリア…。」

苦笑しつつレオンハルトがそう言う。エミリアは、笑顔で答えてこう言った。

「お父様も頑張って下さいな。さあ、行きましょうか。シエルエル、ライエル、ウィサウレル。参りますわよ。」

「はっ。」



エミリアに言われリッター達はエミリアについて移動を始めていった。其の様子を見つつレオンハルトが言う。

「やれやれ…娘も旅立つ…か。寂しくなるな…。」

「閣下、私が傍に何時までも居りますわ。」

ライザが傍でボソツとそう言った。苦笑しながらレオンハルトがライザに手を掛けながら答える。

「よく言えたなライザ。エミリアのお節介があったとはいえ俺も前の気持ちに応えよう。この会戦が終わって暫くしてからで良いかな？」

レオンハルトの其の質問にライザは無言で頷いた。其の様子を見ていた周囲の兵士や上級士官達は二人を笑顔で見ているのであった。

前線はもう間も無く交戦する範囲まで来ようとしていた。まずは、魔法による長距離の砲撃から始まるのが軍での戦いでは常であった。機動力のある馬などの騎乗動物を使う戦法も考えれるが集団戦闘の場合、その様な運用で有利に運ぶには、対象が強力な飛び道具を持たないか、または其れを無効化する術が無い限り不可能であった。今この世界では、魔法は多々に渡って研究されており、その用途は広く、戦場でも重宝されているのであった。身近な「お守り」に込められたものから、武器の威力を上げる為、または「属性」を付与し強化する為、自身を守る防御壁として、護身の為の変わり身、究極的なものでは自立式魔法生命体つまりホームンクルスまでが既に実

用化されていた。単純に力を具現する上でも、大量の魔道触媒等を使用するとはいえ「時空門」<sup>ゲート</sup>「長距離魔法攻撃弾」<sup>エネルギーボルテージ</sup>「対魔法用障壁」<sup>マジックエネルギーフィールド</sup>「蘇生術」<sup>リザレクション</sup>等、様々に用いられていた。

「間も無く交戦範囲に入る。魔術部隊、対魔法攻撃用魔法障壁、用意せよ！」

指揮をしている隊長がそう言う。後方に位置していた魔術部隊が、部隊全体に効果を及ぼす魔法の障壁を作り出すために所定の手順に従い詠唱を開始し始めた。其れを見つつエミリアが言う。

「ウイサウレル、私達の周囲にも障壁をお願いしますわ。シェエル、ウイサウレルの障壁が完成したら二人で魔法攻撃の準備を、ラリエルは至近戦まで待機しなさい。」

「はっ。」

リッター達は指示に従い素早く行動を開始する。其れを見つつ玲も言った。

「エミリア張り切ってますわね。では私達も頑張りましょうか。アイン、魔法反射を行います。ゼクスを基点として増幅反射の構成を組みなさい。」

「了解致しました。」

アインはそう返事をする、すぐに他のガイストたちは行動を移し準備を完了するのであった。二人を見つつミルがレネアに言った。

「お二人とも凄いですねえ。レネアちゃん、私達も張り切りましょうか。まずは精霊たちに言って、元素乖離<sup>げんそかいり</sup>からはじめましょうか。」

「分かりました。サポートはレネアにお任せです。」

レネアはそう答えて、素早く精神を研ぎ澄まし、ミルが行おうとする魔法のサポートを開始し始めた。そんな彼女達を見つつ志郎が言う。

「魔法に長けた者達の独壇場だな、長距離戦は。」

「そうですね。でも志郎様、私達の活躍はその後にありますわ。」

セレナがそう言う。頷きつつ慍<sup>しずか</sup>が言う。

「ああ、矢が来る範囲まで来れば今度は俺たちの番だ。」

「そうだな、もう少しだ、彼女達が頑張った後で俺たちも頑張るかな。」

微笑みつつ志郎はそう言った。

「敵、魔法攻撃有効範囲に間もなく入ります。」

伝令がそう連絡する。グラフィエルトは魔術部隊で一気に掃討すべく命令を出す。

「よし、魔術部隊に一斉攻撃命令だ。ありったけの攻撃魔法を叩き込め。」

「はっ。」

指示を受け伝令が伝えに去っていく。其れを見つつセイルがラーナに言った。

「どう思う？ 敵の動きを、真っ直ぐすぎる気がするが。」

ラーナはしばし考えてから答えて言った。

「恐らく、魔法を無効化及び反射をして此方の士気を挫きつつ直線的に突っ込んで壊滅させると言う単純な戦法かと。此方は指揮官が指揮官ですので、恐らく混乱し其の間に勝敗が決するでしょう。」

ライルは其の答えに満足したように答えて言った。

「流石によく見ているな。恐らく其の通りだろう。まあ、俺が神殿しに伝えた情報も利用してるとは思うがな。」

其のライルの台詞にラーナは頷いた。戦争は基本的に情報と補給と伝達が重要であり、実際に戦う事も大事だが、まず其れが出来なければ集団での勝利など不可能だからだ。無論、一人で集団に勝てる存在なら無問題だが。一騎当千の存在も大事ではあるが、軍である以上、組織として脆弱であっては勝ち目は無い。ライルは其れを知り尽くしているが故に今回の判断は正しいと結論した。

「よし、敵軍の動きに合わせて我々も行動を開始する。仲間全員にその旨を伝えておけ。」

セイルがそうラーナに命じた。ラーナは、「はっ。」と短く返事をして素早く移動し始めた。不敵に笑いながらセイルが言う。

「さあ、今度は俺は何処へ切り込めるのかな。楽しみな事だ。」

そう言っている内に帝国軍魔術部隊の魔法砲撃が始まりセイルの後方から無数の魔法の力が撃ち出されて行った。放物線を描くようにしてそれらは飛んでいく。そう、実際の戦いが今始まったのだ！

「シャアアアアア！」

空間を滑るような音がしてくる。直線系の魔法弾が来るときの特有の音だった。ウィサウレルは「力」を展開し其の魔法弾を中和する。空中に六亡星が浮かび上がり、其の光る六亡星に魔法弾が直撃する。

「ジュッ！」

昇華するような音と共にエネルギーの塊は中和され空中に四散する。其れを確認しつつウィサウレルは報告した。

「まずは一つ。」

「では、お返しを致しましょう、ウィサウレル、サポートをお願い致します。」

シエルエルがそう言う。ウィサウレルは頷きすぐさま「力」を展開する。シエルエルが「力」を発動した。上空に五亡星が浮かび上がり其処に、三つの力の塊が現れた。

「さあ、三様<sup>トライザム</sup>之力を受け取りなさい。」

シエルエルがそう言うのと、三つの力は捻り合いながら急速に前方に進み始め、見る見るうちに一本の線のように敵陣に向かっていく。

「キュウウウウアアアア！」

耳に障るけたたましい音と共に其の力は突き進んでいった。様子をしながらエミリアが言う。

「さすが玲様のリッター素晴らしいですわ。」

「ゴォォ！」

巨大な火球が着弾点目掛けて落ちようとしていた。其処へミルが来て言う。

「全ての精霊よ、其の属性から開放され、この世界より立ち去れ！」

そう言って全精霊<sup>アンチエレメンタル</sup>解放を唱える。レネアは後方で一生懸命にサポートをしていた。ミルの上空に巨大な光の壁のようなものが出現した。

「サアアアア…。」

火球は其の壁のようなものに触れた瞬間、解<sup>ほぐ</sup>れる様に消えてゆく。そう、炎の精霊力を失った為、無と化したのである。其の様子に納

得しながらミルは言った。

「いい調子ですねえ。この調子で他にも展開してゆきましようか。」

「はい。」

レネアがそう答えてミルに付いていく。前線の兵士達は行軍しながら其の様子を感心しつつ見守っていた。

玲の方向には、巨大なエネルギーの塊が近づきつつあった。魔法弾の中でも一際強力なもの「マジックナバーム魔力焼夷弾」であった。精霊力を使わず、魔力を利用し魔法の作用で魔力が展開し周囲の空気を人が呼吸できないものに変えて敵を戦闘不能に至らせる強力な魔法弾である。玲は其れを眺めつつこう言った。

「アイン、おやりなさい。」

其の命令によりアインは仲間に素早く指示を出す。ゼクスを基点として既に空中に待機していた6名のガイストは「力」を展開し巨大な力場を形成した。魔法弾は其処の中に入り込む。

「キュゴォ！」

轟音と共に魔法弾は効果を発するかと思われるが力場により其れは発揮されずに保持された。アインが其処で「力」を使い力場内にある魔法弾を送り返す。

「ゴオオオオウウウウウ…。」

轟音と共に其れは送り返されてしまった。そう、玲が言った魔法反<sup>マジックリフレ</sup>射である。しかも、只の反射ではない、ガイストの力を利用して威力を増幅して送り返しているのだ。帰ってきて受けるほう側はたまったものではない。玲は冷笑ともいえる笑みを湛えつつ立っていた。

「敵と交戦を開始いたしました。前線では、エミリア様の姿も見えます。魔法戦にて善戦しておられる模様。」

伝令はそう報告してきた。レオンハルトは苦笑しつつ其の報告を聞いていた。あのリッター達がエミリアを守っているのである。間違はなく無事であろう。確信しつつレオンハルトは命令を出した。

「次は遠距離武器により実弾戦だ。負傷者もそろそろ出始める、衛生班、各自いつでも前線に出れるように最終確認をしろ！」

そう命令され、待機していた衛生班達は慌しく準備を始めた。其の様子を見ながらレオンハルトはぼやいて言う。

「俺も前線に行きたかったなあ…。」

そんなレオンハルトをライザは苦笑しつつ見守っていた。



「キュゴオオオオ！」

其れはけたたましい轟音と共にやってきた。そして地面に着弾すると、

「ゴオッ！」

強力な衝撃波と共にエネルギーの波が辺りを襲う。着弾点近くの兵士達は文字通り吹き飛ばされた。

「ドドドドオオオオオ…」

地面の凄まじい振動といまだに空気を振るわせる独特の揺れが身体に響く。其の様子を目の当たりにした兵士は啞然として立ち尽くしてしまふ。自分達には強力な魔法障壁が掛けられていたにも拘らず其れを突き破り着弾したからだ。

「御報告致します。前線付近、本陣から見て左方向において魔法障壁をさえ破る強力な魔力弾が到達、周辺被害の詳細は不明、付近の兵士に動揺が見られます。」

伝令が至急で報告してきた。グラフィェルトが焦りつつ言う。

「な、何だと！魔法障壁の強化を伝えよ。そんな強力な魔法が本陣に来たらたまったものではないわ！」

あくまで自分の保身しか考えてないグラフィェルトの命令であったが

伝令は返事をして指示を伝えに行った。苦笑しつつライルがラーナに言う。

「帝国の魔法障壁を破ると為ると連中だろうな。」

「は、恐らく其の通りかと。將軍閣下が動揺されましたら事を起こされますか？」

ラーナは答えながらそう聞いた。セイルが答えて言う。

「いや、神殿が直接来られるそうだ、軍の士気を奪う為にな。その後一緒に帝都へ向かう。」

「了解しました。では、神殿を確認後、すぐ行動出来る様に手配致します。」

ラーナがそう答えた。セイルは頷き前線に視線を向けていた。前線は矢が飛び交う戦況と為っていた。そんな時、セイルの上空を一際大きな魔法弾が飛び去っていた。

「キャパツ！」

後方で空気が劈く様な音が聞こえた。其の後で、ばたばたと後方に居た魔術師達が倒れ始める。其の合間を縫って伝令が報告に来た。

「緊急報告、敵陣から飛来した魔法弾により後方に控えていた魔術師部隊九割方戦闘不能になりました！今現在衛生班による治療を始めておりますが、魔法焼夷弾による被害と思われまます。」

「何だとおおお！では、魔法障壁も強化出来ぬでは無いか！魔法攻撃より魔法障壁に精力せよと魔術師部隊には言え！くそっ、なんて奴等だ。」

グラフィルトは怒号を上げつつ命令をしていた。自分の立場は危ないかもしれない、そう考え始めていた。そして言う。

「左右に待機している遊撃部隊に命令を出せ。敵側面より攻撃を開始せよと。」

伝令は返事をして其の命令を伝えに言った。グラフィルトは齒軋りしながら言う。

「おのれ：数に物を言わせて其の俥畳み込んでやるわ！」

セイルは其れを聞きながら、簡単に其れができるなら苦労はしないな、そう心の中で思っていた。

前線では矢が届く位置まで接近していた。各兵士は小型の弓を掲げて盾の合間から矢を射始める。そうしなければ自分も矢の被害に遭うからだ。

「シュツ：シュツ：シュツ：」

前線の兵士から撃たれる矢が軽く弧を描きながら飛んで行く、其れは放物線を描き、重力によって加速をつけながら地面に、また敵兵士に向かっていく。しかし、上空に掛けてある対弓用の防御魔法で大半は弾かれてしまう。ごく一部が敵兵士の間に落ち、且つ盾で防御されていない部分に運が悪く落ちた兵士が呻きつつ倒れて行った。しかし、レミアルト軍の方には殆ど矢は落ちてこなかった。

「よしよし、殆どの矢は防げましたねえ。レネアちゃん流石ですねえ。風の精霊のお偉いさんとお知り合いだったのですねえ。」

ミルはそう言ってレネアを褒めていた。レネアは自分が契約を元に呼び出した風の大精霊と話をしている所だった。

「今回は有難うね、あなたのお陰で皆が助かります。大精霊シャレニウム。」

「いや、私は現れて少し力を使っただけだ。お前との契約に比べれば大した事では無い。」

謙遜に大精霊シャレニウムはそう答えていた。レネアは一通りの感謝を述べた後、彼を元の世界へと返した。

「此れで矢に関しては大丈夫ですね。」

レネアがそう言う。そんなレネアを撫でながらミルが言った。

「大活躍なレネアちゃんにはミルから御褒美をあげないといけないですねえ。」

ミルにそう言われてレネアは喜びながらミルに抱きついていていた。前線は間も無く接近戦の距離に近づきつつあった。

「よし、俺は行くぞ！」

慍しずかはそう言って前線から抜け出し敵陣に切り込んで行った。其れを見てセレナが叫びながら言う。

「慍しずか！もうっ！いつも先走りするんですからあ！」

セレナはそう怒鳴りつつ慍しずかを追いかけて行った。苦笑しつつ志郎が其れを見ながら言う。

「俺と神しを足して二で割ったような振る舞いだな、慍しずかは。」  
「二人の娘だから当たり前だな。」

ラミアが当然とも言える答えを提出する。志郎は「違うない。」と苦笑して敵陣に走り始めた。ラミアも付いて行く。そう、とうとう戦線は接近戦へと展開して行くのだった。

上空では風が強く吹いていた、そう、此れから荒れると言わんばかりに。

## **K r i e g**（クリーク） 「戦争」 第二部（後書き）

魔法による交戦が開始され間もなく近接戦闘も始まろうとしていた。  
縦横無尽に戦う神達<sup>しの</sup>。

此の戦いから得られる結果は如何に為るのか…。

次回「**K r i e g**」<sup>クリーク</sup>「戦争」 第三部」。

貴方にも良い風が吹きますように。

（次は、人物紹介第二部、その次は、魔法や術式に関する説明の回です。ご了承下さい。）

## 人物設定    z w e i (前書き)

人物設定第二回です。

なんと登場人物は40名を突破……。

ガイストやリッターを細かく説明すると50名を超えます。

人物整理がきつくなって来た…。

でも、お気に入りをおぼろげに下さっている方の為に完走まで頑張ります。

それではどうぞ。

尚、イラストは、勇さん提供です。有難う御座います。

## 人物設定      z w e i

小説 風の吹くままに

人物設定(第二十章時点)

>i2191<ruby><rb>326<  
杜</rb><rp>( </rp><rt>あかなし</rt><  
rp>) </rp></ruby>神しの

当物語の主人公。「かの方」により「神」としての力を強制的に与えられ、別世界「ノンテースンザード」にて旅をすることになった女性。現実主義的で前進的な考え方の女性。悲観的に考えることに對してトラウマがあった。外見年齢は16〜20歳程度。身長149cm体重46kgスリーサイズは86, 62, 87白銀の美しく長い髪と鮮やかな赤い瞳が特徴の美しい女性である。杜志郎あかなし(剣志郎)と婚姻する。

>i2254—326<  
ミルⅡフェリシア

神しのによって創られた「使い魔」。楽観主義の能天気娘。ただし、与えられた命令はそつなくこなす能力者でもある。神しのが世界を旅するに当たり助け手及び話し相手として創られた。外見年齢は20台。身長199cm体重102kgスリーサイズは104, 76, 105やや浅黒い肌と燃えるような赤い髪、エメラルドグリーンの綺麗な瞳が特徴的。実は神しのが元居た世界の姉がモデル。レネアの保護者兼恋人のような関係に為っている。



かの方

当物語の裏主人公 真の「神」といえる存在。神しのが旅をする原因となった張本人。

初老の人物

かの方に仕える存在。直接かわりのある人物のようだが、現時点では詳細不明。

アーレフⅡレミアルト

レミアルト王国第三王子。よく言えば「いいとこの三男坊」(笑)。温和な人物で信仰心が厚く国が立てた教会の神官として修行をしてきた。身長179cm 体重80kg 黒い髪黒い瞳の好青年である。今現在の年齢は18歳。日向 晶と婚姻した。

大天使

ノンテーサンザードの「天」にて責任ある立場にある人物。大天使は称号であり名前ではない。詳しいことは現在不明。

>i2253<ruby><rb>326<  
杜</rb><rp>(</rp><rt>あかなしく</rt><  
rp>)</rp></ruby>志郎 (剣 志郎)

優れた体術を習得し、それを武術として磨き上げ、冒険者として名を馳せている人物。ある依頼から神に出会うが依頼遂行より神についていくことを選ぶ。基本的に現実主義的で神曰く「カッコいいおじ様」。身長167cm体重70kgやや褐色がかった黒髪にモスグリーン系の瞳を持つナイスガイである。外見年齢は40歳。神と婚姻した。それにより彼も「神」の一員となる。今は能力が低いが神と共に居ることとでその能力は高められるであろう。

>i2327<ruby><rb>326<  
ラミア</rb><rp>(</rp><rt>レスフェミユナ  
シア</rt><rp>)</rp></ruby>

神が入手した魔道具である「核」を使用して創り上げた、特殊魔法生命体。元の名前はレスフェミユナシア（神を狩る者）という名前であったが神がラミア（刃となる者）と言う名を与えた。「核」が神の作品ではないため感情表現が希薄で神曰く「模範的な心」の持ち主。外見は非常に可愛い少女の姿をしている。身長155cm体重50kgスリーサイズは88, 68, 89 藍色の髪に蜂蜜色の美しい瞳、透けるような色白の肌が特徴的な少女である。外見的年齢は13—17歳程度。十話の時点でコアは取り除かれ神により新たなコア（完全品）が入れられて生まれ変わった。

晶Ⅱ日向Ⅱレミアルト（日向晶）  
ひなたあきら

レイグラード大陸の東にある島国 皇の国の巫女。叔父の勧めで世界見聞で叔父の仕事を手伝いながら旅をしていた矢先に叔父と死に別れしかも悪魔崇拝の一団に拉致されてしまう。魔族を宿するという驚異的な事象を経験するもアーレフの神器を使った行為で九死に一生を得る。実は、魔術も武術もそつなくこなす女性。非常に長い黒髪を持ち、淡く輝く灰色の美しい瞳をしている。身長162cm体重58kgスリーサイズは78、58、80。今現在の年齢は17歳。アーレフと婚姻した。

グラニデウス

ある人物が書物に書かれた方式で強制召喚された魔族。非常に強い「力」を持っており、声を発するだけで耐性の無い人間は気絶するほど。彼曰く「休んでいる」時らしく、あまり「力」を発することは無かった。神の力<sup>し</sup>で無理やり召喚された状態を解除されて「元」の世界へと帰って行った。彼が「起き上がった」時はどうなるのか・・・。補足として、魔族とは天界の住人には属さない知的精神生命体全般を主に指しており、一般的に言う悪魔は、その中でもかなり低級なものである。彼らの中には「神」に匹敵する者たちもあり「魔神」と呼ばれる。因みに神<sup>し</sup>から与えられた姿でダビデ像の様な筋肉たくましいダンディーな外見をした肉体を今はつけている。勿論これはかりそめであるが。

グランモスキャメラウル（グラム グラン爺）

オーソストラム平野など、一定地域の竜族を束ねる長の一人。古代<sup>エンシェント</sup>竜の一人でもある。三千年程度は生きている長老竜で高い「力」も有している。普段は、ある山の中腹にある洞窟内で結界を張ってそこで静かに暮らしている。人型に変身することもありその時は老人の姿をとっている。

ディルサイヴ

冒険者の初老の男性。魔法使いを自称している。アーキレストの街でラミアと出会う。ラミアの成長に貢献する。また彼自身、魔道具の探求者でラミアに好意を寄せる。それは父親のような愛情でありそれがラミアに対して優れた働きをした。重病で余命が少なかったが神の<sup>し</sup>介入で余分な寿命を得ることが出来た。

ラグレム

冒険者のドワーフ。男性である。アーキレストの街でミル、晶と出会う。

> i 2 3 2 5 — 3 2 6 <  
レネア

非常に若いエルフ。出身はアーキレストの北にある彷徨う森のエル

フの郷。淡いブロンドの髪に耳が鋭く立ち非常に優れたスタイルをしている。瞳は淡い緑色。身長150cm体重44kgスリーサイズは72, 60, 73。今現在の年齢は98歳。明るく快活な女性だが、同姓愛好者という変わった側面を持つ。ミルが依頼していた女性に御執心だったがミルを見て一目惚れしてしまい今はミルにゾッコン状態となっており付きまとう毎日を過ごしている。実は彷徨う森のエルフの郷の長ランヴェルサイラーヴの末娘である。人間的な外見年齢は16歳程度に見える。ミルと恋人関係となっている。

>i2276<ruby><rb>326<  
杜</rb><rp>( </rp><rt>あかなしく</rt><  
rp>) </rp></ruby> しずか 惺

鮮やかな長い黒髪、綺麗な銀色の瞳をした少女。身長130cm体重30kgスリーサイズは65, 54, 66。外見年齢は8〜10歳程度。言葉遣いが「俺」言葉を使うのが特徴。 しずか 惺は神と志郎の二人によって「創られ」た娘で彼女も「神」の一人である。生まれたばかりで能力は志郎とあまり大差がない。セレナと一緒に道を選んだ。

>i2277<ruby><rb>326<  
杜</rb><rp>( </rp><rt>あかなしく</rt><  
rp>) </rp></ruby> あきら 玲

鮮やかな漆黒とも闇の色ともいえる髪、右目が輝く緑色、左目が輝く血の色をしている。外見年齢は16〜20歳程度。身長149cm体重46kgスリーサイズは86, 62, 87。神が しの グラニデウスの「力」を貰いそれを使用して彼女の「娘」として造り上げた存在

在。左目のみが開いているときは「闇」の側の性格が、右目のみが開いているときは「神」の側の性格が、両目が開いているときは「融合した」性格が出る特異な性格の持ち主。姿形が神に非常に似ているため、髪の色が違わなければ見間違えるほどである。エミリアを可愛い妹兼僕<sup>しもべ</sup>として引き取るようになった。

>i2324—326<

セレナⅡレミアルト

レミアルト王国息女。現国王の唯一の愛娘。箱庭育ちの典型的なお姫様だが教育をしっかりと受け入れて育ってるのかかなりのしっかりものである。最近は、国王一族が命を狙われているため自由が少なくそのことがストレスになっていた。身長160cm体重54kgスリーサイズは81, 65, 85。黒い長い髪黒い瞳をもつ美しい女性である。現年齢は14歳。実はレオンハルトが舌を巻くほどの武術など戦闘系能力に長けた人物だったりする。慍<sup>しずか</sup>に思いを伝えて一緒に道を選んだ。

レオンハルトⅡフェイグラシェイム

レミアルト王国筆頭將軍。40台で国軍のトップに躍り出ている超エリート軍人。もちろん能力も高く軍では驚異的な支持がある。政治面などには全く興味を占めさない無骨な性格で真面目な人物。しかし、遊び心を忘れないナイスガイでもある。現在の年齢は42歳。身長190cm体重93kg淡いプラチナの髪にダークグレイの瞳が美しい好青年である。志郎とは長年の友人で親友、悪友とも呼べる間柄。八年前に奥さんと他界しており現在娘も離れてしまい一人

身状態。第二十章にてライザからの気持ちを受け入れた。

>i2600—326<

エミリアⅡフェイグラシエム

レオンハルトの娘。現在16歳。幼い頃から優れた父を見てきたせいで一般の男性には興味が無い側面がある困った少女である。以前までは志郎を結婚相手に考えていた。母親に似て非常に美しい女性でしかも、「お嬢様」である。身長156cm体重51kgスリーサイズは81,65,84。綺麗なシルバーの髪に鮮やかなマリブルーの瞳が美しい少女である。ひよんな事から玲に惚れ込んでしまった困ったお嬢様。今は玲の妹兼僕しもべとして献身的に付きまといている。

セイルⅡグラハム

サデイルウム帝国帝国軍第三遊撃部隊隊長。階級は大佐。「切り込オシみのグラハム」というあだ名を持つほどの遊撃作戦に優れた名将。帝国の腐敗振りを憂いている人物の一人。独自に帝国の浄化が出来ないか努力をしているが腐敗が著しい帝国ではどうしようもない状況と為っており、気が沈む原因とも為っている。身長181cm体重75kg。グレイの髪を持ち鮮やかなマリブルーの瞳を持つナイスガイである。現年齢は31歳。

アイランズ

元帝国軍人。軍内部の腐敗に呆れて退役した人物。帝国の状態には憂いて居るが自分の非力さを僻<sup>ひが</sup>み日々盗みなどで生計を立てていた。身近な知り合いにレミーナが居る。

## レミーナ

出仕不詳の女性。今は帝国帝都で盗み等を生業としながら生活している。アイランズとは盗み時代からの知り合い。

## ライザ

レオンハルトの副官。非常に有能な女性でレオンハルトの両肩に掛かる面倒な事務処理全般を肩代わりする程の女性である。女性軍人らしくショートカットヘアで凛々しい顔立ちが美しい。年齢は28歳。身長161cm体重54kgスリーサイズは91，69，95。真面目ゆえに浮いた話の無い女性でもある。実は、レオンハルトの事が好きなのだが彼はシャリー一筋の為に思いは伝えられないで居るある意味可哀想な女性。だったのだがエミリアのお節介により第二十章でレオンハルトに思いを打ち明ける。軍の上での立場は国軍大尉。

## シェレーヌ



レミアルト王都で情報屋を営む女性。非常に能力の高い工作員の一人。普段は老婆の姿をしているがこれは仮のもので実際は淡いピンクの美しい長い髪を持つ非常にグラマーな美女。本当の状態のときは身長172cm体重62kgスリーサイズ99，69，100。美しい褐色の瞳も特徴的。志郎とは冒険者の頃からの知り合いで彼女も彼を狙っていた一人。今回神と出会って神の提案に乗り帝国に対する工作を開始する。

ラーナ

サデイルウム帝国帝国軍第三遊撃部隊隊長副官。階級は大尉。セイルの傍で細々とした面倒な仕事そつなくこなす女性。他聞に漏れず彼女も上官であるセイルに好意を持っている訳だが、そう言う苦労は報われないのも定石と言う所か。身長160cm体重54kgスリーサイズは88，68，90。ダークグレイのショートヘアに淡い緑色の瞳を持つ才女である。現年齢は27歳。

ランカスター

帝国皇帝の傍で助言役の立場に居る人物。以前神に消された（実際に消したのは玲だが）グレイハワードが言っている人物と同名だが、果たして？詳細は不明。

ヴェルザイライド十四世

現サデイルウム帝国皇帝陛下。第四十四代目に当たる。軍備を整えては領土拡張をしていた。南方侵略が一段落し、この度レミアルト王国へ侵攻を開始する。国政にあまり介入をしようとは思えないが、気に入らない者、役に立たない者に対する処断は厳しい人物。其の為、普段は権力に腐心する人物ですら彼の前では縮こまると言われる。身長190cm体重91kg。ブロンドの鮮やかな長髪を持ちダークグリーンの綺麗な瞳を持つ貴公子でもある。現年齢40歳。

## ジェネット

サデイルウム帝国帝国軍第三遊撃部隊隊員。階級は少尉。諜報関係専門のエキスパート。セイルが信頼を置く部下の一人。小柄な男性で、見た目は気弱でひ弱そうに見えるが、かなり豪胆で強靱な身体を持ち主。変装が得意で小柄なため女性や子供によく変装する。今回はシェレーヌと接触し、セイル以下仲間達を神しんの側に引き込むきっかけを作ることになった人物。褐色の髪に鮮やかな赤い瞳が特徴の可愛い(?)男性。現年齢は25歳。身長150cm体重51kg。

## ローギユンター

サデイルウム帝国帝国軍第三遊撃部隊隊員。階級は中尉。非常に大柄な男で、部隊では味方(仲間)の防衛からセイルの切り込み時の重要な壁や補佐として活躍する人物。其の体格故に生傷が耐えないだろうと思いきやかなり敏捷な人物でもあり実はそんなには無い。

見掛けと違い、大人しい人物であり喋る方では無い。しかし、行動力は素晴らしく、彼のお陰で仲間が助かる場面は両手では数えられないと言う。身長210cm体重120kg。浅黒い灰色の髪に紅茶色に見える美しい瞳をした好青年である。現年齢29歳。

## レミアルト二十四世

現レミアルト王国国王。現年齢56歳。三人の息子と一人の娘を持つ、普通のおじ様である。しかし、能力は統治者として秀でており、父一（アーレフの祖父）から受け継いだこの王国を無駄を殆ど無く維持し有効に活用してきたのであった。国外に対しては友好政策を取り、侵略等は一切行わず。国内ではきちんとした統治機構の整備を進め、昔以上に「良い」政治を行ってきた政治家として模範的な人物である。故に、家庭を顧みる事が出来ない事に彼自身は些か不満を持っている様だ。温和な性格で、且つ裁断する時はしっかりと、メリハリのある人物。身長170cm体重73kg。黒髪に淡い灰色の瞳を持つおじ様である。

## ガイスト

ガイストとは影、精神と意味する語でここでは玲が自分を手助けする僕として創り出した「影」を指している。全部で七名居り、隊長格のアイン、以下ツヴァイ、ドライ、フィア、フェンフ、ゼクス、ズイーベンの七名である。基本的に精神生命体である為、はたから見ると影のように見えるのが特徴である。エミリアが幽霊のように見えたのはこの為であった。玲と親密に繋がっており玲から指示さ

れた様々な任務をこなす執事のような存在である。

リッター

リッターとは騎士を指す言葉では在るが、このリッターは玲がエミリアを守護させる為に創り出した特殊な存在である。輝く翼を持ち「天使」の様にも見えるのが特徴である。普段は翼をしまっておりかげひなた陰日向にエミリアを守るべく働く。三名存在しており、シエルエル、ライエル、ウイサウレルと言う。シエルエルが代表格でリーダー的万能型。ライエルが武闘派的直接攻撃型、ウイサウレルが魔術的支援特化型である。美男子執事の様でありお嬢様らしいエミリアには似合うものとも言える。

ログマウヤルⅡグラフエルト

サデイルウム帝国帝国軍大將軍。帝国軍での最高位の持ち主。但し、軍的实力で得た地位というよりは政治的謀略で得た側面が大きい。故に、彼の姿を見て人は「豚」と評する。汚い政治ゲームに明け暮れる帝国の暗部を代表するかの様な人物。ある意味可哀想な者とも言えるであろう。体格からも想像できるように戦闘能力はほぼ皆無、戦略能力も人いわく「豚」並みである。しかし、実権があるだけに有能な部下を使い、今のところは現在の地位を保持している様である。現年齢は53歳。

ライルⅡレミアルト

レミアルト王国第一王子。現年齢22歳。跡取りとしてしっかりした教育を受け、また本人も義務を理解しながら頑張っているしっকার者の王子様である。兄弟の仲は非常に良く、成人してから忙しい公務をする毎日である。身長180cm体重81kg黒い髪に黒い瞳を持つ好青年である。

シメオンⅡレミアルト

レミアルト王国第二王子。現年齢20歳。次男故に、言葉遣いは多少乱暴だが、非常に気が利くしっকার者。ライルと同じく成人してからは公務で忙しい日々を過ごしている。身長173cm体重76kg黒い髪に黒い瞳を持つ好青年である。

サイス ガイル ジェニー

レミアルト国軍兵士。お互いが知り合いで同部隊の仲間。サイスはやや心配性、ガイルは冷静沈着、ジェニーはやや直情的、どこかで見るとような三人構成である。

大精霊シャレニウム

レネアが「契約」している精霊。エルフは其の類まれな精霊力と魔

力により特定の精霊と契約を結び強力な力を借りる事がある。レネアは風の大精霊の一人シャレニウムと契約を結んでいた。大精霊は、通常の精霊魔法に対して絶対的な影響力を持ち、悉く無効化や強化をする事が自在に出来る。但し、自分に属する精霊力に対して、だが。第二十章では魔法が掛かった矢を防ぐ為に風による矢を防ぐ魔法防御幕を展開し矢を悉く防いだのであった。

## 人物設定    z w e i (後書き)

以上。第二回人物設定を終わります。

次は魔法や術式に関する設定について、くどくどしく解説を入れま  
す。

あたしの頭にある事が少しでも皆さんに分かって貰えたら嬉しいで  
すね。

それでは次もどうぞ。

## 魔法等法則や術式の設定集（前書き）

小説内における魔法や術式の設定集です。

特定の専門用語も出ますので、毎回解説するのは億劫な上によく忘れるので。

此処で纏めて解説させて貰います。

尚、情報が増えた場合は随時此処は更新して行きますね。

蘊蓄系なので別にいいや、と言う方は飛ばして下さいね。



## 魔法等法則や術式の設定集

小説 風の吹くままに

魔法等法則や術式の設定集

「時<sup>ゲート</sup>空門」

空間を跳躍して繋げる魔法技術。通常は、両方のゲートポイントに魔術師を滞在させ、様々な魔法触媒を使用して強力な魔術を元に空間を繋ぎあげて拡張、固定化する技術である。神<sup>し</sup>は単体で此れを行う事ができる。ミルも近距離であれば単体で行える。

「長距離魔法攻撃弾」  
エネルギーボールテージ

かなりの長距離を飛ばす事が出来る魔法のエネルギー弾。実行射程距離は5km以上。強力な遠距離攻撃手段だが、阻害する技術（後述）があるため此れ自体が使われる事は少ない。主に、魔法を使わない蛮族との戦いや野獣等、魔法に対して効果的な敵に対してのみ使う魔術である。

「対魔法用障壁」  
マジックエネルギーフィールド

純粹魔法エネルギーを同一のエネルギーにて中和する為のエネルギー

ーの壁。主に「エネルギーボルテージ長距離魔法攻撃弾」の防止に使われる。中近距離魔法に対しては効果が薄い為別の魔法防御手段が用いられる。大きな城等は常に術式結界にてこう言う魔法が掛けられている。故に城に直接「ゲート時空門」で侵入等と言う事は、これらの魔法の為にほぼ不可能である。

### 「リザレクション蘇生術」

強制蘇生術の一つ。肉体は魔法で再構成し、精神は魔法により補完、生命力も補充可能な部分まで魔力を変換し構成する、生命補完魔法。あくまで補完して蘇生するのが目的であり、完全に死亡して、肉体、精神、生命の三つの力のうちどれか一つが完全に失われたものに対しては効果が無い。故に、戦場で死に掛けている、または死んで間もない者に使用される魔法である。補完するだけなので、蘇生が終了しても本来の状態に為るまではかなりの時間を要するのがこの魔法の欠点と言えよう。

### 「トライザム三様之力」

リッターのシエルエルが使用した魔法。三種類の力（此れが何を意味するかは今現在是不明）を混ぜ合わせることなく敵中に放り込み着弾時に融合、驚異的な破壊力を生む攻撃魔法。人が使えるものではない。玲が創り出したリッターが扱えるもので、属性的には「神」の属性である。

「全精霊力解放」  
アンチエレメンタル

一定空間上にある精霊力、つまり元素に反応させてくれる精霊の力全てを無力化、中和する魔法。ファイアボール「火球」など精霊力に影響する魔法を悉く無力化する効果がある。全ての精霊力に効果がある為、精霊憑依や属性武器など、精霊力に関するものの全てが無効化されるという特徴がある。勿論敵味方は関係ない。

「魔力焼夷弾」  
マジックナパーム

読者の世界では第二次世界大戦より用いられたナパーム弾に似た魔法弾。一定範囲の空気を呼吸不可能なものに変化させる魔法弾である。非常に強力な効果があるが、手間と魔法触媒を多量に使う為、連発は出来ず、扱い方の難しい魔法の一つ。大部隊に撃ち込んで戦局を変えたりする場合に良く用いられる。

「魔法反射」  
マジックリフレクター

文字通り魔法を反射する魔法。攻撃魔法に対抗する最大の防御魔法である。非常に高位な魔法で使用できる術師は限られる。玲がアイン達ガイストに行わせたものは、其れを更に向上化させた特殊なもので、魔力フィールド内で増幅した後で相手に打ち返すと言う凶悪極まりない代物である。威力が数倍から十数倍に為って返るので喰らう方はたまったものではない。

## 「術式結界」

地面や空中等に魔法文字ルーンを書いておき、半自動的に魔法を発動させる特殊な「仕掛け」。発動する迄に魔法文字ルーンが消されたりすれば効果が失うが、一旦発動すれば基本的に効果は周囲から得られる魔力が尽きない限り、設定された期間持続する半永久魔法。勿論、長い期間効果を得る様にするには多大な手間と多くの魔法触媒が必要になることが多い。主に城等の重要物の守護、戦場における自軍を有利にし敵軍を不利にする為の手段、特定の対象に対する為の罠などに用いられる。魔法文字ルーンにも色々種類があり、主に使われているのは、一般的な一般魔法文字コモナルーン。一部の高等魔法研究に嗜んでいる者やエルフ等、元々魔法に長けた者が使っている高等魔法文字ハイレベルルーン、古代竜など人以外の超高等生物が使う竜言語エンシエントルーン、神の魔法言語とも言われる真言ゴツズスベル等がある。

## 魔法等法則や術式の設定集（後書き）

以上、長々と蘊蓄でした。

次回は戦争最終段階に入ります。

ストックが少なくなりましたので、戦争が終了した辺りで更新は遅くなると思います。

マツタリと読みながらお楽しみください。

## **K r i e g**（クリーク） 「戦争」 第三部（前書き）

戦闘は激しさを増しついに近接戦闘が始まる。  
其処では何が起きようとしているのか…。

## Krieg(クリーク) 「戦争」第三部

小説 風の吹くままに

第二十一章 Krieg<sup>クリーク</sup>「戦争」第三部

戦線の最前線はついに接触した。近接戦闘が開始されたのである。総勢約13万の人々がぶつかるのだ。凄まじい事に為りそうだったが、実際に全人数が当たるわけではない。もしそうなら総当たり戦のようにゲームは進み、恐らく数分で合戦は済むであろう。そんな都合のいい殴り合いは出来るはずが無い。実際は前線の一部の者が接触し戦い合うのが関の山で其の人数としてはお互いで千人もいかないう程だろう。

「えーっと…俺たちって確か最前線だったよな？」

サイスが確認するように言う。ガイルが呆れつつ答える。

「サイス、後でお前医療班に行つて来い。」

「いや、俺は正常だって。」

サイスはそう答えるが、別の場所から否定される。

「サイスは元からおかしいからねえ。」

「そりゃ無いぜジェニー。」

不満たらたらにサイスは答えるが、ものの見事に却下されたようだ。ガイルが其の様子を見ながら言った。

「まあ、サイスの気持ちは分からないでもないがな。一応俺たちは最前線に居るが、恐らく戦う機会は無いさ。」

そう、ガイルは目の前で行われている状況を見てそう言っていたのである。目の前では白銀の美しい髪をした少女、いや女性か、其れが敵兵士をぼこぼこに叩きのめしているのだ。しかも人数は見えるだけでも約五名。姿形は全く同じ、アーレフ王子の結婚式の時、上空で見たあの女性である。そう、神だった。神ズはここに、約五名が来ており、レミアルト軍最前列で敵兵士達を文字通りぼこぼこに叩きのめしていた。

「ほらほら、そんなんじゃないわよ？」

神がおちよくるように言う。それに激怒して一人の兵士が答えて言う。

「くっ、多少強いからと言ってこの全軍を相手に出来ると思うな！行くぞ！」

そう言って神に襲い掛かる。しかし、呆気なく其の兵士は吹き飛ばされてしまった。そして神が答えて言う。

「本当は其のつもりだったんだけどね。お節介が回って其処まで出来なくなったのよ。」

神は本音を言っていたのだが、帝国軍の兵士達には意味が分からなかったであろう。そうしている内にも帝国軍の兵士は、一人、また一人と薙ぎ倒されて行く。其処へレミアルト軍の隊長が一人、神に声を掛けた。



「神殿<sup>しの</sup>、ご助力感謝します。我々は如何にすれば良いでしょうか？」

状況判断として良い質問であった。何もせずぼうつとしてる訳にも行かないし、かといって神<sup>しの</sup>の中に割り込めば其れこそ自分たちまで殴り飛ばされかねないからだ。神<sup>しの</sup>は笑顔で其の隊長に答えた。

「こぼれた敵の掃討をお願い。あと、万が一敵を殺しても、また味方が死んでも、この合戦場全体にあたしが仕掛けた術式結界があるから皆復帰出来るので安心して戦って頂戴な。」

「はっ。その御指示、味方に伝達して参ります。そして御指示通りに！」

隊長ははつきりとそう述べてから、伝令に素早く伝え始める。神<sup>しの</sup>は其れを目に留めた後、再び敵兵士に攻撃を始めていた。

「よし！俺に掛かって来い！」

惺<sup>しずか</sup>はそう言って敵陣に飛び込み、敵兵士を一人叩き伏せていた。彼女の武器は今、長さ約2mほどの棍であった。木製であるがそれ故に軽く扱いやすい。乱戦時では非常に強い武器の一つである。そんな惺<sup>しずか</sup>の姿を見て敵兵士が三人ほど一斉に襲い掛かる。惺<sup>しずか</sup>は笑みを湛えつつ、棍を自在に振り回して、一秒もしないうちに三人の兵士を吹き飛ばしてしまった。そんな折、セレナが到着し、

「惺<sup>しずか</sup>！全く貴女は…。私も楽しみたいのですよ！」

そう言いつつ、手にした大剣を振り回していた。彼女の身体に対して非常に重く操り難そうに見えるのだがセレナは軽々と其れを振り回して敵兵士を纏めて薙ぎ倒しているのであった。苦笑しながら惺しずかが答える。

「セレナだって、十分楽しんでるじゃないか。さあ、行くぞ！」

「ええ！」

惺しずかの呼び掛けにセレナはそう答えて敵兵士の只中で暴れているのであった。ようやく到着した志郎が見て言う。

「やれやれ、うちの一家は自分達だけで戦争を終わらせるつもりかな。まあ、単に暴れたいだけか。」

「どちらも正しいと思う。」

ラミアアが其の問いに答えて言った。苦笑しつつ志郎が言う。

「確かにな。さて、俺たちも行くか。ラミアア、神しのは「光剣」を使って良いと言っていたから恐らく、合戦場自体に仕掛けがしてあるはずだ。思う存分暴れよう。」

「了解。」

ラミアアはそう答えると両手に「光剣」を出した。そして二人は敵陣に切り込んでいく。志郎は得意の武術で、ラミアアは華麗に「光剣」で切り裂きながら。

側面からの敵陣攻撃を命令されて移動し始めていた別働隊は恐るべき状況に立たされていた。自分達の部隊は約一万。そう、そんなに少ないはずが無いのだ。にも拘らず、今、自分達の前に居るたった十人の女性に文字通りぼこぼこにされている所であった。

「こ、こんな馬鹿な事があって良いのか…。」

別働隊を任されていた隊長がそう言っていた。無理も無い、たった十人に、しかも女性に一方的に一万人の大半が倒されている現状を認めると言うほうが難しいものだ。勿論、対峙した十人が「神」であると理解できれば少しは違ったかもしれないが。

「まあ、馬鹿な事よねえ。あたしがじきじきにあなた達を殴り倒すってのも。本当に馬鹿な事だわ。」

神は自嘲気味にそう言っていた。確かに、只、敵を滅ぼしつくすのであればそんな面倒な事はする必要は無い。極論的には、敵陣上空で神が強力な「力」を使うだけで事は済むからだ。しかし、目的は敵の殲滅ではない。そう、神の目的は「帝国の解体」だから。故に、自分の力を喧伝するような方法を使っているのだ。戦った兵士が後々再び神の姿を見れば神の存在に対して喧伝する役を担う事になるからだ。其の為にも、この兵士は一度殺したとしても復帰出来るように予め合戦場全体に仕掛けを満遍なく施していたのだから。ともあれ、左右に展開していた別働隊は二十名の神ズによって徹底的に殲滅されたのであった。そして殲滅された情報は本陣に届く事は無かった。

「ふむ、後もう一步と言うところだな。」

セイルが状況を見ながらそう言う。別働隊の様子は掴めなくなっている。本隊も次第に前線が下がって来ている。つまり、確実に我が軍は負けていると言う事だ、しかも一方的に。

「間も無くすれば来られる訳ですね、彼女が。」

セイルに答えるようにラーナがそう言った。セイルは其の答えに頷く。傍に居る豚ことグラフェルト將軍閣下は部下に対してあれやこれやと怒鳴り散らしていた。早々ここは終わるか。セイルはそう結論していた。

「いやあああつほおおお！やあつと俺様の出番だぜえええ！」

そう言いながら敵陣に殴りこんで暴れているのはリッターの一人ライエルであった。彼が鮮やかに光のごとく敵陣に切り込むと敵兵は十人以上ばたばたと倒れていくのであった。

「いやああああ。皆頼りないねえ。もおおおつと頑張ってくれないとすぐ終わるよおおお。」

軽い男の口調でそうライエルは言うが、行動其のものは超凄腕の戦士其のものである。そんな姿を見ながらシエルエルが言う。

「ライエルもあの口調を改めてくれれば良いのですが…。」  
「無理だろう。」

ウイサウレルがそう答える。苦笑しながらエミリアが言った。

「個性は仕方ありませんわ。でも、ライエルの強さは本物です。それで宜しいですわ。」

シエルエルとウイサウレルは頷く、彼らはエミリアを守護すべく傍に立っていた。そして三人はライエルの縦横無尽の活躍を眺めているのであった。

「アイン、全員で適当に兵士達の相手をしなさい。」

玲はそう命じる。アインは頷き、ガイスト達は個々が判断しながら敵陣に切り込んで行った。そう、死の災厄をもたらす影が。玲も全身に「闇」を纏いながら敵陣に歩いてゆく。

「さあ、何方からどなた「消え去り」たいのかしら？」

左目を血の様に赤く輝かしながら玲は冷笑を浮かべてそう言っていた。敵兵士はある者は其の姿を見て恐怖して逃げ出し、ある者は腰を落として動けなくなり、ある者は気が狂ったようになり、ある者は言われるがまま襲いかかり文字通り「消え去って」いった。玲はゆっくりと敵陣を歩きながら「恐怖」を撒き散らしていた。

「皆暴れてるわねえ。まあ無理も無いか、久々だし。もう少しで頃合ね。」

上空で様子を見ていた神しはそう言っていた。レミアルト軍は既に帝国軍の半数以上を壊滅させ、帝国軍の本陣三分の一までに食い込んでいた。半分辺りまで食い込めば恐らく敵の指揮官は逃げ算段を始めるであろう。その時こそが神しが行く機会だ。そう思っていた。

「さて、セイルの活躍はこれからよ。頑張つてね。」

聞こえる位置ではないが神しは空の上でそう言っていた。そう、ここからが本当の神の戦いである。今迄はあくまで前座に過ぎないのだ。

「くそ!どうなっているのだ。別働隊は何故来ない?連絡はまだ無いのか!」

グラフィェルトは側近に怒号で言う。しかし、答えはまだだ、の一点張りであった。無駄に出た腹が震える様に為りながらグラフィェルトは言った。

「不味い、不味いぞ。此の俣では私は無様に負けた指揮官となって

しまう。如何すれば良いのだ…。」

「良い方法はもう尽きたわよ。大將軍閣下。」

ふいに女性の声がした。グラフィエルトは驚きつつ其の声の方を見る。其処には美しい白銀の髪をした鮮やかな赤い瞳の女性が居た。そして言う。

「なんだと！どう言う事だ其れは。」

其の質問に女性は答えて言う。

「簡単な事よ。貴方はこの戦争で負けて、無様に負けた將軍、戦死した人として後世に語り継がれる。ただ其れだけの事よ。」

直接的に侮辱されてグラフィエルトは激怒しながら答えて言った。

「何だと！無礼な！私を帝国軍大將軍ログマウヤルⅡグラフィエルトなのだ。お前達のような下賤の者とは違う！そう、下級市民達などこの私の出世の餌に過ぎないのだから！そうだ、お前たちは餌なのだ！」

神は其の答えに凄まじい程の「力」を持って答えた。神の周りに凄まじいまでの輝きが起こり、周囲の者は目を開けられなくなってしまった。グラフィエルトは其の輝きをもちに見てしまった為、目を焼かれて叫びつつ蹲うずくまってしまう。神は蹲しったグラフィエルトの首を掴み、そして握りつぶし始めた。

「愚かな男ね。でも、簡単に殺すのは生ぬるいわ。皇帝陛下の目の前で惨殺してあげるわ。暫く其処に入っていないさい。」

神はそう言って自分が創り出した「牢」の中にグラフィエルトを放り込んだ。「力」を解きつつ神は周囲に聞こえる声で言う。

『私は杜神<sup>あかぬめ</sup>。帝国軍諸君に告げる。総大将ログマウヤルⅡグラフィエルトは私が捕獲した。此れにより帝国軍の敗退は確実である。無駄に死にたくなければ速やかに投降せよ。繰り返して言う。お前達は負けたのだ。速やかに投降せよ。』

そう言われて目の前で将軍が囚われているのを見た兵士達から投降の意思を表すものが出始めたのである。

「将軍が捕まるのを俺は見ただ！凄まじい光と一緒に！俺はこんな戦いで命を落としたくないぞ、投降する！」

「此の俘では無理だ、皆戦うのを止めよう。下手に死んでしまったら悲しむのは家族なんだ。」

「俺は、帰ってしなければ為らない事があるんだ、此処で死ぬわけには行かない！」

次第にそう言う声が広がっていく。小一時間もしないうちに帝国軍は完全に降伏の意思を示したのであった。セイルが近づいて言う。

「貴女が神殿<sup>しほ</sup>だったのか。お初にお目にかかる。私はセイルⅡグラフィエルト。サディルウム帝国帝国軍第三遊撃部隊隊長をしている。貴女の意味に従い帝都に対して「切り込み」たいのだがどのようにすべきかな？」

神は笑顔で答えて言う。

「ああ、貴方が。よろしくね、セイル。此れから「時空門<sup>ゲート</sup>」を開くからあたしと一緒に帝都中枢部まで案内をお願いしたいわ。」



「了解した。しかし、「時空門<sup>ゲート</sup>」と言われるが、向こうに其れに組する手のものが居るのか？」

セイルは尤もな質問をする。しかし、神は苦笑しながら答えて言う。

「要らないわよ。此れでもあたしは「神」ですからね。しかもそんなじよそ等の「神」とは比べ物に為らない、ね。」

「ああ、済まない、失念していた。こう、美しい女性だどうして外見から人と勘違いしやすくてな。」

苦笑しつつセイルが言った。神も苦笑しながら言う。

「そうよねえ。まあ、其れが普通よね。ま、其れは兎も角、行きましようか。」

「了解した。よし、我等、サデイルウム帝国帝国軍第三遊撃部隊は神殿を帝都中枢部に案内する。皆の者付いて来い！」

セイルの其の台詞に、サデイルウム帝国帝国軍第三遊撃部隊の面々ははつきりと肯定の返事をして神が開いた「時空門<sup>ゲート</sup>」に入っていくのであった。

帝都は、基本的に定期的な歩哨が歩き回っており、犯罪を犯すにしても其の歩哨をやり過ぎさなければならず、かなり大変なものであった。此処、帝都中枢部、サデイルウム城の城門前は城門は開けられていたが出入りする人員に対して厳し過ぎる程の検査が行われていた。そんな折、城門前にいきなり「時空門<sup>ゲート</sup>」が現れたのである。

その場に居る者は吃驚してしまっていた。そして「時空門<sup>ゲート</sup>」からは帝国軍が数多く出てきた。そして其の中の代表者らしき男が言う。

「私は、サデイルウム帝国帝国軍第三遊撃部隊隊長、セイルⅡグラハムだ。火急を要する件につき問答無用で此れから我々は皇帝陛下に御目通りさせて頂く。」

そう言って、部下に合図をする。其れにより部隊全員は一気に城内へとなだれ込み始めた。

「「切り込みのグラハム<sup>シャイレフォン</sup>」と言われてたらしいけれど、流石に素早いわね。」

神が一緒に走りながらセイルに言う。セイルは答えて言った。

「俺は此れしか得技が無いからな。」

「あら、謙遜ね。シェレーヌはあなたはもっと有能って評価してたわよ。勿論此のあたしもね。」

神は答えてそう言った。セイルは苦笑しながら言う。

「やれやれ、俺は相当高く買われそうだな。」

其の言葉を聞いて神は笑顔で答えていた。そうしている内に内門に近づく、門を守る兵に声を掛けながら部隊のメンバーが襲う。そうやって、邪魔な兵士を処理しながら部隊は城の中へと入っていった。

「さて、城内には入れたが皇帝がいる玉座は此処より上、五階の位置にある。一応最短で行けるとは思うが、万が一の場合には強行突破もありえるからお前達も覚悟しておけ。」

セイルは全員にそう述べる。部隊全員は頷きながら素早く行動に移していった。途中、歩哨や親衛隊兵に出会うが、部下が眠らせたり無力化させてセイル達は無事玉座の間迄来たのであった。感心しつつ神しのが言う。

「本当に、「切り込みシャイレフォンのグラハム」だったわ。あなたを引き込めて良かったわよ。」

「其れは嬉しい一言だな。では参るかな、神しの殿。」

セイルがそう答えて言う。神しのは其れに頷き、部下を残して二人は中に入った。

玉座にはヴェルザイライド十四世が何時ものように座っていた。傍にはランカスターがいる。しかし、其の玉座の間にはその他に誰も居なかった。皇帝は信用を置く者以外は傍に置かなかったのだ。そんな中に神しのとセイルは入ってきた。

「皇帝陛下、突然に失礼する。」

セイルはやや丁寧な言葉遣いで入り際にそう言った。神しのは無言で中に入る。二人が皇帝の前に来ると皇帝は口を開きこう言った。

「さて、突然に何用かな？ 本来そう言う入り方自体が出来ないはずだが。」

正論とも言える言い方でそう言った。それに神が答えて言う。

「まずは、負け犬の裁きでもお願いしましょうかね。」

そう言って神は「牢」の中に閉じ込めていたグラフィェルトを叩き出した。グラフィェルトは何度か咳き込んだ後辺りを見回して顔面が蒼白になった。そして言う。

「こ…皇帝陛下…わ、私はその…最善を尽くしたのですが…。」

そう言いかけていたが、無情にも皇帝はさっさと裁きを言い渡した。

「無能者に用は無い。役に立たぬのなら、死ぬが良い。」

冷酷にそう言い放つ。グラフィェルトは哀願しながら言った。

「お、御願いで御座います。ど、どうか御慈悲を…。私に御慈悲を御願ひ致します。」

其れは醜い光景だった。先ほどの戦場で神に暴虐な台詞を吐いた人間とは思えない状況だった。神が其れに答えて言う。

「貴方、さっきあたしに何て言ったかしら。今度は貴方がその「餌」になる番よ。まあ、あたしが手を下すんだから光栄に思いなさいな。」

そう言って神は「力」を使う。グラフィェルトは「力」により身体を縛りこまれ身動き出来ない状況になった。苦しみつっ言う。

「ど…どうか御慈悲…た、助け…………。」

其れを聞きながら神は、哀しげな声でやや叫びながら言う。

「馬鹿！自分が痛い目に遭わないと何故理解出来ないのよ！うんと苦しむがいいわ！」

そう言って「力」を更に使った。グラフェルトは「力」に取り込まれ其の俣「消えて」しまった。其の状況を見つつ皇帝が口を開き、こう言った。

「素晴らしい。お前が、レミアルト王国に現れたと言う「神」か？」  
それに答えて神が言う。

「そうね、杜神あかむしめと言うわ。さて、皇帝陛下。貴方の国家組織はあたしが頂くわ。結果的に貴方は死ななければ為らなくなるの。勿論、何故かは分かるわよね？」

「分からないのであれば、当に此の玉座を放棄して逃げているだろうさ。」

皇帝はそう答えた。神は其の答えを聞き続けて言った。

「為るほど、確かにそうかもね。では、宣告します。貴方は此れから此処で死にます。どういう死に方が良いかしら？希望を聞いてあげるわ。」

「ほう…私に選ばせてくれる。そう言うのか？」

皇帝は興味深そうにそう聞いた。神は答えて言う。

「ええ、貴方には特別にね。そもそもの最終責任は確かに貴方だけ

ど、貴方だけが悪い訳じゃないからね。さっきの豚のような奴も大勢いるでしょうから。」

神の言葉に、皇帝は笑い出した。暫く笑った後こう言う。

「此処まで公平に見るとはな。御主が行う支配は例え直接では無いとしても素晴らしい世界に為りそうだな。私も其処で生まれて居たかったよ。ああ、そうだな、少し贅沢な望みだが良いだろうか？」

「私に出来る事なら何でもやるわよ。」

神がそう答える。苦笑しつつ皇帝が言う。

「ではすまないが、神殿だったな。人である者が贅沢な望みを言わせて貰おう。御主の「本当の姿」を見たいのだ。宜しいかな？」

苦笑しながら神が答える。

「確かに、人としては贅沢ね。分かったわ。約束した以上お見せしましょう。セイル、すまないけど其処のご老人と一緒に此の部屋から出てもらえるかしら？ 本来人間はあたしの姿は見るものじゃないから。まあ、死にたいなら居てもいいけどね。」

そう言われてセイルは頷きつつ答えた。

「分かった、俺もまだ死にたくは無いからな。ランカスター殿ご同行願えるだろうか？」

ランカスターは頷きセイルは彼と一緒に部屋の外に出、扉を閉めた。神は其れを確認した後、皇帝に言った。

「さて、これで良いわね。ではお見せするわ。最期に為るからじつくりと見なさい。」

神はそう言って「力」を使い始める。肉体が次第に見えなくなり、一時的に何も居ない状態になった。その後、光が徐々に集まり始め人のような形を形作っていく。そして、其の光は非常に強くなり始めた。しかし其の光は眩しくなく見る事が出来た。そして、其の光の中、神が言う。

「さあ、見なさい。此れが貴方の見たかったものよ。」

そう言って、神は、彼に「本当の姿」を見せた。皇帝は玉座から立ち上がり言う。

「素晴らしい……「神」は確たる方だったのだ。私を含め人は愚かな者だ。此の様な素晴らしいものに気づけないとは。感謝する神殿……。本当に、かん……す……。」

光が無くなり神は元の姿に戻っていた。周囲には誰も居らず、神一人であった。眩きながら言う。

「彼も、もっと早く気づけば良かったのに……。」

そう言って神は其処を後にした。

合戦場では驚くべき事が起こっていた。地下に神が「仕掛けて」い

た術式結界が発動し合戦場全体を覆う巨大な魔法円が出現していた。

「何だ此れは?!」

兵士達がざわめく。レオンハルトは落ち着くように指示を出しながら、気づいてこう言った。

「なるほど、神しさんの仕業か。先ほど報告のあった奴だな。全軍及び帝国軍に伝令せよ! 此れは神しさんの術式結界によるものだ。此れにより死亡者を含め全ての兵士が復帰してくる。ここにいる者はな。この点を全ての兵士に知らせ、今は、全員休息を取る様に至急伝令せよ!」

伝令はすぐさま頷き、各地へ伝令を伝えに言って行った。

「早くも会戦は終了か。まあ、俺達も居たし神しが一杯居すぎたからな。当然の結果と言えば結果か。」

志郎はそう結論した。其の元に皆が集まってくる。ミルが言う。

「マスターは既に帝都のほうに行ってるみたいですねえ。あたし達も行きますか?」

「そうだな…まあ、帝都掌握に少し時間がかかるだろうし、ゆっくりでいいと思うぞ。レオンハルトもしばし休息を取ると言っていた様だしな。」



志郎はそう答えた。エミリアが言う。

「では早速お茶でも致しましょう。玲御姉様、御淹れ致しますわ。」  
そう言いながら、リッターに命じてお茶を用意させていた。苦笑しながら玲が答える。

「そうね、頂きましょうか。皆さんもゆっくり致しましょう。」

全員も頷き、其処で休憩が始まり団欒が始まった。

周囲では落ち着いたようにゆっくりと風がなびいていた。

## K r i e g (クリーク) 「戦争」第三部 (後書き)

合戦場での戦闘は終わった。

縦横無尽の神達しのの活躍によって。

其れからはどうなるのか…。

次回「Sta atシユタート「国家」」

新たに建国される神権国家、そして其の後神しのは如何行動するのか。  
貴方にも良い風が吹きますように…。

## **S t a t (シュタート) 「国家」 (前書き)**

会戦が終了した。

次に神は新たな国家を作成し始める。

其処から何が始まろうとするのか……

(今回から、場面及び時間変化時に状況を分かりやすくする為に  
) 表示で説明を加えてみました)

## S t a a t (シュタート) 「国家」

小説 風の吹くままに

### 第二十二章 S t a a t<sup>シュタート</sup> 「国家」

(サデイルウム城玉座の間の入り口付近で)

「ふむ、なるほどな。」

ランカスターはセイルから事の次第を聞きそう言っていた。セイルはやや驚きつつ言う。

「あまり驚かれないのだな、ランカスター殿。俺は、彼女が力を発揮した時「驚異」を感じたのだが。」

其れに対しやや苦笑しつつランカスターは答えて言った。

「まあ、立場上、「神」とは近い関係だったのでね。帝国に拉致される迄は一応神官として諸国を旅していたからな。」

其の答えに頷きつつセイルが答えて言う。

「なるほどな。グレイハワードがお前を嫌っていた理由が良く分かったよ、此れで。あいつはお前が物知りなのを嫌って居たんだな。」  
「まあ、そんな所かな。其れはそうと、恐らく陛下はこのまま帰ってはこないだろう彼女の「本当の姿」を見て無事では済むまい。此

れから如何する積もりだ?」

ランカスターは答えつつセイルにそう尋ねた。セイルは答えて言う。

「其れは俺が言う事じゃない、もう暫くすれば神殿しのかがこっちに戻つて来られるだろうから彼女に聞いた方が早いだろう。」

「なるほど、確かにそうだな。一応私は皇帝の最期を見届けた生き証人と為る訳だし、私にも役割が与えられそうだな。」

「ああ、今後もな。」

二人はそう会話をしていた。そんな折、二人の後ろ、つまり玉座の間に通じる扉が開く。そして其処から神しのかが出てきた。神は泣いていた。驚きつつセイルが言う。

「神殿しのか? 如何どう為されたのだ?」

涙を拭きつつ神しのかが答えて言う。

「ああ、御免なさいね。何でも無いわ。さて、次のステップに進みましょうか。あ、そうそう、ランカスターでしたっけ?」

神しのかにそう呼ばれてランカスターが答えて言う。

「あ、ああ。私がランカスターだが、何かな?」

「貴方が皇帝の最期に立ち会った帝国側の生き証人と為るから暫く付き合って欲しいのだけど良いかしら?」

神しのかがそう聞いてくる。ランカスターは笑みを湛えつつ答えて言った。

「其れに関しては問題ない。しかし、暫くで良いのかな？」

「如何言う事？」

「其方が良ければ、私は幾らでも付き合うが。」

要するに神の手を貸そうか？と言っている訳である。苦笑しつつ神が答えて言った。

「有り難い申し出ね。帝国内にはこんな人が沢山要るのかしら？」

「恐らく沢山な。逆に、利益が無くなると踏んで不平を述べる者も沢山居るだろう。其の点に関しては如何するのかな。」

ランカスターの質問に神は悪戯小僧のように微笑みながら答えて言う。

「簡単な事よ。先の会戦の帝国軍兵士が戻ってきたら、あたしの言葉に皆震え上がるから一月程猶予を与えて、選択させるだけよ。此処に留まるか、適当な財産を持って逃げるか、ね。」

そう、神は其の為に先の会戦で帝国兵をわざわざ生かしておいたのだ。つまり、神にコテンパンにされた事を先の会戦に出た兵士達が帝都で宣伝する事に為る。其処に神が帝国崩壊と其れに伴い神に服従するかの選択を迫るという事なのだ。帝都に居座る為には神の方針に従わねばならずグラフェルトのような事をすれば如何為るかには彼自身が既に証明している。そして其の報告は兵士達によって為されるのだ。つまり、今までの不正や悪事を行うなら此処には居られないと。神はそう警告している訳である。

「成程な…此の会戦自体が帝国崩壊のシナリオに組み込まれていたという事か。」

セイルが感心しつつそう言った。神は其の言い分に頷いて肯定する。そして言う。

「さつき、志郎達、ってああ、あたしの旦那達だけど連絡したから帝国軍兵士を連れてこっちに來ると思うわ。レミアルト王国軍の方は帰っていくと思うしね。と言う訳で、セイル、此れからが貴方の腕の見せ所よ。」

「出来るだけ、味方は多く、敵は少なく、だな。」

ニヤリとしつつセイルがそう答える。神はその答えに満足しつつ笑顔を返した。セイルは続けて部下達に向いて言う。

「話は聞こえたな？ 今から俺達の任務が発せられた。先ずは城内から味方を増やすべく行動を開始する。ジェネット、お前は単独で説得に当たれ。後のメンバーは基本的に俺に付いて来い。状況に応じて俺が指示を下す。行くぞ！」

セイルはそう言い終えると素早く行動を開始した。部下達もそれに合わせてすぐさま移動する。其れを感心しつつ神は見ながらこう言った。

「流石「切り込みのグラハム」よね。素早い行動だわ。」

「そうだな、処で神殿。ご主人達が参られるまで如何為さるかな？」

ランカスターがそう聞いてくる。神が答えて言った。

「そうね、少し時間があるし、貴方と暫くお話ししましょうか。」

そう言って、その場に座り込んだ。

(ほぼ同じ頃、レウネキアス丘陵の合戦場にて)

「成程、分かった。」

志郎がそう言う。そして、レオンハルトに向いてこう言った。

「神<sup>しの</sup>から連絡が来た。皇帝は崩御したそうだ。此れから俺達は帝国兵と共に帝都に向かう。」

それに答えてレオンハルトが言った。

「そうか、予<sup>かね</sup>てよりの計画通りだな、流石は神<sup>しの</sup>殿だ。分かった。俺は本国に戻り国王に報告する。またな、志郎。神<sup>しの</sup>さんに宜しく。」

「ああ。お前も頑張れよ、色々な意味で。」

志郎が冗談交じりにそう言う。レオンハルトの周囲に居た兵士達から笑いが起こった。レオンハルトは顔を赤くしながら言う。

「な！お前！何時其れを知った？！」

それに苦笑しながら志郎が答える。

「あれだけ兵士達が噂してるんだ。知らない方がある意味天然だと思っぞ？」



「くそっ……今度は俺が言われる番か……でも、まあいいか。」

やや、諦め気味にレオンハルトはそう言っていた。志郎はレオンハルトに別れの手を挙げながら帝都のほうに向きを変え進み始めた。志郎の動きに気づき、慍<sup>しずか</sup>達が近づいてくる。

「父上、そろそろ移動か？」

慍<sup>しずか</sup>がそう尋ねる。志郎は答えて言った。

「ああ、神<sup>しの</sup>から連絡があった。帝都に帝国軍兵士を連れて来い、だそうだ。ミル、「時空門<sup>ゲート</sup>」を御願い出来るか？」

「はい。此の程度の距離なら何とか。ああ……えーと……ウイサウレルさんでしたっけ。済みませんが増幅サポートを御願いしたいのですが。」

志郎にミルが答えつつミルはウイサウレルに頼みながらそう言った。ウイサウレルは答えて言う。

「了解した。「時空門<sup>ゲート</sup>」の補助で良いのだな。」

「はい。兵士さんも連れて行かないといけないので、大きいのが必要なのですがあたしではちょっと自信が無いので。」

「分かった、存分にやってくれ。」

ウイサウレルはそう答えて「力」を展開しミルのサポートに付いた。ミルは其れを確認してから言う。

「では開きますね。帝国軍の方には伝えて下さいね。」

そうしてからミルは「時空門<sup>ゲート</sup>」を展開し始めた。暫くして其れは

巨大な光の門として完全に出現した。

「よし、では行こうか。帝国軍の皆さんも俺達に付いて来てくれ。」

志郎はそう言った。そうして、志郎一行と帝国軍兵士は全員「時<sup>ゲ</sup>空門<sup>ト</sup>」に入っていたのだった。

（帝都内のある酒場で）

シェレーヌは老婆の状態から何時もの美女の姿に戻り、酒場で話していた。

「其の話は本当なのか？だとすれば、俺も手伝いたいが…。」

そう言っているのはアイランズである。帝国が崩壊するという情報<sup>レ</sup>が舞い込んだのだ。疑問に思いつつも興味がある。シェレーヌが其れに答えて言う。

「まあ、信じられないのが普通さね。もう少しすれば、あたしたち全員に聞こえる「声」で宣誓がされるだろうさ。現帝国は崩壊し新国家が樹立する、其れに従いたくない者は速やかに立ち去れ、とね。」

其の情報に興味を示しつつレミーナが言う。

「いいねえ、帝国だった時は文字通りやばい仕事しか碌ろくに無かったけれど、役人とかが刷新されるなら期待出来るかもねえ。」

「まあ、そうだな、先ずはその「声」を待つとするか…。」

アイランズはそう言いながら手にしていた酒を飲んでいた。シェレーヌは関心を示す其の二人を微笑みながら見ていた。

（帝都、そして視点は城へ移っていく）

帝都にレミアルト国軍と戦った兵士達が帰ってきた。其の報告は帝都に広がった。しかし、それだけでなく驚異的な情報も縦横無尽に広がった。帝国軍は一度、数十人の存在により完膚なきまでに叩きのめされ壊滅したのだと。しかも、大將軍グラフエルトは敗北を皇帝に報告して死を賜ったと。其の原因と為った人物は「杜神あかまめ」、そう言うのだと。シェレーヌが仕掛けた事もあるが帝国兵達により瞬く間に広がっていった。何せ、約九万近いメッセンジャーが宣伝するのである。其の宣伝速度は凄まじいものであった。二日もたたない内に帝都全体に動揺が広がった。同時にセイル達は城内をほぼ掌握。同意しない人物は一時的に牢に放り込みセイル達は玉座に居る神しのの前に居た。

「よくやったわセイル。」「切り込みのグラハム」の名に恥じない行動、とくと拝見しました。此れから行う宣誓の後で、貴方達のこと  
は決めるわ。」

神しのが玉座に座りながらそう言う。セイルは答えて言った。

「いや、俺も部下の事を思ってたまでの事。仕事をこなしただけだ。大した事をした訳ではない。」

其の答えに満足しつつ神しのが言う。

「そう、今度の国家にはそう言う者が頂点に近い場所に立つべきなのよ。まあ、裁定は後で言います。先ずは宣誓のほうね。玲、サポートをお願いね。」

神しのにそう言われて近くに立つ玲が答えて言う。

「分かりました母上。何時でもどうぞ。」

其れを聞き届けてから神しのは全帝都に向けて話し始めた。

『あたしは杜神あかなほめ。サディルウム帝国皇帝ヴェルザイライド十四世はあたしの前で崩御した。証人はランカスター殿である。故にあたしは此の帝国を掌握した。此処にサディルウム帝国解体を宣言する。今後、あたしが任命する国王を基にした神権国家「ザードⅡフェリティア」を設立する。其処では、今までのような帝国で行われていた不正、悪事は一切容認しない。万が一そう言う者を見つけた折には極刑を以もって処罰するであろう。故に、諸君らに一月の猶予を与える。新国家に追従するのであれば城に赴き所定の手続きにそって住民として登録するが良い。些かの負担がある代わりに相応しい保護を授けよう。もし登録しなくても此処に留まるのであれば法は遵じゆん守しゅされるべきである。何故ならその様な者は外人居留者であるからだ。勿論ある程度の保護は得られるであろう。法を守るのが嫌いな者、また、今までの悪徳から抜け出せない者は至急、荷物を纏めてこの都市から出るが良い。もし居座るなら相応しい報いを授ける。以上、あたし、杜神あかなほめが自分の名を持って宣誓する。此れが聞こえた

者は皆心せよ。守らねば、次に失うのは己の命だ!』

厳しい口調で神はそう言った。その後、一息吐きながら言う。

「さて、国王を創らないとね。」

そう言って神は「力」を使い始めた。其れにより神は輝き始める。セイル達は見ることが出来ず目を覆った。輝きが収まって見ると其処には一人の女性が立っていた。光沢のある緑髪で背も高く非常に美しい女性だった。

「さて、永目覚めなさい。」

神はそう言う。永と呼ばれた女性は目を覚まし答えてこう言った。

「お早う御座います。神様。」

「此れから此の国を貴方が治めて貰うわ。」

神がそう言う。永が答えて言う。

「畏まりました。私の全てを持って神様の期待にお答え致します。」  
「御願いね。あ、そうそう、少しだけ此処の任命をあたしにさせてね。」

神がそう言う。永は答えて言う。

「自由どうぞ。」

其の答えに苦笑しつつ、神は言う。

「ライル、貴方を此の国の大將軍に据えます。ラーナは其の補佐に。そして、貴方達部下全員は最低2〜3階級特進、細かい昇進内容はセイルとラーナで決めて頂戴。そして此の部下達は貴方の直属として置く事。いいわね。」

きつく言われて、セイルはつい、

「承知した。」

と言ってしまふ。此れでセイルの将来は決まってしまった。神しのは続けて言う。

「ランカスター。貴方は永はるかの補佐として立ち会って欲しいわ。先日の皇帝と同じ様にね。勿論永はるかはおかしな事はしないけれど、此の子も「神」だから「人」としての助言を貴方からお願いしたいわ。」

そう言われてランカスターは頷きつつ答えた。

「分かりました。そう言うご依頼であれば引き受けましょう。非才な身ですがご助言役受けさせて頂く。」

其の答えに満足しつつ神しのは次に言う。

「次はラミユア。貴方は此処に残り、此れからデイルサイヴを呼ぶから一緒に住んで彼の研究を手伝いなさい。緊急時には永はるかが呼ぶときがあるかも知れないけれどその時は手伝ってあげて。」

それに答えてラミユアが言う。

「分かった。有難うマスター。」

其の答えに神は微笑んだ。

「まあ、こんな所かしらね。デイルサイヴはこの後呼ぶ事にしてつと。後は、永、御願いするわ。細かい事はランカスターやセイルと相談しながら御願いね。」

神がそう言う。永は答えて言った。

「畏まりました。ご命令忠実に果たして御覧に入れます。」  
「御願いね。」

神は微笑みつつそう言った。そして玉座から立ち上がり、永に席を譲る、その後神は言った。

「さて、ここ、ザードーフエリティアは此れでいいけど、帝国に主従していた各都市は素直には従わないでしょうからあたし達は其の対策からかしらね。」

それに答えて志郎が言う。

「つまり、向こうに出向いてって事か？」

「ええ、まあ、あちらが態度を決めてからだけだね。大半は日和見でしょうけれど、もし、敵対する者があれば徹底的に叩き潰すわ。」

神がそう言った。全員は其れに頷く。更に神が続けて小声で言った。

「でないと、彼が可哀想なもの…。」

志郎は其れが聞こえたが無言で神の肩を抱いたのであった。そうして、新国家「ザードⅡフェリティア」は誕生する事に為った。

(城内の廊下にて)

「あゝあゝ承知なんてするんじゃないかな…。」

廊下を歩きつつセイルはぼやいてそう言っていた。一緒に歩きつつラーナが苦笑しながら言う。

「セイル様…あそこで承知した以上、諦めざるを得ないでしょう…。」

「と言うか。あの状況に流石のセイル殿も呆気にとられていたと言う事かな？」

ローギュンターはセイルに対してそう言った。セイルは苦笑しながら言う。

「まあ、そんな所さ。神殿が「神」と言うのは分かっていた。しかしだ。目の前で我等の「国王」が創られる場面を目撃したのだ。驚かない方が如何かしてるがな。」

「確かに其れは言えます。ですが、引き受けた以上我々も最善を尽くして参りましょう。我等も直属として任命された身。此れからもセイル殿に誠心誠意仕えさせて頂きます。」



ジェネットがそう言う。苦笑しつつセイルが答えて言った。

「結果としてお前達を巻き込んだな。済まないが、此れからも宜しく頼む。」

其の言葉に、セイルの部下全員が敬礼して答えた。

（暫く経った城内のある部屋で）

「デイルサイヴ！」

そう言ってラミアはデイルサイヴに抱きつく。デイルサイヴは驚きつつラミアを抱いた。そして言う。

「元気だったか？」

「ああ、私は平気だ。デイルサイヴこそ大丈夫なのか？」

「わたしは神殿に助けられてから元気其のものだよ。」

「此れからは、私もデイルサイヴの研究を手伝えるのだ。」

「ああ、神殿（しよ）から話を聞いた。荷物も後日こちらに来る。そうすればお前にも手伝ってもらおう。」

「分かった、私も頑張る。」

「頼りにしてるぞ。」

二人はそう言ってしっかりと抱き合った。其の姿を志郎と二人で神（しよ）は見ていた。そして言う。

「やはり、あの二人は一緒のほうが良いよね。」  
「そうだな。お互いが心の拠り所なんだろうな。」

志郎がそう答える。神は志郎に振り向きつつ言う。

「あたしは貴方なんだからね。何時までも一緒よ。」  
「ああ！勿論だ。放しはしないさ。」

そう言って志郎は強く神を抱きしめた。神は其れを幸せに感じていた。

（其れから更に時間が経ち、神一行が部屋に集まっている時に）

「グラニデウスに会いたい？」

神は玲にそう聞いていた。玲は頷きながら答えて言った。

「はい。私もお父様にお会いして少しお話がして見たいのです。志郎様とお話した折、このザードIIフェリティアが誕生して母上が少し暇に為った時なら行けるだろうと助言を頂きましたので。」

玲にそう言われて神は志郎のほうをキツと見つめた。志郎は惚けたように視線を逸らす。ため息を一つ出しながら神が答えて言う。

「分かったわ。彼も会いたいと言っていたしね。但し、ひとつだけ言っておくわ。玲、貴女の「融合した力」はまだ彼に見せないように。」

「はい。分かりました。ですが何故でしょうか？」

玲が疑問に思いそう尋ねる。神は答えて言う。

「玲に施したこの方法は恐らく今まで誰も考えなかった事なの。と言う事は、グラニデウスも言っていたけど私達に關心を示して私達を見ている者は沢山いるって事。其の者の中には玲の「融合した力」を個人的利益に使えるものと考えて自分の為に使うものが必ず現れるわ。何せ、グラニデウスはいい人だけど魔族は全てそんな存在では無いからね。」

其の答えに納得しつつ玲は答えて言った。

「なるほど、良く分かりました。母上は、父上をいい人と見られているんですね。」

そう言われて、神は顔を赤くしながら答えて言った。

「な…そんな所は覚えなくていいの！ったく、どうして私が係わった者はこうもお節介なのかしら…。」

「言わなきゃいけないか？」

志郎が神にそう言う。神は顔を真っ赤にしつつ答えて言った。

「要らないわよ！」

其の答えに聞いていた全員が苦笑していた。神は「力」を使い「

時空門<sup>ゲート</sup>」を開き始める。そして言った。

「では、とりあえずグラニデウスの所に皆で行きましょうか。」

それに皆は頷き、全員で「時空門<sup>ゲート</sup>」に入って行った。

外では静かにそよ風がなびいているのであった。

## S t a a t (シュタート) 「国家」 (後書き)

神権国家を設立させ、また一つ事を果たした神。<sup>しの</sup>

彼女達はグラニデウスに会おうとしていた。

其処では何が? ……

次回「H<sup>ヘレ</sup>o<sup>ウン</sup>l<sup>ント</sup>e u<sup>ヒメ</sup>nd h<sup>メル</sup>i m m e l 「地獄と天国」」

貴方にも良い風が吹きますように。

(次回から原稿のストックが切れた為に更新が大幅に遅れます。マッタリと御待ち下さい。)

神<sup>し</sup> 「あら？此処は前書きじゃない。」

作者 「うん、今回から此処にも出演して貰おうと。」

神<sup>し</sup> 「いったい何の魂胆かしら？」

作者 「あゝ……。話の展開に詰まって執筆が遅々としてるからその気まぐれに……。とか。」

神<sup>し</sup> 「どうせそんな事だろうと思ったわよ！旅をするだけなのに如何してそう為るのかしら？」

作者 「いや、だけってのが逆にネックに為るのよね。派手なイベント囃ますと其れは其れで問題があるし…。かと言って普段通りだといちやつくシーンしか描けないしなあ……。」

神<sup>し</sup> 「あ、あたしは、いちやつくだけでも良いんだけど？」

作者 「じゃあ、今の事件が終わったら考えておく……。」

神<sup>し</sup> 「えらく、沈んでるわね……。」

作者 「月末が近くて体調が悪くてね……。」

神<sup>し</sup> 「あゝ……。其れはご愁傷様……。」

作者 「あ…ではお楽しみ下さい…。」

**H? l l e (へレ)      u n d (ウント)      h i m m e l (ヒメル)      「地獄と天国」**

小説 風の吹くままに

第二十三章 H? l l e      u n d      h i m m e l 「地獄と天国」  
ヘレ      ウント      ヒメル

(一行は「時空門」<sup>ゲート</sup>を抜けて「魔界」に入る)

神達<sup>しの</sup>は「時空門」<sup>ゲート</sup>を抜けてきた。

「ほう。此処が「魔界」か。」

辺りを見ながら志郎がそう言う。人だとまず行かない場所、其処に自分が居る。そう言う感慨に浸るように、そう言っていた。

「あまり、我々の世界と変わらないような気がしますわね。」

セレナが周囲を見渡しながらそう言う。実際辺りには木々があったり、動植物が居たりと、知らないものばかりとはいえ、同じ感覚に感じたのだ。神<sup>しの</sup>が答えて言う。

「まあ、世界そのものは基本的に似てるかもね。根本的に違うのは、主要種族が此処では魔族って事。そして、魔族の基本形態は精神生命体だと言う事かしらね。」

『最大の違いは、地上世界と異なり、此処の属性は「闇」と言う事だな。』

一同に割り込むように声が聞こえてきた。全員が其の声の方向へ振り向く。其処には、無駄の無い筋肉が付いた美しい男性が立っていた。其の姿を見て神しんが言う。

「お久しぶり、グラニデウス。」

「今日は、えらく大勢で来たのだな。何か起きたのか？」

グラニデウスがそう聞く。苦笑しつつ神しんが答えた。

「いいえ。そうじゃないの。向こうでのごたごたが一段落したから、玲を貴方に会わせようって話に為ってね。」

「あきら？」

意図が分からずにグラニデウスがそう聞く。神しんが苦笑しながら補充して説明する。

「ああ、ごめんなさい。此の子よ。あたしと貴方の子供。玲と言うの。」

そう言って神しんは玲をグラニデウスに紹介した。玲はグラニデウスの前に出て挨拶をする。

「初めまして、父上。杜玲あかなしと申しますわ。」

グラニデウスはじつくりと玲を眺めていた。しばし時間が経った後に口を開きこう言った。

「素晴らしい。神しん、お前に「力」を渡して正解だったな。此の娘こには、「地獄と天国」がある。」



其の言い方に、神は微笑みながら答えた。

「流石ね、グラニデウス。いい比喻だわ。」

「どういうことだ？」

志郎は良く分からずに神に聞く。神は苦笑しつつ説明した。

「闇と光の力、つまり、魔族と神の力が、共存している、彼はそう言いたいのだよ。」

「ああ…。」

志郎はそう言われて得心しつつそう言った。惺がグラニデウスに近づいて言う。

「お初にお目にかかる、グラニデウス叔父上。つかぬ事を尋ねるが其の御身体は御自分で身に付けられた物なのか？」

グラニデウスの身体に興味津々に惺はそう尋ねた。其れに対し、グラニデウスは答えてこう言った。

「ああ、此れか。此れは、私が無理やり地上に召喚された際に、神が、分かりやすいからと言う理由で与えてくれた身体だ。」

「なるほど、此れは母上からの贈り物だったのだな。非常に素敵だと思う。」

素直に惺はそう言った。其の答えに微笑みつつグラニデウスが言う。

「そうだな、私も気に入っているのだ。さて、玲よ。私に何か言う事があるのかな？」

そう、玲にグラニデウスは話しかけた。玲は答えて言う。

「そうですね。出来れば父上と二人だけでお話がしたいのですが。」

神は其の意図を悟り、こう言った。

「分かったわ。じゃあ、皆、二人だけ残して一旦帰りましょうか。玲、後で迎えに来るわね。」

神はそう言って、他の皆を促しながら「時空間<sup>ゲート</sup>」に入っていった。其れを見つつグラニデウスが言う。

「神は何時もあんな感じなのか？」

「そうですね。母上は優しすぎると思いますわ。」

玲は素直にそう答えた。苦笑しながらグラニデウスが言う。

「まあ、其処があいつの良い所でもある。それに、玲、お前もそんな母だからこそ慕うのだろう？」

そう問われて、玲もくすりと笑いながら答えた。

「まあ、父上はお見通しですのね。確かに其の通りですわね。処で父上。父上は母上とはいっしょに行動は為さらないのですか？」

其の質問にグラニデウスは苦笑しつつ答えた。

「そうだな…神に呼ばれば考えるかもしれないが…一応私も「魔神」なのでな…。そう、ここから離れるわけにも行かないのだ。」

玲は少し気落ちしながら、

「そうですか…。」

と、そう答えた。そんな玲を見ながら微笑むようにグラニデウスが言う。

「まあ、私はすぐにお前達と、どうこうは出来ないが、そうだな、お前の助けと為る様に、もう少し私の「力」を与えましょう。」

玲は其の言葉を聞いて、喜びつつ答えた。こう言う。

「有難う御座います、父上。今はまだ私の「力」は御見せ出来ませんがいずれ御見せ出来る時がありますわ。」

其の言葉に喜びつつグラニデウスは答えて言う。

「其れは楽しみにしておこう。H<sup>ヘレ</sup>? l l e u<sup>ウント</sup> n d h i m m e l<sup>ヒメル</sup>  
此の言葉がお前の力となる。心に置いておけ。」

そしてグラニデウスは玲に「力」を与える為に「力」を使い始めた。其れを見つつ玲は答えて言った。

「分かりました。父上の言葉は間違いなく私の心の中に。私、父上を父上と呼ばせて頂ける事に誇りを感じますわ。」

其れを聞きながらグラニデウスは「力」を玲に手渡した。そんな折、神がやってくる。

「お邪魔だったかしら？」

「いや、大丈夫だ。」

神の問いにグラニデウスがそう答える。微笑みつつ神が玲に言う。

「父親との話は楽しめたのかな？」

「はい。ますます私自身に誇りが持てる様に為りました。」

玲は自信を持ってはつきりとそう言った。抱き寄せながら神が言う。

「良かったわね。少しの間またお別れに為るけれど今日は此れで帰りましょうか。」

「分かりました。では、父上、また会いに参ります。」

玲は神に返事をしつつ、グラニデウスにそう言った。グラニデウスは微笑みつつ答えて言った。

「また、いつでも来るがよい。離れてはいるが私は何時でもお前達を見ている。」

「有難う、グラニデウス。では、また会いましょう。」

神はそう言って別れを告げた。其の姿を見届けつつグラニデウスはこう言った。

「やはり、偶然とはいえ、「神」同士での出会いは、良いものだと言えるのかもしれないな。」

出会えた偶然と、その後の素晴らしい結果、そして先の希望を見つつ、グラニデウスは笑みを湛えていた。

（「時空門<sup>ゲート</sup>」の中、神と玲が歩きながら）

「で、どうだったの？」

「時空門<sup>ゲート</sup>」の途中で神は玲にそう聞いていた。玲が答えて言う。

「はい。父上から素晴らしい言葉を頂きました。」

其の言葉に神は微笑みつつ、

「多分其れが、玲の「力」の鍵になるわ。貴女の「力」を使う時には、グラニデウスの事と、其の言葉を忘れないようにね。」

「はい。分かりました、母上。」

強く頷きつつ、玲は神にそう答えていた。そうして二人は元の場合に戻ろうとしていた。

（ほぼ同じ頃、ザードⅡフェリティア城のある一室で）

「ふう……。」

それとなく志郎は溜息を吐いていた。其の様子を見ながら惺しずかが言う。

「父上、如何したのだ？」

其の言葉にやや苦笑しながら志郎が答える。

「ああ……なんか、神しが選んでくれているとはいえ、グラニデウスのような立派な存在を見ると俺はかなりちっぽけだな、そう思えてな。」

其の言い分をしばらく惺しずかは考えていたが志郎の方に向きながら言う。

「父上の言いたい事も分かる、俺も玲のような「力」を扱いたいと思う時もある、だが……。」

「ん？どうした？」

志郎は聞きたい素振りを見せて惺しずかに、話すように促す。惺しずかは意を決して言い始めた。

「父上には誰にも無い物がある。それは、母上の絶対的な信頼を勝ち得られていると言うものだ。其れは、どんな「力」よりも素晴らしい物ではないだろうか。」

其の言葉に、志郎は暫くじつくりと自分自身に噛み締める様に聞いていた。そして頷きながら答えてこう言う。

「そうだな：神は、俺を選んでくれた。其れは何物にも換えられない俺だけの物だな。確かに、どんな「力」よりも良い物だ。有難う<sup>しずか</sup>、お前に気づかせてもらうだなんて、俺も父親としてもっと励まないといけないな。」

そう言つて苦笑した。そんな折、神達<sup>しの</sup>が帰還する。

「ただいま。あら、如何したのしんみりしちゃって。悩み事？」

帰つて、開口一番神は<sup>しの</sup>そう言っていた。そんな神を見て志郎は苦笑しつつこつこつ言つた。

「いや、俺はお前が大好きだなつて話してたのさ。」

そう言われて、神は<sup>しの</sup>顔を赤くしつつこつこつ答えた。

「な：何よいきなり：そんなの当たり前じゃない！貴方は、あたしだけを見るんだからね！」

其の可愛い仕草に志郎は苦笑しつつも幸せを感じていた。

（其れから暫しの時間がたった神達<sup>しの</sup>一行がいる部屋で）

ザードIIフェリティア城内の一室で神達<sup>しの</sup>一行は集まっていた。今後の事を話し合うためである。当面の大きな問題は回避できた為、

本来の神しの旅、つまり、ぶらり旅へ戻ろうかと言う提案であつた。

「然さして懸案が無いのであれば問題は無いのではないのでしょうか。」

玲がそう述べた。誰も反論が無い様なので神しが其れに答えて言った。

「じゃあ、旅に戻るとして。当面は何処に向かうかよね。行きたい場所とかある？」

そう言われて一同は暫く悩む。志郎は兎も角、殆どが他国に行つた事すらない面々である。迷うのも当然であつた。そんな中、志郎が言う。

「皆、そうだな、レネア以外は恐らくあまり外国とかは行つてないだろうし決めるのは難しいのではないかな？」

そう言われて神しは苦笑しながら答えてこう言つた。

「まあ、そうかもねえ。今まではアーレフが居たけど、今は旅に慣れたのは志郎とレネア位だもんね。なら、如何しましょうかねえ。」

そんな風に、悩んでいる所に、部屋に入ってくる人物が居た。

「おやおや。皆で悩み事かい？御姐さんが相談に乗ろうか？」

入り様にそう言ってきたのはシェレーヌであつた。今は美女の姿で居る。彼女を見て神しは答えてこう言つた。

「あら、良い所に來たわね。シェレーヌ相談があるんだけど。」



「おやおや、神しのさんの相談とあれば、いつでも引き受けるよ。で、なんだい？」

そう言いつつ、シェレーヌは一行の中に混ざっていった。神しのは今までの経緯を話し始めた。

(ザードⅡフェリティアの玉座の間にて)

「神しの殿は旅立たれるのですか。」

玉座の傍でランカスターはそう言っていた。永はるかが答えて言う。

「ええ、とりあえずここは、私に任せるとの事です。まあ、神しの様の事です。旅立った先でも色々事を為されるでしょう。」

笑みを湛えつつ永はるかはそう言った。そう言いながらも、自分の前にある新国家に対する様々な書類群を手際良く捌いているのであった。其の様子を見つつ、ランカスターが言う。

「しかし、永はるか様が其処まで優れておられますと、私共が何かを言うほどの事でもない様に思われますが…。」

それに答えて永はるかはこう言った。

「別に私の替わりや代理をする為に貴方を据えた訳ではありません

よ、神様<sup>しの</sup>は。あのお方は優しいのです。私が一人では寂しいと思われたので傍に居て安心できる者として選ばれたのですよ。そう言う意味ではランカスター、貴方はもっと誇りに思ふべきです。」

そう言われ、ランカスターは恭しく一礼をした。永<sup>はるか</sup>は黙々と書類を捌いているのであった。

(ザードⅡフェリティア城大將軍執務室にて)

「そうか、旅立たれるか。早い出立だが、希望であれば仕方が無いな。」

神<sup>しの</sup>に旅立つ事を伝えられ、セイルはそう言っていた。此処は大將軍の執務室、今はセイルの仕事部屋である。神<sup>しの</sup>は其処に来ていたのであった。

「で、まあ、お節介なんだけどね。」

悪戯小僧のように微笑みながら神<sup>しの</sup>がそう言う。少し、やばい状況かも、とセイルは感じていた。続けて神<sup>しの</sup>が言う。

「貴方とラーナさんをくっつけたくて此処に来ちゃったって訳。」  
「はあ?!」

セイルとラーナは二人してそう言った。その後二人は顔を赤くし

ながら答えて言う。

「いや、いきなりそう言われても俺はだな……」

「ちょ、ちよっと神様、私、心の準備が……」

そんな二人の様子を見て、神はうんうんと納得しながら見ていた。そして暫くしてからこう言う。

「つまり、オツケーて事よねえ？」

押しの強い、ドスが利いた口調で神はそう言った。セイルはやれやれと両手を広げつつ言う。

「先日、レミアルト国王から書簡が来て「神殿はお節介だから。」と口添えがあったが……。こう言う事だったのか。」

セイルにそう言われて、今度は神が逆に赤くなりながらこう言った。

「んな！ ったく……あの人も、人の楽しみの揚げ足取らなくてもいいのに……」

そんな神を見てラーナはくすりと笑っていた。神は二人を見ながら言う。

「こんな感じなら、変なお節介も要らなかつたかな？」

それに答えてセイルが言った。

「いや、有難いと思う。今まで、上官と部下との関係に慣れすぎて

いたからな。そうやって意識する機会が無かった、と言うよりは、理由にして逃げていた、かな。やっと言えそうだよ。」

其の清らしい笑顔を見ながら神は安心しつつ、答えてこう言った。

「そう。なら良かったわ。じゃあ、お邪魔虫は退散しますか。今度は、貴方達の子供が出来た頃にでも会いましょう。」

そう言って神は、執務室から出て行った。しばし静寂が起きた後にセイルが言う。

「ラーナ、そう言う事だから、今後はそう言う関係でも、お前は良いのかな。」

暫し、間を置いた後でラーナが答えて言う。

「はい。セイルがそう望むなら。」

セイルは「セイル」と呼ばれてラーナを傍に抱き寄せながらこう言った。

「お前も我慢していたのかもしれないな。今度は遠慮なく言ってくれ。」

そう言って二人の絆はより一層強くなるのであった。

(神達一行が集まっている部屋にて)

「決まったぞ。」

自分達の部屋に帰ってきた神に志郎がそう言った。

「あら、早かったわね。で、如何するの？」

神が答えつつそう聞く。志郎は答えてこう言った。

「先ずは南下して旧帝国の衛星都市の一つ「ロギュールミュント」に向かう事になった。」

「へえ、どうして其処へ？」

神がそう尋ねる。シェレーヌが其れに答えて言った。

「神さんがちよっかい出したくなる様な場所だからさ。」

其の言い分に神はやや顔を赤らめつつ、

「ちょ：シェレーヌまで：ったく、分かったわよ。そう言う事ならまず其処へ向かいましょうか。じゃあ、今日は仕度などをして明日出発と言う事で、ここは解散にしましょう。」

そう言った。此れにより、一行は解散し、各自がそれぞれ仕度をしに部屋に戻っていった。

新たな風が吹き始めた。しかし、  
あった。  
澱<sup>よど</sup>み行く空気もまだまだあるので

神<sup>しの</sup> 「しっかし…「地獄と天国」って…まるっきり…「勇者王」じゃ……。」

作者 「あゝ……。まあ、二つの相反する「力」を合わせる訳だし、実質同じ様な物でしょ……。」

神<sup>しの</sup> 「原理的には似てるかもねえ……。」

玲 「と、言う事は、私も、「ゲン、ギル、ガム、ヴォクホ……」と、言わないといけないとかでしょうか？」

作者 「あ、いや、其処まで真似しなくていいから……。って言うか、その台詞合ってるか分かってないし……。」

神<sup>しの</sup> 「まあ、とりあえず、次回で再び旅に戻るのね。」

作者 「うん。神<sup>しの</sup>のお節介の旅がね。」

神<sup>しの</sup> 「其処、五月蠅いわよ！まあ、次回予告ね。玲御願い。」

玲 「はい、母上。次回「<sup>ライゼンデ</sup>Resende「旅人」」と為ります。皆様、お楽しみに。」

作者 「只、作者が些かブルー状態なので更新は遅れます……。」

玲 「あらあら。」

貴方にも良い風が吹きますように。



## Reisende (ライゼンデ) 「旅人」(前書き)

作者 「ふいゝ…………。今回は難産だったわ。」

神<sup>しの</sup> 「やあっと出来たのね。」

作者 「うん、やっと…………。」

神<sup>しの</sup> 「えらく掛かったじゃないのよ。」

作者 「片手間で始めた「蓬の旅」の話のアイデアがサクサク沸いちゃってねえ…。」

神<sup>しの</sup> 「で、こっちのアイデアは沸かなかったと。」

作者 「うん。」

神<sup>しの</sup> 「さて、覚悟は出来てるんでしょうね？」

作者 「ちょ！いや、作品は書き上げたし…なんで…」

神<sup>しの</sup> 「今までアレだけ遅れた責任は取って貰わないとねえ…。」

作者 「あ、いやあ！神<sup>しの</sup>ちゃんやめてえ！」

神<sup>しの</sup> 「ええい！往生際が悪いわ！問答無用！」

作者 「ギャ——、(//▽//) ノ——ス!!!!!!」

神<sup>し</sup> 「さて、すっきりした処で本編をどうぞ。」

作者 「うううう……。ばたり。」

## Reisende (ライゼンデ) 「旅人」

小説 風の吹くままに

### 第二十四章 Reisende ライゼンデ 「旅人」

(ザードⅡフェリティアを出た街道で)

「なんだか久々に街道を歩いてる気がするわねえ。」

神しのがそう言っていた。頷くようにミルが言う。

「そうですねえ…およそ一月くらい、結婚式だの戦争だったのでごたごたでしたものねえ。」

今、一行はザードⅡフェリティアから南下して街道を下って行く所であった。目的地は、元帝国の衛星都市ロギュールミュント。シエレーヌの情報により神しのが行きたがる様な都市と言う。つまり、御節介を焼きたく為る様な、と言う意味だ。

現在一行は八人十人。普通の人間には八名しか見えない。残りしずかはガイストとリッターだから。神しの、志郎、ミル、レネア、慍、セレナ、玲、エミリア。以上八名がまったりと街道を南下していた。

「さて、現地に行くのは良いとして、まったり行くので良いのか？いきなり目的地前でも良いような気もするが。」

志郎がそう言う。其れに対して、セレナが言う。

「其れは、志郎様。既に旅をされてる方は其れで良いでしょうが、私やエミリアさんは旅などほぼ初めてですから出来れば楽しみたいのですのよ。」

神しのかみは其の答えに肯定しつつ、こう言う。

「まあ、志郎。そう言う訳だから今回はまったり行きましょう。其れに急ぎの事情が出ない限りは基本的に歩こうって言ってたしね。」  
「まあ、そうなるか。分かったそうしよう。」

志郎はそう答え、一行は南へと緩やかに歩みを進めていた。

（数日後、暫く進んだ街道上で）

街道では、かなりの人々が往来していた。帝都がザードⅡフェリティアに生まれ変わって、其の情報が伝わり、帝国の旧支配から逃れる為にザードⅡフェリティアに向かう人々。逆に帝都での一財産を元手に、旧帝国の息の掛かる都市で再び一儲けしようと企む者、ザードⅡフェリティアの支配体制に恐れをなして逃げている者等、様々に居た。

「結構往来が激しいな。」

様子を見つつ惺しずかがそう言う。其れにセレナが答えて言う。

「そうですわね。新国家の噂を聞いて其処に逃れる者、逆に嫌に為り出て行く者、様々でしょうね。」

其の答えに全員が頷いていた。そんな時……

「御爺様、しっかり為さって下さい。」

街道を歩いていた女性が老人にそう言っている場面に出くわした。惶<sup>しずか</sup>がすぐさま駆けつけて言う。

「如何したのだ？我々で何か出来る事があるなら手伝うが？」

女性は老人を介抱しつつ答えてこう言った。

「あ、有難う御座います。御爺様が持病で調子を悪く為さって歩くのが大変なのです。それで如何しようかと思っていたところで……」

其れに答えてエミリアが言う。

「その様な事でしたらライエルに任せれば宜しいですわ。ライエル。其処の御老人を抱えて差し上げなさい。」

「お任せを……」

何処からとも無くライエルが現れて老人を抱える。女性はやや驚きつつこう言った。

「あ、あの……この方は、何時の間に……」

「ご心配には及びませんわ。ライエルは私に仕える忠実な者。どちらまで参られるのかは存じ上げませんが御手伝い致しますわ。」

エミリアがそう答えて言う。やや、自慢げであるようだ。其れを玲は微笑みつつ見ていた。感謝しつつ女性は語った。

「御親切に有難う御座います。私、フロレンスと申します。此方はお世話に為っている御爺様で、ローグレント様と仰られます。此れから、ロギュールミュントに向かおうとしていたのですが、急に御爺様の持病が悪化した様で……。」

話を聞きつつ、ふと疑問に思つてセレナが言う。

「フロレンスさんと仰られましたね。御爺様を様付けで呼ばれておられますが、御血縁ではないのですか？」

其の質問に、フロレンスはやや俯きつつ答えてこう言つた。

「あ、はい…私は、ローグレント様の御好意で養女として先日迎え入れられました。ですので、まだ中々、其の忝御名前で呼ぶ事が出来なくて……。」

其の言葉に、頷きながら神しのが言う。

「そうよねえ、急に言い方を変えるなんて難しいわよね。御爺様は、ちょっと後で癒しましょうか。」

そう言つて、一行は街道沿いにある少し大きな樹の下に来ていた。ライエルが其処に老人を横たえる。老人は、些か胸を押さえながら苦しそうにしていた。神しのが軽く手を当てる。

「あの……お医者様か何かなのでしょうか？」

フローレンスがそう尋ねる。苦笑しつつ神が答える。

「あゝ……。そうじゃないけれど。多少癒す力があるだけよ。」

誤魔化しつつそう言っていた。志郎は苦笑しつつ其れを見ている。調べ終わって神がやや重い口調でこう言った。

「かなり酷いわね。このまま旅は如何考えても無理よ。此の人も何か目的がありそうだし、ロギュールミュントまで送り届けましょうか？」

其れに、やや慌てる様にフローレンスが答えて言う。

「あ、はい！是非御願います。詳しくは知らないのですが御爺様は、何としても生きてロギュールミュントに行かねば為らない、そう仰ってたので。ですのに、私は大した事も出来なくて……。」

ミルが魔法をかけつつ、こう言う。

「では。御爺様は魔法で寝かせておきましょう。その方が苦しまなくて済みますし。」

「お、良いアイデアね、ミル。お願いするわ。ライエル、其の後でまた抱えてもらえるかな。『時空門<sup>ゲート</sup>』で今回は行きましょう。」

ミルの言葉に神がそう答えて、ライエルに言いながら全員に伝えた。ライエルは、「了解。俺に任せたまえ。」と軽く言いつつ、的確に仕事を始める。神の言葉を聞いた全員は肯定の返事をした。神はそこで、其処より街道から少し離れた場所に行き、『時空門<sup>ゲート</sup>』を開く。

「こ、此れは……………」

突然現れた「時空門」<sup>ゲート</sup>を驚いて見つ、フローレンスはそう言っていた。苦笑しながら神<sup>し</sup>が言う。

「驚いてる処悪いけれど。御爺さんの状態が状態だし、急いでロギユールミュントに向かいましょう。」

そう言われて、フローレンスも神<sup>し</sup>一行と共に「時空門」<sup>ゲート</sup>に入ってしまった。

(ロギユールミュント近くの街道に近い丘で)

「時空門」<sup>ゲート</sup>はとある丘の上に開いた。其処には誰も居なかったが、たまたま草を食<sup>は</sup>んでいた動物達は驚いて走り去る。其処に神<sup>し</sup>一行が出てくる。

「ほう、あれがロギユールミュントか。」

志郎が街を眺めつつそう言った。その街は堅固な城壁に囲まれた城塞都市で、以前に見たレミアルト王都と同様非常に堅固に見えた。

「まあ、都市国家だし、基本は見た目似てるわよね。」



志郎の横で同じ様に眺めながら神しのがそう言う。

「では、参りましょう。」

フローレンスがそう言う。其れを遮るしのように、神がこう言った。

「直接入るのであれば、然るべき身分であたし達を保証できないと、多分あたし達は普通的手段では入れないけれど、如何しようかな？」  
「ああ、そうか……。仮にも帝国を倒した張本人が来るわけだしな……。いつその事変装でもするか？」

志郎がそう言う。玲が苦笑しつつ、

「別にそんな事をしなくても、意識に働きかければ行けますが、まあ、味気ないかもしれませんわね。」

そう言った。エミリアが、

「神しの様が直接街中に「時空門ゲート」を出されると言うのは如何でしょう？」

と提案する。神しのは苦笑しつつ、

「まあ、其の方法もあるけどね。さて、如何でしょうかね……。」

そう言いながら考え込み始めた。皆がそうやって考え始めて暫く経った時、

「私が保証しよう。」

ライエルが抱えていた老人がそう言った。ライエルは、老人が目覚めたので抱えていた状態から地面に立たせた。

ややふらつく様にしながらも老人は神達しのかみの前に立ち、毅然とした態度を取る。

「御迷惑を掛けたな。フロレンスから紹介されたとは思いますが、ローグレント。ローグレントIIゲッセルヴァーグと言う。今後とも御願ごんいしたい事もある故に御同行を願ごんいたい。」

老人はそう言った。神しのかみは溜息を一つ吐きつつ、

「何か結構な仔細がある様ね。歩きながら話して貰えるかしら？」

そう言いつつ老人に手を掛けた。そしてさりげなく「力」を使う。

「了解した。貴女方は只者ではない様だ。此方からも是非御願ごんいしたい。」

ローグレントはそう答えて、一行は歩き始め、彼は事の次第を話し始めた。

ゲッセルヴァーグ家は、帝国時代に一財産を築き上げた名家の一つであった。ローグレントの前の代の時には皇帝から「爵位」まで貰い、貴族としても歩み始めていたのだった。そしてローグレントの時代にも順調とも言える歩みが続け「伯爵」まで上っていたのである。が、彼には問題があった。自分の後を継ぐ者の事である。彼には三人の息子と一人の娘が居たが内二人の息子は流行り病で幼い内に死亡。娘は、嫁ぐ前に事故で亡くなっていた。残った一人息子も最近に亡くなっていたのだ。で、近親の者が、という事に為りそうだが、元々急成長して「貴族」と為った訳である。親族は基本的に一般人や商人ばかりだった。そんな処に、財産が転がり込むか

も？と言う事に為れば……。富に目が眩めば如何為るかは一目瞭然であった。其れまで仲の良かった親族は反目し合い、影ではお互いに揶揄し、公では、さりげない嫌味を飛ばしあう、そんなぎすぎすとした関係に為り、ローグレントも嫌気が差している処だったのだ。そんな時、帝都で彼はフローレンスと出会う。彼女は、真面目に彼に尽くしてくれた。勿論、メイドとして始めは来た訳だから仕事をするのは当たり前かもしれない。しかし、一緒に接している内にローグレントは、フローレンスが親身に自分を気遣ってくれている事に気が付いた。故に彼は、彼女を養女として身請け、自分が亡き後に、安心して託せる「身内」を作ろうとしたのだが……。彼自身は既にかかなり病気に侵されており、法的手続きをする為の移動が困難な状況であった。そんな折、倒れていた時に、神達しのかみに出会った。そう、彼は説明したのだった。

「成程ねえ……。しかし、手続き自体は其れで良いとしても、あなたが居なくなれば誰がフローレンスを守るのかしら？」

神はローグレントの説明を聞いてそう言った。確かに、尤もな質問である。其れに答えて、ローグレントは、

「其れに関しては問題は無い。今は住居をザードⅡフェリティアに構えている上に其処に、信賴の出来る者が何人か居るのでな。」

そう答えた。セレナはふと疑問に思い、

「御用件は分かりましたが……。伯爵までの爵位を持たれるのなら、旅の為に部下を用いての移動など容易な筈では？」

そう言った。志郎が苦笑しつつこう言う。

「セレナ、気持ちは分かるが……。さっきローグレント殿も言っていただろう。身近な親族が虎視眈々と狙っているんだ。そんな時に、此れから移動します。って態度を示したら如何為ると思う？」  
「ふむ：難しい事は俺には分からないが、恐らく、そう言う奴等なら、街道で襲ったりしそうだな。下手に取り巻きが居る方が目立って危険だし。そう言う意味では確かに二人旅の方が安全と言えるか。」

考えつつ惺しずかがそう言う。セレナも、暫く考えた後、

「確かに惺しずかの言う通りですわね。下手に引き連れたら、折角、フロレンスさんに親族として相続させようとする事の妨害はほぼ間違いないくありそうですし。」

そう言った。そうやって取り敢えず疑問が解決した処で神しのが、

「さて、悩みが解決した処で、ローグレントが此処でやるべき事を私達も手伝いましょうか。まあ、邪魔者の始末がメインでしょうけれどね。」

そう言った。其れに、神しの一行全員が肯定の答えを出すのであった。ローグレントは深く頭を下げながら、

「済まないな、私が元気だったらこんな事を頼まなくても良かったのだが……。」

そう言った。其れに答えるように志郎が言う。

「何、心配しなくてもいいさ。神しのは、お前さんみたいな困っている人が居ると首を突っ込みたくて居られない性質たちなんぞでな。」

「ちょ！人をお節介の塊みたいにな。あたしは好きでやってるんですからね！」

神は一生懸命に弁明に為らない反論をそう言っていた。そんな神を微笑ましく見る一行であった。

（暫く経ちロギュールミュントの市内で一行が歩いているときに）

「あっさり通してくれたわねえ。」

神は簡単に街の番兵が入れてくれたので拍子抜けに為り、そう言っていた。苦笑しつつ志郎が言う。

「何か起きないといけない様な台詞だな。」

「な！あたしは只……。ああ！もう！わかったわよ！そうよ！何か起きて欲しいと思ってたわよ！」

最後には自棄に為るような口調で神はそう言っていた。やや驚きつつ志郎が、

「お、落ち着けて。フローレンスも驚いてるぞ？」

そう言う。神がふとフローレンスを見る。彼女は目を丸々として此方を見ていた。そして、

「あ、え?! いや、その。お二人は仲が宜しいのですね。恋人同士なのですか?」

そう言ってくる。神は苦笑しながら答える。

「あゝ。そう言えば言って無かったわね。あたしと志郎は夫婦なの。あたしたちは一応、全員が家族みたいなものなのよ。血縁か、親しい関係と言う意味でね。」

神達一行は、フローレンスにそうやって笑みを見せた。其れを見つつフローレンスは答えて、

「素晴らしいですね。誰もがそんな風になれば幸せに為りそうなのですが……。」

そう言った。そんな彼女の肩を抱きながらローグレントが言う。

「何、これからお前も其れを作る立場に為るんだ。私が生きている限り、お前を手伝うから、頑張るのだよ。」

フローレンスはそう言われ、「はい、御爺様。」と、短く答えるのであった。

一行は、ロギュールミュント中央部、城郭までやってきた。其処に行政の中核である、行政局があるからである。

入り口で呼び止められるものの、ローグレントが身分を明かすと、あっけなく中に入ることに為る。

「ローグレントさんは、此処での知名度はかなり高いのですわね。一般の兵士ですら名前をご存知のようですし。」

玲が歩きがてらにそう言った。其れに答える様にローグレントが、「ははは。まあ、貴族としてもだが、元々我が家は商人だったからな。有名で有力な商人と言う事に為れば地元では知らない者が居なくなるんだよ。」

軽く笑いながらそう答えた。そうして、一行は、目的の行政の管轄部門に到着する。

中に入る。中では、職員たちが縦横に走り回っていた。役所と言う所は暇ではない。一つの事を決定するにも、様々な法的手続きが必要となり、其の手順をきちんとこなさないと為らなくなるからだ。不正を行うと良くニュース等になるが、まじめにやっている者こそニュースにすべきであるのだが……。まあ、読者の世界に関しての注釈はこの辺にしておいて、そんな訳で、忙しく働いている中に一行は入った。

「おや、これはローグレント様。今日は如何いかなる御用でしょうか？」

窓口で作業をしていた女性が作業を止めてそう、声を掛ける。ローグレントが答えて言う。

「忙しい処済まないな。此の度養女とした、此のフローレンスに、私の持つ財産の相続をしたいので其の手続きに来たのだよ。」

二人を見つつ女性が答えてこう言った。

「成程、御用件は分かりました。隣の別室に資料を御届け致しますので、御先に其処で暫く御待ちください。」

そう言いながら女性は、其の部屋を手で案内した。其れに答えて

ローグレントは、

「有難う。では、先に待たせて貰うとしよう。フロレンス、そして皆さん、行きましょう。」

そう言っ一行を促した。一行は其の部屋へ向かう。

そこは広い部屋で、一行十人が入っても十分過ぎる広さがあった。如何やら応接室の様で、あちらこちらに調度品も置いてある。

「此れは何だろうな？」

惺<sup>しずか</sup>が、調度品の一つを不思議そうに眺めて言う。ローグレントが答えて、

「ああ、其れは此の都市出身の彫刻家ラミセウスの作品だな。躍動感のある人物を彫るのが上手な作家だよ。」

そう言っ、其処にある様々な調度品の説明が始まった。

「流石と言うべきか。俺みたいな武術馬鹿だと、聞いて関心と言うか圧倒されるな。」

志郎は丁寧に説明するローグレントを見つつそう言っていた。神<sup>しの</sup>は傍によりながら、

「でも、あたしは志郎がいいのよ？」

そう言う。苦笑しながら志郎は神<sup>しの</sup>の肩を寄せてこう言う。

「そんな心配は不要さ、神<sup>しの</sup>。俺は、俺だ。此れだって自慢なんだぞ



？  
」

「うん……。」

神は顔を真っ赤にしながら志郎に寄り添っていた。

暫くそんな形で談笑が続いていたが、役所の人間が所定の手続きの為の書類を揃えてやって来る。其れにより、手続きを行う為、厳粛な時が始まるのであった。

（役所での手続きが取り敢えず終わり、其処から街に出た一行）

「ふう。何処でも役所の手続きは大変ね。」

神しのがそう言う。やや苦笑しながらローグレントが答える。

「まあ、公平に公正にしようとするれば、きちんと手続きや記録が必要になりますからな。人である以上、神たり得ませんからな。」

其の言葉に、神達しのは頷くのであった。

「然し、先程のご様子では手続きは全て終わった訳ではないのですか？  
よう？如何されるのですか？」

玲がそう言う。其れに答えてローグレントが、

「そうなのだ。貴女方に御願したのも其処にある。法的手続きは

少し時間がかかり、最終的な完了までに、一週間ばかり掛かるのが普通だ。其処で、私達を守る事を御願いしたいのだ。特に、此のフロレンスを。」

そう言いながら深々と頭を下げる。フロレンスが、

「御爺様、私は、御爺様と一緒に宜しいですわ。どうか御自分も大切に為さって下さいませ。」

そう言っていた。そんな二人を見つつ神しんが答えて言う。

「大丈夫、ザードⅡフェリティアを打ち立てるよりは此の件は楽だからね。」

そう言われた時点で、漸く、ローグレントは神達しんが何者かに気づく。

「そうか…貴女方が…此れは杞憂と言うべきだ。此れで私の肩の荷は降りたも同然だな。」

そう言って微笑んだ。神しんも其れに微笑み返す。そして、

「では、手っ取り早く宿でも借りましようか。一週間掛かるのなら一悶着は有りそうだしね。」

そう言って歩き始めた。一行は其れに付いて行く。  
こうして、新たな行動が始まる事と為った。

（一行が泊まる事に為った宿屋にて）

神達しの一行とローグレントおやこ爺娘は、ロギュールミュントにある中堅の宿に入った。一般の旅行客相手に営業しているごく普通の宿で、適度な綺麗さと、過ごしやすい環境の宿であった。神しのは志郎と、ローグレント爺娘おやこが一緒に、慍しずかとセレナが、ミルとレネアが、そして玲とエミリアが、それぞれの部屋に分かれて泊まる事になった。

神しのは部屋に入り、ベットに腰を掛けながら、

「なんか、一氣に来ちゃったわね。」

そう言った。志郎は神しのを抱え上げる。

「な！ちよ、ちよっと、志郎。如何したのよ。」

慌わてるように神しのが言う。志郎が答えて、

「何、こうしたくなった。其れだけさ。」

そう言った。神しのは顔を赤らめながら、

「うん……………」

そう言いつつ、志郎の顔を触りつつ、其の顔を火照った顔で見つめていた。

>i2633—362<

隣の部屋では、ローグレント爺娘おやこが休んでいた。

「御身体は大丈夫ですか？御爺様。」

フローレンスが心配しながらそう言う。苦笑しながらローグレントは、

「大丈夫だ。お前に全てを渡し、安心して見届ける迄は死ねんよ。其れに、神殿しよの御陰で身体が随分楽に為ったのでな。」

そう答えた。フローレンスは泣きながら、

「私は…御爺様が生きていて下されば其れで構わないのです…。財産とか、そんな物は如何でも……。」

そう言っていた。ローグレントは、

「お前ならそう言うと思っていたよ。然し、此れは私の我俣なのだ。言うなれば、私からの押し付けた。其れを其の後で如何するかは、お前に掛かっている。無論、より良い事に使うと信じているがね。そんな、爺の我俣は駄目かな？」

そう言う。フローレンスは首を振りながら答える。

「いいえ！御爺様の我俣であれば、フローレンスはしっかりとお受けいたします。分かりました。必ず、御爺様の御希望に添えるように致しますわ。」

そう答えるフローレンスをローグレントは優しく抱くのであった。其処には、微笑ましい爺娘おやこの姿があった。

更に其の隣では……。

「セレナ…、お前気が早いんじゃないか？」

惺しずかがそう言う。既にセレナは服を着ていなかった。答えて言う。

「あら？ 私たち二人に部屋を宛がって下さったんですもの。折角だし楽しまないといけないと思いませんか？」

「いや、言いたい事は分かるが…。来て早々なのかと思うとな…。」

惺しずかはそう言い苦笑する。セレナは答えて、

「いいえ、楽しむべきです。折角ですから、旅の途中では皆の目もありますし、こうして中々出来ませんでしょ？」

そう言っしずかて、惺が座るベットにやってくる。更にセレナは、

「さあ、惺しずか。二人で楽しみましょう。」

そう言っしずかて、惺の顔に手を伸ばす。惺もセレナの顔に手を伸ばし、

「そうだな、せっかくの機会だ。楽しもうか。」

そう言っしずかた。

> i 2 6 3 7 — 3 6 2 <

そうして二人は熱烈に愛し合うのであった。  
更に其の隣の部屋では。

「今回の旅も楽しめそうですねえ。」

ミルがそう言う。其れに答えてレネアが、

「そうですね。ミル様、又一緒に楽しみましょう。」

そう言ってミルに抱きつく。

> i 2 6 3 8 — 3 6 2 <

そんなレネアを見ながらミルは微笑みつつ、

「そうですね。折角ですから楽しみましょうか。」

そう答えるのであった。其処でも愛の営みが始まろうとしていた。  
更に其の隣でも。

「さて、どのような邪魔者が来るのか楽しみですわね。」

玲がそう言う。エミリアが答えて、

「然し、人間の間者だと、リッターやガイスト達で終わりそうな気が致しますわね。」

そう言う。玲がくすくすと笑いながら、

「そうですね。では、其れはアイン達に任せて私たちは楽しみましょうか。御出でなさい、エミリア。私が可愛がってあげるわ。」

そう言いながらエミリアに手を差し伸べる。エミリアはウツトリしながら玲に近づき、

「は…はい…玲御姉様。今日もエミリアを可愛がって下さいませ。」

そう言うのであった。

> i 2 6 3 9 — 3 6 2 <

そして二人はベットに入って行く。お互いの愛を確認しあう為にも。

外では、物々しさがあったが、此の宿では、お互いの愛を確認しあう一時が流れているのであった。

(ロギュールミュント。ある商人の家にて)

「では、ローグレントは既にこちらに來ていると?」

男がそう言う。言われた相手の男が答え、

「ああ、役所に現れて財産移譲の手続きに入ったと言う事らしい。役所の奴らが話しているのを聞いたんだ。」

そう言った。始めの男は、やや地団駄を踏みながら、

「くそ!と言う事は時間は余り無いな。折角財産を分捕れるチャンスだったのに。」

そう言った。もう一人の男が言う。

「少し投資に為るかも知れないが。」

そう言って、相手の男の関心を誘う。男が関心を示すと続けてこう言った。

「謀殺を手がける者を数人知っている。そいつ等に依頼して「消して」貰うってのは如何だ？」

そう持ちかけた。始めに喋っていた男は少し考えた後頷きながら、「そうだな、今は形振り構う余裕は無い。お前の提案に乗ってみよう。で、幾ら掛かるんだ？」

そう答えた。其処では、怪しい「商談」が行われようとしていた。

(翌日、神達しのが泊まっている宿屋にて)

朝日の陽光が窓から差し込む。其の暖かな光に促される様にフロレンスは目覚めた。そして、服を着替えながら、寝ているローグレントの姿を確認する。彼の姿を見て安心し、部屋から出ようとした。その時、

「お早う御座います。フロレンス様。」

扉を開けた、其処で、三人の美男子が立っているのが見えた。うち一人は見た覚えがある。確か、ライエルと言っていた筈だ。

「あ、えっと。お早う御座います。あの、貴方方は？」



フローレンスはそう尋ねる。代表するようにシエルエルが答えて言う。

「失礼致しました。私共は、エミリア様に御仕えする者で、此の度、フローレンス様の一件が終了する迄、御傍に居るようと命じられ此の様に馳せ参じた次第で御座います。ライエルは御覧に為っているので御存知かと思えます。私はシエルエル。此方はウイサウレルと申します。以上三名、一時的ではありますが、フローレンス様の騎士<sup>リッター</sup>として御仕えさせて頂きます。」

突然の申し出に、暫く呆氣に取られていたが、氣を取り直してフローレンスが答えた。

「あの、有難う御座います。しかし、エミリアさんの方は行かなくても宜しいのですか？私としては有難いのですが…。」

尤もな質問をする。其れに答えてウイサウレルが言う。

「其の事であれば問題は無い。エミリア様には玲様が常に傍に居られる。あの御方は私達とは比較に為らない方なので安心なのだ。」

其の言葉を聞き、安心しつつも、フローレンスは、疑問に思いう言う。

「あの…不都合でなければ御聞きしたいのですが…貴方方は一体…。」

尤もな、必ず聞かれるであろう質問を聞き、シエルエルは苦笑しつつ答えてこう言った。

「尤もな質問ですな。直接御答えは出来かねますが、そうですね、困った方々を助けたがるお節介な一行。とても申しておきましょう。」

そう言われ、フロレンスは、「はあ……。」と呆けた様に答えていた。無理も無い事ではあるが。

そんな折、部屋から神しのが出てくる。

「あら？フロレンスも起きていたのね。お早う。つて。シエルエル達如何して一緒に居るの？」

神しのはフロレンス達を見つけてそう言っていた。シエルエルは仔細の説明を始めるのであった。

（其れから暫く経ち朝食時に為って全員が揃っている場所で）

宿屋の一階は酒場兼食堂と為っていた。街の人達も団欒できる場所と為っており、故に其処で情報交換や交流が行われるのである。

神達しの一行も、其処に降りて食事を楽しんでいた。

「全く。セレナはもう少し程度と言うものをだな……。」

惺しずかが食事を口に運びながらそう言う。セレナは、顔を多少赤くしながら、

「な！惺しずかだって喜んでいた癖に！そんな言い方はあんまりですわ！

あれだけ楽しんでいるのに……。」

些かいきり立ってそう答えるのであった。  
苦笑しながら志郎が、

「やれやれ、皆考えることは同じか。神、此れからも苦勞と楽しみがありそうだな。」

そう言う。神は顔を赤くしながら、

「ちょ！あたしに迄其れを振る訳？！志郎だって昨日は……。」

そう言いかけた処で志郎が口を塞ぐ。そして、

「ちょ！待て！分かった、分かったから落ち着け。幾らなんでも其処迄此処で言うのは不味い。」

焦りながらそう言う。

くすくすと笑いながらミルが、

「皆さん激しい様ですねえ。」

そう言った。レネアが其れに答えて、

「レネアたちは何時も通りですものねえ。」

と、そう言う。言っている事は普通ぽいがやってる事は……、此処ではあえて言わないでおこう。

「私達は何時も通りよね、エミリア。」

玲がエミリアにそう言う。エミリアは答えて、

「はい。エミリアは昨日も玲御姉様に愛されましたわ。」

と、ドストレートに答える。そんな姿を見て、フローレンスは苦笑するのであった。

ローグレントが言う。

「此れから如何為さるのかな？」

其れに答えて神が、

「特に予定は無いわね。ゆっくりしようと思ってるし。其れに動かない方が、邪魔な奴の退治は楽だと思うわよ？」

そう答えた。志郎も賛同しながら、

「確かに、動き回ると対応が面倒だしな。どうせなら手続きが終わるまでのんびりした方が良さそうだ。」

そう言う。ローグレントは其の答えを聞き、

「そうか、では私達もそうさせて貰おう。感謝する、神殿。」

そう言った。神は答えて、

「別に大した事じゃないわよ。貴方が困っていてあたし達は其れを助けたかった。そして助ける力もあった。だからやっている。其れだけよ。」

そう言う。確かに其の通りかもしれないが、助けられる身としてはこの上なくも嬉しい言葉である。ローグレントとフロレンスは二人で深く頭を下げたのであった。

尚、此の数日後、ローグレント達を襲いに來た刺客が居たが、リッター達に滅ぼされたのは言うまでも無い。

澱み行く空気がある場所にも爽やかな風が吹き行こうとしているのであった。

**Reisende** (ライゼンデ) 「旅人」 (後書き)

志郎 「なんだか……。」

神<sup>しの</sup> 「ん？」

志郎 「いちゃついてるだけの回だった様な？」

神<sup>しの</sup> 「うん。多分そうね。」

志郎 「いいのかこれで？」

神<sup>しの</sup> 「いいんじゃない？少なくともあたしはいいと思うし。」

玲 「愛し合う場面が見せれば私は其れでいいですわ。」

エミリア 「玲御姉様の言う通りですわ。」

神<sup>しの</sup> 「はいはい、貴女達はそうでしょうよ。」

セレナ 「さあ惺<sup>しずか</sup>……。」

惺<sup>しずか</sup> 「ま、待て！セレナ此処は後書きだ！」

セレナ 「後書きでもいいじゃありませんか……。」

惺<sup>しずか</sup> 「ちょ！待て…ああ…ああん！」

ミル 「あらあら、ますますお盛んですわねえ。」

レネア 「レネア達も向こうでしちゃいましょう!」

ミル 「では、行きましょうか。」

神しの 「……………」

志郎 「好き放題だな…。」

神しの 「頭痛くなってきたわ…。」

志郎 「取り敢えず次回予告と行くか。次回は「Geliebte  
e「恋人」」だそうだ。又何かありそうだな。」

神しの 「まあ、楽しめれば其れで良いのよ。」

志郎 「まあ、そうなんだけどな。」

神しの 「まあ、次回をお楽しみに。」

貴方にも良い風が吹きますように。

## Geliebte (ゲリープテ) 「恋人」 (前書き)

作者 「煩惱のまま突き進んだ結果。H描写が過激に為っています。」

神<sup>しの</sup> 「全くこのスケベ作者が……。」

作者 「あははははは。」

神<sup>しの</sup> 「笑って済むか〜〜〜!!」

作者 「ギャ—— (〃▽〃) ——ス!!」

神<sup>しの</sup> 「ま、そう言う訳だから、H描写が苦手な人は読まないように。」

作者 「今後どんどん増えるからねえ。」

神<sup>しの</sup> 「こりゃ、止まらないわね……。」

作者 「うん。今回は無いけれど、神<sup>しの</sup>と志郎も……。」

神<sup>しの</sup> 「ちょ!ま、まさか……。」

作者 「そりゃ、見たがってる人は多いだろうし。」

神<sup>しの</sup> 「ま、待ってよ……。そんな事言われたって、あたしだって心の問題が……。」

作者 「あれだけやりまくってて、何を言ってるんだか。」



神<sup>しの</sup> 「其れと此れとは別だあああ！」

作者 「ギャ——、（//▽//）ノ——ス！！！」

神<sup>しの</sup> 「全く……あ、本編をどうぞ。H描写が苦手な方は注意して下さいね。」

## Geliebte (ゲリープテ) 「恋人」

小説 風の吹くままに

第二十五章 Geliebte ゲリープテ 「恋人」

(ロギュールミュントの宿屋にて)

朝、陽光が差し込む。清清しさを感じる時だ。神は、宿の部屋の扉を広げた。階下を見ると、宿屋の前の少し広くなった場所で志郎と惺しずか、そして、セレナが早朝の修練をしている処だった。

「よし、来い！」

志郎がそう言うのと、惺しずかが、踏み込んで、志郎に向かって「気」を放つ。

其れから微妙にタイミングをずらす様にセレナが踏み込んできて、志郎に「気」を打ち込んだ。

志郎は、自分の周りの「気」を張り巡らして、其の攻撃を受け止める。そして、其の後、二人に手刀を叩き込んだ。其れにより、二人は吹き飛ばされる。

「くっ……中々、一撃を踏み込めないな。」

「防御が硬いですわね。」

惺しずかとセレナはそう言う。二人は、お互いを見た後で頷き合い、二手に分かれた。

「ちっ……やはりそう来るか。」

予想はしていたが、実際に為ると面倒だ。そう思い、志郎はそう言った。惺しずかとセレナは、志郎を中心点として左右に展開し、二人はほぼ同時と為るタイミングで、志郎に襲い掛かる！

二人が志郎のいる所に「気」を叩き込んだ。大きな音と共に土煙が起こる。しかし、

「な！いない！」

「一体何処へ？」

二人はそう叫ぶ。その時、

「後逃げる場所は上だけだぞ！」

上方から声が聞こえた。志郎が「気」を溜め込んで、二人が居る場所に、叩き込んだ！先程と同じか、其れ以上の土煙が発生し、大きな音が起きる！

暫くして、土煙が収まった所には、惺しずかとセレナが、倒れ込んでいた。

「くっ……。」

「まさ……か……。」

二人は、身体を起こそうとしてそう言っていた。其処に、上空から降りてきた志郎が降り立つ。

「まだ甘いぞ、二人とも。息が合うのは立派だな。」

志郎はそう言った。二人は漸く起き上がり、

「上手く行くと思ったんだが……、まだまだ父上には敵わないか。」  
「結構<sup>しずか</sup>惺と考えたのに……残念ですわ。」

そう言った。其れを見つつ、神<sup>しの</sup>は、

「良くやるわねえ、三人とも……。流石武闘派なだけはあるわ。」  
そう言っていた。

（ロギュールミュントの宿屋。神<sup>しの</sup>達が居る場所の一階食堂兼酒場にて）

「今日は何をしようかしら……。」

朝食を食べつつぼんやりと神<sup>しの</sup>はそう言っていた。そう、とりあえず今するべき目的が無い為、如何するか迷っているのだった。

「ん……。そうですねえ、ミルは、レネアちゃんと、精霊達の多い、街外れの木々が多い場所に行つて来ようかと思ひます。」

ミルが自分のしたい事柄を提案する。其れに、釣られる様に、

「あ、私と惺<sup>しずか</sup>は二人でデートがしたい！」

セレナがそう言う。慍しずかがそれに答えて、

「デート?! って、何処へ……。」

そう尋ねる。セレナは、顔をややにやけながら、

「其れは此処では明かせませんわ。二人だけの場所に参りましょう。」

そう言っていた。其れを聞いてエミリアが、

「あ、為らば、私達も、二人だけの場所で楽しみませんか? 玲御姉様。」

そう提案する。玲は其れに答え、

「あらあら、私は構わないわよ。為らばそうしましょうか。何処が良いかしらねえ……。」

と言い、既に次の行動に移っていた。そんな彼女らを見つつ志郎が、

「なんだか、決まったようだな。俺達は如何する? 神しの。」

そう聞く。神しのは答えて、

「あゝ……。そうね、とりあえず、のんびり出来る場所で、二人で過ごしましょうか。ちよっと木陰になる樹の傍なんて良いかも。」

そう言った。志郎は頷きながら、

「よし、そうするか。」

そう言い、各自の行動が決まるのであった。そうして、それぞれは、朝食の後、己が望む場所へと移動をしていった。

（ロギュールミュントの街外れ、木々が並び、また、大きな樹もある、自然豊かな場所です）

神と志郎、そして、ミルとレネアは、それぞれ二人ずつが一緒に為って、此の辺りにやってきた。神と志郎は、大きな樹の所、木陰に為る辺りに腰を掛ける。ミルとレネアは、木々が多く、又小川も流れる、爽やかな場所に腰を下ろした。

「ん〜……。良い場所ね、此処は。眺めも良いけど、風や雰囲気が良いわ。」

神が、空気を吸い込みながらそう言った。志郎が、其れに答える様に、

「そうだな。まだ朝早いってのに、もう子供達も遊びに来ているな。」

そう言って、視線の向こうに居る子供たちを眺める。神も釣られ

て其方に眼をやる。其処では、数人の子供が、木切れを持ち、何やらごっこ遊びをしているようだった。一人が悪役、他が其れに立ち向かう勇者達と言う処か。如何やら、悪役の子供が一際腕が立つ様で、勇者役の子供達が苦戦していた。

「悪役に苦戦する勇者達と言う処か。何だか、一昔前の御伽話おとぎばなしの様な展開だな。」

様子を見つつ、志郎がそう言った。神しは履いていた靴を脱ぎつつ志郎に寄り添う。そして、同じ様にその様子を見ていた。

「そうねえ。あたしには出来ない展開ね。」

神しがふとそう言う。志郎は苦笑して、

「そりゃ、御前に太刀打ち出来る者は此の世界には居ない訳だし……。」

そう言った。神しは、其れに微笑みながら、

「ま、まあそうだけどね……。でも、此処に来て、手に入れられない「もの」を手に入れたから、そんな「力」よりもあたしにとって、其方の方が大事よ。」

そう言った。志郎は、

「そうか。其れは重畳。」

そう答えるのであった。ふと神しは、「あるもの」に気付く。そして、其れを指差しながら、

「志郎、あれを見て！」

そう言う。志郎は其の方向を向き、

「如何した？」

そう言った。

> i 2 8 9 8 — 3 6 2 <

其処では、数人の女の子達が、花畑で、一生懸命に花を集めながら、何かを作っている処だった。神は其の様子を微笑ましく見ている。志郎はそんな神とその女の子達を交互に見て、微笑んでいた。そして、

「よし、俺達も何か作るか。」

そう言って、近くに咲く、花の一つを取った。神が不思議に思いながら、

「如何するの？」

そう尋ねる。志郎は、答えて、

「俺も少しはチャレンジしてみたくな。」

そう言って、「力」を使い始めるのであった。

少し離れた小川の流れる場所では、ミルとレネアが寄り添って座っていた。そして其処では、レネアが呼び集めた精霊達が集まって、



少し賑やかなパーティーと為っていた。

「へえ。そうなんだ。」

精霊達は、大精霊クラスまで為らないと、人が直接理解出来る言葉は発しない。レネアは、精神的に、感応しながら精霊達と会話をしているのだった。そんな様子をミルは微笑ましく見ていた。

> i 2 8 9 9 — 3 6 2 <

其の様子は、自然と触れ合う子供を、親が微笑ましく見ている様な、或いは、新たな知識や状況を理解しようと、又、楽しもうとしている愛しい者を、静かに愛でる、そんな情景であった。そして、

「後で、又、一緒に楽しみましょうかね。レネアちゃん。」

ミルはそう言うのであった。レネアはミルに抱きついて、

「はい。ミル様。」

そう答えて、自分の喜びを表現していた。集まっていた精霊達もそんな二人を微笑ましく見るかの様に、周囲に集い、それぞれの仕事を見せるのであった。

自然に恵まれた其の場では、愛しいものに愛を示す、美しい光景が広がっていた。

(ロギュールミュント宿屋の地下室にて)

薄暗く、食料等を一時的に貯蔵する、地下室の一角に、玲とエミリアは来ていた。魔法で灯された明かりが、室内を薄暗く照らしていた。

「玲御姉様。此处で宜しいのですか？」

エミリアがそう尋ねる。玲は周囲を見回しつつ、

「そうですわね。此处なら、雰囲気といい万全でしょう。アイン、不用意に侵入者が居ないように入り口を「封印」して置いて下さいな。もし、宿屋の関係者が来る様ならば、私達が分からない様にすれば良いですから。」

そう言う。アインは姿を現しつつ答えて、

「畏まりました、仰せの俣に。」

そう言って、直ぐ様、行動を開始した。玲はエミリアを捕まえて、

「さて、如何可愛がりましたようか……。」

そう言って、周囲を見渡し始め、

「そうね、こうしましょう。」

そう言い、エミリアを壁につけると、「力」を用いて、腕を壁に固定し、身動きが殆ど出来ないようにした。そうして、右手からは、

「闇」が纏うような状況で、

「さあ、エミリア、如何可愛がって欲しいのかしら……。」

そう、静かに、然し重みのある声で玲はそう言っていた。エミリアは、

「玲御姉様、エミリアを激しく可愛がって下さいませ！」

今にも玲が欲しい、と訴えるようにエミリアは嘆願をしているのであった。

玲は其の様子を見て、

「まあまあ、欲望に飢えたメス豚です事。そう簡単には差し上げられませんわよ。」

いやらしくそう言う。エミリアは更に嘆願し、腰を振り回しながら、

「お、御願い致します。玲御姉様。エミリアに、エミリアに、貴女の手を、貴女の全てを、欲しいのです！」

既に形振り構わない状況と為りながら訴えていた。涙は溢れ出し、涎も垂れ始め、更に、下半身も其の欲求に絶えられず、パンツは既に色が変わるほどに為っていた。其の姿を見て、玲は興奮しながら、

「良い格好だわ、エミリア。此の伥狂うまで置いておこうかしら。うふふふ。」

そう言いながら、エミリアの顔に手を掛ける。

エミリアは泣きながら更に懇願をして、

「お……御願い……します……エミリアを可愛……がって下……さ  
いませ……。」

余りの状況に息絶え絶えに為りながら、エミリアはそう言っていた。そんな中、妖しい笑みを湛えながら玲はエミリアのパンツに手を伸ばし、「闇」を纏う右手を、其処に当てる。そして、

「まずは、如何反応するのかしら？」

そう言って、「闇」を纏わせた右手を其処に押さえつける。

「はあああああ！」

エミリアは、急に訪れた感覚に、そう叫びを上げる。そして全身を戦慄かせて、快感に酔いしれた事を伝えた。そんな姿を見て玲も興奮しながら、

「まあ、可愛いわエミリア、其の反応。ますます虐め甲斐があるわね。」

そう言いつつ、左手で胸を強く握る。

「あああああ！」

痛みが走る筈だが、エミリアは興奮して、口からは涎を垂らし、

涙を流しながら、快感である事を訴える。玲は、そんなエミリアを見て、益々興奮しながら、

「本当に、可愛いわ！さあ、まずは一回目よ！さっさと行きなさい！」

語調を強め、右手でエミリアをパンツを少し下げてから、其処に現れた、感じる場所を強く押さえる！それにより、エミリアは絶頂を迎えて、

「ひいいい、もう、だめえ！」

そう叫んで、がつくりと項垂れた。うなだそんなエミリアを見て玲は、

「本当に可愛いわ、エミリア。此れからも私の物。一杯虐めて差し上げてよ。」

そう言っ、一旦、壁に固定したものを外し、エミリアの衣服を脱がし始めるのであった。そう、まだ一回目なのだから。二人の営みは続いて行くのである。

（ロギュールミュントの宿屋、個室の一つ、しずか惺とセレナが二人だけで居る部屋にて）

しずか惺とセレナは、二人だけの部屋を貰って其処に入っていた。そして、既に二人は衣服を脱ぎ、ベットに入っていた。

「つて言うか、セレナ。朝からこれで良いのかな、俺達。」

惺は苦笑しながらそう言った。セレナは答えて、

「あら、構いませんじやありませんか。其れとも、惺は、服まで脱いだのにもうやらないんですの？」

惺にじり寄りながらそう言う。惺は其れに苦笑しながら、

「いや、俺も御前とすること自体は、嫌じゃない。寧ろ楽しんでるさ。只、朝からやってて良いのかとな。」

そう言った。セレナが其れに答えて、

「朝しようが、夜しようがやってることは同じでしょ？で、あれば、今したいと思って、更に、其の機会まで与えられたんですから楽しみましようよ。」

そう言いつつ、惺を弄り始める。

「あ……待て！セレナ。や、やめ……ああ！」

惺は襲い来る感覚に、そう訴えて、身体を振らせる。セレナはそんな姿を見て興奮しながら、

「うふつ、ベットだけはまだ惺には負けませんわ。」

そう言って、惺の首筋を舐め始め、手は惺の胸と、アソコの周囲を弄り始めた。惺は其の感覚に更に悶え始め、

「ひああああ！や、やめて……おかしく……なっちゃ……う……。」

そう訴える。セレナはそんな<sup>しずか</sup>惺を見て益々興奮し、

「いいですわ！<sup>しずか</sup>惺。其の俛、おかしくなってしまうなさい！」

そう言いながら、乳首を噛み、アソコの突起部を摘む！其の為、  
急激に快感が、<sup>しずか</sup>惺に襲い来る！

「ひいいい！ああああああ！」

<sup>しずか</sup>惺はそう叫び、喘いだ。

>i2903—362<

そうして、暫く快感に喘いだ後、失神してしまい、ベットに倒れ  
込む。其の様子を見てセレナは、

「可愛いですわ、<sup>しずか</sup>惺。此の後も更に可愛がってあげますわ。」

そう言っ、<sup>しずか</sup>惺が快感の為に、注ぎだしていた、アソコから流れ  
出る液体を舐めていた。其の姿は妖艶な美女其のものであった。

（ロギュールミュントの街外れ、木々が立つ自然豊かな場所にて）

志郎は「力」を使い、一つの花から「存在」を作り上げようとしていた。初めての試みに苦戦しつつ行っている其の様を見て、神は微笑ましく其れを見ていた。小一時間、志郎は様々に苦戦苦闘しつつ「力」を其の花に対して使っていた。日頃は、「気」として展開し、只、戦えば良かったのである。勿論、戦う事も楽ではない。しかし、昔から武闘家として歩んできた志郎にとって、戦うのは当たり前だった。然し、今、行っている「創造」の技は、ほぼ初めての試みである。以前は神と一緒に、漸く惶を創り出せたが、今回は自分の力でやろうとしているのだ。生半可には行かなかった。

「くっ……。一人でやるのがこんなに大変だったとはな。如何に神に頼っていたか分かるというものだ。」

苦戦しながら「力」を用いつつ志郎はそう言っていた。神は敢えて何も言わずに、微笑みながら志郎の傍に寄り添って見守っていた。志郎の「力」で、其の花は、次第に光に包まれた俤、形を変えて行き始めた。「其れ」は次第に小さな可愛い人型と為っていく。凡そ一時間、志郎は苦戦苦闘の末、漸く「其れ」を作り上げた。

「はっ……ふう……慣れない事がこんなに大変だったとは……。此れからはもっと神から教わらないとなあ……。」

漸く出来上がった安堵感からか、志郎はそう言っていた。神は、志郎に抱きつきながら、

「凄いわ。お疲れ様。戦う事だけでなく、他の事柄にも目が向けれる様に為ったのね。」

笑顔で志郎の顔を見ながらそう言っていた。志郎は苦笑しつつ、



「いや、まだまだだよ。でも、出来上がった事による充実感はあるな。俺だけでも此処まで出来たと言う。今迄は只単に、相手を倒す、戦う、此れしか考えなかったからな。勿論全く考えなかった訳ではないが。然し、殆ど考えてはいなかっただろう。今回漸く、些か考える事が出来た。どんな成果に為るか楽しみだよ。」

そう答えるのであった。そして、出来上がった「其れ」は、漸く光が収まり、其の姿をはっきりと現した。

其の姿は妖精のようで、身長が人の足から膝程度であり、頭には可愛らしい花の髪飾りがあった。そして髪の色は美しい若草色、肌は人と同じく肌色だが、瞳の色が、淡く煌き、如何やら日の光で様々に変わる様な美しい瞳であった。身体つきは華奢で、丁度、幼子を、其の俣縮めた様な姿と表現するのが良いのかもしれない。

「まあ！可愛いわねえ。志郎にこんな可愛らしい者を生み出すセンスがあるなんて、素敵だわ。」

「其れ」を見て神がそう言った。「其れ」は神がそう言ったのを見て驚き、志郎の影に隠れる。其れを見て神は苦笑して、

「あら……驚かせちゃったかしら……。」

そう言った。志郎は、やや、苦笑しながら、

「おいおい……リュミユレ、そんなに怖がらなくても大丈夫だ。彼女は俺のパートナー、永遠の最愛為る人なんだぞ。」

そう言う。そう言われて、リュミユレと言われた存在は、すごすごと志郎の影から出てくる。そして、

「……………」

何か囁いたが二人には聞き取れなかった。志郎が苦笑して、

「リュミユレ……。恥ずかしいのは分かるが、もっと皆に分かる声、大きな声で言いなさい。」

そう言った。リュミユレは、暫く俯いていたが、徐に顔を上げて、

「……あ、あの……。あ……。あたし……。リュミユレと……。申します。  
え……。えっと……。これからよろ……。宜しく……。お……。御願います。」

顔を真っ赤にして一生懸命にそう言っていた。神は微笑みながら、

「まあ。よく言えたわね。苦手な事は大変でしょうに。可愛いわ。」

そう言う。そう言われてリュミユレは更に顔を赤くして俯いていた。神は志郎に向いて、

「さて、リュミユレは可愛いから良いとしても。志郎、慍の時と違って如何してこう極端なの？性格が。」

そう問います。志郎は苦笑して、

「あ……。いや、慍の時が、ああ言う風になったから、ちょっと押さえてみようかと思ったんだが……。何処を如何なっているのやら……。」

頭を掻きつつそう答えるのであった。神はやれやれと両手を広げながら、

「相変わらずねえ。まあ、あたしも余り人の事は言えないけれど。でも、リュミュレは可愛いと思うわ。そうね、此れはあたしからのプレゼントよ。」

そう言って「力」を使い始める。其れにより、リュミュレの身体の周りに光が纏い始め、其れが収まった時には、淡い若草色と、鮮やかな茶色の見事なコントラストが魅せる、素敵な服を着ていた。志郎は其れを見て、

「おお。素敵じゃないかリュミュレ。花であった御前には相応しい素敵な服だ。頭の飾りと瞳が良く映える。」

そう言っていた。リュミュレは自分の服を眺め、そして、くるりと一回転してから、

「あ……あの……ありが……有難う御座います……。」

顔を真っ赤にしつつそうお礼を言うのであった。そんな可愛い仕草を見て、

「ああ！もう！可愛すぎるわね！志郎、此の子をあたしに頂戴！」

と、神はリュミュレを抱きかかえながらそう言う。リュミュレは、いきなりそんな事をされて、神の手の中でジタバタとがきながら、

「あ……あの！え……えっと……お……御願いですから……降ろして……くだ……さい……。」

一生懸命に、そう言っていた。志郎は苦笑しながら、

「神……気持ちは分かるが……リュミユレが、怖がっているから今回は諦めてくれ。」

そう言った。神は溜息を吐きつつ、

「そうね。嫌われたくないし、怖がらせたくも無いから、残念だけれど今回は諦めましょう。」

そう言って、リュミユレを下に降ろした。志郎は苦笑しながら、

「つて、御前。この先狙うって事かよ。」

そう言う。神はペロツと舌を出して、志郎の其の言葉を肯定した。志郎は、やれやれと両手を広げるのであった。そんな二人を見て、リュミユレはおろおろとしているのであった。其処では、新しい「命」が生まれ、其れを愛でる、心豊かな空間が生まれていた。其れから、次に如何為るのか。其れは、此れから語られる事である。

風は今日も、緩やかに流れていた。

## Geliebte (ゲリープテ) 「恋人」 (後書き)

リュミユレ 「え……えっと……あたし……どう……すれば……？」

神し 「じくく。」

リュミユレ 「ふえ?!……あ、あの……。」

神し 「じくく。」

リュミユレ 「あううう……。あの……ど……如何しよう……。」

神し 「(可愛いわねえ。虐めたいくらいに。)」

玲 「お母様も煩惱がただ漏れですわね。」

志郎 「もう、呆れるばかりさ。」

エミリア 「私達のようにすれば宜しいですのに。」

志郎 「な!リュミユレにそんな事はさせん!」

玲 「あらあら。父親としては許せないようですわ。」

エミリア 「御一緒に参加されたら楽しめますのにねえ。」

志郎 「いやいやいや、其れは何か間違っているぞ!やはり、リュミユレは、可愛く愛でる事がだな……。」

玲 「子煩悩な父親という奴でしようかしらね。」

エミリア 「そうですわね。御父様も以前はあんな感じでしたわ。」

玲 「初めての「自分の」娘ですから仕方ありませんかしらね。」

エミリア 「私の時も似たようなものでしたから、そうかもしれませんわ。」

リュミユレ 「あ……あの……次回は……」「リュミユレ」……だ、そうです。……って、どう……して……あたしの名前……？」

神<sup>しの</sup> 「やっぱり可愛いわあ。」

志郎 「神<sup>しの</sup>……。」

貴方にも良い風が吹きますように。

## リュミユレ（前書き）

作者「え〜。「風の吹くままに」は今回で完結（一旦終了）と為ります。」

神「は?! 聞いてなかったわよ? そんな事。」

作者「うん。急遽決まったし。」

神「相変わらず、行き当たりばったりなのね。」

作者「うん。」

神「そんな処ばかり、素直に納得するなあ!」

作者「ギャ——（//▽//）——ス!!」

神「しかも、今回は濃厚なHシーンばかりみたいだし……（ぽっ）。」

作者「まあ、そういう事よ。描く事が其れ位しかなかったと言うか。」

神「如何描いても同じ展開に為るって奴ね。」

作者「うん。作者の技量が無いせいもあるけれど。神は万能過ぎるからねえ。」

神「そう言う話で始まったから仕方が無いか。」

作者「うん。では、お楽しみ下さい。はっきり言ってHシーンしかありません。」

神<sup>し</sup>「だから、そういう表現が嫌な人は絶対に見ないでね。」

作者「それでは、本編をどうぞ。」



## リュミユレ

小説 風の吹くままに

### 第二十六章 リュミユレ

（前回と同じ、ロギュールミュントの街外れの木々が生い茂る場所の外れで）

草花の上を、鮮やかに煌く花飾りを頭に付けた緑の髪の可愛い存在が、踊っていた。髪と同じ様な緑と土の様な綺麗な茶色の美しい色彩の服を纏い、煌く瞳を輝かせながら。

「嬉しそうに踊っているわ。」

其れを見ながら神が<sup>しの</sup>そう言う。そう言っている間に、草の上に転び、其の俤、横に転がっていく。そんな行為ですら、其れ、つまり、リュミユレにとっては楽しい様で、笑っているのであった。そんな様子を志郎は、

「お、おい……リュミユレ……楽しいのは分かるが、余り派手にすると怪我をするぞ……。」

まるで、可愛い我が子を見守る父親の様に、おろおろとしながらそう言っていた。神は<sup>しの</sup>そんな様子を見て、

「何か、リュミユレが嫉<sup>ねた</sup>ましくなるわねえ。」

志郎に向いてそう言った。志郎は、苦笑して、

「お、おいおい……。俺はだな……。リュミユレは、可愛い子供の様なものでだな……。」

そう、言い訳をしようとした。其処へ、神しのは志郎に顔を近づけながら、

「そんな事は分かっているわよ！あたしが問題にしている事は、そんな事じゃないわ。」

語気をやや強めてそう言った。志郎は、神しのが何を言いたいのか読み切れずに、

「え？！じゃあ、一体なんだと言うんだ？俺には、御前が何を求めているのか分かっていないんだが……。」

そう言っていた。神しのは、顔を背けて、

「もう……さっきから、そう、リュミユレを創り上げてからよ。ずっと、リュミユレばかり……。そうよ！ずっと、リュミユレしか見てないのよ！もう、あたしは要らなくなったのね……。」

そう言って、泣き始める。志郎は其の様子を見て困惑し、

「ちょ？！ちょっと待てよ。別に俺は、御前が要らないとかそんな事は微塵も思った事は無いぞ。如何してそう言う結論に為るんだよ。」

そう言った。神は志郎の方に向き直り、

「じゃあ、今、貴方の心を占めているのは、誰？あたし？それともリュミユレ？さあ、どっち？！答えなさいよ！」

そう、強い語調で言いながら迫り寄る。志郎はやや後退りをしながら、

「お、落ち着け……、わ、分かった、俺が、些かりュミユレに傾倒していた事は認めるって。だからと言って、御前を愛している事を止めている訳じゃないんだぞ。」

そう答えた。其の答えに神は、ニヤリと笑みを湛えつつ、

「言ったわね……志郎。じゃあ、あたしを愛して頂戴な。今直ぐ！」

そう言って、にじり寄る。志郎は驚いて、

「は？！ちょっと待て……此処って……こんな野ざらしの場所ですか？！人目ってものがあるだろう？！」

やや素っ頓狂な声を出しながらそう言う。神は、志郎に抱きつく様にして、

「大丈夫よ……周りに見えない様にするから。リュミユレ！貴女も一緒にしましょう。」

そう言って草地で遊んでいた、リュミユレを呼ぶ。志郎は更に驚いて、

「なあ?! 神……まさか御前……。」

そう言って、顔面がやや青くなる。神は、顔をにやけながら、

「そうよ。リュミユレにも参加して貰いましょうかね。」

そう言った。志郎は、戸惑いながら、

「ま、待て！俺は御前を愛してやるから……、リュミユレまで巻き込むな。」

そう言った。神は首を振りながら、

「駄目よ。区別なんてさせないわ。あたしも、リュミユレも、志郎、貴方を愛するんだから。」

そう言って、志郎に寄り添った。其処へリュミユレが来て、

「あ……、あの……何でしょ……うか。神様……?」

おどおどとそう言っていた。神は其の姿を見て、

「やっぱり可愛いわねえ！リュミユレ、貴女も志郎の事を愛しているでしょう?」

そう言う。リュミユレは、徐に頷きながら、

「あ……あの……はい……マス……ターを愛……してお……ります……。」

顔を真っ赤にして、俯きながらそう言っていた。神しのは其の姿を見て微笑みながら、

「うんうん。可愛いわ、リュミユレ。なら、一緒に志郎を愛しましょうか。」

そう言った。リュミユレは、顔を更に真っ赤にしながら、驚いて、

「え？ええ？！あ……あの！……あ……あたしは……そ、その……えっと……ま……マスターは愛し……たいので……すけれど……。」

しどろもどろに為りながらそう言っていた。神しのは微笑みながら、リュミユレを自分の傍に寄せて、

「大丈夫。志郎も恥ずかしいだけだし。貴女にして貰えば喜ぶわよ。あたしだって、貴女と一緒に嬉しいのよ？だから、一緒に楽しみましょう。」

そう言って、リュミユレの服を脱がし始めた。リュミユレは、硬直しつつ、

「あ？！……あの！……し……神様しの……あ、あたし……恥ずか……しい……。」

そう言う。神しのは其の姿を見て、興奮しながら、

「か……可愛い！もう、此れは、是非リュミユレにも張り切って貰わないと！」

そう言いながら、更にリュミユレの服を脱がしきった。創られた

のと同じ状態、そう美しい綺麗な身体が露に為る。緊張して、全身がやや高揚してやや赤く火照っているのが更に美しさに拍車を掛けていた。そんな、可愛い姿を見て、志郎も興奮してしまい、

「あら？……ほら、リュミユレ、志郎もあなたを見て喜んでるわ。こんなになってる。」

神がそう言う。志郎は、息子を大きく立たせてしまい、ズボンから露に為る程に為っていた。志郎は慌てつつ、

「いや……その……うん……リュミユレ、可愛いぞ。その……こ、此れはだな……。」

そう、一生懸命に言い訳をしようとしていた。神は苦笑しながら、

「この期に及んで、何を言っているのよ！さっさと、リュミユレに見せて、可愛がって貰いなさいな！」

そう言って、ズボンをずらし始め、志郎の息子が露に為る。其れは、元気に自己主張をしていた。其れを見て、リュミユレは恍惚とした顔で、

「あ……此れが、マ……マスターの……。」

そう言いながら、志郎の息子を一生懸命握り、口を当てて、舐め始めた。一生懸命にする其の姿を見て、神は興奮しながら、

「いいわね、志郎。そろそろあたしもして欲しいわ……。」

そう言って、着ている服を脱ぎ始める。志郎は、身動きが出来な

い状況と為り、リュミユレに、息子を掴まれて、喘いでいた。

「ま、待て……そんなに……ん……くう！」

一生懸命に舐めまわす、リュミユレの舌捌きに、快感を訴えながら志郎はそう言っていた。神しんはそんな姿を見て、興奮しながら自分のアソコに手を当てて弄り始めていた。

「可愛いわ……リュミユレ……一生懸命で素敵……んあ！……あたしも、欲しいな……。」

神しんはそう言いながら一生懸命に自分のものを弄繰り回していた。其の手は次第に激しくなる。志郎はそんな姿を見て更に興奮していく。リュミユレは其れによって硬くなって行く志郎の息子を見て興奮しながら、

「マス……ター……興……奮してる……硬い……もっと気……持ち良……く……な……って……。」

そう言っ、更に、志郎の息子を舐め回し始めた。其れから来る感覚に、志郎は、

「ぐ……リュミユレ……もう……俺は……我慢出来ない……行くぞ……。」

そう訴える。そして、志郎の息子から激しく液体が噴出す！それは、みるみるリュミユレの顔や全身に掛かっていく。リュミユレは、其の掛かった液体を手に掬って舐めながら、恍惚とした笑みを浮かべて、

「あ……マ……スター……熱……い……美味し……い……。」

そう言っていた。神は、そんなリュミユレを捕まえて、志郎を寝かせてから其の顔の上に座らせて、

「さあ、リュミユレ……志郎に舐めて貰いなさい。そして、気持ち良くして貰うのよ……。」

そう言った。志郎は、リュミユレのアソコを徐に舐め始める。リュミユレにとっては大きな、志郎の舌が、当たって、悶え始め、

「んああ！……マ……ス……ター……気……持ち……いいで……す。も……もつと……御願……い致し……ます……。」

そう言う。腰を揺らし始め、志郎の口や鼻に当たる様に一生懸命に揺らし始めた。そんな様子を見て神は興奮しながら、

「ああ……あたしも、欲しく為っちゃった。志郎、あたしも貰うわよ！」

そう言って、志郎の息子の上に乗り上げて自分のアソコに志郎の息子を入れようと捕まえる。そして、

「ん……んああ！……い、いい……いいのおおお！」

そう言いながら、アソコに入れて悦びの声を上げる！志郎は、迫り来る快感に耐えながら、一生懸命に舌を使っていた。リュミユレは其の快感に、叫びを上げつつ、

「はっ……ま……マス……ター……あ、あた……し……もう……駄



……目か……も……。」

そう言っていた。志郎は激しく、リュミユレのアソコを舐め上げる！ 迫り上がった快感にリュミユレは全身を痙攣し始め、

「は……はああああああ！」

そう言って、叫びを上げる！ そして其の俛、リュミユレは、志郎の顔の上に倒れこんだ。神は其の姿を見ながら、腰を使い志郎の息子から快感を絞り上げる。しかし、其れだけでは満足出来ず、腰は振りながら、リュミユレを抱え込むように抱き寄せて、リュミユレの胸とアソコを優しく弄り始めた。

「未だよ、リュミユレ……此れからなんだから……。志郎をうんと愛しましょう……。」

神はそう言って、リュミユレのアソコと胸を優しく弄りながら、其の全身を舐め始めた。リュミユレは、快感に上がったばかりの身体を更に震わせて、

「はあっ！……神……様……や……やめ……て……気持……ち良……過ぎ……て……おかし……く為……っちゃ……う……。」

そう訴える。そんな姿を見て、志郎は、リュミユレと唇を重ね、其の快感に酔いしれる。快感に震えるリュミユレを見て神は更に興奮しながら腰を激しく振り始めた。貪るほどに志郎の息子から、快感を得ようとしていた。

「可愛いわ、リュミユレ……、あたしも、一杯感じているわ……志郎……あたしにも一杯頂戴……。」

神はそう言い、激しく腰を上下にも振りながら、更なる快感を貪ろうとした。志郎はどうとう、耐え切れなくなり、

「行くぞ！神……くう！」

そう言い、息子から激しく液体を噴出させた。それは神の中に入っていく。神は其の感覚に酔いしれながら、

「ああああ……いいわああ……。」

そう言いながら、恍惚として、快感を喜んでいた。志郎は、出しすぎたせいか其の尽くたばってしまう。リュミュレは、快感に身を委ねつつ、神の身体を今度は舐め始めていた。

「神……様……も……美味……しい……。」

既に恍惚とした顔に為って、リュミュレはそう言っていた。神はリュミュレを抱きかかえて、志郎の上から草むらに降りる。そして更に二人は、快感を貪るように愛し始めるのであった。神は、リュミュレのアソコを舌で優しく舐め上げ、リュミュレは、身体を伸ばして、神の乳首を一生懸命に吸い上げていた。

「いいわ……リュミュレ、もっと強く……。」

「ん……神様……あむ……。」

二人はそう言いながら、快感を貪りあう。一心不乱に愛し合う二人を余所に、ゆっくりと起き上がる者が居た。そう、志郎である。志郎は、熱烈に愛し合う、神とリュミュレを見て微笑み、その後、立ち上がって根っ転がっている神の足元に来ていた。暫く、二人の

様子を見て、興奮した後に、徐に、神の足を掴み、自分の息子を神のアソコに入れ始める！

「ん……えっ?!……ああ?!し、志郎?!」

神は驚いて、リュミユレを舐めていた舌を離し、そう叫ぶ。急にやってきた快感に、身体を反り上げて応える。乳首が硬くなったのを見て、リュミユレが興奮しながら、

「神様……興……奮して……る……もつと……感じ……て……。」

そう言い、強く乳首を噛み始めた。二つの場所に来る、強い快感に、神は、

「や、やああああああ!お、おかし……く為っ……ちやう……止……めて……。」

そう訴えた。然し、志郎は、

「ふっ……さっき、御前は俺に如何したんだったかな……御前も同じように為って貰うぞ……リュミユレ、御前も楽しめ!」

腰を激しく振って、神に快感を与えながらそう言った。リュミユレは、其の声に頷きながら、更に激しく神の乳首を弄り回す。神は、涙を流し、涎も垂らしながら、快感に溺れていく事を示していた。

「かつ……はっ……も……う、あた……し、駄……目……かも……。」

神はそう訴え、快感が最高潮を迎える事を伝える。其れを聞いて

志郎とリュミユレは更に激しく神しのを攻め立てた！そして、

「よし、一回目だ、いってこい！」

志郎はそう言っ、力強く突き上げた！其の感覚に、神しのは、全身を戦慄わななかせ、

「ひいいいああああ……………」

そう叫びながら、力尽きた。志郎は、神しのの中から自分の物を抜き出して、

「リュミユレ、此処を丁寧に舐めてあげなさい。其のうち神しのが気付いて、又快感に酔いしれるから。」

そう言い、神しののアソコを指差して示した。リュミユレは、頷いて、

「分か……………りました、……………マス……………ター……………。一生……………懸命……………に……………勤めさ……………せて貰……………いま……………す……………」

そう言い、直ぐ様、言われた事柄をし始める。志郎は、神しのを起き上がらせて、自分は神しのを抱きかかえる様にし、神しのの足を広げて、リュミユレに舐めさせれる様にした。そうして、一生懸命に行う、其の様子を眺めていた。リュミユレは、神しののアソコを丁寧に舐めながら、

「ん……………神……………様の……………ア……………ソコも……………美味……………い……………マス……………ター……………の……………味……………もする……………」

そう言い、酔いしれる様に舐め上げる。暫くして、神しのが気付く。

「ん……。え?! リュミュレ? や、やだ……。そ、そんなに舐めないで……。ん……。気持ちいいの……。」

神は、始め驚いてそう言うが、次第に快感に酔いしれながら口調が変わっていく。

「あ……。はっ……。此处も御願ひ……。」

神は、逆に、して欲しい場所を指定する程に、快感に再び酔いしれ始めていた。その時、後ろで抱いていた志郎が、自分の物を、徐に神のアソコに入れ始める。そして、其の上をリュミュレが丁寧に舐め上げていく。

「え?! ……ああああ! し、志郎?! そ、そんな……。未だ、あたし敏感で……。んあああああ!」

神は急に来る快感にそう訴えるが、志郎はそんな言葉を無視して、静かに神の中に自分の物を突き上げていく。そして、奥まで突き入れた後で、一旦止まる。其処を、リュミュレが丁寧に舐めていた。神は、其処から来る感覚に悶えながら、

「もう……。止……。めて……。あた……。し、お……。かし……。く為っちゃ……。う……。よお……。」

そう訴える。そんな、神の耳元で志郎が、

「まだまだ、神には楽しんで貰うさ。さあ、神、リュミュレを可愛がってやれ。リュミュレ、其処はもういいから、今度は神の乳首を噛んでやれ。」

そう囁く。神は、虚ろに為りながらも頷いてリュミユレを抱きかかえ、リュミユレのアソコを弄り始める。リュミユレも、抱きかかえ上げられた事で、神の乳首を噛み上げ始めた。志郎は其れを見てから、ゆつくりと神の中に入れた物を動かし始めた。三人は声を上げて快感を貪りあう。

「神様……、気……持ち……い……いで……す……。リュミユレお……かし……く為り……そ……うで……す……。」

「ああ……また……又来るの！……又来るのお！……ああ……ああ……ああ……ああああああ！」

「はっ……いいぞ……神……俺も、又行きそうだ……。」

三人はそう言い、快感が絶頂に向かう事を伝える。最後に叫びを上げて、お互いに痙攣を起こし、快感の余韻に酔いしれながら、草の上に横たわった。

其処では、静かに、撫でる様に、優しく風が吹いていた。

（ノンテーサンザードとは異なる、「莊嚴な」領域にて）

其処は、「普通」ではなかった。「莊嚴な」場所で、「聖なる」場所であった。其処にはある人物がいた。其処へ、初老の姿をした人物がやってくる。そして、

「御報告致します。」

其の人物は、其処に居た人物にそう言った。初老の姿をした人物に、頷いて其の人物は次を語るように促す。其れによって、初老の姿をした人物が答える様に言い始める。

「ノンテーサンザードに送り出した「杜神」<sup>あかむめ</sup>の件に関してです。」

そう言って、一旦区切る。ある人物は、答えて、

「報告を聞こう。」

短くそう言った。そう言われて、初老の姿をした人物は一礼をした後で、

「はっ。今回は、「良い」方向へ作用している様です。腐敗していた国家を浄化したり、困窮している人を助けたりしております。又、急激な変化をせずに、当人は、人間の範疇<sup>はんちゆう</sup>で楽しみながら、行動している様です。また、人間や魔族など、既に存在していた種族と交流を持ちつつ、「神」としてのコミュニティも広げつつあります。今回はそう言う観点から「良い」結果に為ったかと。」

そう報告した。其れを聞いて、ある人物は、

「其れは良かった。今後とも、「良い」方向へ進んで欲しいものだな。前任の者は途中で「道」を外してしまったが故に「処分」せざ

るを得なくなってしまったからな。今度は「良い結末」を得たいものだ。」

そう言う。初老の姿の人物は、其の言葉に頷く。ある人物は、其れを見つつ、

「では、他の面に関しても聞こうか、胤よ。」

そう、胤つひきと言う人物に対してそう言った。胤つひきと言われた人物は答えて、

「畏まりました。神様しの。「神龍シャイレオン」が存在するあの世界の件についてですが、再び「魔王ゲイブリオン」が出現し「混沌カオス」を巡る戦いが再び激化しそうで御座います。此の度は「神龍シャイレオン」も「混沌カオス」に抵抗すべく活動しているようです。しかし、世界全体の人の傾向が、あまり「良い」とは言えず、状況は混沌カオスとしている様ですな。」

そう言う。其れを聞いて、神様しのと言われた人物は暫く考えた後に、  
「そうか。まあ、あそこは「神龍シャイレオン」に任せてある。「混沌カオス」に還るかどうかをゆっくりと眺める事にしよう。そういえば、「李もも」はどうしたのかな。最近姿が見えないのだが。」

そう言う。其れに答えるように胤つひきは、

「はっ。李様ももは、時空を旅しながら人々に接しておられるようです。基本的に、余り「介入」はされてはいないようですが。」

そう答える。神しのはそれに対して、



「成程。まあ、李<sup>もも</sup>らしいと言えるか。暫くは好きにさせておこう。「人間」が「気付く」様にしてやりたいのだろうな。あやつとしては。」

感慨深くそう言った。胤<sup>つづき</sup>は頷いて、

「恐らく左様かと。李<sup>もも</sup>様は、態度とは裏腹に御優しい方で御座いますから。」

そう言う。苦笑しながら神<sup>しの</sup>は、

「そうだな。「色々」あるものだ。さあ、次はどんな「色」を示すか楽しみな事だ。出来得るなら「神」に相応しい「色」を示して欲しいものだ。」

何やら、謎めいた言葉を残しながら神<sup>しの</sup>はそう言っていた。胤<sup>つづき</sup>は、それに対し、

「はっ。又、今暫く眺めて参りましょうか？」

そう尋ねる。其れに、神<sup>しの</sup>は頷いて、

「うむ。胤<sup>つづき</sup>、又面倒だが、頼むぞ。」

そう言った。胤<sup>つづき</sup>は其れに、恭しく一礼をするのであった。

莊嚴で神聖な其の場所は、一人の存在の栄光を称えつつ、永遠の輝きを見せていた。其処では、「永遠」が文字通り存在しているのであった。物語は再び紡がれるのかも知れない。今度はどの様に紡がれるのだろうか？

## リュミユレ（後書き）

作者 「お疲れ様。」

神<sup>しの</sup> 「は、激しすぎたわ……。」「

リュミユレ 「……楽し……かった……で……すす……。」「

志郎 「流石に連戦はきついな……。」「

玲 「私達も激しくしたかったわねえ。」「

エミリア 「残念ですわ。」「

セレナ 「惺<sup>しずか</sup>！今度は神様<sup>しの</sup>の真似をしましょう！」「

惺<sup>しずか</sup> 「ちょ？！セレナ、御前最近過激すぎだぞ？！」「

ミル 「あらあら、楽しそうですねえ。」「

レネア 「ミル様。あたしたちも色々やりましょ。」「

作者 「まあ、こんな感じで彼女たちは楽しみながら今後も「旅」をして行くでしょう。又、描く機会が出来たら第二部として書いていきたいと思います。拙い文章を最後まで読んで頂き有難う御座いました。」「

一同 「又、宜しく御願います！」「

貴方にも良い風が吹きますように。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2132i/>

---

風の吹くままに

2010年10月10日22時28分発行